女學世界

第六巻第九號

[明治]三十九年七月五日発行
[毎]月一回五日発行
[明治]三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可



夏季向呉服太物類一切

小間物類化粧品等

は最新流行の品々極めて格安に販賣致居候間多少に拘はらず御用命被下度奉願上候

夏衣裳

と題する地方御注文案内書は御申込次第早速呈上可仕候

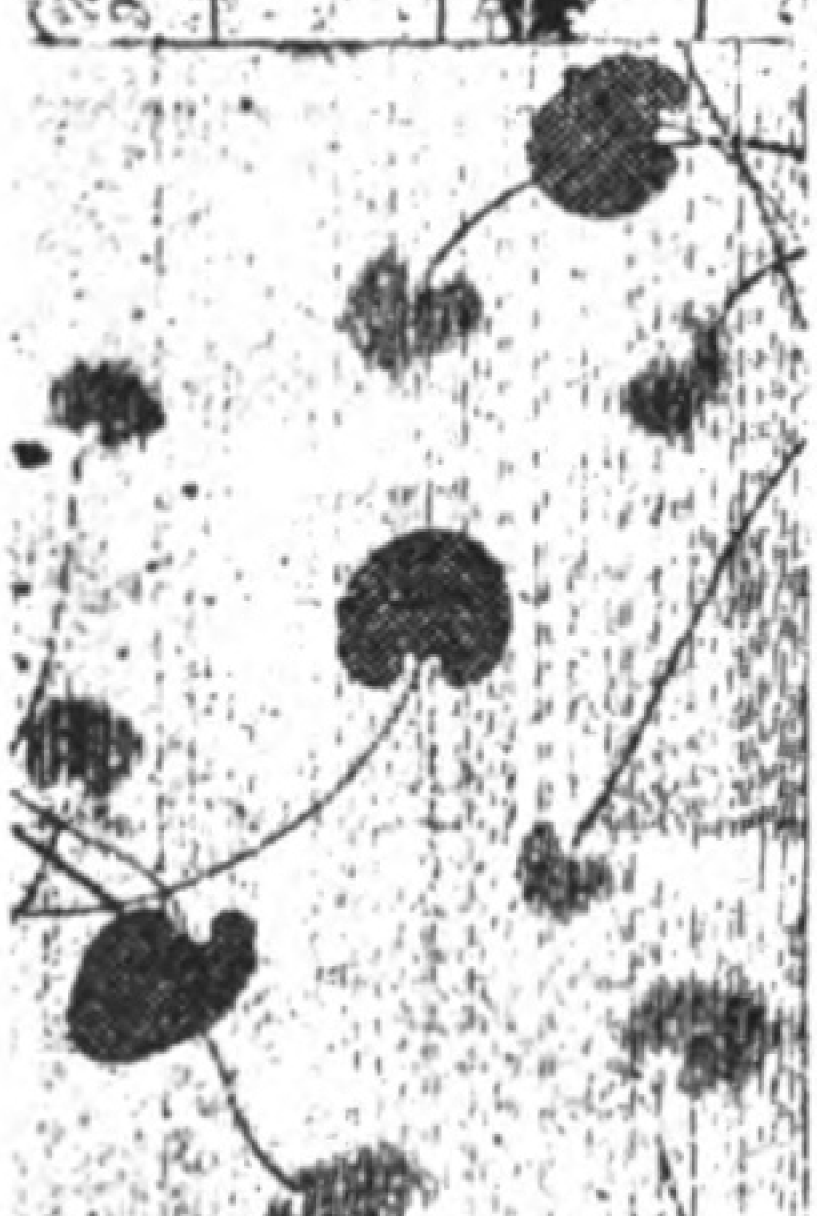
新柄中形浴衣地の内御覧に入れ申候

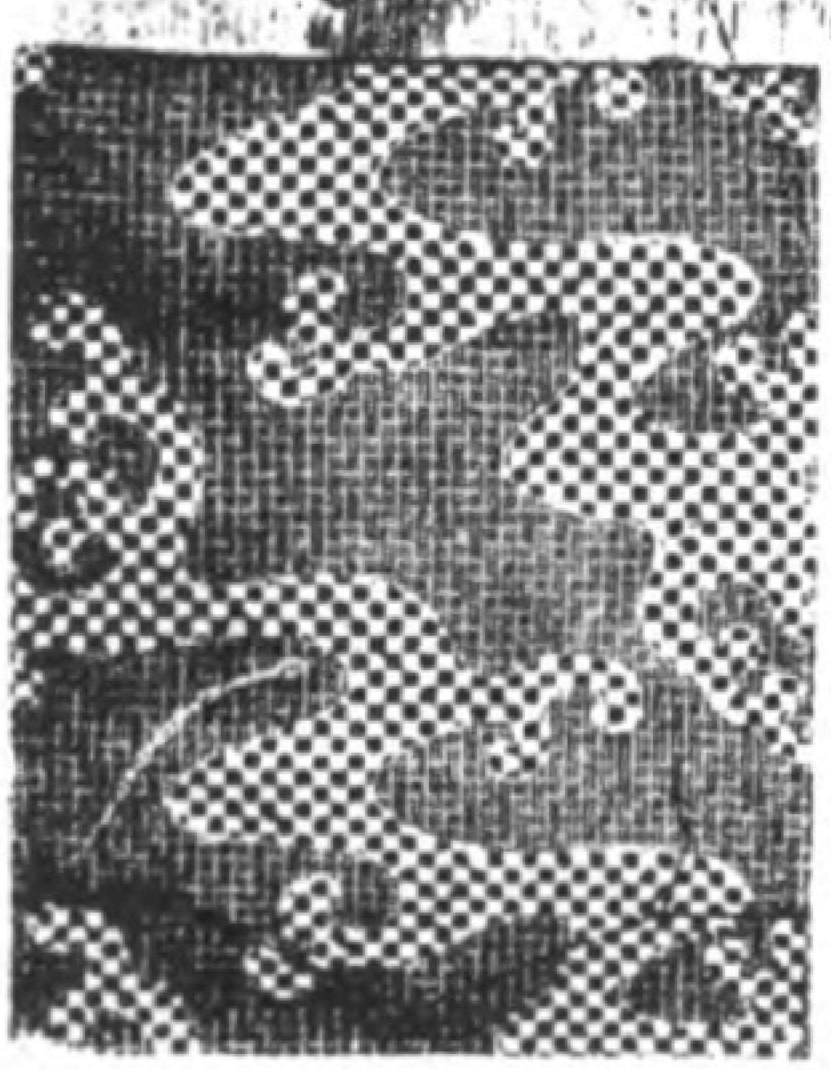

（一）一圓七十五錢


（二）一圓六十錢


（三）一圓四十錢


（四）二圓四十錢


（五）一圓六十錢


（六）一圓三十五錢

東京日本橋區駿河町

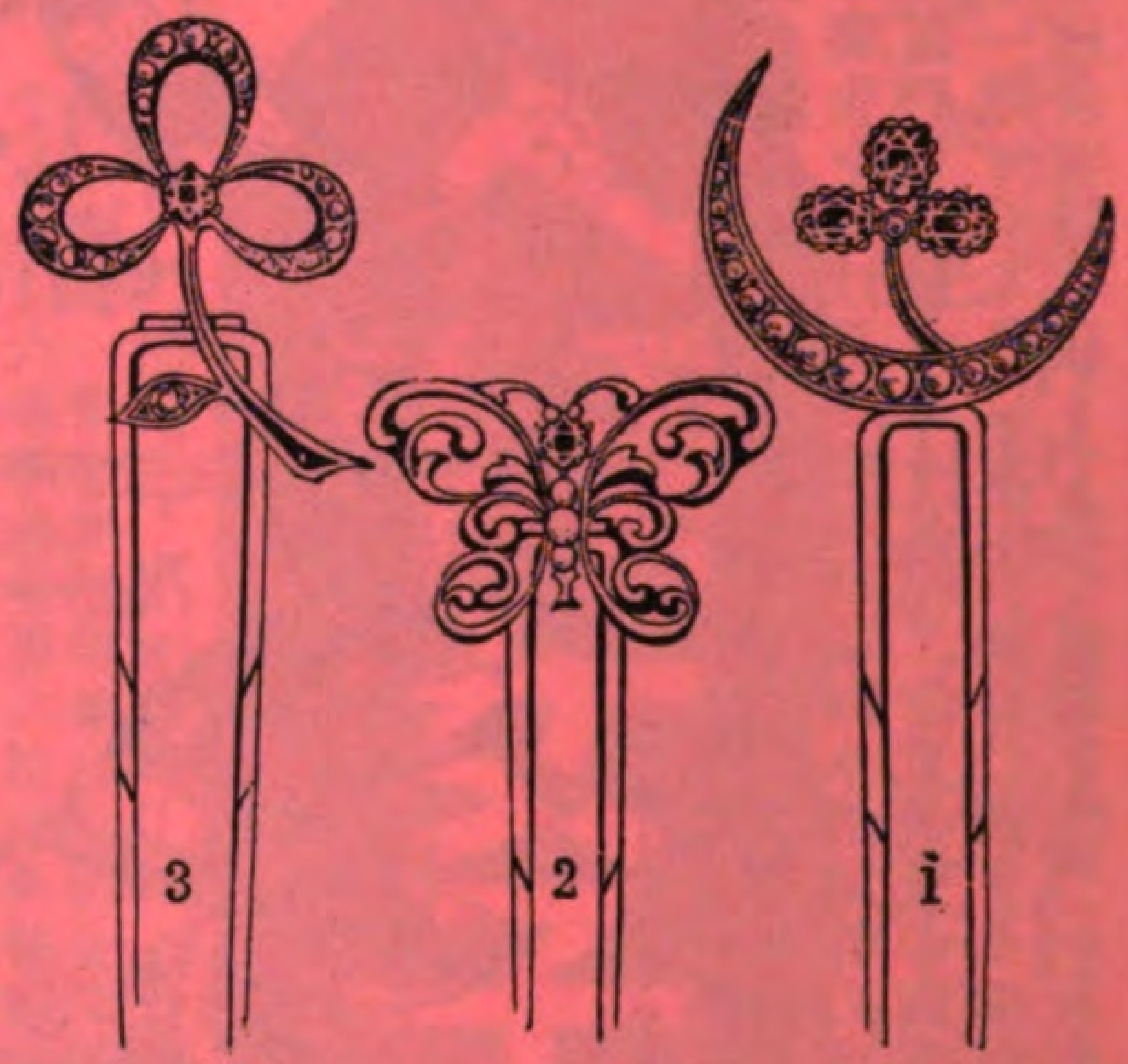
越

三越呉服店

圖は何れも尺幅と御承知被下度候

女學世界 第六巻 第九號 目次

寶石入束髪ピン



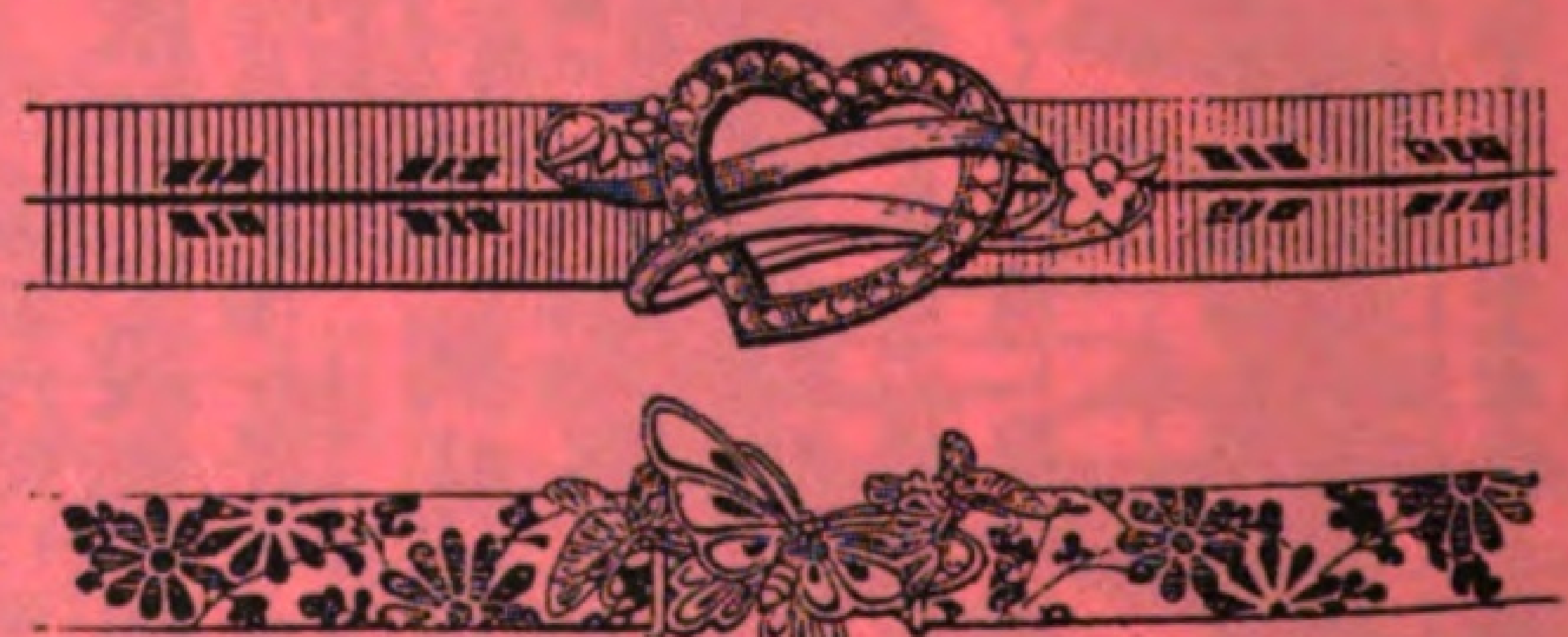
(1)拾八金花月形眞珠及ルビー、サフハヤ入甲價參拾五圓、乙價三十圓、丙價廿五圓、同形ダイヤモンド參個入貳百圓以上各種

(2)二十金蝶形眞珠入甲價廿五圓乙價貳拾圓同形ダイヤモンド入甲七拾五圓乙五拾圓

(3)拾八金洋花形ダイヤモンドルビー眞珠入甲價壹百圓乙價八十圓丙六拾圓丁五拾圓

○此外銀製にて眞珠又は人造石を嵌入して前記の金製品と畧ぼ同形のもの
甲價七圓半乙價五圓丙價參圓丁價貳圓半

最新美術帯留（大四年の五）



○廿金製眞珠及寶石入リボンにハート形
甲價卅五圓乙價卅圓

○十八金製蝶模樣
甲拾五圓乙拾參圓半

此外夏の帯留として新に調製致せしは黑白黄青等の奇貝にて花鳥又は蟲魚を巧に彫刻せし金具へうつりよき織物又は墨畫の紐を附けし清洒なるもの參圓五圓六圓七圓半

●夏季用裝飾品各種新案の品取揃居候

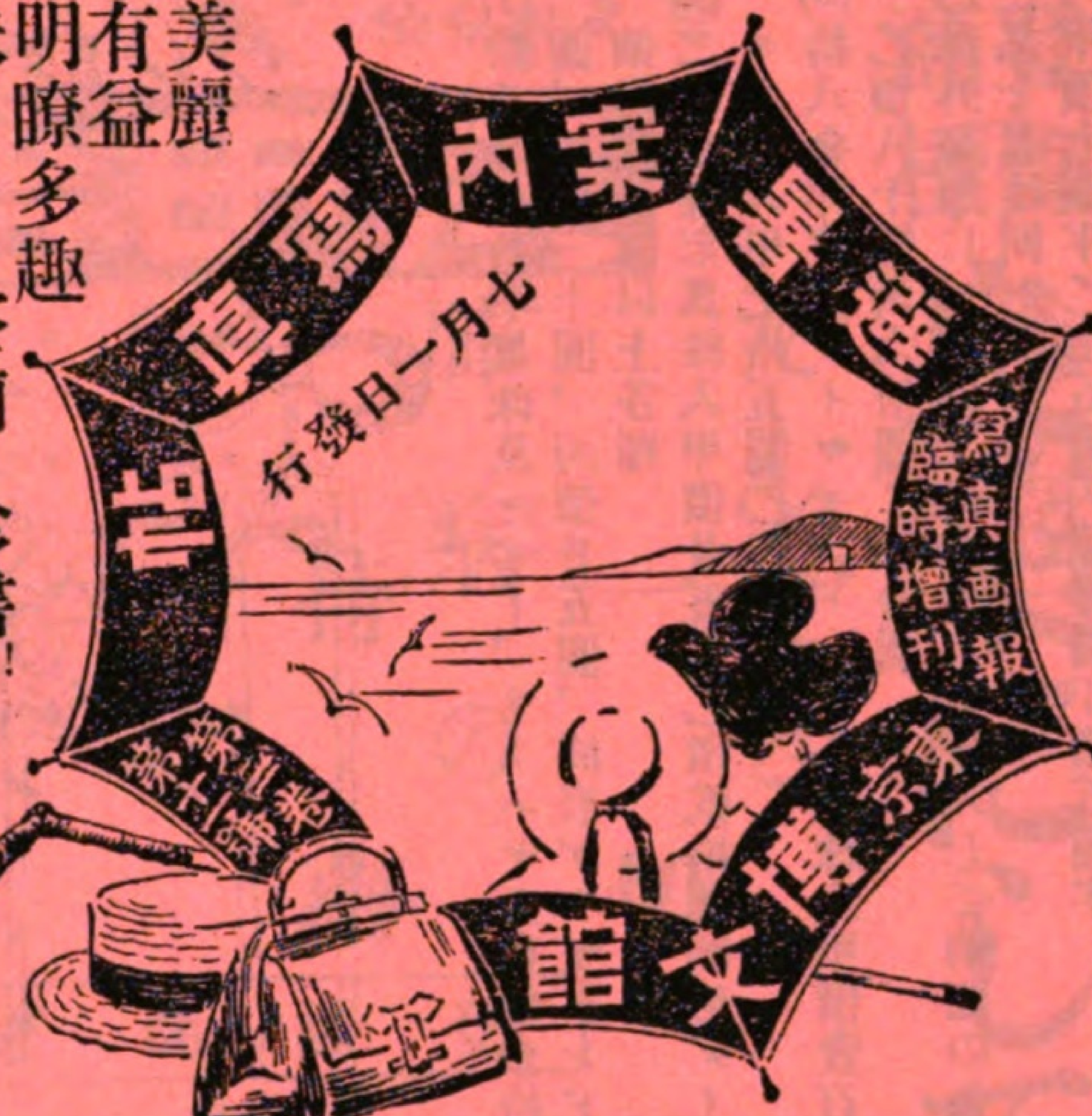
貴金屬寶石
美術携帶品商
婦人粧飾品

東京市京橋區南傳馬町三丁目

大西白牡丹

特 電話本局三十番

（甲の一）



夏は來れり！夏は來れり！。請ふ『避暑案内寫眞帖』を携帶して、其の思ふ所に暑さを避けよ。紳士も行くべし、淑女も行くべし。商人も行くべし學生も行くべし。此編收むる所全國各地の良好なる溫泉場海水浴場は勿論、隨所の名勝奇景を寫眞版として網羅し、印刷の鮮明美麗なるは云はずもがな、案内記に至ては仔細に道程、船車の便、旅館の設備、溫泉の効能等其の他主要なる事項を懇切に說述し且つ附するに明細なる地圖を以てしたれば、一讀人をして迷ふことなからしむ。然かも讀者に提供する所は單に是等の興味實益に止まるにあらず口繪として當代名家の手に成る色彩石版書ポンチ書等を始め、醫學大家の避暑衞生訓を掲げ記事には旅行中の遊戲娛樂に就ては亦讀者の熱心なる相談相手となれり。若し夫れ閑なくして出遊の機を得ざる人も一と度此の書を繙けば身親しく其の境に臨むの想あらん。

美麗有益明瞭多趣味なること空前の珍書!!!

本卷避暑旅行案内寫眞帖には新案に係る案内廣告欄なる一欄を特設し其旅行準備の項には旅行に携帶すべき必需品を注意し併せて之れを精實廉價に販賣する店舗の廣告を掲げ又各地溫泉場海水浴場等の項は旅館其他之れに關係したる廣告を各方面に依て區別し掲載しあるを以て銷夏避暑の淸遊を試みんとする士本號を繙き本文と共に廣告欄を一覽せらるれば直ちに旅行に關する準備を整へ併せて己が赴かんとする方面には如何なる旅舍客館の在りて以て諸君を待つかを知らん。

正價貳拾錢
郵稅貳錢


THE GEM
衛生家必携
懐中良藥
ゼム
ゼム一粒の馥郁たる香氣と愛すべき美味とは一度用て終生忘るゝ能はざらしむ故にゼムは廣く萬人に愛用せらる
ゼム二粒は煙草の味を美にし心神を爽快にし疲勞を感じ息切れを防ぎ渇を醫す故にゼムは外遊學生に愛用せらる
ゼム三粒は音聲を美くす音聲は美の一要素也故にゼムは紳士佳人に愛用せらる
ゼム五粒を食前食後に用ふれば食慾を増進し消化を助く故にゼムは衞生を重んずるの士の常用劑として愛用せらる
ゼム十粒は異境に於ける風土病疾癘食當り水傷りを治して神効あり舟車の醉を防ぐ故にゼムは進取的遠征家及び旅行家の必携劑として愛用せらる
ゼム定價
七十五粒入十錢　百六十粒入廿錢
四百卌粒入五　錢　九百粒入一圓
容器入ゼム　二十錢
日本一手發賣　東京馬喰町二丁目　愛國堂　山崎榮三郎
支舖　大阪高麗橋二丁目　山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり

(甲の四)

花ぞの



女子師範學校教授 近藤正一君著
佐方鎭子女史序文

女子職業案内



男女其體格に於て其好尚に於て將た其技藝の長けたる所短き所に於て一樣ならざるは是れ自然の事なり故に其從事すべき事柄即ち職務に於ても異同あるは素より其所なり然るに女子の適すべき職業を撰擇するにつき世人未だ十分の注意を與へず從て此等の事柄を記したる書多からず否全く無しといふも不可なきなり著者茲に思ふ所あり此の缺點を補はん爲め女子に適切なる技藝及び業務につき其種類を網羅して殘す所なく記述し遂に本著の擧あるを見る其說明極めて懇切明亮にして其記事皆な其道の實驗材料に基きたれば一讀容易に其の職の大要を知り得べし世の婦女子諸君職業便覽として請ふ一本の精讀を祈る（近刊）

全一冊洋裝 三六判顏美本 紙數四百七十頁 正價四拾五錢 郵稅八錢

目次

▲女子の生活 ▲女子の獨立 ▲女子の職業 ▲小學敎員 ▲中學敎員
▲家庭敎師 ▲保姆 ▲女醫 ▲女記者 ▲文學家
▲音樂家 ▲畫家 ▲寫眞師 ▲割烹敎師 ▲挿花師範

目次

▲茶道敎師 ▲看護婦 ▲產婆 ▲通信事務員 ▲銀行事務員
▲電務課員 ▲商店員 ▲速記者 ▲謠曲師範 ▲編物敎師
▲裁縫師 ▲繡工 ▲女工諸業 ▲電話交換手 以上



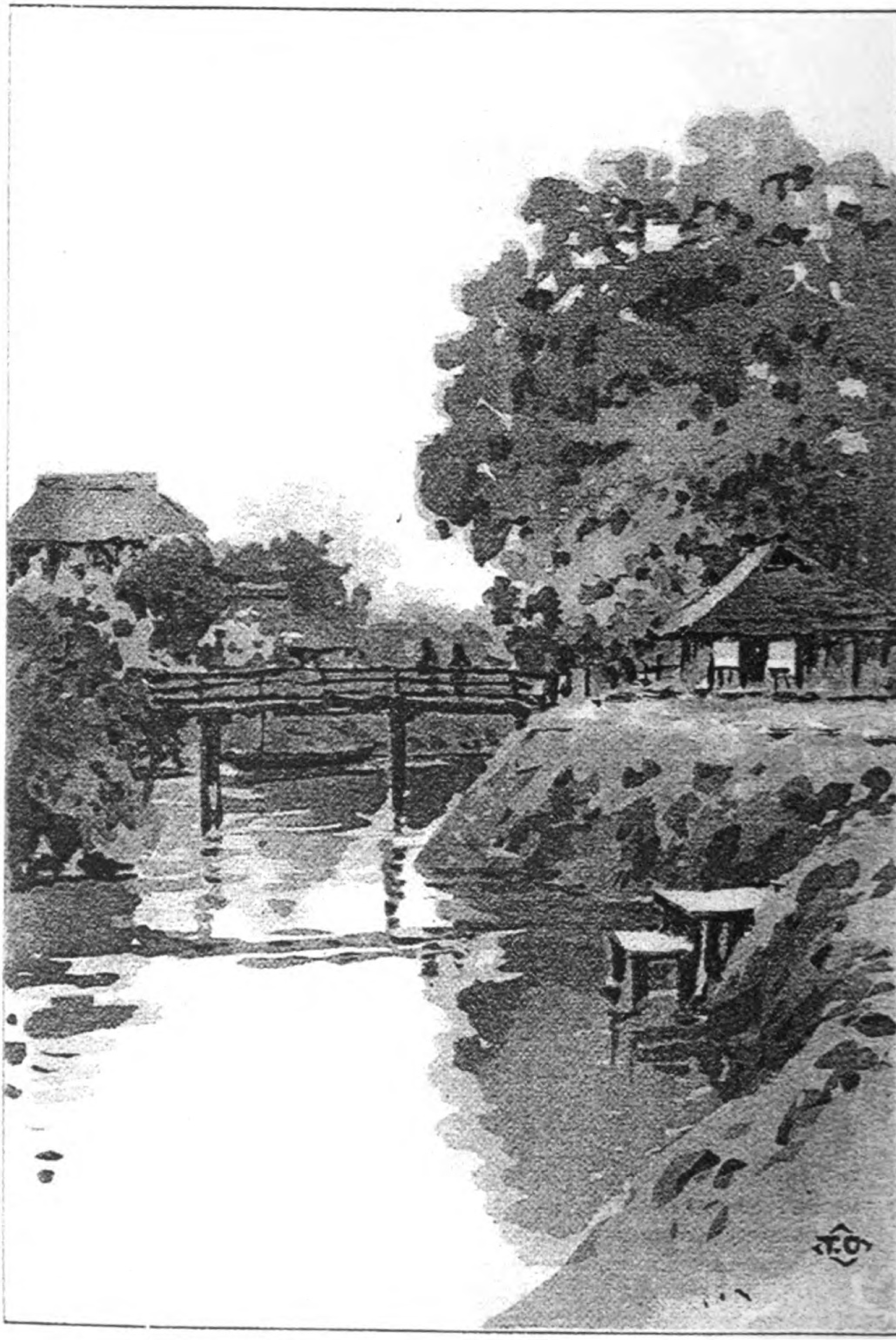


口繪
寫眞銅版畫……織田東禹君筆
女子職業圖……四枚挿入

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

女(乙の二)

夏の朝



大下藤次郎筆



眞正無毒

クイーン白粉(おしろい)

皮膚艶美

クイーン水

本品(ほんぴん)は我同盟國(わがどうめいこく)より輸入(ゆにう)せる最新最優(さいしんさいゆう)の原料(げんりよう)に貴重(きちよう)なる芳香(かをり)を加(くわ)へ精製(せいせい)したる他(ほか)に比類(ひるい)なき化粧料(けしようひん)なり

本舗 東京日本橋新和泉町 三井花陽堂



五大軍醫合議製劑

賣價 五週分壹円、三週分六十五錢、二週分四十五錢、一週分二十五錢、試用分十錢

本舗 東京銀座壹丁目 大阪南久寳寺町堺筋東 山田安民

全國各藥店にて取次販賣す

▼地方の人士に警告▼

地方のお方にて東京より買物をなさるに直接賣捌本店へ御注文なさる時は割安ならんとおぼす方多けれど決して然らず地方よりの注文は直引の出來得る品も定價にて押し付け或は粗製品を代用してごまかす者なきにあらず殊に近來新聞雜誌の廣告上少しも實効の無き者を誇大に吹聽し地方の人を欺かんとする者も見ゆるを以て地方よりの注文は危險多し弊社茲に見るあり地方買入方の代理となり市内にて賣捌く商品は圖書書籍は勿論諸藥品美術品織物又は舶來品に至るまで何品にても價額の多少に拘はらず誠實と懇切とを旨とし非常に少額なる手數料にて買入れの依頼に應ずべし一たび弊社の手腕を試みられ御信用願上候

▲弊社の業務手續及び依頼方法は往復はがきにて御申越次第即時送呈す

東京本郷區湯島天神町一丁目八 信頼社 電話下谷一三六一番

女(丙の一)

西山悊治先生編(家庭の寶典)

日本家庭辭書

製本出來本月中旬

四六判形總クロース頗る美本
全壹册舶來上等紙摺紙數凡八百餘頁
定價金壹圓三十錢内地小包料十五錢

壹萬部限り特價九拾錢◎期限本月中

(期限内ト雖滿數ノ時ハ不得止正價ニ復スルコアルベシ(小包料十五錢))

家庭問題は今に殘されたる社會問題として、又戰捷後必然に社會の要求する時代急需の聲に應ぜんとて世に出づる家庭向きの著書敢て尠からずと雖も惜むべく多くは一時的際物の零片たるを以て充たさる。即ち編者西山先生此に周到の用意、多大の苦心、抱負を以て本書を編纂せられたれば、家庭は此れに依て光明に浴し新しき福音に接するもの尠からざるを信ず。幸に世の流行的一夜作の駄編と同一視する勿れ。

◎本書の内容見本御入用の方は往復はがきにて御申越あらば送呈す

學習院女學部長下田歌子女史著

女子の修養

洋装菊判形頗ル美本

全一册(正價金七十錢 郵税金八錢)

◎總ふりかな付

東京朝日新聞批評

少女の心得、少婦の心得、母親の心得、戰後婦人の心得、繼母と繼子、姑母と小姑、婢女の心得、都會の女子と地方の女子と、教ふる人と教へらるゝ人と、應接と交際と、の十章に分ち有らゆる婦人の修養の心得を約かに説き明かされしものなれども文章は優に麗はしく製本體裁亦之に副ふ家庭女學生間の讀物として此上やあるべき(定價七十錢、弘道館發行)

●新家庭經營の寶鑑●廿世紀女子教育の生粋

女(丙の三)

發兌　東京市京橋區南大工町　弘道館

撫子鷭



戸田玉秀筆

夏ノ富士



夏の海濱
（久の濱波立藥師）



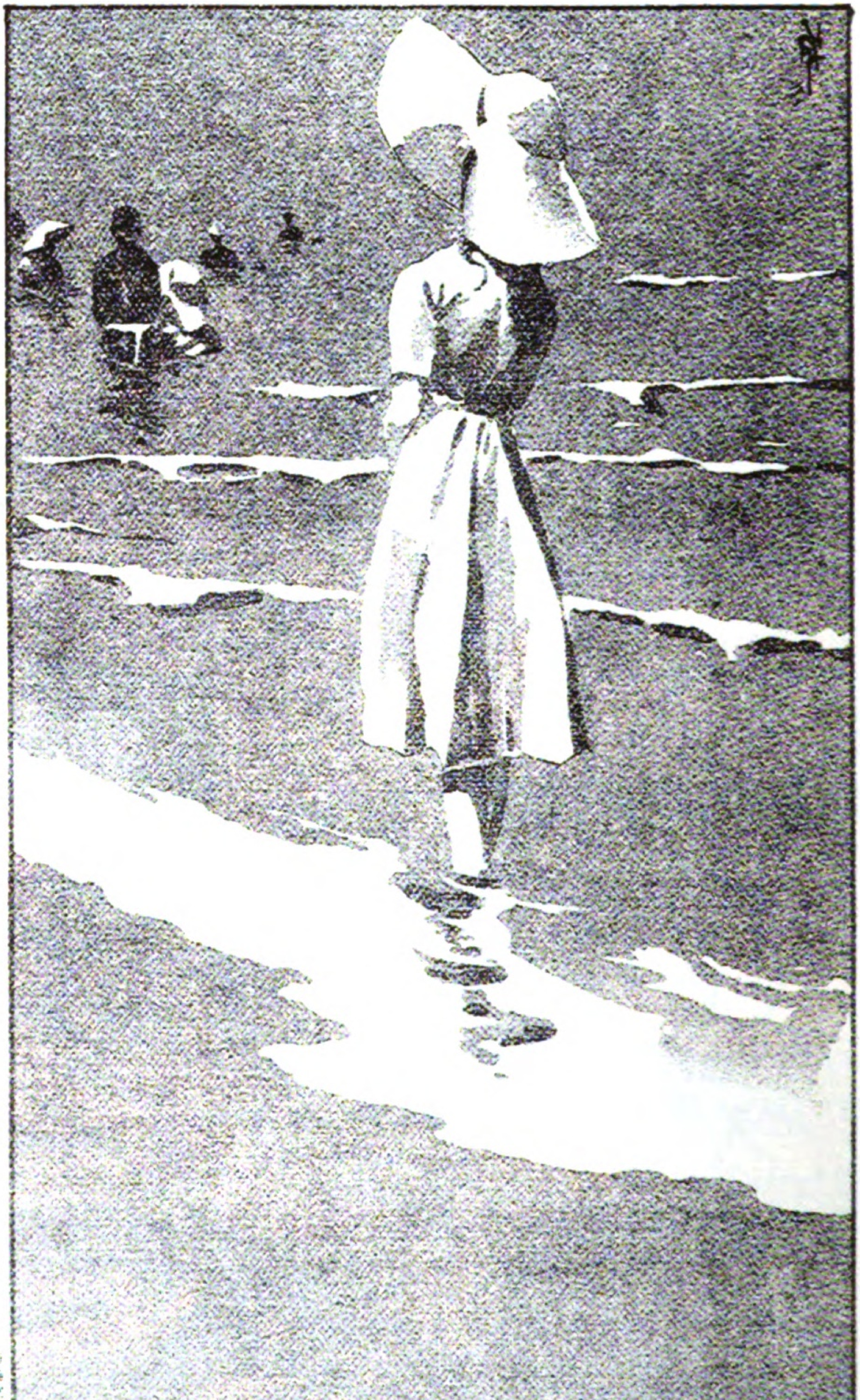
馬杉青琴筆

さゝ川



川崎蘭香筆

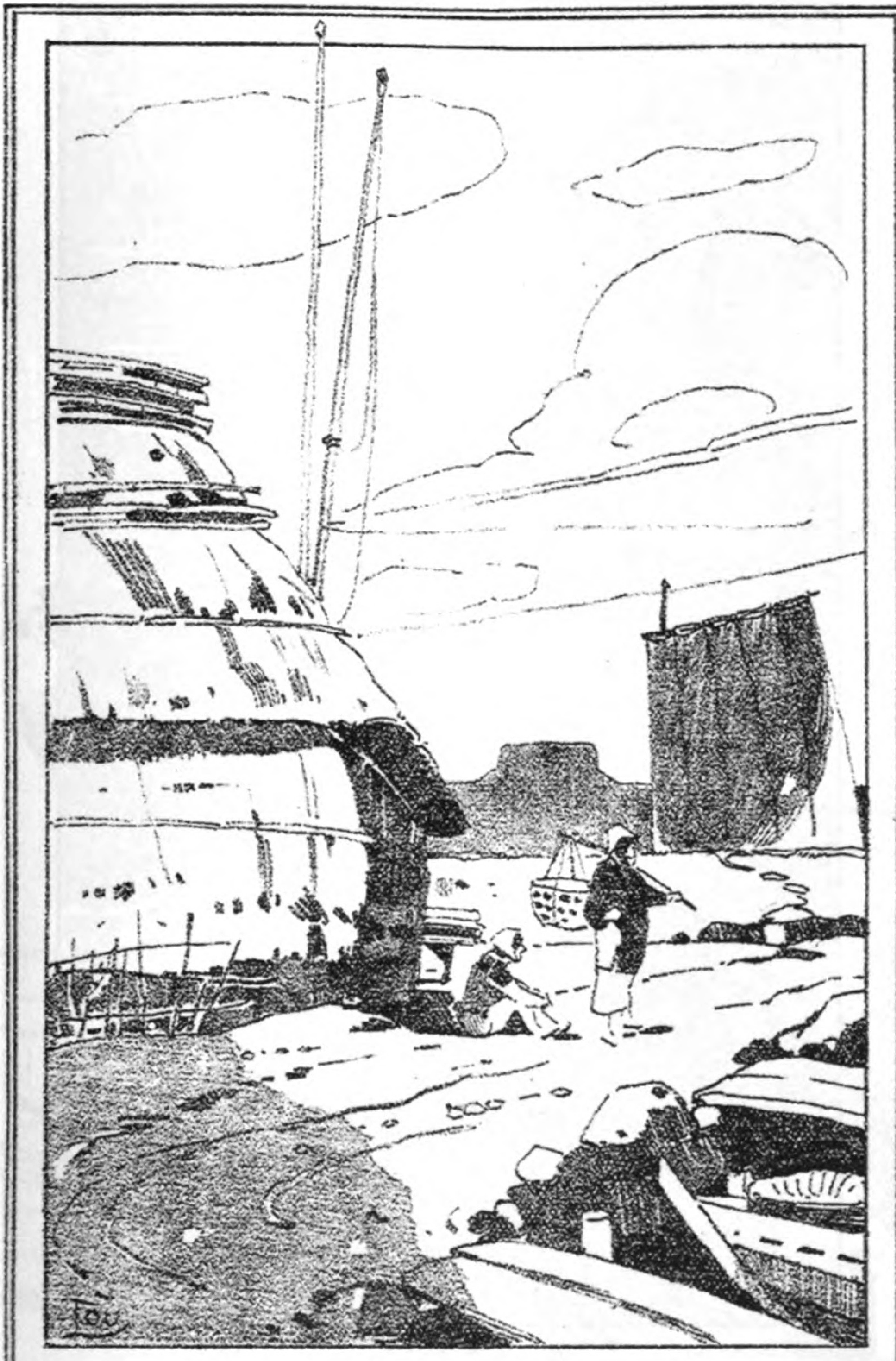
潮浴



一條成美筆

初夏の漁村

織田東禹筆




美術
造花
材料

戸澤姑射　淺野馮虚　共譯

沙翁全集

第壹卷　悲劇　ハムレツト　價金八十五錢　郵稅金十錢

第貳卷　悲劇　ロメオエンドヂユリヱツト　價金八十錢　郵稅金十錢

第參卷　喜劇　ヴエニスの商人　價金八十錢　郵稅金十錢

第四卷　悲劇　オセロ

定價八十五錢　郵稅十錢

沙翁四大劇中の随一と稱せらるゝ「オセロの悲劇」は翁が四十一歳劇才方に絶頂に達せるの時作にして世界の最大傑作なりと推尊せられ特に我邦に於ては沙翁劇中最早く舞臺に上ぼせられたるが故に最能く世間に知らる然れども其筋書は飜案の結果原劇の精神も面目も非常に變化せられて殆んど別劇の觀をなし徒らに空名を存せるに過ぎざるも世人多くは原劇を解せざるが故に「オセロの悲劇」とはアンナものかと思居るは斯道の爲に誠に惜むべしとなす本集は抄譯にもあらず梗概にも非ず忠實親切を旨とせる完全譯なるを以て原劇の眞精神と眞面目とを發揮して餘蘊なく眞正の「オセロの悲劇」を紹介す世間に飜案せられたるオセロが時々塲に上ぼるの今日如何に興味の深かるべきや想ふに於て本集を繙きて其異同を比較しなば斯道に志ある人は必ずや速に一本を手にするを禁し得ざるべし況んや譯者の筆致益々圓熟して詞華絢爛光彩陸離學に之を邦語の劇詩として見るも優に文壇に濶歩するに足るに於てをや

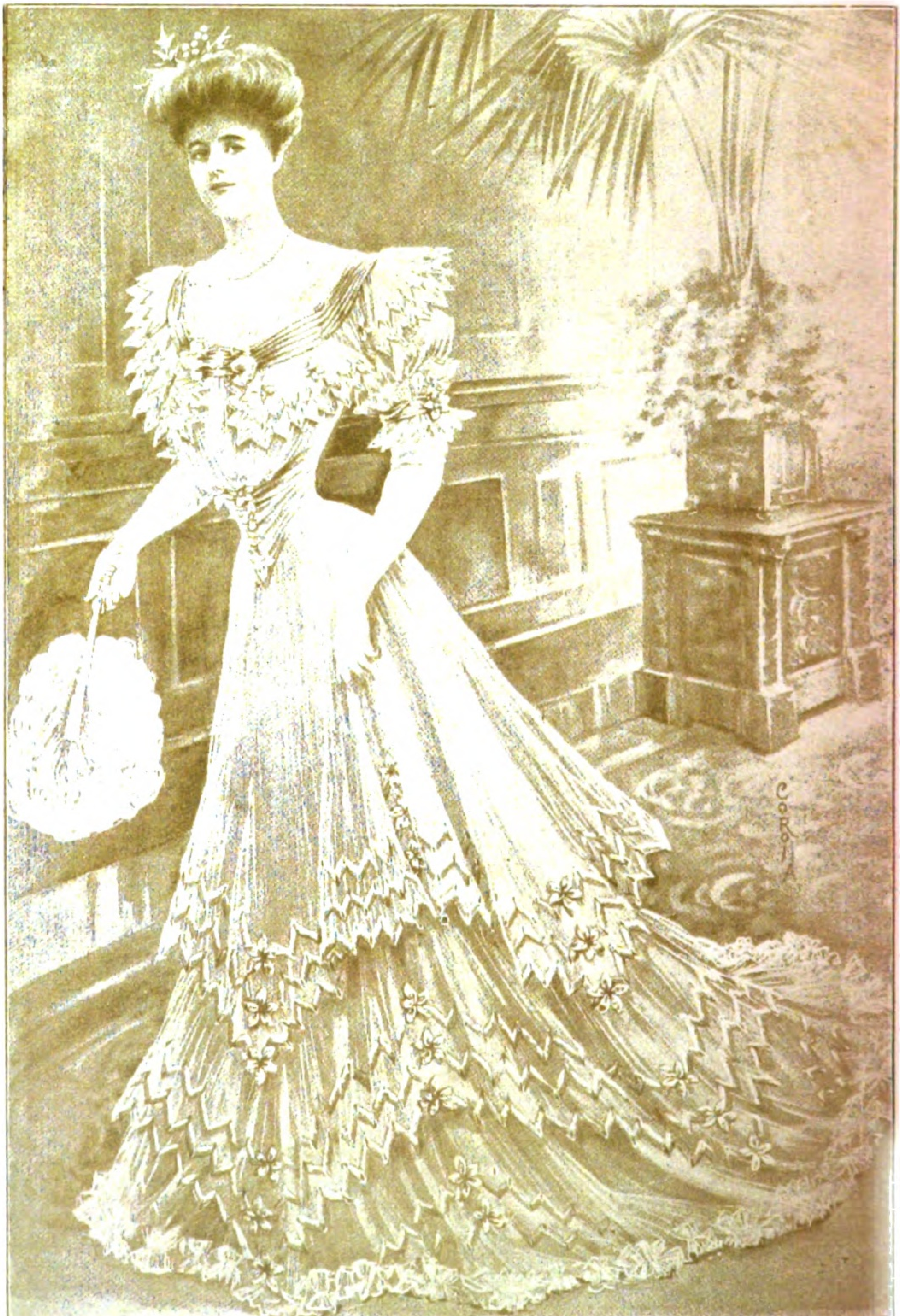
發行所　東京京橋區銀座一丁目　大阪東區北久太郎町四　大日本圖書株式會社

女(丁の二)

女(丁の三)

女（丁の四）

夏の装ひ



牙城



（讃州高松城）



ネッスレス ミルクフウド

各國帝室及王家御用



歐洲諸國及ビ本邦名醫ノ讃辭ヲ辱フセル者ナリ
小兒病者又タ平素不消化ニ苦ム者ニ適當ノ最良食物ナリ○最モ盛カンニ藥舗洋酒食料品店ニ販賣ス

女(戊の一)

(弍の二)

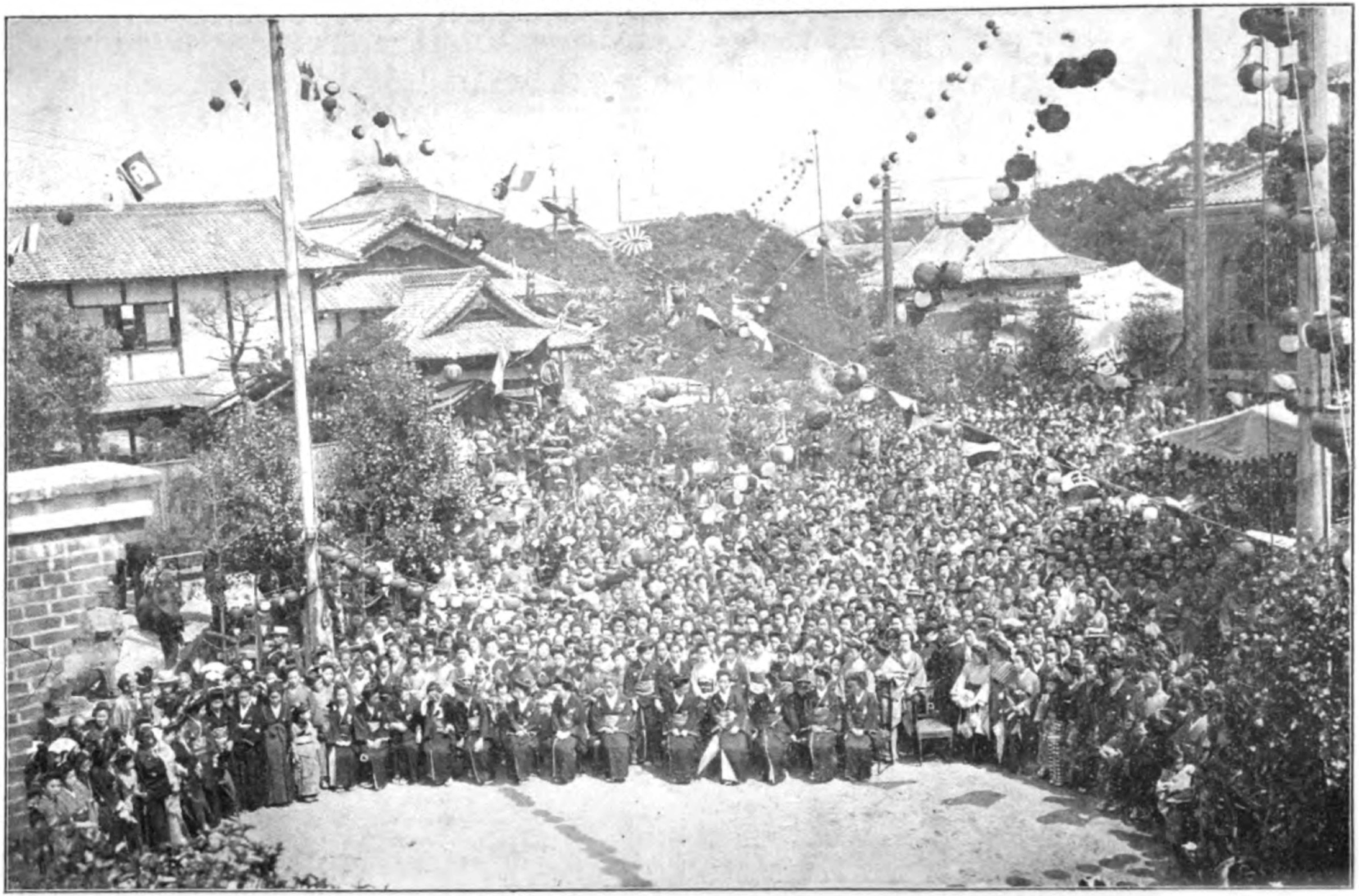
女（戊の三）

慈愛





愛國婦人會大阪支部總會



（大阪　三上高等撮影寄贈）

根治確證

わきが

新治療藥 プラピヨン

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用ひて苦惱を脱せよ丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を潔淸驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難症も甲價特別製を用ひよ

毛のはへる

毛髮生養液 原名ヘクネス

めはへぎわうすき人●まゆ毛●ひげ●婦人こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひよ毛髮溶生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ有力なる最新液にして毛をはやしたき人早く試みられよ●ぬけ毛落毛を止

化學製品

色の白くなる

ハンドコロン溶液

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十三錢本劑は貴紳淑女粹士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝をなし盛に皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

みやくをとろし

メソルビン此藥は子宮を痛ず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は効能極めて烈強なるも毫も身體に害なくたやすく下る又月經不順より起る子宮血の道を全治し古血を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製分貳圓參拾錢小包料拾錢

專賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舘

根治確證 新治療藥

梅毒

ギネール GINEL

本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の完全なる一種特有の新劑にして忽ち全身の毒を大小便にとり如何なる劇烈のはい毒●そう毒●かさ●ふきでもの●よこね●かんそ●骨うづき其他如何なる惡性の梅毒も必根治す世間樣々雜多の無效なる賣藥の比に非ず輕症は半劑惡症重症も二劑用ゆれば奏效す藥價半劑八十五錢一劑一圓六十錢二劑三圓郵券代用一割增

らい病

新治療藥 ダービン

本劑は最近歐洲諸大家の最良藥と認めたる有力藥品の成劑にして何人にも容易に服藥し得る樣弊舘幾多の調劑の實驗に鑑み丸藥となしたる者にて其有效確實なる本劑に優る者なし試に一劑分丈け用ひ見よ必ず大效あり一劑廿日分三圓二劑四十日分五圓特製九十日拾圓●郵券三錢送れ説明書進呈す

獨逸撰方 効驗一夜に顯る

りん病

新治療藥 キーロシン

本劑は最新の文明的有力藥にして如何程頑固劇烈なる淋病しようかちも一夜に輕快を覺え膿血速に止り痛を止め輕きは一劑重きは二劑分

如何なる惡性の頑固慢性病も特製を用ゆれば忽ち根治の目的を達す本劑は内服すれば一種の化學的變化を起し強度の殺菌防腐液となりて便と共に排泄せられ自然の洗滌法となり淋菌を根底より驅逐し人に知られず居ながら文明的新治療を受るを得速に病根を斷絕し苦惱を脱せよ

日本一手發賣本舖 藥價一劑輕症用六十五錢二劑重症用一圓廿錢特製惡性頑固症用二圓卅錢

專賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舘

(己の一)

農商務省技師
農學士 齋藤萬吉君閲 峯三八君著（既成發賣）

農家百事問答

洋裝三六判
紙數約四百五十頁
全一冊
正價三拾八錢
郵税八錢

農事の改良發達は近時大に步武を進め之に伴ひて斯業に關する出版多しと雖概ね高尚に過ぎて實際に適合せず爲めに專門的學術を修むるもの丶參考となるも未だ農家一般の必讀要書となるべきもの尠なく常に遺憾とする所なり今や我國强露を征して國威大に宣揚すと雖も退て其富源たる農事を顧みれば大に猛省せざる可からざる所あり本書は戰後國民の精勵すべき殖産興業の援助たらんことを圖り種藝、肥料、植物病理、昆蟲、園藝、煙草等に關し自ら耕耘に從事せる全國の當業者が疑惑不審の點に付き當局者に說明を求めし事項を蒐集し極めて實際に適合ならしめん爲め各項を問答體に記し不明の所は精密なる挿圖を以て說明し懇切に其解を與へたり且つ斯學に精通せる齋藤農學士の綿密なる校訂を經しものなれば葢し當業者諸君の爲めには此上なき參考要書といふべきなり。

農學博士稻垣乙丙君著（文部省檢定濟）
● 農學階梯
全一冊 大判上綴 正價七拾五錢 郵税拾貳錢

農學博士稻垣乙丙君 西鄉政次郎君合著
● 續農學階梯
全二冊 大判上綴 正價一冊七拾五錢 郵税一冊拾貳錢

前山口縣知事法學士武田千代三郎君著
● 農民讀本 新農家
全一冊 中判並綴 正價四拾錢 郵税八錢

農學士高橋久四郎君著
● 園藝通論
全一冊 大判並綴 正價四拾錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢

農學士高橋久四郎君著
● 園藝各論
全一冊 大判並綴 正價四拾錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵税拾錢

志岐湖月君編
● 新撰農業要項問答
全一冊 小判上綴 正價貳拾錢 郵税四錢

發元兌　東京日本橋區本町三丁目　博文館

跡見女學校卒業生



武信卯一郎君著▲最新刊▼

新編記憶法

菊判全一冊●紙數貳百餘頁●定價四拾錢●郵税四錢

記憶法を記憶するの煩に堪へずとは從來の記憶書に對する批難なり本書は最新最良の方法により心理學を根據とし各人天賦の記憶力を基礎として建設したるもの頭腦の明晰記憶の好良を欲する者は須らく速に本書を讀め

目次

醫學博士佐々木政吉先生序文及講演
東京府師範學校長瀧澤菊太郎君編纂

六版

冷水養生法

一名簡易無費長壽法

菊判全一冊
定價十八錢
郵税金四錢

湯本武比古君序
樺正董君序
精神靈動著者桑原俊郎君著

六版

實驗記憶法

菊判全一冊
定價金卅錢
郵税金四錢

◉發行所 東京市神田區小川町九番地 (電話本局二四二〇番) 開發社



美術

漆器

蒔繪

御婚禮道具 ぜんりん 家具 其他

製造

ぬりもの陳列場設置有之候間御隨意に御縱覽多少ニ不拘御用向被仰付候偏ニ奉希上候敬白

東京市日本橋區
室町貳丁目

木屋本店

林九兵衛

電話本局(九百九十二番 千七百十番)
電信略名(キ 九)

女(庚の一)



女（庚の二）

女（庚の三）

天下一品

最上醤油

釀造元

千葉縣野田町

茂木佐平治

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に有之候

御秘 御園白粉

畏き邊りの御料に召させ給ふ

完全無鉛 高貴御化粧料

御料 御園白粉

◎ねり製 御園の雪

◎水製 御園の月

◎粉製 御園の花

◎クリーム 御園のつぼみ

◎高貴化粧水 御園の露

◎打白粉 御園なでしこ

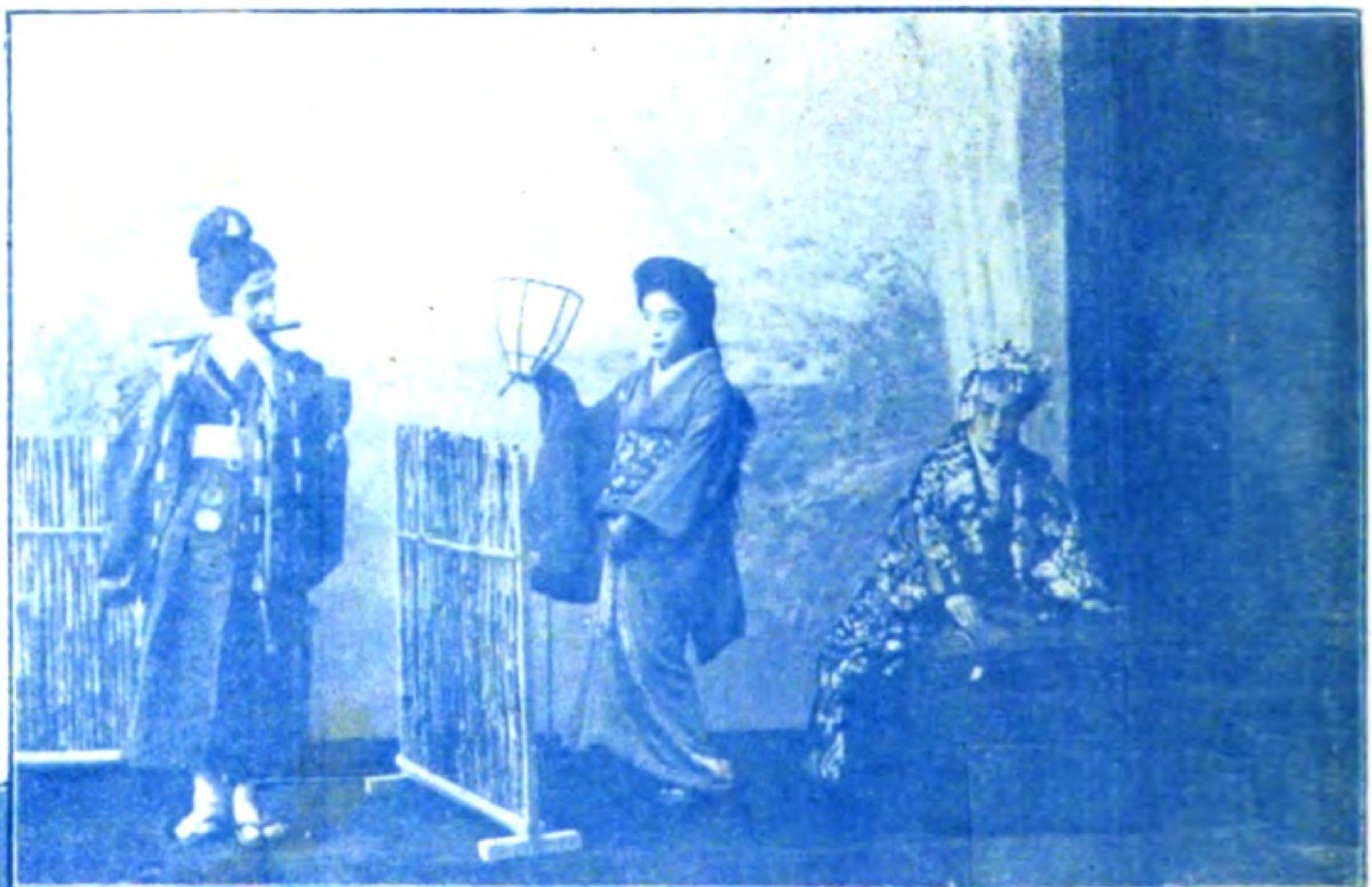
◎濃厚化粧水 四季の花

製造元 東京芝 胡蝶園

發賣元 東京市日本橋區橋町四丁目 特電浪花四四八番 丸見屋

女（庚の四）

天津の日本婦人慈善會



活人畫（小督）



三曲合奏



活人畫（會津落城）

博文館編輯局編纂

全一冊洋裝菊判
石版表紙裝幀優美
紙數約六拾頁
寫眞版挿入
（既刊發賣）



女子に日誌記載方練習の必要なることは云はずもがな、各女學校高等小學校等に於て生徒に夏期休業日誌を記載せしむることは近來殆んど其軌を一にせり然るに之に恰當せる簿冊のあらざるため亂雜なる書き方に流れ易く教師は之を閲覽訂正するに苦み生徒は之が保存に其の興味を欠く弊多し是れ等の弊を矯むるの目的を以て本書を編纂せり惟ふに現今の女學生がその學科の煩多に逐はれ社會の問題に疎く卑近の家事にさへ通ぜず卒業生にして尚ほ且つ沒常識の譏をうくること少なからざるは實に嘆はしきに非らずや故に本書は夏期休暇中を利用して避暑消閑の間に知らず識らず日常百般の智識を與へんことを目的とせりされば本書は縱し之を日誌に用ゐずとも夏期休暇の友として慥に好讀み物たるべきを信ず幸に高需を待つ

正價一冊拾貳錢
五十冊以上一冊拾壹錢
百冊以上一冊拾錢
▲外に郵稅一冊貳錢宛

各女學校生徒
高等小學校生徒
夏季休業中
必需書

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

（辛の一）

明治母の會小集



米國藥學化學士藥劑師

川崎近雄君著



夏の夕一家團欒の食卓に研究に依て得たる自製の清涼飲料劑を上さば如何に家庭の趣味を深からしめん。又炎暑灼くが如き日來客に接したるの時先づ一盞の清涼飲料を饗すれば如何に主婦の品位と注意の周到なるかを顯はさん。本書は久しく米國藥舖にありて清涼飲料劑製法に經驗を有し亦前に京都醫科大學醫院藥局にありて助手を拜命し製劑上に就きて多年の研究を積みたる川崎近雄君が家庭及製造業者の爲め新鮮美味なる清涼飲料劑を輕便實用的に製する方法を簡明に記述したるものにして。家庭に於ては主婦の良友又營業者には好指針たる樣編述したる者なれば。趣味と實益と衛生とを兼ねたる無二の良書は本書を措て他にあらざるなり。

全壹册
洋裝四六判
紙數八拾頁
正價拾貳錢
郵稅四錢

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

近日發行

(一〇四)

巖谷小波君著



全一冊

四六判裝幀優美

紙數約三百頁

九夏三伏の候、休暇三旬の閑を得て、一味の涼風に、百年の齢を伸べんと欲するものは、この『笑の國』に遊ぶに如かず。『笑の國』は、文壇の笑上戸、兼ねて笑はせ上手なる例の小波山人が、輕快の筆と洒落の想とを以て新たに建設する所なり、我と笑はん人々は、疾く來つて笑へかし。夫れ天國は近づけり笑の國は開かれたり矣。（近日發行）

東京 博文館 本町



大評判のクラブあらひ粉を

御婦人の愛用頗る盛なり

帝國化粧品倶樂部

東京市內

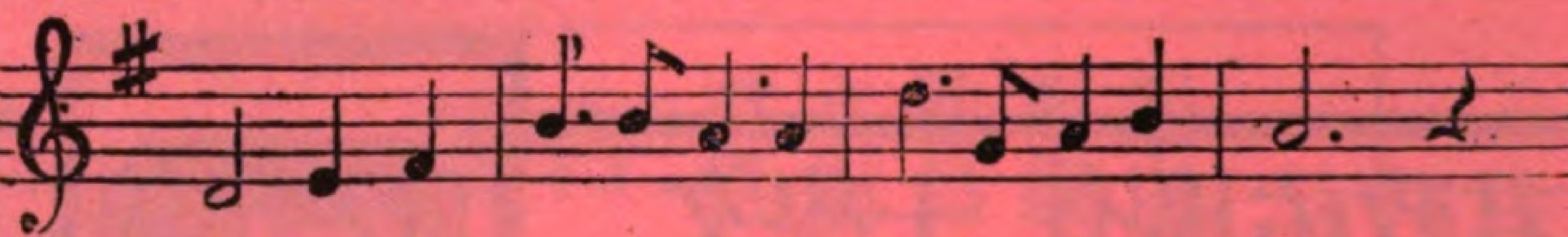
有名なる化粧品店にあり

（五の四）

東洋女藝學校卒業生



（所在地東京神田猿樂町）



日本唱歌集

樂書刊行協會編

全一册洋裝總クロース
紙數六拾頁
近日發行

國は世界無比の國體なり人は文武秀絶の人種なり而して風光明媚氣候和順の邦土に住する吾人は須らく平素唱歌奏樂の技術を盛にして以て此光輝ある此名譽ある邦人の精神教育に資せざるべからず本書收むる所の歌曲は何れも現今の斯道大家が本會の爲めに特に作歌作曲せられたるものなれば本邦人の性情に適せざるものは一もあることなく且つ幾度か之を實際に試奏せしを以て寸毫の遺憾なきなり而して此歌曲は師範學校中學校女學校幷に高等小學校の唱歌科の資料に供する目的なると共に一般國民の演奏にも利用すべき最も完全なる歌曲といふべきなり其内容は左の如し

金剛石……皇后陛下御詠　奥好義作曲
養蠶の歌……皇太子妃殿下御詠　樂書刊行協會謹作曲
武士……小笠原長生作歌　田村虎造作曲
摘草……武島又次郎作歌　天谷秀作曲
皇后陛下御誕辰日奉祝歌……下田歌子作歌　高井德造作曲
納涼船……旗野十一郎作歌　目賀田萬世吉作曲
礒の波……松平靜作歌　高井德造作曲
花火……旗野十一郎作歌　早川喜左衛門作曲
四季鳥……鳥居忱作歌　高井德造作曲
小督局……中村秋香作歌　山田源一郎作曲
川中島……棟方悌二作歌　高井德造作曲

山内一豊の妻……中村秋香作歌　納所辨次郎作曲
囹園梅……旗野十一郎作歌　島村吉門作曲
追悼歌……旗野十一郎作歌　米野鹿之助作曲
望郷の歌……小笠原長生作歌　高井德造作曲
菅公……高井德造作歌　メンデルフ、ッーン作曲
歸省……松平靜作歌　高井德造作曲
征露紀念 七十七士……池邊義象作歌　クッケン作曲
征露紀念 速鳥……池邊義象作歌　クッケン作曲
卒業式歌……旗野十一郎作歌　高井德造作曲
暮春……税所敦子作歌　上眞行作曲

東京　博文館　本町

(其の一)

武士道家訓集

文學士有馬祐政君
秋山梧庵君
共編

我日本道德の**精華**たる武士道は、**鎌倉以後の武家法令家訓類**が**根幹**となりて、**陶冶鍛錬**せられたりと云ふも、敢て不當にあらざるなり、故に苟も武士道を**究明**し、若くは之れを**發揮**せんと欲せば、必ず此等數多の**家訓類**を**討尋**するの要あり。

曩きに井上文學博士有馬文學士の合編に成れる武士道叢書には、如上の法令家訓の類を併錄すべかりしも、頁數に限りありて之れを加ふること能はざりしにより、更らに有馬學士秋山梧庵氏之れが**修補整理**の任に當り、本書を蒐輯せられたり、故に名は家訓集と云ふも武士道叢書の**續編**と見て不可なし、今や**德性**の**涵養風教**の**宣揚**は**朝野**に**喧**しく、此時に臨んで、本書出づ苟も**武士道**の**研究者**と**德育教範**の任に當る人は、一讀せざるべからざる好書なり。

全一冊洋裝菊判
紙數三百三十餘頁
正價金四拾五錢
郵稅八錢
(既成發賣)

(癸の二)

東京 博文館 本町

女（癸の三）

帝國百科全書

第百五十編

文學士 遠藤隆吉君著 既刊

視話音字 發音學

發音學の書は我國唯本書あるのみ、本書の特徴を列擧すれば、(一)各音の如何なる口形に由つて起るかを明かにし得ること、(二)一種特別の音字は即ち其口形を表象し居ること、(三)各種の音を記述するに當り視話音字は一層精密なり得ること、(四)外國音を聞き其如何なる發音構造より出るやを辨識し得るに至ること、(五)母音は同きに似て種々の差異あること、(六)便利の爲めに口形圖を最も多く挿入せり、(七)英語の發音を明かになし得ること、(八)理論よりも記述を主とせり、(九)日本の音響を知り得ること、(十)啞子教育を爲し得ること、(十一)發音矯正をなし得ること、(十二)吃音矯正を爲し得ること、是れ發音學の大要にして本書の特徴なり

上製五拾五錢 郵税拾錢
並製四拾錢 郵税八錢

第百五拾壹編

南條文學博士閲 文學博士 前田慧雲君著 (近刊)

佛教美術

日本は美術國なり、而して其原流は佛教によりて開發せらる、即ち日本美術を知らんとせは、必ずや佛教美術の研覈を忽緒に付すべからず、今や美術研究の聲喧しきにも拘らず、未だ日本美術史だも編著せられざる所以何ぞや、他なし原始根元の如何なるかを知り且つ導くものなきに由れり、前田博士は碩學の大家なり、而も南條博士の校閲を經、我帝國百科全書の一部として茲に之を出版するを得たり、茲に佛教美術を原始的に考究し、其發達及び形狀につき、懇篤なる編述を了し、而して鳴呼是れ我美術研究上の一曙光にあらずや、又斯道を益する決して尠少ならざるものあるを信して疑はず。

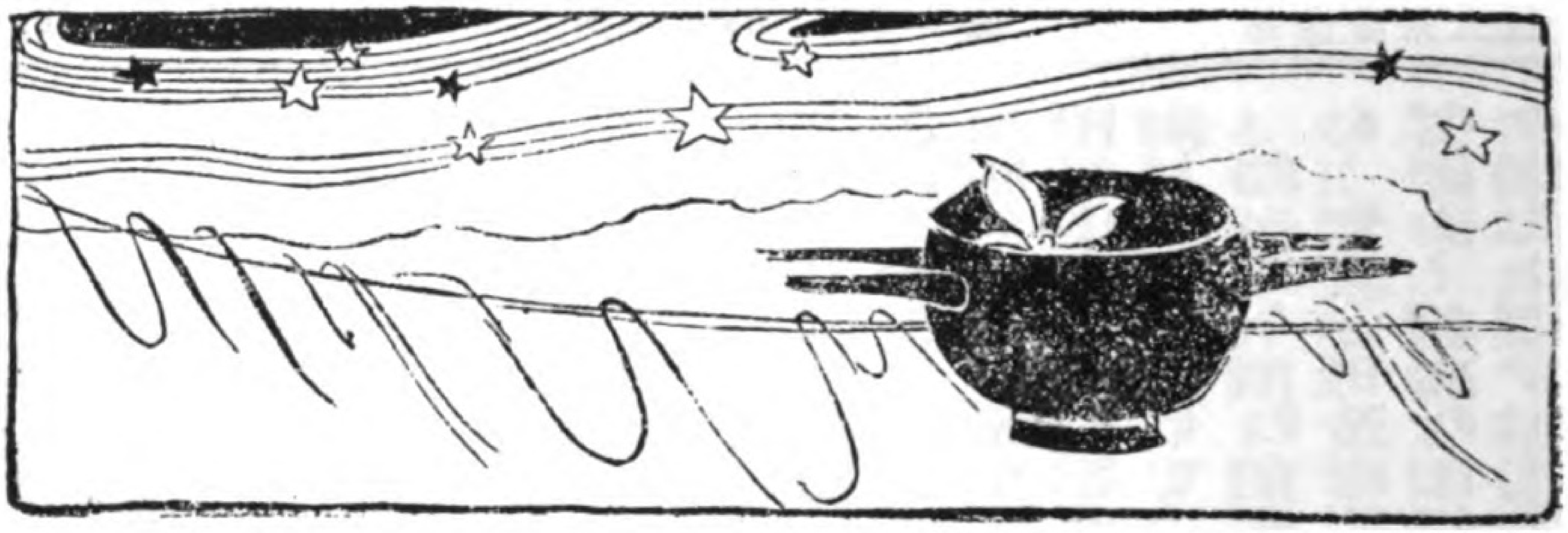
上製五拾五錢 郵税拾錢
並製四拾錢 郵税八錢

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

女(癸の六)

（癸の七）

女（癸の八）



女學世界

第六卷第九號

七月五日發行

●行事＝此月十一日頃より諸官衙學校の暑中休暇○各地海水浴初まる○十三日より盂蘭盆○河々にては施餓鬼あり○九日に淺草觀音の四萬六千日○富士登山開き○美濃長良川鵜飼初まる○隅田川の大花火は此の月の下旬なり。

●遊覽＝東京附近にては上野公園、隅田川の夕涼、愛宕山の月、角筈十二社、芝浦海水浴、大森の海岸、羽田の礦泉○地方にては日光、松島、舞子、須磨、近江八景、鎌倉、大磯、興津、舞坂の海水浴等避暑遊覽の地頗る多し。

●料理＝胡瓜揉み○刺身○茄子の鴫燒○どじやう鍋○鰻の蒲燒○松魚の沖膾○枝豆○干瓢○冬瓜の葛煮。

●日曜＝一日、八日、十五日、廿二日、廿九日。

時論

女子の獨立生活

江原素六

近頃女子の職業が、種々發見されたに就て、婦人社會に獨立自營の道を求むるものが、益々多くなつて來た、之れは果して喜ぶべき現象であるか、一寸考へて見なければならぬ問題である。

現今の女子敎育は少しく、其の方針を誤つて居るかと思はれる、何故かと云ふに、一體婦人に學問をさせる旨意は、第一其智識を廣くし、品性を高め、趣味を饒くし、嗜好を高尙ならしむるのが目的である、それは他日人の妻となりて、一家を組織した時、夫の事業を補佐して、遺憾なからしめんが爲めである。

然るに今日の女學校は生徒に學問や技藝を敎ゆる事のみを勤めて、肝腎なる本來の目的を忘れて居る樣である、先づ一日五時間乃至六時間を、敎師は義務的に其學術技藝を授くるのみに勤めて居るから、敎はる所の女生徒は、本來の目的を忘れて仕舞て、其の授つた學術と技藝を應用して獨立自活の道を求むる樣になるから其の結果は即ち良妻賢母の看板をかけて、盛んにオールドミスを養成して行く事になる、是れ今日の女學校一般

の弊である、右は女學校に就て云つたのであるが、更に父兄の方に就て見ても、甚だしい心得違ひがある、即ち今日の社會では父兄が其の娘を學校に出すのは、他日良妻賢母として、家を治め子を養ひ、夫の內助をするのに差支なくするとの準備でなくて、只々學校の卒業證書を目的として、嫁入道具の一種に數へて居るのである之れが抑も間違で、こんな事をして居るものだから、若し一朝良人にでも死なれると、直ちに生活の途に困ると云ふ事になつて來る、そこで多少は自活の道を敎えて置く事も必要であるが、普通一般の女子に、只獨立し得べき技藝のみを敎ゆるばかりだからして、嫁入の後ち、良人若くは姑舅にでも、八釜しく叱られると、おれは獨立の生活が出來る、こんな所に我慢して居らずとも、到る所日は照ると云ふ、氣樂な考へを以て、直ちに飛び出して仕舞ふ、之れは大なる間違で、一生孤獨の生活に終ると云ふ實に悲しむべき結果に陷るものが多い、今日の女學校の敎師、裁縫の敎師の如き多くは此の類である。

斯ふ云ふ事は屢々吾人の耳にする所であつて、素より女子其人の罪も有らふが、其大部分は最初の父兄の考へ違ひと、學校に於ける敎育方針が誤つて居つたのに原因するのである。（文責記者に在り）

情實を酌める婦人研究

文學博士　桑木嚴翼

▲同情を以て女子を觀察せよ

婦人問題の聲が旺になると同時に、女子自身の研究問題も頗る範圍が廣くなり、權利問題、家庭問題、職業

問題と云ふやうに種々の方面に渉つて解決を求める樣になつたのは、軈て女子活動の門戸が開かるべき徵候かと思はれる。然し一方で女子の位置が高まると同時に又一方では頗る婦人を罵倒する聲が熾になつて來た。之が何故かと云ふに常に婦人を論ずる人々が概ね男子だからである。人間は中々身勝手なもので、婦人自身に婦人を論せしむれば婦人相當の都合の宜いことを云ひ、又男子に婦人のことを云はしむれば、婦人は同じ人類の中でも別種の人間なるかの如く心得、『女子は女子自らの女子に非ずして男子に有さるゝ女子なり』。といふ程極端に考へて居る人々さへあるだから何時までも男女間の意思が疏通せず、隨つて萬事に誤解を生じて、つひ冷罵的に觀察する樣になるのである。故に女子は男子の惡口を怖るゝことなく、寧ろ進んで自ら胸中にある理想や主張を告げ、正直に意思の疏通をはかる必要があらうと思はれる。又男子が婦人問題を解決せんとするには、先づ第一に女子に對する同情心即ち婦人の運命、婦人の境遇、及び其現在と過去とを考へて觀察せねばならぬ。例へば東洋と西洋とは婦人の道德に於て非常の相違がある。西洋では女子の貞操を矢釜しく云ふと共に男子にも同等の制裁がある。けれども日本では然ぢやない、之を米國邊の道德に比べて見ると全で反對である、頃日も世界の文豪と目されて居つた、露國の小說家ゴルキーが米國に渡航すると紐育の市民は狂喜して之を歡迎したが、一たびゴルキーの同伴せし婦人が正妻に非ずして女優であると云ふとが知れ渡ると共に俄然米國民の態度は一變して、遂には旅館より謝絕し放逐するほどであつた、米國の社會制裁は恁くまでに嚴正である、同じ歐羅巴の中でも佛蘭西や伊太利になると、男女とも餘り貞操が正しくない、けれども互に之を默許し合つて居るから日本のやうに片手落の攻擊はない、それを我邦では男子自身の墮落は棚に上げて置き、惟り女子のみを責めやうとするが私は昨今世間で云ふほどに

▲女學生は墮落して居らぬ

ものと信じて居る。或は豫想外に貞操であるかも知れない。故に今女子に就いて貞操を云々するよりも、寧ろ男子自身に省みて相互の習慣を改めねばならぬと思ふ。そこで男子が女性を研究するに必要な條件は「女子とても同一の人間なれば其性質は十人十色なり」との觀察である。元來男子は異性を觀察するに當つて必らず「女子は斯樣の者である」と皆な同じ性格を具へたものゝ如くに斷定する傾きがあるが夫が抑もの誤りである。男子の中にも男らしい男と女らしい男とあるが如く、女子の中にも女らしい女と

▲男らしい女とがある

男子の性格に剛柔の差別がある如く、女子にも亦たその區別がある人の性質は天與のものであるから之を無理に枉げるとは却々難い、だから女子も男子と同樣の人として觀察すれば其缺點も長所も明かに見えるのである。私が女子に對する同情とは、即ち其天性を自然に發達せしむるの謂で、この同情心がなければ女子問題は永劫に解決せらるべきものでない。之は女子に代つて男子に對する私の注文である。それから

▲結婚問題を如何にすべき乎

と云ふ事は女性の最も痛心する處であるが、之に就いては餘り局外から干渉をする必要はなからうと思ふ。要するに男と女とを十一して初めて完き人と云ふものか出來、男女相調和して家庭を作るのが自然の約束であるから、結婚は決して悲觀すべきものでない。併し從來の例によると結婚に就いて父母其他の干渉が烈しいため、若い男女の間に幾多の悲劇が演出されるのみならず、殊に女子の身の上より見て結婚といふものが一大問題である、然らば

▲自由結婚は如何

と云ふに、之は頗る考物である。これに依て意外な幸福を得た人もあれば亦た非常な不幸に陷つて居る人も

ある。畢竟自由結婚なるものは瞬間の發動によつて成立つたものであるから一種の運で、當ることもあれば當らぬこともある。私は自由結婚でも非自由結婚でも何方でも關はぬと思ふが、唯だ一旦夫婦となつた以上は互に相扶け相許し、少々の缺點は大目に見、不足な處は忍耐し合つて、共白髪まで暮されんことを希望するのである。互に結婚當初はつまらぬ男だ、嫌の女だと思つても萬事運と諦めて暮す中には自然と感情が融和し愛情が生じ、夫婦の間に特種の美點が認められる樣になるから、決して絶望してはならぬ。又た

▲家庭は如何に處理すべき乎

と云ふ事も婦人の念頭を惱すところの問題であるが、之は決して理想通り或は理窟通りに行かぬものであるから、婦人は飽までも夫の補助となる心得で、臨機應變に楫をとつて行くが宜しい、若し爾でなく自我の意見を張通さうとする時は、忽ち衝突して不平と不滿に身を食はれて、遂には離縁沙汰となり又は煩悶懊惱の結果、生涯を破壞するやうな事になる、尤も一身を破壞する程の不健全思想の人ならば、生きて居た處で仕方のない人であるけれども、其爲跡に殘る父母親戚社會に及ぼす悪影響は實に非常なものである、さらば所謂

▲良妻賢母主義は如何

と云ふに、私は之に對して無論異議のあるべき筈はない、併し強いて言はゞ元來此主義は男子が自分勝手に製造して女子に押附けた言葉であるから、女子にとつては少しく殘酷ではないかと疑はれるのである。勿論女子は家庭の主婦たるべき者には相違ないけれど、然かと云つて前にも述べた如く、天性を強ふるのは甚だ宜しくないことで、女と生れたからは必ず人の妻とならねばならぬと云ふ理由もなからうと信ずる。若し非凡の才を有し學問其他の事業で立派に獨身生活の出來得る婦人ならば男子全體の女として大に尊重する價がある、男子も亦た一生無妻で終つても、人類の全部に於て人の父たり母たりする價値は十分である、畢竟教育の方針とい

ふも此邊から割出して行かねばなるまいと思ふ。然らば將來の

▲女子に對する敎育方針

は如何と云ふに、私は或一部の人の云ふが如き消極說は採らぬ、寧ろ進んで一般の婦人に積極的敎育を普及して天才の人があればドシ〳〵引上げてやりたいと思ふて居る。女子に學問をさせるのは危險であるとか或は生意氣になつて困るなど云ふのは最も卑怯なる男子の言葉で、若し女子が學問をし偉い者になれば自分達がそれに凌駕されはしまいかとの虞から起る一種の嫉妬心である。若し女子が偉い者になつて困るなら男子もそれに負けぬ程の學問をしてそれ以上の豪いものになれば可いではないか、又生意氣を云ふのが氣に障るなら男子自身で女に生意氣を言はさぬ樣に自ら奮發すれば宜いではないか、敢て女子の活動範圍を制限する必要はなからうと思ふ。私は何故に女子敎育を奬勵するかと云ふに、女子が他日多少位地ある夫に嫁いだ塲合に、自ら相當の智識がなければ夫を解することが出來ないで、互に同情心を缺くからである。例へば文人學者若くは美術家の如き人の妻にして一通りの敎育がなければ夫の學問又は趣味を解することが出來ぬ、趣味を解する力がなければそれに對する同情と云ふものがない、同情がなければ自然夫婦の間が不調和になつて行く道理であるから、學問は是非境遇の許す限り行つて置かねばならぬ。殊に將來の婦人は必ずしも

▲柔順ばかりが譽れでない

と思ふ敎へる側でも亦た此方針を以て餘り婦人を抑壓せぬ方が宜からうと信ずる。玆に獨逸の脚本で見た好個の適例がある。

獨逸の某處に一對の若い夫婦があつて其夫は頗る新らしい思想を持つた專門の學者で而も熱心な勉强家であつた。又細君の方は極く温順の性質で萬事に忠實しくよく家政を治むることに力めて居たが、惜いことには少

しく學問の素養を缺いて居た爲に夫が何學を研究してゐることやら自分には更に解らぬ、夫は妻が自分の趣味を解して與れぬのでモ少し敎育のある婦人を擇べばよかつたと私に悔ゐ乍ら面白からぬ日を送る中に夫婦の愛情は次第に冷却して遂には一日口を利かぬことさへある樣になつた、妻は之を不平に思つて時々不足がましいことを云ふと却て反對に、無學な奴は仕方がない、と云つて不平を鳴らされると云ふ始末。一日夫が例によつて讀書に餘念なき處へ細君は不平の餘り、今月の拂が足らぬとか子供の衣服がドウしたとかいふ樣な物質的の問題を訴へに來たので夫は耐え兼ねて『一體獨逸の女は子守をすることと臺所を仕末することの外に能がないのか。』と怒鳴りつけた。すると細君の方にも一理屈あつて『仰せまでもなく、妾とても勉强したさは山々ですけれど、家政を整理したり子を育てたり、到底其時間が許しません』。とやり返した。猶ほ何彼と押問答をして居る處へ、此學者の名聲を慕ふて訪問して來た一人の女學生がある。此女は頗る博學で其夫とは大に對話が投合して一見舊知の如くなり遂に學者の家に同居することとなつたが、それ以來夫婦の不和は益々甚だしく一家に風波の絕間がない。そこで兩親は嫁を氣の毒がつて同居の女學生を退去せしめて了つた。然るに其夫は間もなく憂鬱症に罹り、一方の女學生も全くの發狂者となり終つた。

と云ふ悲惨の事例があるから、女子は少くも夫の才學、見識及び趣味等を解するだけの敎育を受けねばならぬ。然り乍ら玆に誤解してならぬ一事は、特別の天才を有する人、若くは境遇上獨身生活を送らねばならぬ婦人を除いて、一般の婦女子に專門的の深い學問をせよと云ふのではない。唯だ夫の職分や趣味を解する必要ある智識を修めよと云ふのである。つまり深くなくとも廣くして淺き平面的の學問を要するので、餘り深く專門的に傾いては却て夫と議論の衝突を起したりなどするから此邊は宜しく度合を考へてやらねばならぬ。即ち前に述べた柔順なる妻の反證とも云ふべき實話がある。

これも獨逸に於ける出來事で、夫婦共專門の智識を有する科學者で、何れも負けず劣らずの勉强家である。が過ぎたるは及ばざるが如しで、兩人とも餘り學問にのみ凝りすぎて家庭のことなどは更に省みぬ、のみならず偶ま對話すれば議論がましい事ばかり言合つて、少しも夫婦の愛情といふものがない、そこで夫は家庭の無味乾燥なるにたへざる儘、不圖つまらぬ婦人に關係して悲慘なる末路に了つた。

と云ふ一例もある。日本には未だ恁る女學者がないから安心ではあるが、女子の學問も度に過ぎ理に傾いては以上の如き結果を來すから、よく／＼前後の例話を對照して其中心を歩むやうにしなければならぬ。男子には男子の特長あり、女子には女子の特長があるけれど又各々短所もある、依てお互の長所を以て短所を補ひ合ふ樣にしたら多分の間違はなからうと思ふ、而して女子は餘り世間の非難を受けざる範圍に於て活動し、男子は亦た之を引上げてやる同情心を持たねばならぬ。之を概括すれば、婦人問題の解決は以下の數條に着歸する

▲婦人の進歩を罵倒するは男子が處世上の嫉妬心より起る一種の負惜み也。▲兩性間の意思を疏通せしむるは女子問題解決の捷徑なり。▲女子の貞操を云々するよりも先づ男子自身に省みよ。▲女子の性格も百人百樣なれば之を一定の模型に入れんとするは非なり。▲女子に對する同情心なくんば婦人問題は永劫に解決せらる可きものに非ず。▲干渉結婚も非なれど自由結婚も考へもの也。▲萬事運命と諦めざれば不平の爲に身を過る。▲非凡の才を有する獨身の婦人は男子全體の女たり。▲女子の活動範圍を制限する勿れ。▲將來の婦人は柔順一方を以て律すべからず。▲女子に平面的教育は必要なれど專門學は却て夫婦の情を冷却せしむる由因也。

尙ほ萬事理論通りに行くものでないから、各自が每に變に處し機に應じて自ら工風するのが肝要である。

（桑木博士の講話を筆記したるものなれば文責は記者にあり）

男女青年の自殺に就て

文學博士　井上圓了

近來青年男女の間に自殺の惡風が流行して恰かも一種の傳染病の如き傾向があるから、爰に聊か自殺に對する卑見を述べやうと思ふ。

近頃の新聞紙に或る青年の自殺の記事が載つて居る、この青年は哲學館の出身で是迄哲學を研究した結果として自殺をしたものだと云ふやうに書いてある。果して私の學校に居たものか何うか、其の邊は未だ能く調べても見ぬが、何しろ恁う云ふ者が現はれるので世間では私の學校と自殺と云ふ事とが何ぞ關係でも有つかのやうに思ふて居ると云ふ事を耳にした。又何時ぞや華嚴の瀧に身を投じた藤村も亦私の學校（京北中學）の出であつたので、昨年私の學校から四百五十人許の生徒を引率して日光へ修學旅行を試みた時などは、向ふの警察署では若しや身投を爲はせぬかと非番巡査まで召集して非常に警戒を加へたと云ふ。是も私の學校と自殺とが特に密接な關係を有つものと思ふたからであらうが、此の二人の自殺を私の學校から出したとて、世人から箇樣に思はれては甚だ迷惑な話である。

今日本全國の統計に就て見るに每年一萬有餘の自殺者を出して居る。全國の人口を假りに五千萬とすれば、年々五千人に一人の自殺者を出す割合になる。けれ共自殺者は其の年齡は大概十五歲以上にして相當の思慮あるものと見ればならぬから、まづざつと三千萬人に對する一萬人位の自殺者と見ても可からう、すると年々三千人に付き一人の自殺者が出る割合になる、然るに哲學館は創立以來二十年間に三千人の卒業者を出して其內僅かに二人の自殺者を出したに過ぎぬから、之を全國の割合に比較して見ると、其の人數は非常に尠ない事になるので、決して私の學校と自殺とが特別の關係があるとは言へない。彼の帝國大學に於ても私の知れる丈でも二人の自殺者を出して居るから決して私の學校ばかりとは言へぬ。

道理上自殺は果して許すべきものなりや否や。倫理の方では其の枝葉に涉つた議論は別として、根本に就ては自殺は罪惡なりとし固く之を戒しめて居る。然らば吾輩の意見はどうかと云ふに、矢張り之を大罪惡と信じて居る。其の理由は甚だ簡單である。今こゝに他人を殺して善いものか惡いものかと問ふならば、何人も之は惡いと言ふに違ひない。吾輩の論據は即ち此處にあるので、吾輩は他人を殺す事が罪惡ならば自己を殺す事も亦罪惡でなければならぬと云ふ考を懷いて居る。

世の中には自殺は自分を殺すのであるから全く各自の自由勝手であると云ふ樣な考を懷く人もあらうが、併し深く之を詮議して見ると必ずしも其樣は言へない事情がある。自分の身體生命は自分一己のものではなく、隨つて自分の一量見で自由に處置する事の出來るものでは無い、自分の身體は自分が生み出したもので無ければ、亦自分獨りで成長きくなつたものでも無い、詰り親が箇樣に拵へて吳れたのであるから

此點から見ると自分の身體は即ち親のものと謂はればならぬ。其れより更に其の親に遡り又遡りしてずつと推し上つて見ると、自分の身體は祖先傳來の預り物で、決して自分一己のもので無いと判つて來る。猶一層遡つて見れば、自己の身體は結局宇宙萬有の力で出來たものであるから之を天地造化のものとこそ謂ふべけれ。決して自分一己のものとは言へないのである。又國家社會の方面から考へて見ても、我々が此の世の中に無事安穩に生存する事の出來得る所以のものは、即ち國家社會の賜物であるから亦之を自分一己のものとは言はれない。既に自分の身體生命が自分一己のもので無いとすれば、之を殺すのと他人を殺すのとは何等の差異も無かるべき筈で、他人を殺すが罪惡ならば自分を殺すは亦罪惡と謂ふべきであらう。

次に自己と云ふ事には私の自己と公の自己との二通ある。私の自己とは一個人としての人格であつて、公の自己とは廣く人間としての人格である。此の私の自己は自分で自由に處置するも差支はあるまいが、公の自己に至つては之を各自の私有物とは言へないから、之を自由に處置する事は許されぬ。一例を申せば、人に謙ると云ふ事は一つの德なれ共、公の自己から言へば無暗に人に謙り無暗に鄙劣手段を用ふる事は許すべからざるとであつて、道德上之を自重の德と謂つて居る。即ち公の自己は人間全體に關係あつて非常に貴いものであるので、此の點から言ふと我々は實に唯我獨尊である、私の自己から言へば自他の區別もあらうが、公の自己から言へば自他の區別は無くして彼れ何人ぞ我れ何人ぞと云ふ樣になつて來る。之を要するのに公の自己から見ると我々は萬物の靈長であつて、非常に貴きものなれば、之を殺す上に於ては自他の區別を認めるとは出來ぬ。即ち此の點より見るも自分を殺す亦罪惡なりと謂ふとが出來るのである。

次に一度人間を殺せば縱令如何なる過失ありとも最早取りかへすとが出來ぬと云ふ事も亦殺人の罪惡たる一理由であつて、彼の死刑に對する反對論は多くは此に論據を置いて居る。そこで我輩は、若しも取りかへすとが出來ぬから他人を殺すが罪惡ならば、自分を殺すも亦同じく罪惡であらうと思ふので此の點に於ても自他の區別は認められぬ。或は又吾人の生命は子孫繼續と社會永續の爲に大切なりとの方面から見ても、自分を殺すは他人を殺すと等しく罪惡であらう。尙ほ茲に注意すべきは物と生命との差異である、他人の物は其の承諾さへあれば之を破壞するも差支はあるまいが、他人の生命は縱令承諾あればとて之を斷つは道德上の大罪惡たるを免れぬ。既に承諾あるも尙且つ他人を殺すが罪惡ならば、自分の承諾にて自己を殺す所の自殺も亦等しく罪惡であらうと思ふ。

私は右等の如き理由を以て自殺は他人を殺すと等しく大なる罪惡であると信じて居る。所がこれは今日非常に流行して社會には著しく現はれて居る、すると一波起れば萬波起る自殺を企つる者が頻々として恰度傳染病の樣な傾向を以て四方に傳播して居る斯の如きは正しく其の精神の不健全なるを示すものなれば、大に注意をしなければならぬ。或は哲學を研究せるが爲に自殺を遂げた者もあるやうだが、哲學は決して其樣云ふものではない。病的精神を以て病的哲學をやればこそ其樣云ふ成行にもなるので、之も注意して豫防するが大切である。又我々が非常な逆境に立つた時には世事悉く厭になりて、遂にはあらぬ心を起して可惜一生を自殺に了る事があるが、一體此の世の中は何事も儘にならぬが普通の事であるから、平素より能く此の變の事情を辨へ、大に自己の運命の開拓に力を致されんとを望むのである。



探險婦人――小島官吾氏夫人

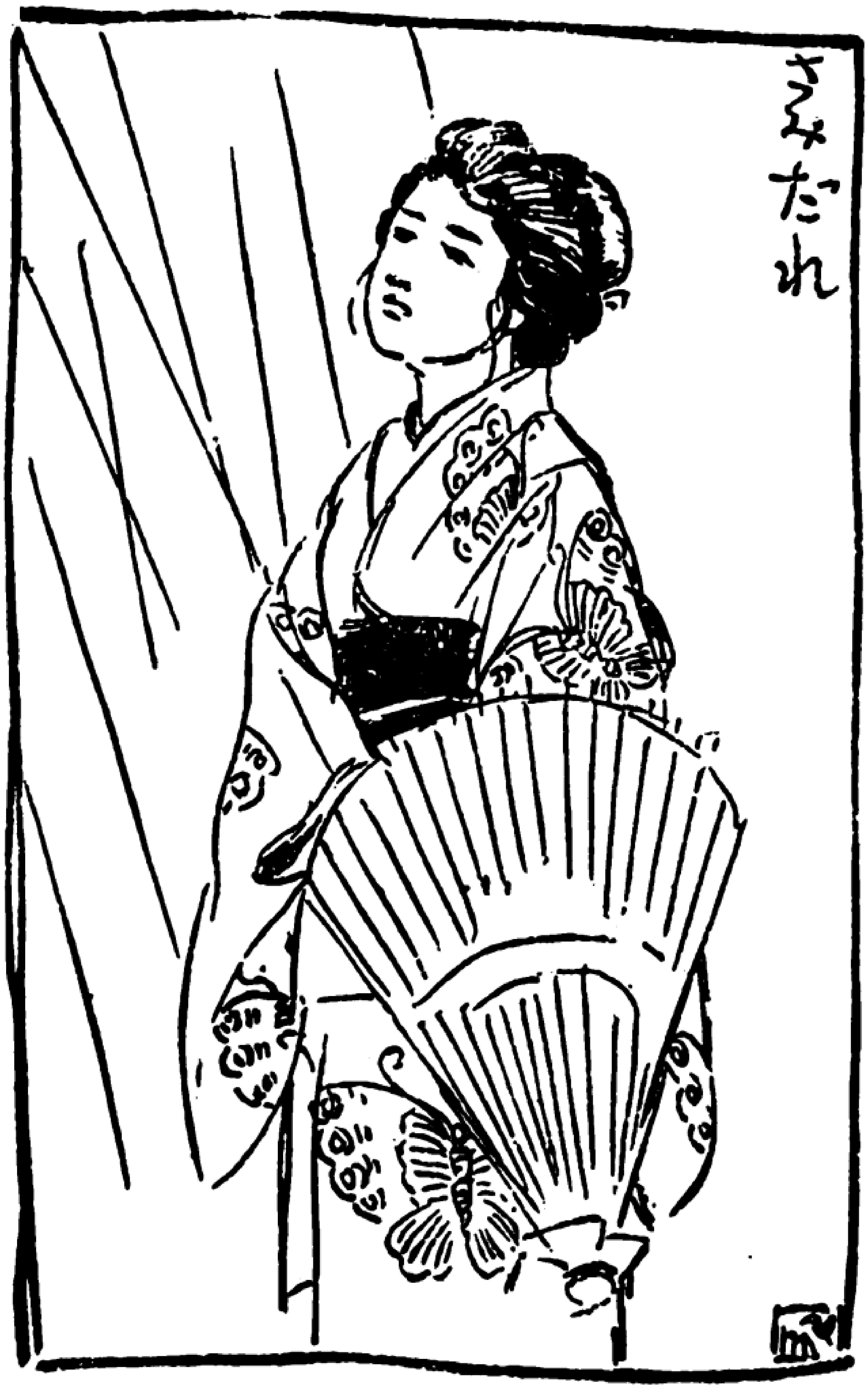
翠柳手記

良人將來の發展を圖らんが爲めに、多數の兒女を人手に預けて、單身米國へ渡られ、辛酸を嘗むること殆ど一年、彼地農商業の眞相を探究して一先歸朝せられたる小島辯護士夫人を頃日訪問しました。夫人名は淸子、筑後國柳川の藩士北川正男の長女で、文久三年九月生れゆゑ本年四十四歲ですが、幼より語學を修め、十八歲で小島辯護士に緣付かれたのです。夫人が元より敏活な資性は、熱心なる信仰によつて益々其光を加へ、以て今回良人の爲めに活動の基礎を作られた。夫人の如きは、眞に時代の要求に適つた賢妻と申して宜しい。尙ほ感服に堪へないのは、博愛の精神が每時夫人の心胸に漲つて居るので、御自分の御子供多であるに關らず、他人の子女を愛育するを唯一の樂として居られる事です。而して內を守ると云ふ婦人の天職は確實に務められる方ですが、又來客に接しては快談縱橫興味津々、實に談話術の奧義に達して居られるのであります。夫人は記者の質問に一々答へられて、左の通り述べられました。

▲夫人の生ひ立

私は維新の坂を跨いで居りますから、種々な變化も存じて居ります、藩から會津へ出掛けた騷動なども覺えて居ります。私は極幼年の折、姉と橫濱へ出まして外國人に就きましたが、其頃四十八番に寄留してあつたミセスプライン、ミセスピアソン、ミスプルスベの三名の米國婦人を師と仰いだので、生徒は私と姉の二人限りで學校と申すも名ばかりの塾でありました。それから追々御出になつたのが井上馨さんの令孃御二人

禍澤さんの姪御さん等でありました。此プラインと申す老婦人は、明治の初年に良人が米國政府から日本へ使節に遣はされた時、日本政府から軍艦買入れを依托されて其金を消費したので、プライン夫人は多年憂慮煩悶して是非日本へ謝罪せんものと思ひましたが、資産はなし迚も金で償ふ次第に行かぬので、切て日本の女子を教育して謝罪の一端と致さうと決心し、老體を以て渡米されたのださうで自分の懺悔話を善くされましたが其誠意は實に感ずべきものでした。此老婦人は後に支那へ渡り専ら傳道に從事されたさうです。此學校も追々生徒が殖えて、二百十二番に移りましたので、此處で學んで居りましたが、明治六年に小學校令が出たに付き、私は東京の芝櫻川小學校へ入學致しましたが、其時私は丁度十一歳でして、日本の教科書を非常に難かしく感じました。小學を終つて竹橋の女學校へ入りましたが、英語は幼年からの練習で幾分か樂で面白味もありました代り、日本の學問が困難なので終に半途で退學致し其後は唯だ少しばかり漢學などに通ひました位で、十八歳の折此家へ嫁したのであります。



▲奇式の結婚

私の結婚は極奇式なので、一面識もない小島に嫁したのです。實は小島と他の婦人との間に結婚の約が成

りかゝつて居つたところ、俄に其婦人が破約したので媒酌人が偶然に私を代りに世話致したやうな次第でした。唯今は結婚問題も却々八釜しくなつたやうで、結婚前に互に交際して其人を知り合ふのは誠に宜しいに違ひありませんが、唯今までの所では、何故か斯樣にして結婚されて夫婦にスヰートホームが少くつて、却つて親や他人が干渉して出來た夫婦の方が結果が宜いやうに見えます。これは私ばかりの實驗でなくて、巖本先生なども善く左樣仰しやいます。私は素から男學生を世話致すのが道樂ですから、御婿さんの候補を澤山有つて居り巖本さんは、御嫁さんの候補を澤山有つて居られるので、互に結婚の御世話を致しましたから善く實際を存じて居ります。何卒遺憾なき御夫婦をと存じ、結婚前に隨分立ち入つた事まで調べ雙方の交際を取計らひ媒酌したのが、結婚後案外不幸な結果に終るのが御座いますので、詰らぬ次第であると巖本さんと能く御話し致します。一體男女は通常の朋友として交際致す間は少しも虛飾なく、互の批評眼も精細ですけれども、一旦許嫁といふ境遇に立つと、互に虛飾一ぱいになるので、自然眞相が解り難くなるのでしやう。それに日本の程度では未だ却々女が男に十分讓歩しなければならぬのに、自由結婚であると、幾分か遠慮しなくなり我儘が出るので風波が起るのだらうかとも存じます。何れにしても今日の所では、總ての點に於て女子は男子に及ばぬのは事實ですから、服從の分子が必要でしやう。何の道を歩んでも、忍耐が必要の世の中である、別けて人の妻となつては、先づ犧牲的精神を第一義と致す外あるまいと存じます。

▲男學生の世話

私は幾度も流産致したので、これは神樣が私に子を賜らないで、人の御子を世話せよと云ふ命であるかと考へました。丁度學生墮落の評判の八釜しい頃、直ぐ私宅の側へ一軒家を借りて家族的の寄宿を設け、實費だけ申受けて御懇意先の御子さんを御世話申しました。小中大學の諸校へ御通ひの學生達を一家に寄せて炊事の下婢を附け、私は毎日これへ通つて及ばずなが

ら監督致しましたが、實に天眞爛漫の生活で、面白く御可愛らしいものでありました。仕合せに結果が宜しう御座いまして、立派な學士或は實業家となられた方が隨分あり、唯今でも私の處を家のやうにして來られますが立派な紳士を矢張り坊樣のやうに思つて居るので、毎時大笑ひ致すのです、寄宿にあつた青年方には成るべく他へ出て樂みを求められない樣に、私が隨分一緒になつて遊びました。折々は名流婦人の品定めも試みたり、將來の妻に要求すべき理想を書かせたり、男子の缺點を冗談半分に指摘したり致して大笑ひする時もあつたので、和氣藹々の中に學業を勵まるゝ樣に致したのでした。此御世話も永く續ける積りでありました處、二十八歳で初めて滿足に出產した子供が誠に弱う御座いましたので、平生の意氣込に似合はず、この初めての子供の世話に一身を縛られ、其後、續々子供が殖えると云ふ始末で、殘念ながら書生さんの世話を中止致しました。唯今は十六を頭に女ばかり六人、それに親戚の女子も二人參つて居り、隨分賑かで御座います。私は監督さへ嚴重であれば、若い男女が親しく友達附合する方が物珍らしいと云ふ感情が失せ、互に男女の異性を



忘れて、過失が少くなると考へますから、娘達も宅へ御出での學生方とは隔てなく終始御交際致させ、種々な室內遊戯をして無邪氣に遊ばせますが、自然眼が高くなつて、男子方の彼是を善く批評するやうになつて居ります。御話しがゑらい別の方になつて、失禮致しました。

▲良人の代り

土地が狹くて人口は殖えるばかりと云ふ此日本に、押し合ひして居るよりは、廣い土地に移住して發展を圖りたいと云ふのが、以前から良人の希望でありました。けれども家族多でもありますので、手輕にも參り兼ねグズ〳〵になつて居つたところ、一昨年開戰以來發揚する人氣と共に一層此希望は盛になりしまして、兎に角一應探險して來やうと云ふ事に決しました。所で一年でも二年でも良人が職業を休んで留守に致せば、米櫃が空になると云ふ次第ですから、良人は私に向つて『おまへ一つ探險して來ては如何か』と相談し掛けました。私は元から出不精で、必要の外は門前へも出た事もなく、二十年來住んで居る此家の近隣でさへも知らぬ人もある位な意氣地なしで御座いますが、矢張り戰爭の爲めに大に鼓舞せられ。出征の方を思へば探險ぐらゐ何でもないと存じ、子供を置いて參る事に決心しました。それで本年の一月に知人を招いて私の志を述べました處、知人の七分通りは私共に向つて『貴所方は今日相應の地位に立つて居られ、別に世間から邪魔物にされる次第ではなし、今更其樣な眞似をする必要はあるまい』と懇々止められましたが、殘り三分の知人は大に賛成を表されたのです、而して其賛成された知人は、矢島楫子さんを始め皆六七十歲の御老媼ばかりであつたのは實に豫想外でありました。尙其方々は『貴女が探險に行かれた留守は、私達が出來るだけ御子さん方を保護しましやう』とまで仰しやつて下さいました。ソコで異議を唱へられた方の中には私の單身探險を發狂では無いかとまで仰しやるのもあつて多少躊躇しましたけれども、小島は決心の臍を固めまして、『我々は復び日本へ還らぬと云ふ次第では

無し、時暫彼地で働いて來るばかりである、兎に角おまへの探險だけは遣つて見たら宜からう」と申しましたので、愈々それと定りました。留守は二人の下女と乳呑の世話に別に一人雇ひましたが、乳呑は丁度生後八箇月でこればかりが私の氣掛りでありました。併し私は乳不足で生後四箇月を經つてからは牛乳ばかりで育てましたので結句好都都であつたのです。

▲出立

私共の子供は、何事も神の御手に任せると云ふことを平常教へてありますから、私が遠方へ旅立致すのにも皆思ひ切りが宜く、却つて後の爲めに喜んで居る位でした、唯だ一人腦の惡い兒と下女とが後で泣いたとの事です。子供達は皆玄關までの見送りだけで、横濱の波止場まで送られたのは小島の外に知己の方だけでした。乘り込んだ船は四千四百噸で左程大きくありませんが、此船は上等と下等ばかりで中等が無い代りに、他船の中等より少し高い位（二百圓足らず）で上等に乘ることの出來る都合の好い船でありました。旅費で御在いますか、これは極少しばかり持つて參つたので、總計六百圓程であります。荷物は大きなトランクを六個女一人の荷物には珍らしい容積で御座いますが、少々考へがありまして、古代器物、古書、衣裳など家の珍



藏品らしい物は殘らず纏めて詰め込んだのです。

▲船中に探險の副產物を見る

出帆致すと間もなく船員が參つて、御迷惑ながら一人旅の若き修學婦人を貴方の室へ置いて頂きたい、但し英語が出來ぬから萬事宜しく願ふとの事ですから、私も快く請合ひますと、早速連れて來ましたのは十七八の娘で雙子の着物に羽織を着け、何樣も良家の令孃とは見え難う御座いましたけれども、至極柔順で私の船暈の際など親切に看護して吳れ、丁度腰元でも連れたやうな具合で、一人旅には好都合と喜んで居りました。軈て旅行劵を調べに參つた者が、其女に一應質問致すと何だかドギマギした返辭を致したのです。併し成るべく無難に濟ますのを勝手とするのが船員の習ひですから、格別咎め立ても致しませんでした。私が其女に向ひ旅行劵に夫のあるやうに記してある事に就て尋ねました時、『私は存じません、私は獨身です』と答へるなど、何樣も迂散と思はれました處、他室に乘り合した一知人が私の室へ來訪されて、此女を見ると唐突に『貴樣など此室へ入るべき者でない』と大喝されたので、女は赤面致し私も氣の毒に感じました。十三日目に無事にバンクバーに着した時、怪しげな婦人十名ほど乘り込めるを發見して始めて件の婦人も同類であることを確知しました。後に聞けば、件の婦人は終に上陸叶はずして何れへか影を失つたさうです。これは探險の副產物で御座います。

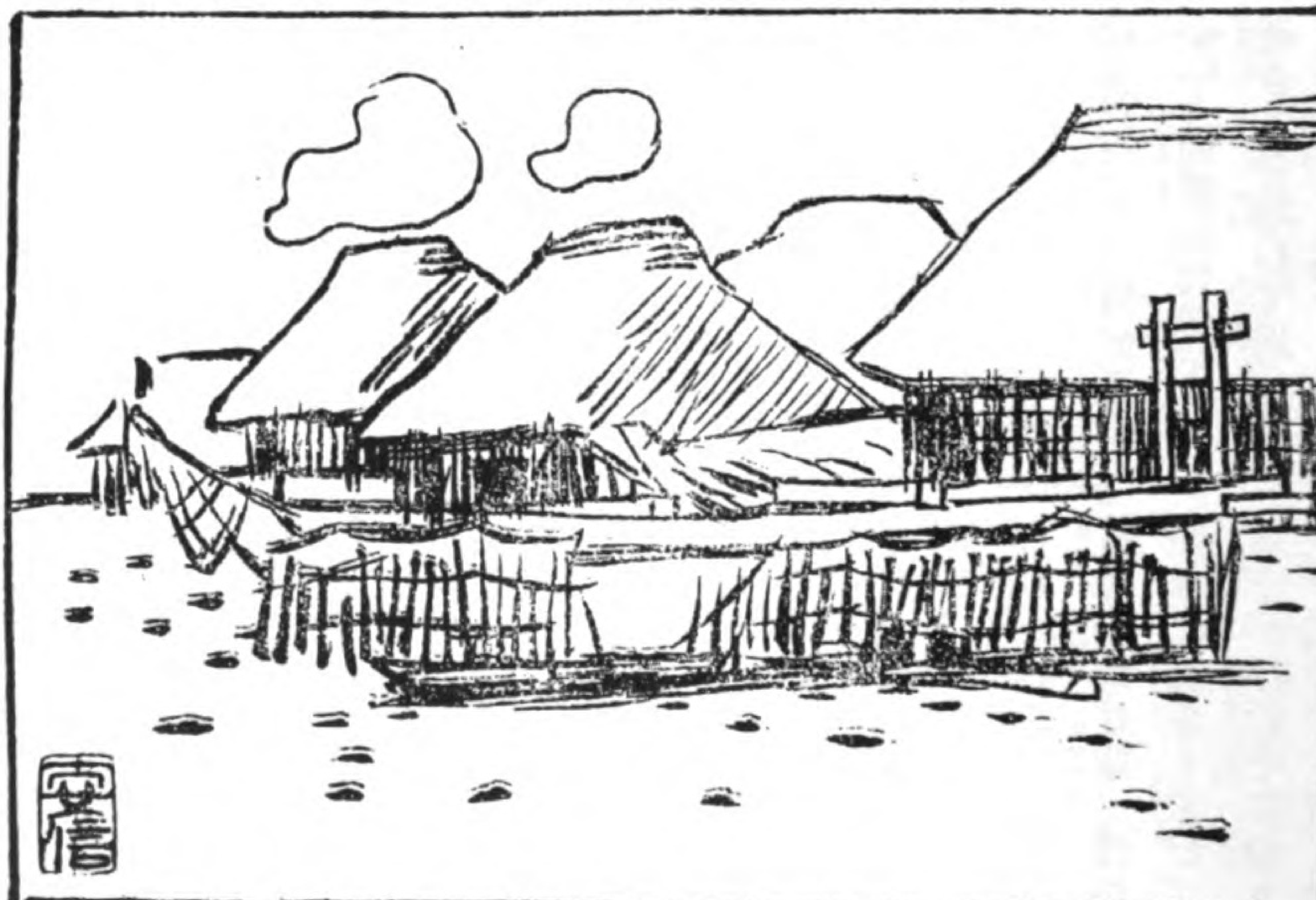
▲荷物調べ

前に申し上げた通り澤山な荷物ですから、關稅の多いことは覺悟で居りましたところ、私の荷物が餘り奇妙な品ばかりで價格の見積りが出來ない所から、ごたごたして居るうち、時間も切迫するので先の稅關で取扱ふ事にと言はれ、其次でも同樣な事を繰り返へされ、何處も有耶無耶で御仕舞になりました。それからシャトルに着きました時には、荷物の中の鼻紙臺が毀れて居りましたので、私も大切の品であるから少し不平な顏を致しました。所が婦人を重んずる國風の事ですから、役員が非常に氣を採み、係りの者の不注意を詫び、

無税で濟ませました。荷物の税金を取られないのは、從來私一人ださうで、後に皆様と大笑ひ致しました。

▲バンクバー滯留

バンクバーに於ける成功者田村さん（田村商會）及び永峰げん子さんなぞ、懇切に世話をされ、商業上の事なぞ善く敎示されました。此バンクバーは物價が低廉で生活のし易い所ではあり、日英の交通は宜し、移住の地は此處に優る所は無いと、皆さんが勸められましたけれども、出立の際に何處でも宜いから暖い處を探して來いと、小島に賴まれた廉がありますから氣候の寒いバンクバーを移住地



には定め兼ねましたので、御厚意を謝して遂にシャトルに向ひました。

▲シャトルより
ポートランド

シャトルへ參つて古谷商會の服部綾雄さんを尋ねましたところ、如何して單身來られしかと驚き、喜んで種々の事情を敎へられました。同地は一日稼げば三十日も食べられると申す位に生活の致し易い處ださうです。例へば山に入つても木が澤山だから、一日で一箇月の燃料は得られると云ふ事を申すのでせう。物價も至つて廉く移住地に適當でありますが、矢張り寒いので主人の注文に叶はず、それ

で其處を立ち去りポートランドへ向ひました。ポートランドには午前七時に着きまして、同地の成功者伴新三郎さんを尋ねやうと存じ、馬車を頼み馭者に案内させました。私はポートランドで伴と尋ぬれば、有名な人ゆゑ直ぐ判ると考へて居つたところ、却々容易に判りません。ソコで公使館へ參つて見ましたが、まだ早朝なので門が開いて居らず、尋ねあぐんで居るうち、馭者が或家の門へ下して此處だと申すから、標札をよく見るとパウンと書いた白人の住居でした。私の探すのはジャパニースだと繰り返し〳〵教へて、又〳〵グル探し廻つて居ると、巡査は早朝に婦人獨りの馬車がうろ〳〵するのを不審に思つたのか、私の馬車へ乘り込んで事情を尋ね、大層氣の毒がつて共に探して呉れました。スルト一人の青年の日本人がヅカ〳〵と馬車の窓へ顔を出して、『貴女は何をしましたか、何が巡査に連れられる樣な事をしましたか』と詰問したのです。私はムッとして、『私は此地の伴さんを尋ねて居ます貴君は私を胡亂な女と思召すんですか』と申しましたところ、青年は誤解を心付き失禮を詫びた上、『伴さんなら私が存じて居ます』とて直ぐに案内して呉れました。伴さんは驚いて私を迎へ深く慰安されましたが、同氏は山中へ人夫を入れて鐵道の枕木を伐り出し、それを廣く賣捌き盛に商賣して居られるので、私の目的とは少々方角が違ひますから、チョット滯在して今度は桑港の方へと向ひました。

▲桑港と近郊

桑港に參る途中、有名なオレゴン州の森林を見ましたが、人の丈より高い蕨が繁つて居るので、其地方の肥沃なのに驚きました。カリホルニヤに參ると、漸〳〵と植物の丈も低くなつて參りますと桑港へ着しますと、市中に苺が澤山見えましたので、これは猶豫ならぬと存じ、早速苺の生產地へ出向いて見たのです。苺の產地は桑港から八九十哩なので、三時間汽車に乘れば着きますが、見渡す限り苺畑で、髭を生した紳士が畑の中に坐り込んで苺の收穫に餘念なき有樣は誠に別天地の感が起ります。この苺摘みは極やさしい

仕事ですが、唯だ指先を實の頭へ付けぬやうに、そつと摘むので、指が付くと直ぐ變色致します。而して小さなのを下積みにして、上層へ大きい粒の揃つたのを列べて詰めるのがチョット熟練を要します。兎に角女の手でも一日に三弗から四弗ぐらゐ極不慣れでも一弗半位の收入はあるさうです。内地でクヨ〳〵不運を歎つて居る婦人は、事情の許す限り外國で働いて立脚地を作るが宜いかと存じます。相應の資本さへ作れば又如何なる新事業の發展も計られませう。昔し獨逸の或る學校で、鐵を以



て鹽を製する法といふ問題を出したところが、機敏な一生徒は、鐵を賣つて鹽を買ふのであると言つたさうです、移住興業の目的は斯樣なものでありませう。但し此苺摘みも一年中は無いのですから、其間は下婢に雇はれ相應の收入を計るのが多いのです。此地では苺の外に砂糖に製する大根を作りますが、耕耘も大根掘りも皆な馬と器械を使用して、人間は唯だ其始末を致すだけですから、酷い骨折はありません。加之地主と商人と特約が結んであつて、苺若くは大根の植付から收獲までの食費を

勞働者に貸與しますから、勞働者は實に氣樂なものです、假令一期が不作で返財が出來兼ねても、次期の收穫まで猶豫して與れるのです。それですから彼地の勞働者は食へぬと云ふやうな心配は無く、唯だ儲かるか儲からぬかの心配であります。日本では勞働者が如何して食べやうかと苦勞するが、彼地では如何して溜めやうかと苦勞する、「べ」と「め」と一字のことで豪い相違では御座いませんか。正直にして働きさへすれば、結果の惡い筈はないのに、飽きて逃げ出したり、放蕩して身を誤つたり、皆自分達の心柄から失策致すのです。地主や商人は應揚なもので、勞働者が食費を借りたまゝ逃げても一向追跡も致しません。けれども我々同胞は日本人の信用を缺くのが辛いから、成るべく斯樣な勞働者を反省させやうと、互に心配して居るのです。

▲裁縫店通ひ

私も探險の間、空しく手を束ねて居るより、自分の稽古の爲め、又一方收入を計る爲め、裁縫店へ仕事に通ひました。自宅で裁縫を受け合ふ人は、隨分收入も多いさうですが、醜業婦などが能く注文に參るので、彼等の身體を抱へて寸法を取るのが如何にも厭な感じが致しますから、收入は少くても店へ通ふて居つたのです。

▲桑港に於ける商業實習

私は商業實習の目的で、桑港に於ける知人の雜貨商の家へ入り込みまして、日々店頭へ出で客に應對致しました。割合に婦人の少い土地の事とて、私が店へ出て居つてさへ客足が多いのです。小島さんは杖をつきそうな年で居て、人氣を取るのが可笑しいと言はれた位で御坐います。西洋婦人は却々厚かましいもので、衣裳など買ふのに澤山積み上げさせ、一枚づゝ着ては姿見に映して見る樣子が實に臆面なしです。而して散々着て見た揚句に一枚も買はない婦人が隨分ありますす、買ふ人でも直段を直切つて直切つて直切倒すのです。店の者が客に對する言葉も日本とは、大分異つて居るので、私は最初客が來ると何が御入用ですかと尋

ねましたが、家の人は『何が御入用ですかと尋ねるのは客に失敬に當るから、私は貴客の爲めに何を致したら宜しう御坐いませうか、と斯樣に應對なさい』と教へて呉れました。私は六箇月ばかり此雜貨商店に居りましたので、取引販賣の呼吸を大略覺えた積りであります

ハイ私の持つて參つた骨董品は大抵賣りました。左樣彼地婦人社會の趣味は、チョツト豫想外な事がありますから、美術品の賣込などに就ては之を善く考へねばなりません。例へば楠正成の切腹、袈裟御前の自害などを笑ふやうなもので、川上も楠公の芝居に切腹の場を除いた位であ



ります。彼地へ輸出する歷史畫などは、此具合を考へて作らないと、案外失策すると聞きました。

移住致してからで御坐いますが、小島は園藝の方を專らに致し、私は商業の方を試みる目的で御坐います。これからが本當の舞臺に打つて出るので、唯今まで私が致した事はホンの幕を開けたばかりの樣なものですから、貴い紙上へ御載せ下すつても皆樣に御利益はありません。ハイ移住先はロースアンゼルスかパサデナかリバーサイドの内を擇ぶ積りですが、土地を確定した上でないと、出發の日取を定めるとも出來ません。多分八九月頃です。

夏の美――七月の巻

▲避暑――海やよけん、山やよからん、さりとては暑き日を、都の塵に染まんよりは、涼しの風を袂に納れて、夏を忘れの夢見草、函嶺も妙で、鹽原可なり、旅鞄に片肱もたせて、汽車の窓より青田を望むも、またなき避暑の手段なるべし。

▲海水浴――眞白き面は潮に染めても、日にや燒けじの麥稈帽か、打ち寄する波に小足をとられて、水に潜るや黒髪の、玉藻と化さんか、こゝに救ひの男神ありて、戀の淺瀬に導くも愛し。

▲夏リボン――男には薄羽織の蟬の羽にも似通へば、少女には夏リボンの蜻蛉とや見るべき。編みて結びし振分髪の、シホンに風も薫るを知るべし。

▲雲の峰――夏雲奇峰多しとは誰が云ひたりけん、投出した足の先より雲の峰とは一茶の句なり。眞個や奇しきたゝずまゐよ、鬼にも似たり、魔にも類しぬ。一連り雨降濺ぎぬる後を、晒を帶びし汝の姿や、一際めでたきもゝの一なり。

▲打水――美しき人の小褄とりて、浴衣の袂口に咬へつ、蹴足となりて打つ水の、いかに艶なる風情なるよ、薩摩隼人の毛脛をあふつて松も越せよと打つ水の、いかに男らしき景色なるよ、しとゞに濡れし葉の雫の、燈籠の灯に映らん頃は、にじり口には茶の客ありとぞ

▲魂棚――あちきなや蚊帳の裾なむ魂祭、夫を先きだてしか、妻をや喪ひしか、あちきなの蚊帳の彼方に、魂棚の灯の洩れ透ける、またなく哀れなり。

▲灯籠――高灯籠は今都に廢れて無し、切籠のみがかけられて、月に灯もす淋さよ、慰めの歌にも涙はあるべし。

▲七夕――短かき夜には七夕の契り敢果なし、竹に五色の紙を添へて、さま〴〵の歌かいつくれば、星も嬉しと咲はせけん、そよ吹く風に樂の音通ふ。

▲帷子――帷子の折目正しく、白扇を膝に置かば、誰か賤しの男と見るべき、さる程に座敷もの〳〵しく、立ちて三里の見ゆらんは、反つて着ぬに優りやすらん

武士道に黄帷子の、竹刀は肩に置くにこそ。

▲蓼――蓼食ふ虫の好き〴〵とこそ世にも云はるれ、夕暮の雨に白き花の傾かば、誰か其味の辛きを知るべき、犬蓼の花は俗にこれを赤飯と呼ばれて、飯事の蓆にはなくてかなはぬ一つとなり、隣の姥さん燧火の箱に堆かくこれを盛りて、中元の使とは日向を避けし軒の下陰、可愛きものに推すを得べけん。

▲紫陽花――女御の恨みに咲きしか花の、七度色を變へんとや、隣りを覗く移り氣憎し、乙由の句の、紫陽花に重たき旭夕日かな、雨には更に咲重りして、土にまみるゝ俤痛まし。

▲アイスクリーム――銀の小匙にちよいと掬ふて、唇避けし手の運びや、黄金の色の淡くてこそ凍る力の堅くてこそ。

▲夏野――秣負ふ人を栞の夏野哉、眞晝の照りに草いきれして、萱の葉も萎へたり、蟬の小川に水涸れ果てゝは、封じられたる石もあらはに、行く人もなき夏野のはてを、順禮の一人行くなる、空には雲の蒸やせん。

▲夕雨――馬の脊も降別くるとや、颯と一連り夕雨ては、軒の玉水瀧を爲して、芭蕉に喞々と蛙も啼くべしさりとては袂冠りて、濡れに出る兒の心やいかに、叱るは母の誡なるべき。

▲ラムネ――菅笠も荷の一つとなりては、旅に物憂き峠越しを、渇きは汗を飲みたきまで、清水やあると探せど見えず、喘ぎながらに一里を辿れば、こゝに嬉しの掛茶屋ありて、ラムネに咽喉を慰むれば、蘇生りたる心地もすべし。

▲朝顏――朝を起きよの心豐かに、情の露を身に沿びては、朝顏や紺に染めても强からず、紅もよく、絞りも妙へに、机に水入の眺めとなれば、鉢は小窓の飾りとならん、釣瓶とられし千代の恨みは、いつの世靜るる時のあるべき、曇りに長き花の命や。（鶯塒）

良人を選擇するの眼識

西施

一日客があつて酔後の放言に這麼事を仰つしやつたのを記臆して居ます。甲の曰く、僕は諸君も知つての通り斯う言ふ氣質で、物事に餘り頓着はしないと云ふ風であるから、妻を迎へるにしても、妻に對して良人たる義務を缺いて迄もとは思はぬけれど、怎うも妻一人にして奉つて行く事は出來ぬ。其の代り妻たる人も…………單に家政上の整理等に就いて主婦たる責任さへ全うして呉れゝは、僕は夫れ以上決して要求しない積りだ。妻も人なんだからね、僕の方でも眞面目に遣つてかれない癖にして妻にばかり貞操を强ゆるのは些と酷では無からうかと思ふ、僕は然う思ふのだ。だから僕は妻の愛情を僕一人の専有物にしなきやならないと云ふ程頑固では無い考へだ、しますを、乙の方は憤發となつて、僕は其麼のは大の不賛成だ、夫婦の關係は其麼淡々しい者では無からうと思ふ、僕等は一旦妻と定めたら、衷心から僕の愛情を一人に捧げる積りだから妻の不貞は忍ぶ事は出來ぬと仰つしやいました、丙なる今一人の方はハヽヽ、ヽと眞底から可笑し相に笑つて、僕は妻に對しては何處〱迄も貞操なれと迫る事は乙君と御同樣だが、怎うも糠味噌臭い女房の御酌はかりちや些と辛抱がなり兼ねるて、だから畢竟僕は甚麼事を仕やうと默つて大目に見て呉れる寛大な度量のある優しい妻が慾しいね。

怎うだ、斯う三人色男がずらりと並むで、各自に這麼勝手な熱を吹いて居るとしたら、一體女は此の中の誰れを良人にと撰ぶだらうとは主なる人の呂律餘り廻り兼ぬる言葉。

私は其時は別に何にも氣にも止めずに、居りましたけれど、全く後で能く考へて見ますと、這らが

良人の選定

には鳥渡考ふ可き處だらうと感じたので御座います。

善きにも惡しきにも、婦人の運命が定まらうと云ふ結婚問題に就いては、誰しも良人の選定には焦慮して居る事だらうと存じます。世間は廣し世は樣々で御座いますから良人を選擇する標準等は元より同じくはありますまい、人に依つては、夕顏棚の下凉みを理想として居るのもありませうし、二頭引の馬車を理想として居る者もありませう、手鍋提げても主の側等と洒落れてる人もあれば、夫婦小女金利の暮し等と至つて虫の好い事を考へてる向きも御座いませう、ですから一々斯うと申し上げる事が出來ませぬけれど、公爵に非ざれば日本一の富豪者と結婚したいとは、去る女學校卒業生の理想だ相ですから、世の中の風潮が如何に富とか地位とかに渴仰してるかゞ分りませう。這麼具合ですと今の靑年男女の結婚の標準等も大概一致して居る譯で、其れでは別に配偶者を選定するの識見等は要らない筈であります。其れに今一つは何時迄も〳〵の樣でしたら、之れにも更に私共が差し出がましく良人を選擇するの必要が無かつたのです。

從來の結婚法

從來の有樣では、單に家の都合とか、門閥の釣り合ひとかに重きを置いて、結婚せんとする本人の希望等は顧られ無かつたので、云はゞ親なり兄なり親類なり長者なりの云ひなり次第、殊に謹愼で無ければならぬ筈の婦人は、結婚に就いては何等毫も喙を容れる譯には行かないのであります。其れでは當人に聞いて見ました上でと、一應は形式を履む樣ですけれど、今日迄の習慣上本人たる者は否の應のと云へた義理ではなし、父母等から一度這麼話しがあれば、もう云ひ渡されたも同樣、耳朶迄眞赤にして疊の緣でも毟つて居る間に、娘も滿更厭では無いらしい容子と、乃で雙方の親々が黃道吉日を選むで呉れて、迷信らしい繁雜な儀式の下に斯くして一對の新夫婦が出來上るので御座います。這麼具合ですから、一寸外面から見ますると、隨分

と壓制的な殘酷な吏に箇人の自由意志等と云ふものを認めては居らぬ野蠻極まる風習の樣にも思へますけれど、因循で姑息で、其れで臆病な世間見ずな自信の無い今日迄の婦人には、此の方が却つて間違ひが少なくて宜かつたので、今日一かど、廿世紀風とやらの敎育を御受け遊ばした立派な方々すらも、御自身一人の獨斷で良人を選定遊ばしては、思はぬ失敗を招き、飛むた浮名を流す等と申す事は間々ある位ですもの、ですから、自分よりは世慣れても居り、自分の將來の利害得失をも能く親切に考へて與れる長者若しくは兩親等に良人の選擇を一任して濟くのは、危險が少なくて却つて安全な策だらうと思ふのです、けれど、斯う申した處で、此れ迚も、或る範圍の限られてる程度問題であつて、盡くとは申されない塲合も御座います、即ち所謂、

自由結婚

とか云ふ、「三更月を踏むで來れ」主義にも、色々な悲慘なる歴史が遺されたと同樣に、只今も申した樣に、「澁かろか知らねど柿の初振斷り」式なる、從來の壓制結婚にも幾多樣々な悲劇の伴なつた事は爭はれぬ事實で御座いまして、所謂義理と人情とを骨子とした慘憺たる德川時代の脚本は、材を此の邊に取つた物は餘程多數で、中には悚然たるものが御座います、だから相當な敎育もあり、相當な自信もあり相當に理性も明るかつて、良人を選定するの眼識を備へて居る人であつたら、父母長上の同意を得た限りに於て、結婚の自由は許してやつても差し支へは無からうと思ふ、否、此の方が結婚を玩弄物半分にして年に幾度の出代り奉公人の樣に氣に染まねば何時でも離婚しやう等と云ふ無責任な忌はしい弊風が大に打破され樣かと存じます、況して斯う女子敎育とやらが盛大になりましては、學校で日頃注入されて居る歐米の思想に對しても、餘り謙遜深からぬ廂髪に對しても、菫の手前星の手前、眞實〳〵の處舊弊な兩親の命令に然う何時迄も屈從して居る譯には行くまいかと思ひます。然うかと申して誘

ふ水さへあれば誰れも彼れも、見境ひなく、流水に落花の嘆を殘すも餘り感心した話では御座いません、此處に於て餘程愼重なる體度を以て良人を選擇するの必要が起つて來るので、先に申した通り、單に結婚の標準が富とか地位とかにあるとしても不幸にして今の一部の婦人の希望に投じる樣に、青年は悉く富むでは居りません、而して青年の多くは悉く高等官若しくは外交官と云ふ譯には參りませんから理想が空想に歸して仕舞ふ方が多いので御座います、だから一層其れよりは充分に見込があると見込を着けて將來の成功に樂しむで、今日の困難を甘んじて偕にし樣と云ふ程の良人を選ぶのが、一番策を得て居るかと存じます、貧にして賤しかつた猿面冠者に見込を着けて他日の大成を期した北の政所等は、良人を選擇するの眼識に餘程銳かつたのであります、人の噂か存じませぬが。



閨秀作家の白眉

斯界の鬼才と迄稱せられて居る女に或る人が某工學士の處へ御嫁にと周旋した相です、處が其女は以ての外の氣色で斷然と、僕は甚麼俗物の妻になる程不見識では無い積りですと、斷つた相です、而して其女が近々某文學士に嫁せらるゝと

か已に華燭の典は擧げられたとか云ふ事です。之れは私の友人の一人で御座いますが、去る折の手紙の端に這麼事を申して參りました。

男にもあれ女にもあれ、私は大なる野心家が大好きに御座候、氣の持ち樣一つで隨分と面白可笑しかる可き世に、所謂沈香も焚かず何とやら云ふ等の人は私、大の大の大嫌ひに候、野心に燃えたる英雄の末路等と果敢なき者の一に數へて、人は憐れがり候へ共、何も世の中は太う短うとやらあらまほしう存じ參らせ候、罪無くて眺めん配處の月よりも罪ありてこそ却々に云はれぬ風情は籠り候ものなれ、されば私は平和を好む常識に富む平凡な温和な人よりも、一生は小賢しやくれた人類の勝手に定めたる道德や宗教に束縛もされず、唯野心の爲に奮戰健鬪する底の人が好ましく候、換言すれば、私良人と撰ばん人は、素手にて一萬の金を貯へ候はん技倆のある人より十萬の借金をする人をこそ床しく存じ參らす可く候、勿論職業は何にてもあれ問ふ處にては御座なく候、云々

兎に角良人を選擇する眼識に於て、善惡の評は御座いませうけれど、此れ等は慥かに一見識ある者と存じます。

然らば、何を以て良人を選定する主眼と致したらば宜しう御座いませうか、之は其人〱の敎育の程度、希望の如何にもよる事ですから、其れに就いては餘り多くを云ふ必要が無いので御座います、要は、

馬には乘つて見ろ人には
添うて見ろ

等と云ふ淺墓な俚諺を金科玉條かなんぞの樣に心得て扨て結婚した曉に、三行半で叩き付けられると云ふ樣な事の無い樣に充分脩養を致して良人の選擇を誤まらぬ程な眼識を具へるにあるのです。

而して此の見込のあるとか無いとか云ふ事は、至極曖昧な言葉で御座いまして、今日健康な身體を持つて居つて白痴で無い限りは、相當な學校の門さへ潜つて

出れば、或る程度迄は成功しないと云ふ事は無い筈です、人才登用等と申しますけれど、只今の樞要の位地を占めてる人は悉く豪ひ方ばかりじや御座いますまいと存じます、大きな聲では申されませぬが其筋の內訓とやらを外ながら伺ひ奉ると實際學閥の恐しい勢力には驚かれます、併し實業とか文學とかは比較的天地が廣う御座いますから、其れ迄學閥は手を延ばしは致しますまいけれど、官途等の方面を望むで居らつしやる方は、些と出身學校は何處だか位は考へる必要は御座いませう、所謂駙馬の君となつて、成功さして……否成功する人は別としても、唯見込があるとばかり申しても餘程注意を拂はねばならぬ事が澤山に御座います。

けれど何と申した處が高々五尺の身體のする仕事ですから、成功を樂しむも失意に泣くも一升の米を一度に食べるには一寸骨で御座いませうし、八疊の座敷一杯寢そべられると云ふ譯では御座いませんから、見込があるの出來るの豪いのと申した處が知れた者です、だから良人の選定等は一に其人〳〵に任せるとして、置いた方が却つて宜しいかも知れませぬ。

唯、人格の高い低いが將來の成功不成功に關はらず各自の生涯の幸福に關係があらふかと存じますから、此の邊が良人を選擇するの眼識を必要とする處で御座いませう。

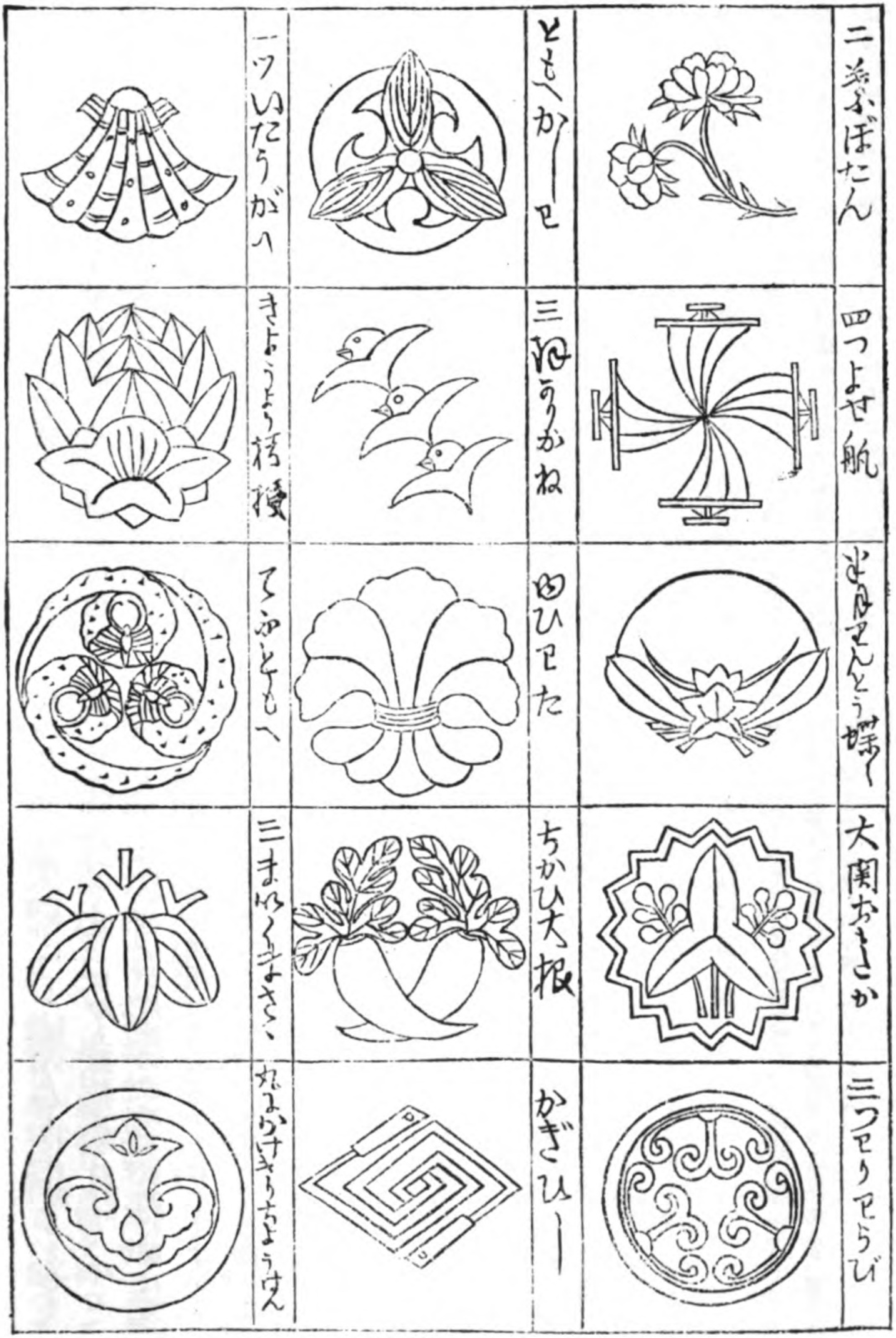
▲前號口繪問題の解

可惜青春の嫁入ざかりを、獨立自活と覺悟して諸方より降るほどの緣談を跳ねつけ、我こそは一廉の女學者なりと自任したりしは天晴れの事なりしも、婦女子の人性觀は變り易きものなり、學問成りし曉つく〴〵と晝日の我れを顧みれば、感慨頻りにして、青春の徒らに逝きしを悔ゆるの情多きを諷したるものなり。

▲本號繪畫の解

方今の男子は、無暗に賢母良妻を説き、生涯臺所に遣ふを以て、婦人の能事了れりとなすものあるを憤慨する一派の婦人が、頻りに賢父良夫を説く所を諷したるものなり。

新意匠の紋


二ツぼたん
ともへかーセ
一ツいたうがへ
四つよせ航
三ねうかね
きようよう桔梗
よせんとう蝶
ゆひした
てふともへ
大関おもさか
ちかひ大根
三まねくすさゝ
三つセりセらび
かぎひし
丸よかけきうちようせん



金婚式を擧げられし岩佐侍醫夫人

婦人記者

耆婆扁鵲にも比すべき老國手、岩佐侍醫長の御家庭が模範的なることは、今更申す迄も御坐いません。侍醫長夫人とく子刀自は舊福井藩士松原治郎左衛門氏の次女で、天保十二年二月生れ、本年六十六歳になられますが、心身共に御壯健で滅多に風邪も引かれないのです。十六歳で今の岩佐侍醫長に縁付かれ、琴瑟和合して茲に五十年、去る五月十九日目出たく金婚式を擧げられたのですが、記者は此多幸なる御家風を造られた夫人に御目に懸りたいと存じ、五月十六日に御尋ね致しました。夫人は丈のスラリとした上品な御風姿で、丸髷の御髪に白髪も雜らず、豐かで血色の良い御顔は十歳ほども御若く見受けられます。夫人は御物腰の昔風なのに似ず、御話は流暢で時に警語を雜へて客を笑はせ、新思想にも富んで居られます。話柄は金婚式より開かれ、

▲金婚式

金婚式と申して皆樣に御吹聽致すのも御恥かしいので御坐いますが、御蔭樣で兩人共壯健で永年過しましたから、其心祝ひの積りで御坐います。一體昨年が丁

度五十年目に當りましたのですが、戰爭中ゆゑ本年に延し、去る一日に宅でチヨツト式を擧げて身内だけの集會を致しました。來る十九日には精養軒で知己の方々を御迎へ申す積りで御坐います。宅で致しました式の節は禮法講習會から參られた方が、小笠原流の古式に則り長柄銚柄で酌を致し、私共の盃を兒孫、親戚一同へ廻したのです。其節十三歳になります孫が、孫總代として私共の前で祝詞を讀みました。御笑草に御目に懸けませう。

此孫君は四女千賀子氏、即ち故山脇登彌太氏（山脇玄氏の令弟）の長男との事で、夫人は父なき兒ゆゑいとしさは一層であると語られました。其祝詞は美しい筆蹟で斯う認めて御坐います。『明治三十九年五月一日、我が祖父母の金婚式を擧ぐるに當り、我等此式に列することを得、歡喜に堪へざるなり、思ふに金婚式を擧ぐるの人は世多く其例を見ざるなり、而して今や我祖父母に於て之を見る、吾々も亦之にならはんと欲すると共に、兩祖父母益々健康にして永く吾々を導かれんこと希望に堪へざるなり、明治三十九年五月一日、孫總代岩佐登』

▲畏きあたりへの獻上品

今回の式に就て、恐れながら兩陛下、皇太子殿下、皇太子妃殿下へ獻上物を致しました。陛下へは日の出に松と鶴の圖、松竹梅の圖の對幅、これは野村文擧の筆で御坐います。他に尉と姥の象牙彫。皇后陛下へは波上の岩に鴛鴦、これに桃、尾長鳥、雀などをあしらふた一幅、筆者は川端玉章で御坐います。他に浦島と西王母の象牙彫。皇太子殿下へは日の出の波に雙鶴の一幅、これは文擧が認めました。他に薩摩燒の關羽の像一個、妃殿下へは竹細工塗金唐草摸樣の御菓子入れを獻上致したので。尙ほ　兩陛下へは二斗五升づゝの紅白の鳥の子餅に鰑、鰹節を添へ獻上致しました。ハイ御嘉納遊ばされて御詞を賜はつたと拜承致し、誠に忝ない御聖旨と感激致すので御坐います。

▲夫人の昔氣質

唯今は御年寄でも眉毛を御立てに成つてゝ御坐いま

すが、私は十六歳の時元服致してから、ツイ此間まで、鐵漿を付けて居りましたのを、世話な爲めに此頃剃がした位、本當の昔者で洋服を着た事が御坐いませんから、參内もとんと致しません。皆様が襠着で參内なさいと仰しやいますが、此剃げた頭で鬢を張らせては、茶番狂言の樣で可笑しう御坐いますから、襠着も毎年虫干を致しては藏つて置きます。餘程以前に皇后陛下から特別の思召を以て内謁見を仰せ付けられました際には、黒紋付で拜謁致しました。ハイ誠に身に餘る難有い御言葉を賜はり、數々の御馳走を戴き、御庭の拜



見を許された上で、イザ御暇申し上げやうと致した時、鷄一羽づゝ入れた美しい籠を二人の子供に賜はりました。

▲夫人の花嫁時代

私は幼少で實母に別れ、繼母も亦早く沒し、種々不幸を重ねました。其頃女子教育は唯だ裁縫、織紡などを主に致し、學問は一向仕込まれませんでしたから、實に何一つ辨へぬ御耻かしい人間で御座います。私が此家へ嫁つた頃は姑が極若う御座いまして、丁度姉妹の樣でありました。而して十三、八つ、三つと云ふ幼い良人の弟妹があつたので、

私は朝夕此子供の世話を致し、子供も善く私に馴染みまして、却て母より姉樣の方が宜いと誠に慕つて呉れました。其頃郷國では、妻を迎へてから修業に出ると云ふ風でしたから、良人は結婚後長崎へ醫學修業に出發致したのです。私も何に致せ未だ十六と云ふ年若ではあり、良人の留守に舅姑や小舅姑に對する務がチヨット骨折で御座いました。姑は却々嚴格な勤勉家でありましたので、大抵毎夜仕事を終つてから姑の肩腰を擦りましたところ、自然と按摩の術に慣れました。子供は二十八歳までに四女一男を擧げまして、年若なのに子供多で一時は隨分骨が折れました。

▲三女の夭折

長女は郷國で沒し、次女は山脇玄氏へ婚嫁の約束中二十歳で亡くなり、其妹を是非後へとの事で差上げましたところ、兩人の子供を遺して三十一歳でこれも沒しました。第四女は山脇氏の弟御に妻せましたが、二人の男子を擧げてから夫を喪ひましたのです。山脇方の孫は最早子供も出來まして私も曾孫を見るやうになりました。娘の男兒は未だ十三歳と八歳で、唯今母諸共宅に居ります。私も我子に就ての重る不幸の爲めに世の無常も感せられ、一層佛教を信ずる心が深くなつたので御座います。

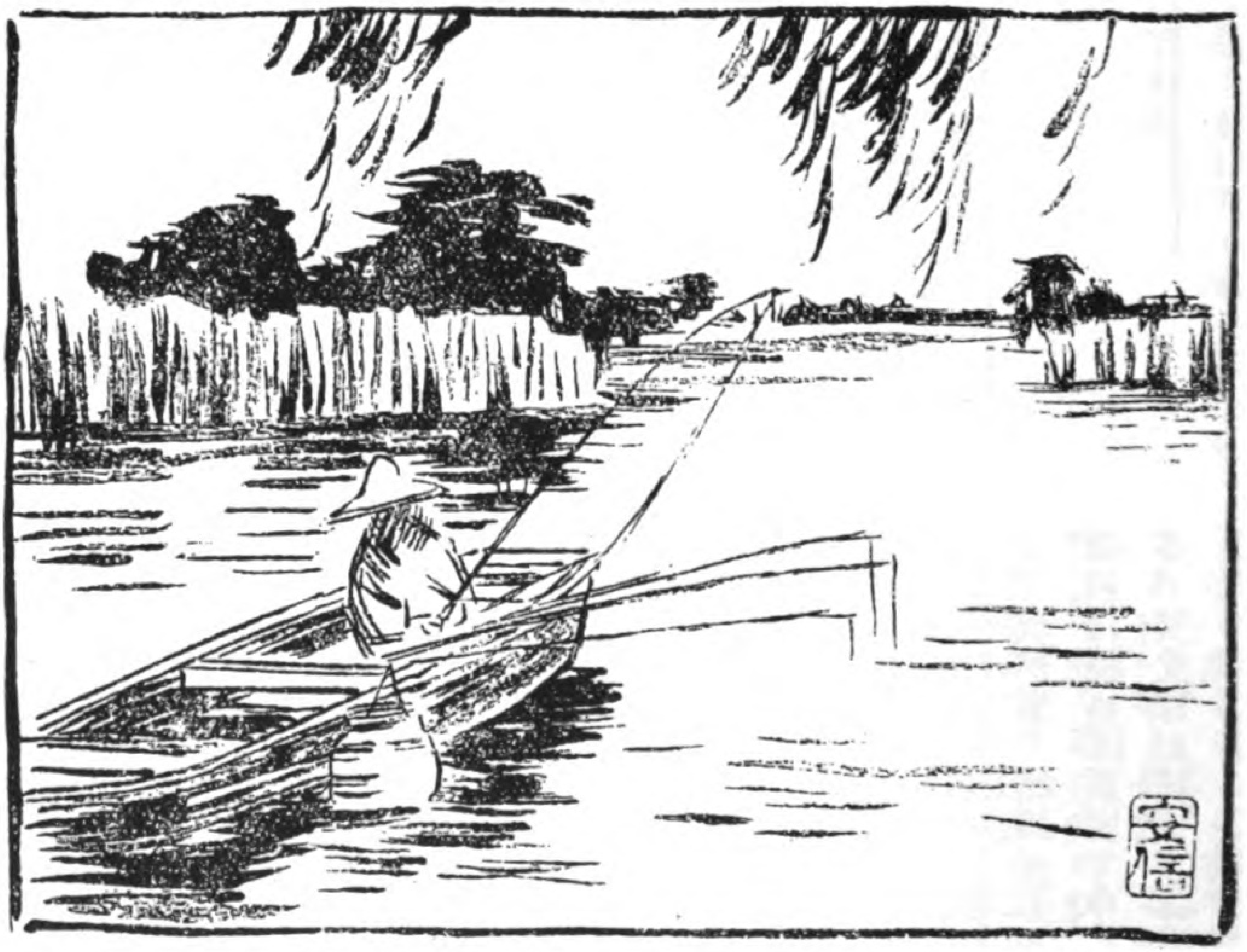
▲信仰と禮拜

私は佛教を信ずるのに決して宗旨を擇びません、河流の末は海に注ぐが如く、何宗でも歸着する所は一つであると存じますから……。私は花見より芝居見物より御寺詣りして說敎を聽聞するが第一の樂みで、種々の佛教會へ出掛けます。何時も參り合せる御婆樣達と御懇意になり、私が出ない日は、彼の御婆さんは如何して來ないかなぞと言はれる位で御座います。今日斯う遣つて安樂に健康に暮して居つても、明日は如何なりますか、中氣でも出て難儀致すやら、人間には迚も一寸先は知り難う御座いますし、最早老先長くもあらぬ身の、後世の賴みが專一と存じて唯これのみ心掛けて居ります。又朝夕の勤行は先祖へ禮拜致す事で、これは良人も怠らず禮拜を勤めますし、宅の孫共には學

校へ出る前に必ず禮拜させ、汝の御父樣の御靈は此御位牌に居らつしやると申し聞かせ、生者に仕へる如く敎へて御座います。

▲夫人の健康と食物

金婚式でも擧げると申すと、餘程老衰したやうに思はれるのは當然ですが、先日或新聞社の方が宅の者に老夫人は腰が曲り齒が拔けて居られるかと尋ねられた相です。けれども私は幸に六十六歲の今日でも未だ腰も曲らず、何處へでも步行は自在ですし、齒も先づ堅固で御座います。別に衞



生と申して格別な事も致さず、轉地療養など偶に孫達の附添としてチョット參る位で、自分の爲めに轉地致すことは大嫌ひ、食物も野菜好きで魚は餘り頂きません。餘所では隨分西洋料理も頂きますが、自宅では肉類を一切用ゐません。斯樣な工合で私は大した滋養品も食べませんが、早起は昔からの習慣なので御座います。『今に嫁を貰つたら早起を我慢せぬと嫁に氣の毒だ』と以前は良人に申された位、斯樣な事が自然身體の藥になつたのでありませう。而して近頃は種々の會へ出ます爲めに、自然運動も多くなり、

尙更壯健になつたやうで御座います。御談話の間にも祝賀に來られし三四の客に應接されましたが、記者に到來の祝品や飾物を見よと仰せられて大廣間へ案內されましたが、目醒むるやうな祝ひ物の數多ある中、最も目に留つたのは、宮內省女官方一同より贈られた縮緬細工の人形、東洋婦人會よりの緋縮緬の鯛雙尾、禮法講習會よりの座蒲團（紅白緞子）、其他貴顯紳士よりの飾り綿、糸などで御座いました。而して尤も美しく愛らしいのは令孫一同が、二個の香水罎を赤地錦の寶袋に包み、床しき薰りを其敬愛する老祖母に獻げて共白髮の目出たき祝意を寓めたる贈物で、其袋の臺に、登、五郎、富貴子、淑子、貞子、滿喜子と御孫達の連名が貼付けられ、永久に淸く樂しき御家庭の空氣は此室に充ち滿ちて居ると感じました。

母親は娘を如何に見るべきか

米國の實例によつて日本の事情を酌む

娘と父母との關係

一體米國は自由結婚の國柄であるから親子の情愛は東洋諸國のやうに親密ではあるまひかと思ふ方もありませうが、實際は却て日本などよりも親密の度合は深いやうに思はれます、殊に娘と父親との間柄は到底我々日本人の想像の及ばぬ所でせう、子供を敎育するに男よりも女に力を入れるのは、米國一般の風習ですから結婚も父の名前で披露される、嫁に遣ると言はずして、我が家で結婚せしめる、結婚後も娘の父母と婿の間柄は極めて親密で中には同居を續けてるものもある、又父母が死去する事があれば其の住宅や家產は男の子に讓らないで娘の方に讓り渡すといふ風で、つま

り婦人は何處までも保護して遣らねばならぬものとの感情から割り出されてゐるのである。

母親の責任

斯様に父母は眞から其娘を愛し、娘の行末の幸福にまでも立入つて考へるのであるから、娘も又その父母に對しては親愛と尊敬とを失はないのである、例令結婚は當人同士の自由であるとは言ひ乍ら、父母の許可を得、又その相談相手になつて貰ふ事を希望して居るのである。



米國とて母親が娘の身を案ずる點は日本とは異りはない、何でも我娘がよい所に縁づき技倆あり、品性ある男を婿にするのは母親の誇りとし、又手柄とする處である、若し過つて我娘が素性の良からぬ男と關係でもする様な事があれば、第一に是を母親の責任問題として家族や、朋友の間から苦情を言はれても仕方がないのである。

婿ゑらびの心配

それと同時に母親は娘が結婚時期を空過するといふ事を甚だしく心配したもので、何でも時期を失はないやうにと注意をする、米國で娘が婚期を逸するのは父母たるものの罪だと認識されて居る、口へ出しては言はないけれども人々の心の裡にはちやんと父母の責任であるといふ事が認められてゐる、例令容貌は美でなくとも學問あり、常識あり、貞

操なる娘ならば相當な處ろに乾度嫁入の出來るものと世間が許してゐる。然るにこれを逸せしむるのは專ら母たるものゝ注意の屆かぬ處ろ、娘に對して慈愛心の薄いものとして社會から擯斥される譯になる、是に就て彼の有名なる現大統領の令孃アリスはどうであつた、アリス孃の爲めには今の母親は繼母である、併し慈愛に厚薄があつては繼母たるものゝ不名譽である、そこで母親たるの責任は十分に盡さねばならぬと孃の結婚に就てはこの母親が一方ならず苦勞したもので、並優れた佳婚を取つて手柄にしやうと日夜苦心の結果、漸くにしてロングウォース氏を候補者にして撰定させたのである。

我が生の娘でないから其の婿はどうでもよいといふ樣な事では母親たるの責任が欠ける、實子であらうが繼子であらうが、母親の盡す心には二た通りはないといふのが眞の米國の母親氣質である。

不孝な娘

故に娘が不氣量であらうが、不人相であらうが、其の母親が巧みに取り做して佳婚を近づけてやるのである、一體男子は一目見たばかりで美人に心を奪はるゝ一の弱點を持つてゐるものである、けれど又容貌揚らぬ娘でも數ケ月、數年に亘つて交際をつゞけさせると其の中には乾度男子が女の心情の美點を認めて來るのである、そこを賢こき米國の母親はよく洞察して巧みに取り入るのである、即ち母は我が娘の心情の美點を男子に認めしむる機會を作るまでは樣々の苦心經營を爲すのである。

であるから母親のこの深き慈愛、厚き心情、苦しい心遣ひを知らずして仇し男に心を奪はるゝ樣な娘は決して善良なる良人を持ちて、末永く良家庭を作る事は出來ないのである、佳婿を得ず、良家庭を作らぬ娘は米國では第一の不孝者として社會から擯斥されるのである、米國流の自由結婚の眞理は到底淺薄なる日本人の思ひ及ぶ處ろではない、斯る次第であるから平素母親たる者は娘の交際振によく氣をつけて、善良な若紳

士でも訪ねて來る事があれば、充分に歡待して交りを深くする樣にし、之に反して不良の青年に對しては成可く避ける樣にして其間知らず〳〵娘に善良なる婿を撰定せしむる下地を造るのである。

ですから彼地でも避暑の時季に立入ると家族的の旅行や登山を企つるのであるが、さア今年の夏は那邊の方面にしやうかとの相談が起ると母親はちやんと心得て、イヤ誰某さんの居る大學の近傍にしたらばよからうと不斷見込をつけた有望青年の在學せる土地を見屆けて屹度其の方面に向ツて轉地旅行をするのである。



親愛の表示

米國の女子大學の生徒は日本の高等女學校の生徒よりも尚小供らしい處ろがある、彼等が其母親に向ツて「マザー」（オカアサマ）と呼ぶのは極めて嚴肅なる場合に限られてゐる、通例は只「マンマ」（カーチャン）と呼ぶのである、是の愛度氣なく呼ぶ處ろに無限の親愛が籠つてゐるのである、從て又娘を教育する上に非常なる注意と、苦心が拂はれてある、タトエバ其娘が教育上の都合によつては一家の住居を轉ずる樣な場合もある、娘が中學時代から大學時代に入るとこの注

意が一層行届いて家庭と學校との關係が親密にされ、娘は實に其敎育の如何に依つて善き家にも惡しき家にも婚嫁する事となるのである。

孝行は心の上

米國の女學生は毎週必ず一度以上は欠かさず、故鄕の母に手紙を出さぬものはない、若し之に外れる者は餘程のお轉婆か、不孝者かである、それは母親との親密の程度を示すものであると同時に又自分がどんな境遇にあつても毎日何をしてゐるかといふ事を遺憾なく知らしめて、遠隔の地にあるも十分安心をさせる爲めである。

されば始めて入學した當時などは毎日必らず信書を出す、斯樣にして我が現在の境遇や學校の事情を告げそして自分も又大いに懐鄕の念を慰むるのである、是等の女學生は大概日曜の午後手紙を書く事と定め、これが濟まぬ内は閑暇があつても小説などを讀む事はない、これが米國娘の母親に對する孝行の一つである。

嚴格な家庭の規律

結婚が女一生の大問題である事は世界各國いづれも同樣であるが、米國でも娘に女一と通りの敎育がついたら父母が專ら此の問題に向つて苦心するのである、隨つて家庭に在つても嚴格な道德的規律が勵行されてゐる、其の規律の第一にはどんな場合でも未來の良人と定められた者の外には接吻する事は許されない、又手袋を忘れた時は握手する事も禁じられてゐる、這は肉體の接觸は靑春の身に取つて殊に感情を惹き起す力の強いものであるからである、勿論女子より手を出さずば、男子からも手を出さぬもので殊に嚴格な基督敎的家庭では猶更の事、そうでなくても、多少心ある父母は決してそんな事を許さない、事情に疎い日本人などは米國人は無暗に接吻し、無暗に握手するものなど思ふは大間違である。

發動期の注意

米國の父母が其娘の身の上に注意する最も肝要の時期は所謂發動期である、即ち未開の處女が一轉して花蕾を開かんとするの時期である、この際に於ける處女の感情は極めて濃密なるものであるから、この感情を仇に放棄せしめずして務めて涵養せねばならぬ若し娘にして此際踏み誤ると所謂浮氣者の部類に入つて終世拭ふべからざるものとなるからである。

故に發動期は女子一生の窮達の岐るゝ處ろであるから父母は大に注意を加へるのであるそれには專ら趣味教育を以て導くやうにする、即ち娘の心を繪畫、音樂、文學、其他優美高尚なる技藝の方



面に轉ぜしむる樣苦心するのである、そしてこの發動期を理想的に生活せしむるは尤も必要な事で、近來日本でも年頃の娘がやゝもすると憂鬱に陷り易く、厭世觀を抱くやうであるが、此際に於ける保護者の注意は尤も必要で決して等閑に附すべきものではない。

家を重ずる風習

兎に角米國の風俗として、女は「家」を重んずる事が深い、それは日本の樣に家名を重んずるとは少しく趣が異ふ、「家」其物に甚だ深い意味(親愛、樂園、慈悲、仁惠、慰安などいふあらゆる美はしき意味)が籠つてゐる、隨つてそこに又いふべからざる重

大なるものが認められてゐるのである。

今これを物質的から割り出して見ると近來米作地として日本よりも盛んに移住者のあるテキサス洲などでは他國に類例のない家庭の法律が社會から認められてある、即ち農家で二百五十エークル(約八十町歩)の土地と、羊二十頭、豚二十頭、鷄若干羽は戸主の所有ではなく家庭の所有物即ち妻子眷族一同の所有物となつてゐて、これ丈は如何に戸主が借財をしても債主から差押する事の出來ないといふ法律が出來てゐる、この法律は家族の權利を尊ぶ道德的から割り出されたものである。

老孃と良妻

米國には婚期を過ぎた處女が至つて多い、是等老孃の多くは花嫁たるの撰擇に洩れたもので善良なる母の資格のないものが多い、中にはそうでなくとも長い間處女生活をしつゞけた爲めに漸次には良母たるの資格を消滅するに至つたものである、彼等の多數は女學校に教鞭を採れども旣に人の妻として不適當に馴らされつゝあるので、兎角性情の圓滿を欠いて偏狹な處があるのは免かれない數である、殊に是等教師が賢母良妻の養成を以て目的とするに拘はらず、其境遇が旣に順境でないから、家庭的の趣味を解する事が出來ず、隨つて孤獨生活の思想を靑春の女子に皷吹するの氣味があるのは米國教育界の一欠點である。そこで近來は社會の一部分に老孃排斥の聲が持ち起らうとしてゐる位である。曰く老孃は女子の特色たる同情に薄しと。

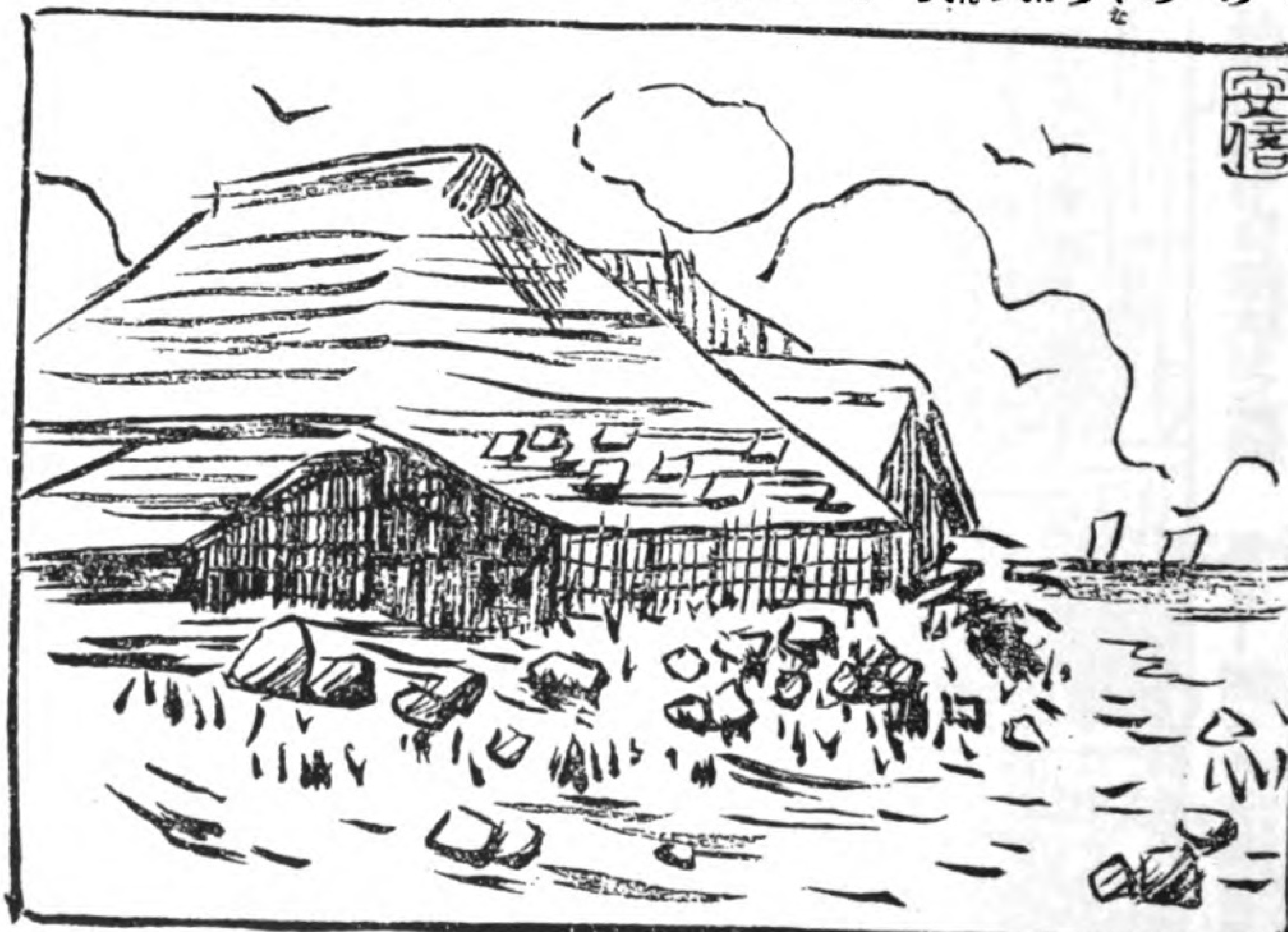
社交上の虛榮心

結婚が女子の一生中最大の重荷たる事は米國をして老孃を多からしむる原因ならんか、學問が重んせらるゝから老孃が多くなるのも其一原因ならんも、社會生活が娘を老孃たらしむべく餘義するの結果高等教育の盛大を致せしものならん、兎もあれ女子をして獨立生活に馳せしむる米國現代の風潮は極めて不健全といはねばならぬ。

米國の上流社會、即ち富豪社會では財産や名譽や地位の爲めに結婚するもの多く眞の愛情より來る結婚は割合に少い、そこで離婚も亦多い、又金錢あるもの丶娘が歐洲の貧乏貴族を尋ねて縁談を申込などは社交上の虚榮心を滿足せしむるものとはいへ甚だ不感心な次第である。

高等教育と嫁入口

斯る次第であるから、米國の現勢は女子教育が盛大なるにも拘らず、心ある青年、高等學校卒業の女子は賢母良妻たるの境遇に入るべく滿足すべからざるものとして結婚す



るに躊躇するの傾向である、言ふまでもなく妻としての仕事は育兒、料理、家政等極めて平凡なるものであるに拘はらず大に忍耐、細心を要すべきもので、男子のやうに學問や、經歴などを振廻はすべきものでないから、高等教育を受けた女には一寸遣り難い處がある、それも牧師とか、醫者とかいふ社會では其の職業上高等教育を受けた女を妻とするの必要があれども、他の農工社會や商業社會にあつて實務に從事する青年には甚だ不向である。

故に是等青年の父母は高等教育仕立の女を嫌ふのである、一般に高等教育を受けた女に通有

する缺點は

第一高慢（學識より來る自然の高ぶり）

第二醜貌（二十五六を過ぎて良人の定まらざるは自然に醜し）

第三優美の動作と可憐なる同情の德を缺く事

畢竟是等の女子は、何處となく男子の好まぬ處あり且つ社會と調和せぬ處があるといふに歸するのである。

娘の特色

第一　交際上手なる事

第二　親に柔順なる事

第三　無邪氣なる事

殊に母親には萬事秘す事なく打あけ、タトヘ情夫に關する、事柄にても母に相談するの美風あり、故に母も又娘も未來の良人たるべき青年をば成るべく歡待し、苟しくも彼等の間を邪魔せぬ樣つとむ。

第四　家庭を重んずる事

此點に於ては日本婦人以上なり勉強がしたいとて家を逃げ出すがごときは米國娘にとんとなき事なり。

第五　父母親族の名を重んずる事

家族の名譽を汚すは絕大の恥辱とて嚴重なる社會の制裁あり、一度操を破りし婦人は再び眞家庭に入る能はざる事、淫賣婦となれば永久に父母に手紙を出す事出來ず。

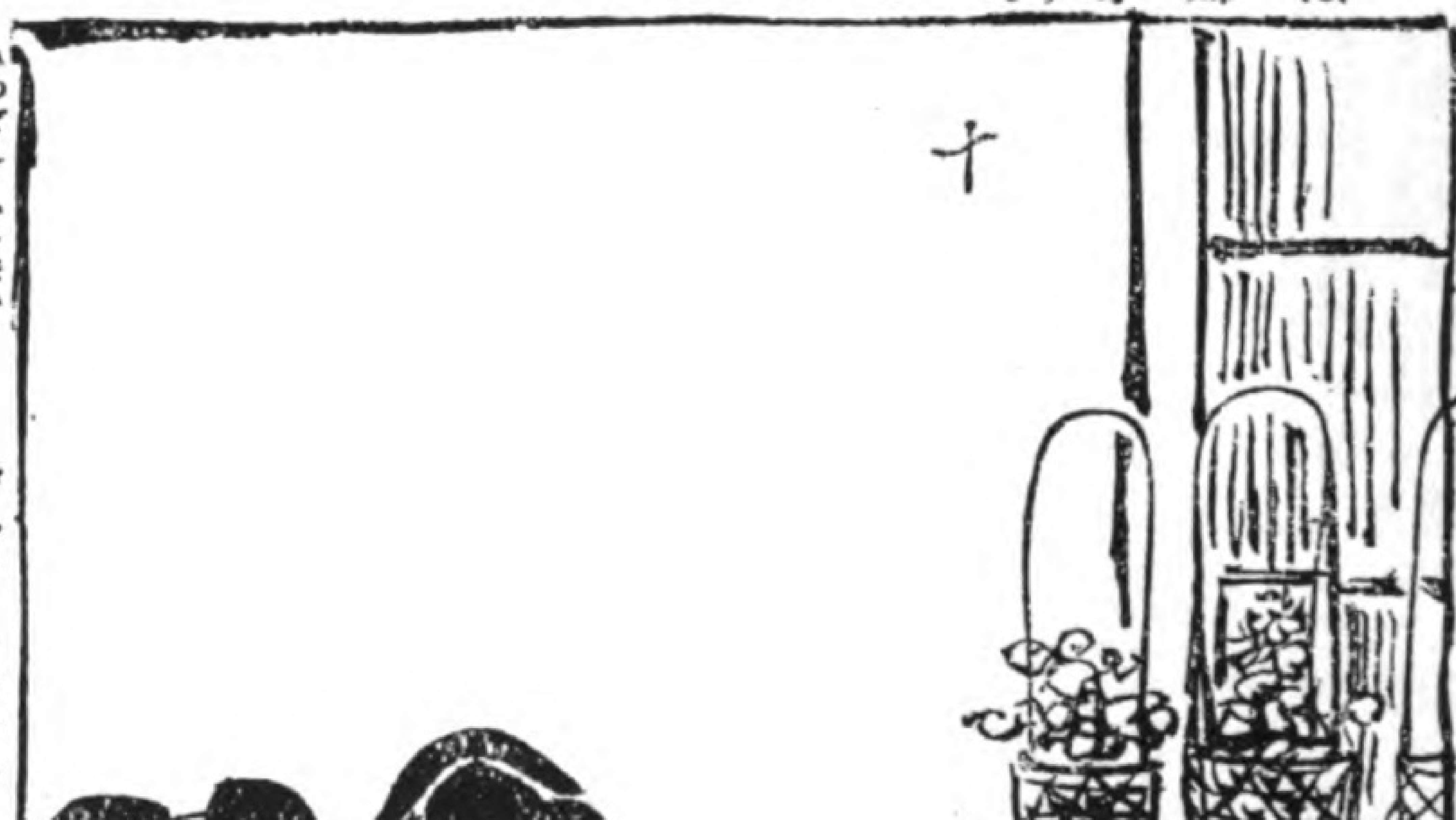
女子の職業

女子の新職業は年一年と擴張され、中には男子を凌駕して段々其の地位を乘り取る樣になつて來た、これが爲めに遊食する女子を減じたのは事實であるが、其結果として兎角未婚女子が家庭を蔑視する樣な傾となつて來た。

婦人の墮落

上等社會は比較的穩健であるが、下等社會の婦人の墮落と來ては中々日本などの比でない、過去十年間に於ける米人品性の墮落は實に著大なもので、彼の大統領ルーズベルト氏が登撰以來極力米國人の品性陶冶に盡しつゝあるのも近世の風潮に鑑みる處ろあつての事

であらう。紐育、市俄古、費府等の大都會に於ける宏大なる會社、商店、事務所、又は新聞雜誌社にはいづれも數十名の婦人書記が居る、是等は速記、又は信書等に從事するものであるが、其容貌の美なものは技術が少々拙劣でも給料は割合に善く、其の給料の一二割は全く美貌の爲めに仕拂はるゝものである、醜貌では餘程の技倆者を除くの外人氣が少い、そこで必然の勢として美貌が歡迎されて、美貌者歡迎の結果として自然墮落の傾向に陷る、



其大多數は善くて店の番頭、技師などゝ夫婦になり、惡るく陷ると所謂賣春的罪惡者になつて社會から捨られる、新約克の各商店の婦人賣子の過半は右の通りである、是等の書記は一週七弗賣子は五弗位の給料であるが生活は甚だ困難である。

米國の娘は獨立心が發達して居丈に自分の好かぬ男には指をも觸させない、併し男子が熱愛を捧て其希望する女の愛を求めんとするや始は容易に應ぜず、再三再四、數月數年の後に至り始めて其熱誠の意を了するに至つて妻として仕へるのである。

夏の家庭

海水浴の効能

◎海水浴は七、八、九の三ヶ月間に於て二週間乃至三週間續行するを良しとす。

◎入浴の度數は一日一回、尤も慣るゝに從つて三回までは差支なし、なほ時間は强壯者と雖も十五分間を過すべからず。

◎入浴の時刻は午前六時より八時まで午後六時より日沒までを最良とす、日中は餘り好くない、殊に帽子等を用ゐずして日光に頭顔等を曝らす如きは衞生上害あり。

◎入浴の時に麥稈帽子を用ゐ腹部を布にて卷き、或は深く沈み或は起ちて身體を前後左右に動かし力めて運動するを要す、然らざれば皮膚健全ならずして感冒に罹り易い。

◎浴後は西洋手拭にて强く摩擦を加へ全身を拭ひ乾かすをよしとす、浴後直に首筋、胸、腋の下等を淸水にて浸すときは痙攣を防ぐとが出來る。

◎浴後適當の散歩も亦必用である、身體の虛弱なものは生雞卵一個を飮用するがよし。

◎男女に限らず神經系統の餘り鋭敏なるものは一般に入浴を禁ずるが例なり、餘り熱度の高きもの、身體の疲勞甚しきものも惡しゝ、殊に婦人の月經中及ひ姙娠中は嚴禁。

◎海水浴を行へば血管緩み皮膚紅潮を呈するものは良く適する人なり、浴後惡寒生じ皮膚蒼白となり或は頭痛、眩暈など催すものは不適當なり又下痢や尿意の切に催すときなども適せず、入浴中は早く起き早く就寢して午睡を禁じ、淡白なる滋養品を採るをよしとす。

海水浴の心得

海水浴で第一に注意しなければならぬのは、取締の不行屆といふ事である、西洋諸國では浴塲の取締が嚴

重であるから浴場で危險がない、日本では海水浴の爲めに溺死するものが尠からぬのは、取締が不完全であるからである、西洋では浴場の場所を限ッて網を張りそして舟番を附け、其の網以外へは誰でも行けぬ樣にして若し氣絶でもしたものゝあッた時は直ぐに救ひ揚げて手當をするといふ事にしてある、どうか日本でも相當の取締法を設けたいものである。

　それから浴者の心得を少し申しませう、海水浴は其人の身體の强弱に依つて浪の荒い處や、靜かな所が大關係する事で、又病氣の種類に依つても海水が良いのと非常に惡いのとあるから病後の人抔は是非とも醫師の診斷を受け、尚其の指揮を受けて行くやうにせぬと回復のつかぬ事が出來るから此の邊は殊に用心して貰はねばならぬ。



　又何程身體の壯健な人でも餘り長い間度々入り過すと忽ち便秘して腸加答兒を惹起す事になるから何でも始めの内は時間を極短かく追々に身體を慣すやうにして三四日經つてから一回十分間位ゐが適當です、そして一日間海水に入るべき度數を午前と午後に一回づゝにした方が適當である云々と右は片山醫學博士の說であるから、更に耳鼻、咽喉科の金杉博士の談によれば、

海水浴を行つてゐる内に耳の中に海水を入れる、殊に鼓膜を破つてゐる人などが耳の中に海水を入れると鹽分を多量に含んでゐるから其の刺戟を受けて耳の奥の機械を損じ、終には生命に拘はる事になる、譬へ滿足な耳にしても浪が鼓膜に當ると忽ち破れて仕舞ふ、そうでなくとも耳の途中に海水の入つた儘打捨て置くと鹽分の刺戟を受けて自然に鼓膜を破る、次には又鼻の中へ海水を入れぬ樣に氣をつけねばならぬ、鼻の中へ入ッた海水が更に副鼻腔の中へ入る樣な事になると非常な害を及ぼすのである、そこで右の豫防法は耳鼻へ脫脂綿をつめて防ぐのであるこれは誰にも容易に出來る事であるが、唯無暗に澤山の脫脂綿を結め込むと耳でも鼻でも自然密閉されて却て意外の危險を招くやうになるから、それは適宜に入れる事にせねばならぬ、又海水浴は過度の鹽分を含んでゐるから、其れだけ身體に對する刺戟も著るしく皮膚筋肉を强固にする外、水に對して抵抗する力が自然の體操となるのであるから、最初に體質の診査を受け、耳と鼻とに注意すれば、至極結構な養生法である。

婦人と水泳法

海水浴の健康に有効なるとはいふまでもなし、されど石地藏の河流れよろしくドンブリコと水底に沈んで居るだけでは興がない、又何時までも堪へられる藝でない、殊に或程度までは必ず運動を要するとだから婦女子と雖も水泳は是非練習ありたきものなり、尤も泳げるやうにならば云ふに云はれぬ樂みも生じ、第一水に就て怖いとか恐ろしいとか云ふ考へがなくなる、若し幾丁かの沖合まで泳いで腕の疲れた頃、グルリと仰向けになりサワリ〳〵と耳のあたりに漣の囁きを聞きながら、足で輕く調子を取つて萬頃一碧の大空を眺め鷗氣取りで居るなどの心持は、水心なきものゝ到底想像の出來ない樂みである、而も水泳とて決して難きにはあらず。

併し河童の子ならば知らず人間として生れながら水を泳ぎ得るものはない、如何なる達人でもそれ相應に

苦心もすれば練習もして始めて上達するものである、さて飛込めばドブリと水底に沈むこの石地藏が如何にして水泳が出來るやうになるかと云ふに、一言せば『習ふより馴れろ』である、水に這入つてパシャ〳〵やつて居らば何時か自然と浮くやうになる、それで最も速成に其コツを覺えるのは水の淺い危げのない所で腹を下にして横はり兩手を人に捕へて貰つて、手で水を搔きながら足で水を蹴る、蹴ると云ふより寧ろ敲くのである、尤も此の際成るべく頭も顔も一所に水に浸ける方が浮かみ易い、我等の地方では之を顔浸と云つたものである、之を繰返し〳〵て居ると次第に人手を借らず自分で遣つて見るやうになる、彼れ是れ遣つて居るその内に自然と足の先きが砂を離れるやうになり次で身體も浮き上つて來るものである。

▲龜の子泳ぎながらも身體が浮くやうになればモー占めたもので、それより面白みも附いて來るから張合も生じ以後は自分の熱心一つで上達も早くなるのである、もと泳方は流儀によつて幾種類もあるが普通素人の遣る方法は、先づ兩手の指を伸ばし拇指と拇指とをクッ附けたまゝ諸腕を十分に前へ突き出し、これと同時に兩足に力を籠めて水を蹴り、それより前に突き出しつゝ手は掌を下にしたまゝ半圓を畫きながら、同時に足を屈曲するのである、最も半圓を畫く手は兩肘の胴に附く時に止めるのである、人によりては伸ばした手で半圓を畫かずして全圓を畫くもあるが、それは宜しくない、斯くては腕の疲勞が甚しい爲め遠距離を泳ぐに不適當である、此の泳ぎが出來るやうになれば次は拔手や立泳ぎと云ふ順序になるので、兎も角これが普通の水泳法であるから一番に之を練習するのである。

▲普通の水泳が出來れば、今度は注意すべき個條である、如何に熟練したものでも水泳中コグラ上りと云つて手足の痙攣を起し身體の自由を失ふとがあるからなるべく岸に添ふて泳ぎ沖に向つて泳がぬがよい、若しこれに罹つたときは狼狽せずして靜にその擬を揉みほどせば乍ち恢復するものだから、決して周章てはな

らぬ。

△鹹水と淡水とは調子が違ふ、海水で泳ぎ馴れたものは河や湖で泳ぐと身體が非常に重くなつたやうに感じて運動ができぬ、淡水で泳ぎ馴るれば海水に這入ると反對に身體が輕くなつたやうに覺えて調子が取れる、是れは云ふまでもなく水の比重が違ふからである、故に海で泳ぎ習ひし初心のものは河川湖水などではよく〱注意しなければならぬと同時に、湖水や河川では泳ぎ習つたものも海に這入ると身體は浮くけれども一番よわるは波を被ぶることであるから注意せねばならぬ併し大なる波の上を乘越すと云ふことは無理な注文で、斯る場合には波が今かぶらふと云ふ時に思切てその下を潜るのである、されば波は忽ち後ろに通り拔けて身は易々と向ふへ出らるゝ、生兵法は大怪我の本と云ふことを能く〱合點し置かねばならぬ、少し水練が出來ると水と見れば直ぐ這入りたくなるものである、川尻などは水流が急で危險が多いから滅多に這入つてはならぬ、總て勝手の知れぬ處はなるべく這入つてはなりませぬ。

海氣浴

▲海水浴は何人にも効果があるとは言へない腺病とか關節病とかには却て大害がある、然るに海水浴の取られぬ場合でも容易になし得られて最も愉快に且つ効驗の著しく總ての人に適するのは海氣浴であらふ、第一海氣はその温度夏は冷かで冬は温かで而も大陸の氣候の如く寒暖の變化が甚しくない、其原因は海水が太陽に熱せらるゝのも又一度熱せられた温度を失ふのも陸地よりは遲い上に、潮流等の關係からして温度の變化を來すのである、之に反して大陸の氣候は以上の關係が皆無で自然氣温日變と月變とをして著るしからしむるものであるから浴場は成るべく氣候の變化の少い土地を撰ぶが必要である。

▲海氣の成分は炭酸、酸素及びオゾン鹽分の少許と云ふと云ふ水の多量を含んで居る、處で海氣の温度は前に述べたやうに甚しい變化がなくて能く人體に適し、

且つ此海氣の成分によりては空氣に濕氣を帯びて居るから粘膜や皮膚の乾燥する事がないので、咳痰などの療養には最上である。

▲なほ海氣は非常に清潔で無菌、無塵であるから之に原因して居る病氣には根本的治療を施すことが出來る、元來都會の空氣は塵埃や黴菌だらけと謂つても差支へない、今フイセル氏及び永松氏等が最近の調査によつて見ると巴里の住民は毎日二百三十密丸の塵埃と七千五百個のスポレンを空氣と共に吸入し、又伯林では五千個、我が東京では一萬四千個のスポレンを吸入しつゝあると云ふことである、それも屋外の空氣に就ての試驗であるから若し流通悪しき屋内の空氣とならば如何計り多くの塵埃と黴菌とを含んで居て、その吸入の割合も亦如何計り多量に上れるかゞ想像出來るでせう、更に一般都會の空氣一立方米突中四萬五千個その古きは三十三萬個のスポレンを有することと算へらるゝと云ふに至ては實に驚くべきではありませんか、殊に水の如きは濁て居て不潔と思ふたら飲まさずとも濟まされるが、空氣は第一黴菌を含んで不潔であるかドーかゞ一寸見分け難く剰へ呼吸せずに濟ますわけに往かない又水は人間一日一升七合て生活する事が出來るに、空



氣は五十石なくては生命を保つことが出來ない、斯くその量に於て空氣は水の幾十倍多きだけそれ丈け害も亦幾十倍多く其中に生活起臥するとせば自然と黴菌だらけの人間となつて了ふ事は免れ難い所である、故に此の無塵無菌の海氣を呼吸するやうになると菌牙を助ける同類が居ないから一菌一牙次第々々に滅びて遂に根絶せしめることが出來るのである。

▲故に鼻加答兒、臭鼻加答兒、咽頭喉頭加答兒、氣管支症より續發する腐敗性氣管支加答兒、腸胃病、小兒の百日咳、初期の肺結核等の諸病にも著しい効驗がある、且つ氣壓が高い爲に肺病及び心臟に對しては呼吸を後緩して心力を强大ならしめる、風が絶へず吹き渡つて居る爲め衣服及び身體を自然に淸潔ならしめる、なほ體溫を奪却して皮膚呼吸を催進する等海氣浴の効能は一々數ふるに暇がないさて少し奪溫作用と皮膚呼吸の關係を述べんに、奪溫作用は冷氣の爲に皮膚が收縮するので此の機會が度々重なると冷氣に應じて速に皮膚が收縮する慣習となり、且つ神經末端は何時か冷氣に慣れて容易に感せないやうになる、此の作用は粘膜にも及びて慢性氣管支加答兒をも三四週間にして能く全治せしめると云ふことです、その外奪溫するにより溫原なる食物を增加し酸化分解しなければならない所から自然と食慾を亢進し、又奪溫と同時に身邊に附着せる炭酸を除去せしめるのである、

▲斯く奪溫作用は酸化作用と新陳代謝とを亢進せしむるから食慾が甚しく進み、營養を容易に回復することが出來るので、幼者佝僂病、腺病及び羸瘦したるもの、貧血性、萎黃病、食慾不振、神經性消化不良、神經衰弱、神經痛、運動並に知覺の衰弱、ヒステリー、ヒポコンデリー等の諸病には取り分け効驗がある、更に皮膚呼吸に至つては身體の不用物、即ち炭酸水氣等が酸素に富める海氣によつて取り去られ、同時に此等に入り代る作用であるから何病にも莫大の効力のあることは此上くど〳〵謂はずとものことである、併し度を過ごしたり又土地の選び方が惡かつたりすると、藥も毒になる例もあり、身體の爲めどころか却てその身體を害ふ

とがあるから此等最も注意を要すべし。

飲用水の素人鑑定

深い井戸の水は夏は冷く冬は温い、殊に夏向になると黴濕き水道の水よりも清冽なる井戸水に限る、井戸の水は深いほど質が良しい淺い井戸は地上の泥溝や便所などから不潔な水が浸み込んで來る恐れがある、深い井戸は斯る心配なく不潔物や病氣の害菌などは途中で充分漉されて無害の上水となる、故に淺い井戸殊に



便所や塵芥棄場に近き井戸の水は飲む可からず。

▲細長い透明なる玻璃器を白紙の上に置き、それへ水を入れて見よ、充分澄み切つて居らねば惡い。

▲飲んで見よ、水の冷つこい甘い味がなければならない、酸味、鹹味、苦味などの少しでもあらば惡し。

▲火に懸けて温め振つて臭いで見よ、硫黃臭いとか、黴臭いとか臭ひがあらば惡い

▲白い皿に少し水を入れて煮詰めれば、如何な水にでも幾らか白い滓が殘る、その時猶強く熱して見よ、その白い滓が黑く變つたら決して飲用すべきでない。

夏の攝生

▲腦の持ち樣　凡て人體の疲れと云ふものは寒冷い時は容易く恢復もし、又た早く恢復もすれど、暑くなつては六づかしいものなり、腦病なども矢張り同樣で夏季は冬季よりも殊に逆上し易いから神經衰弱の人などは分けても注意せねばならぬ。

▲晝寢　此點に就て晝寢は太だ有益なもので一旦疲びれた體軀も晝寢によりて舊に歸へるものであれば人によりて仕事に差支へなき限りは晝飯を食べた後一時間位の晝寢をした方が宜ろしい。

▲汗　晝寢をした後は誰れでも多少汗を搔くものだが之には少しも心配する必要なし晝寢に限らず夏に汗の出るは當然のことで汗が出れば出る程體熱が薄らぎ身體も保てる譯だから汗が出ずば迚も夏中を過ごさるゝ譯のものでない若し又た汗が餘り出て汗疹とならば麥粉の如き無害粉末を其の局部に塗り附くるが一番可し併し暑くも何ともなきに夜寢汗を搔くは病氣であるから醫者に見て貰ふ樣にせねばならぬ。

▲戶外の空氣　蒸し暑いからとて病人の居る室房でも何でも構はず、戶障子を明け放し、戶外の空氣を入れるはよく見ることだが室內換氣法は晝は宜けれど夜は惡るい夜中の空氣は水蒸氣を多く含み溫度も變化の激しきもの故達者な人にも宜しからず、況してや病人などには惡きこと無論なり。

▲植木　夜中植木鉢などを室內に入れ置くことの惡きは植物學を學んだ中學の生徒にすら解り居ることだが是に注意せぬ人隨分多き樣である緣日の晩など植木屋が炭酸瓦斯の濛々たる裡に散步と稱して病人を伴れ行くなどは以つての外の事である。

▲日光浴　是れから顏の色の惡るい瘦せたエボ〳〵した人は歐米に熾んに行はれ居る光線浴日光浴を採るがよい夫れには砂烟の立たぬ空氣の淸澄な處に每日時間をきめて日向ボッコをする事である西洋では硝子の屋根或は四邊壁ばかりの屋根のない家を作ッて其の中に這入つて此療治をなす人も多い體の弱い人には必度利

き目がある。（後藤勝病院長談片）

氷水の飲用法

少しく衛生上のことに注意して居る者の經驗を聞くと十人が八九人迄如何に暑くとも氷水などを呑なくとも、夏は過されるものだと云ふて居ります、實に其通り、食事の時間や食物の分量などに注意し、身體に適當した食物を用ゐ、そして少しく克己の精神を持するならば、我國の如き暑さは決して堪へられぬ筈はありません。然るに氷水を用ゆることが一種の習慣となつて、これでなければ暑が凌げぬもの丶様に思ふて居る人が少なくないのは困つた事である。



氷は一切飲用しない方がよい、こ丶には飲用する人々に對し一二の注意を申しませう。

一、氷を其儘に食するはよろしくない、コップに清水を入れ、そこに氷一二片を加へて飲用すると渇を止むるにもよく、胃を害することも少い。

二、食前食後には用ひてはならぬ。空腹でもなく、滿

腹でもなく、お腹の恰ど良い頃と、暑さの最も激しい時即ち午後三四時頃に飲用するがよい、それも多量は不可なり。

三、小豆とか白玉とかの様に種物の入つたものは氣をつけねばならぬ、胃の腑が氷の爲に消化作用が鈍くなつた所へ、斯様な餘計なものが入ると、胃中に停滯して消化せず、爲に腹痛したり、下痢することがある。況して種物の製造後時あるものに於てをや。

四、夕方紅塵雜沓の市街で氷水を飲むなどは實に危險千萬也。斯様な人は、自分の身體を他人扱にする様なもので、不養生も甚しい。

五、千客萬來の氷店は無論のこと、利益にばかり氣を取られて居る商人共は、コップや匙の洗ひ方が不充分である、夫故氷店に入つた爲め意外の病氣を引受けないとも限りません、是等は御同様充分に注意したいものです。

夏季と飲食物

夏季に入つて毎年流行するのは、赤痢、チフス、虎列刺などであるが、すべて是等は皆黴菌の傳染に依るものであるから其の排泄物の消毒は無論であるが、一般に注意を加ふべきは食物と飲料水である、食物は一切生食を避けて、煮熟したものを用ゆる事にし、且つ水は必らず一度沸騰したものでなければ口に入れてはならぬ、其他、不規則な飲食は勿論、臺所を吟味して不潔物のなきやうにし、夜具襯衣は一日に必らず一度日光に當てるやうにせねばならぬ。

▲酸性の食物　斯る流行病のある時には酸性の食物を攝取する事が肝要である、之れは確かにチフス、赤痢、虎列刺の如き病菌を殺す力がある、まづ梅干とか又は酢を用ひた消化のよひ料理を取らねばならぬ、コレラ流行の時梅酢を飲むなどの事も偶然とはいへ經驗より得た智識でせう。

▲煙草は無効　又食後に煙草を吸ふのは殺菌の効があると素人は唱へるけれど、實際効能はあまりない。

▲菓物　これは甚だ危險である、殊に枇杷、葡萄の如

き皮を剝かずに口に入れる物は猶更である、市中の店に棚さらしになつて居る菓物を見ては何人も傳染病の媒介物と思はぬ者はあるまい、されば菓物は一旦煮て喰べる樣にすれば尤も安全であるが、萬止むなければ、沸騰せる湯をかけて外皮の消毒をするがよし、又果物は下痢を誘ふものであるから、痢病流行の時は斷じてよろしくない。

▲水の煮沸　飲料水は勿論の事雜水でも水道以外の水なれば一旦煮沸して用ひる事を忘れてはならぬ、多くの家庭では兎角臺所の仕事に面倒といふ惡習があつて終に累を一家に及ぼす事がある、傳染病流行期に於ける水の煮沸などは全く其一例で、一日に三度づゝ釜に一杯も沸せば飲むにも食品食器を洗ふにも澤山であらう。尤も家族の多少にも依るけれど、清め洗ひに煮沸水を用ふる注意が屆いて居れば黴菌の附着を除く事が出來る、食品とても其の通り煮た物を食する外は是非煮沸した水を用ひなければならぬ、序に香の物、奴豆腐、刺身などは水で洗つた儘切ッて膳に供へるから、時々病毒傳染の媒介となる事がある、呉々も注意すべきは臺所である。

婦人病弱の原因

某婦人科の博士は言はれた、私が多年經驗する婦人科の病人に就て見るに、中流社會の妻君達が十中の八九分までは病人であると斷定して差支はない、何故かといふに中流の婦人達は平常其の良人の命令に依つて家の留守居をしてゐるばかり、爲めに見聞は狹くなる、運動は缺ける、動作は自然不活潑になる、智識を啓發する事もなければ、社會的に娛樂を求むる機會もない、そこで自然に不健康に陷る即ち彼等は概して病人である、それと反對に下等社會の夫婦は共稼ぎ、共遊びといふ工合に職業の爲めに利するばかりでなく、一層健康を增すのであるから、彼等下流社會の婦人に病氣のあるのは誠に少數である。

朝から外出した良人が留守居を命じられて不活潑になつて居る妻君の所へ歸つて來て、晩餐を共にした處

ろで格別愉快な事はあるまい、愉快が得られぬばかりでなく相互の見聞や其他の事物が一致しない爲めに自然夫婦間の愛情が薄くなる、男子は其愉快を慰めんとして外出する婦人は嫉妬心を起して益々身體を惡くする、そこで平和は破れる、されば目下の狀態では到底一夫一婦婚の成立は見得られぬ事であるから茲に男子が婦人を遇するの方法を改めて苦樂を倶にすると同時に健康を一致する事に努めねばならぬ。

近來女學校が盛んになつた結果、卒業生が追々と新家庭を作つて大分生活的の改良も行はれて居るやうであるが、社會の習慣は中々一朝にして改まるものでない、成程學校に居る間は體育に就て隨分注意もされて居ながら嫁しての後は矢張り舊來の習慣に捲き込まれて仕舞ふのが多い、殊に不健全な家庭に入つては學校で理想した事など到底思ひも寄らぬ事で、體育は學校に在る間だけて嫁に來ると例のお留守番になつて忽ち健康を毀して、不活潑な、精神の萎靡した婦人となつて仕舞ふのである。故に其の當初は海水浴にも行け、登山も出來、探險旅行にも堪へ得べき健全なる婦人も連れ添ふ良人の處置の良からぬ爲めに遂に又これに適せぬやうな患者となり、炎熱燬くが如き日も、一室に閉ぢ籠つて居らねばならぬ程の不幸な身の上となるのは現在の婦人の爲め、家庭の爲め又未來の幸福たる子孫の爲めに遺憾至極の事である。

されば世の良人諸君よ、諸君が各自の家庭の幸福を希望さるゝならばどうか婦人をして最初の健全を保たしむる樣平常から心掛けて、善良なる處置を取られたいものである。

衛生

臺所衛生

醫學士　山根正次

△炊事前の注意

衛生と一口に云へば至極單純なものゝ樣に聞えるがサテ衛生の中にもいろ〳〵の種類があつて、個人衛生、社會衛生、家庭衛生といふやうに極めて複雜したものである。而して又此家庭衛生の中にも婦人方の最も重んず可き衛生は臺所の衛生である。謂はゞお料理に對する身體の注意である。先づ第一に何人も心得て居る樣で而も注意を怠つてゐるのは炊事前の心得で、現に普通一般の家庭では、主婦や下婢どんが朝起きると手も碌々洗はぬ中に直ぐ米を磨ぎ菜を刻み膳腕を拭いたりなどして平氣で居るが之は誠に不注意の次第である。何故と云ふに人間の五體中手と足が最も不潔物に觸れ易いのは云ふまでもなく、此手が前夜睡眠中に頭髪や體を掻き又は不潔なる部分に觸接して如何樣汚ない黴菌が指や爪の間などに潛んで居まいものとも限らぬ。殊に日本人は日常兩手を疊に接いて挨拶をするといふ習慣であるから席上の塵埃が毎に手と足に吸收されてゐる。夫を少しも怪まずしてお料理をすると云ふ風であるから、設令食物の原料は新鮮であつても手や服裝が黴菌の媒介者となつて、偶ま意外の有毒品が人の口に這入ることとなるのである、故に婦人は朝起きたら直ぐに手を洗ふか若くは、凡てお料理をする前に當つて、先づ第一にフケや垢の落ちぬやうに頭髪をとゝのへ、白前垂を掛け而して

△手を充分に洗ひ淨めること

を忘れてはならぬ之を嚴重に云へば身體や服裝を消毒してかゝらねばならぬのであるが然し爾も行屆かぬから、先づ石鹼で手を洗ふこと、爪の垢を取去る事とを勵行せねばならぬ。それと第二には

△手洗鉢の不潔を改良

せねばならぬことである。西洋諸國では何處の家庭へ行つて見ても、便所用の手拭は一度用ゐれば直ぐ棄てゝ了つて二度と同じ巾を用ゐぬ例になつて居る。それが日本では如何かと云へば、到る處の家庭で、手洗鉢の水は二日も三日も、甚だしきは一週間も十日もそれを取換へず、夏季には孑孑でも湧生そうと云ふ有樣、その手拭に至つては一層甚だしいもので、先づ三日に一遍位取替る家が清潔の部で、酷いのになると一月も二月も同じ物を用ゐて、手垢や其他の不潔物で眞黑に染つても平氣で掛けて置く家がある。これ等の人は、所謂便所といふものは穢いものに定つて居るから、これに附屬する手洗鉢や手拭の汚れるのは當然だ位に考へて居るか知らぬが、それが抑々大なる間違ひ大なる不衞生の基で、凡ての病毒菌が皆これから傳染すると云ふことを知つたなら到底一日も彼那汚ないものを使用して平氣で居られる譯はないのである。一家の主婦たる人は宜しく此邊に注意して、手洗鉢の水は少くも日に二回（夏分は殊更）は取替へ、手拭は必ず毎日新らしく洗濯したものを掛替るやうにせねばならぬ。

△食器に就いての注意

目下のところ一般の家庭では、食器に對する衞生思想を缺いて居る樣に見受けらるゝが、之も大に改良せねばならぬ。昔からの習慣で我邦人は兎角、膳椀、茶碗其他古い器具を賞翫する癖がある。古くとも汚なくさへなければ差支はないが、其汚ならしい處を愛する一種の骨董癖がある、人の手垢や飲食品の沈澱物、或は物の殘渣などで器具の染つて行くのを寧ろ樂みにして、故意と不潔物を洗い落さぬ樣に保存し、且は穢ない巾や手で摩擦して、艶が出たとか寂が着いたとか云つて喜んで居る人も鮮くないやうであるが、之は衞生思想の全く零であつた未開時代の惡習として絕對に改良して行かねばならぬ。家庭の器具を取扱かはんとする婦人達は常に、

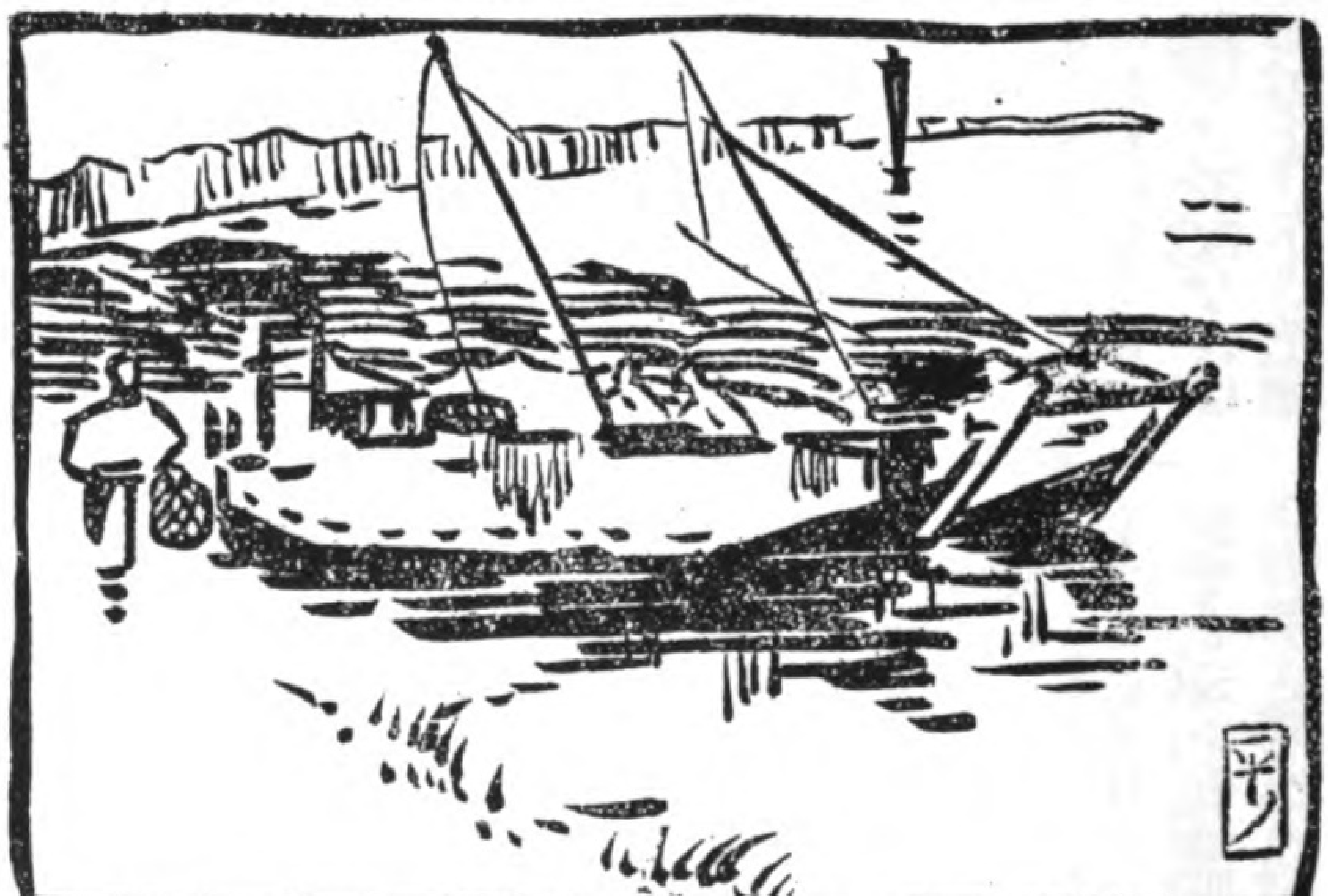
△黴菌は如何なる處をも怖れず

侵入するものとの語を念頭に置いて、食器を使つたら其都度灰研きにして洗ひ浄むることを忘れてはなら

ぬ。肺病、腸窒扶斯其他の病氣を傳染するは大抵この食器が媒介者となるのである。次に最も注意すべきは

△井戸に就いての衛生

である。此問題は衛生學者が一時非常に矢釜しく云つた爲に追々改良されて行く様であるが未だ地方や、水道の引かれてない處へ行くと頗る非衛生な事實が澤山ある。現に、地方ばかりでなく、東京でも、少し引込んだ裏長屋などでは、雪隱や泥溝に接近した一個の井戸を、十軒も十五軒もの人が共用して、狭い井戸端で、米も磨げば襁褓も洗ふと云ふ様になつて居るから穢いことは申す迄もなく、種々の黴菌が井水に滲入して幾多の病毒を發生しつゝある。之はまづ追々に改良することにして玆に最も忽にすべからざる事は



△井戸繩を取扱ふ注意

である。之は極めて些細な事のやうであるが實は衛生に大なる關係がある、人の手に附着した不潔物が井戸繩を繰る毎それに傳はつて飲料水に交るのは自然の道理ではあるまいか。然るに一般の人は井戸端で襁褓の洗濯などをして其汚い手を洗ひもせず、突如井戸繩を引摑んで自ら不潔物を井水に混じ乍ら、人も咎めなければ自分も亦た之を知らずといふ有様であるから、得て恁る共同長屋――共同井戸の邊から傳染病が發生し易いのである。玆に

△實際の例

は、數年前のこと、芝の伊皿子臺で、伊藤侯の邸の附近に住む某る薪屋の老人が虎烈刺病に傳染して死亡したのを

後で其の原因を調査して見ると、近所で虎列剌患者があつて、其家内の者が之を世間に隱蔽し乍ら患者の衣服を共同井戸で洗ひ、其病菌が井戸繩に附着してあつたのを不幸にも右の老人が飲料水に供して頓死の災を招いだのである。又た一昨年、飯田町にも腸窒扶斯患者でこれと同じ例があつた。凡て井戸端衛生の重んずべかきは右の例によつても知らるゝが、サテ之が改良法は如何と云ふに、私は從來の井戸繩を廢して可成ならポンプ仕掛にしたいと考へて居る。若し止むなくば共同井戸を使用する人々に注意して繩を繰る時には必ず手を洗ひ清むること、及び不潔物の流れ込まぬ樣に各自注意を怠らぬことにしたいと思つて居る。

△蠅や鼠の食物に關する衛生

は極めて綿密なる注意を以て之を防がねばならぬ。夏季は何處の家でも蠅の發生を免れ難く、不潔なれば不潔なる程澤山の蠅が群集して食物其他のものに黴菌を止めて行く、實に危險なるバチルスの媒介者であると共に之を豫防する方法を講ぜねばならぬ。即ち出來上つた食物に網をかけるか又は蓋物に入れて蓋をしておく必要がある。先年私の知つて居る傳染病々院内の一醫員が、食事を認めてゐる面前へ一匹の蠅が飛んで來た、此奴危險と思つたまゝ手で撲殺し、後で其蠅を檢査して見ると果して虎列剌菌の附着を發見したので深く其輸入して來た根本を調べて見たらその病院内に居るコレラ患者の便に止つた蠅であつたそうな。だから一疋の蠅と雖も衛生に不注意な人は意外の病毒に感染することがあると心得ねばならぬ。それに今一つ黴菌の媒介者は鼠である。

△鼠とペストの關係（臺所の散亂）

は最早一般の人に知れ亘つて、鼠がペストかペストが鼠かといふ程に怖がられて居るから此上詳しく說明をする必要はないが、唯だ何故に日本の家屋に鼠が多きやと云ふことを明かにしてをる人が素人間には少いやうである。之を一言すれば鼠の多く發生する原因は臺所が亂れて居るからである。即ち殘飯や殘菜が方々に散亂して、棚の隅や流し元など、到るところに鼠の餌

食が落ち溜れてゐるからである。如何な鼠でも食物のない所には住まへぬ道理で、室内と臺所を清潔にして一粒の飯、一片の香の物と雖も之を散らさずブリキ罐の如き物に殘物を入れて蓋をしておく樣にさへすれば鼠は自然と消滅する譯である。又之を鼠穽で捉るにしても他に食物が散亂して居ては決して懸るものでない、之を捕へやうとするには捕鼠器以外に全く食物のない樣にして置かねばならぬ。又た

△夏季の食物に對する衛生

は主婦たる者の最も注意を要する事で、夏分だけは少し薪炭の費用が嵩むでも可成なら二度三度に新鮮な料理をした方が宜からうと思ふ。尤も日本人は兎角食



事時に人を訪問する癖があつて、これが爲に不時の來客に供ふべく豫定よりも多くのものを拵へて遂腐らして仕舞ふ樣なことになるが、此習慣は御同樣改めねばならぬ。それに夏季は宵越しの物を一切食べてはならぬ。中には又棄てるのも惜いといふので腐敗かけたのを無理に詰込んで中毒を起したりなどする人も鮮くない樣であるが、若し病氣に罹つて高價な藥代を拂ふものと考へて見れば殘食を棄てる位は一向微々たるものである。既に私の知人の許に雇はれて居る下婢が茄子の鴫燒を拵へて、宵越しにしては食べられぬといふ考から我慢して其夜の中に平げた結果、猛烈なる腸加答兒を起した例もあるから、殘り物

は必ず惜まずして捨てた方が宜しい。それに序乍ら心得べきは

△食器を拭く巾の改良

をせねばならぬことである。西洋では此拭巾に番號を附けておいて一回使用する毎に洗濯屋へやるといふ程潔癖であるが、日本の家庭では膳腕や盃などを拭くに木綿では斑がつくとか云つて、袖裏又は衣服の裏にした古い絹の布などを用ゐるが、之は甚だ心得ぬ次第で、少しく衛生に心ある人から見れば態々黴菌を器物に扶殖するやうなものである。だから凡て新らしいものを用ゐるのが衛生上の原則と心得て居れば太した間違はなからうと信ずる。（以上は女倶樂部講談會に於ける山根氏の講演なり）

動物と天氣豫報

△猫が身體を舐め洗ふ時は好天氣なり、併し毛を逆に舐るとか耳越しに顔を洗ふ時は天氣不良と知るべし又其尾を火の方へ向けて臥するときも同じく不良なり

△牛馬が牧場へ出て日中早く臥せば雨の近きものなり、又隠れ場でも捜すやうに一緒になつて騒ぐ時は暴風の徴なり

△鳥が唯一羽で翔つて居るは曇天の徴なり、非常に騒しく啼いてぐる〳〵飛び廻らば雨と知るべし

△牛や馬が頸を伸ばして何物かを覘く様子をする時は雨、野獣の落着いて休む事の出來ざる様子あらば暴風雨の襲來と知るべし

△小鳥が囀りを止めれば雨に次で雷鳴あり

△候鳥（わたりどり）が北に飛べば暖き日和なり、南へ飛べば寒き天氣となる又途に迷ひて無暗と空中に飛び出し容易に誘拐される時は旋風の近きものと知るべし

△蜂が巣より出でざる時は如何に快晴なる天氣も雨雲の近づく徴候なり、又巣の口を密閉する時は冬季の寒氣凜烈なる時、輕くその口を閉ずる時は暖氣なり

△雁が海に出づる時は好天氣なり

△孔雀が高く鳴き叫ぶ時は風雨の徴なり

女代診（其四）

糸左近

▲不妊の原因及其救正法（前號の續）

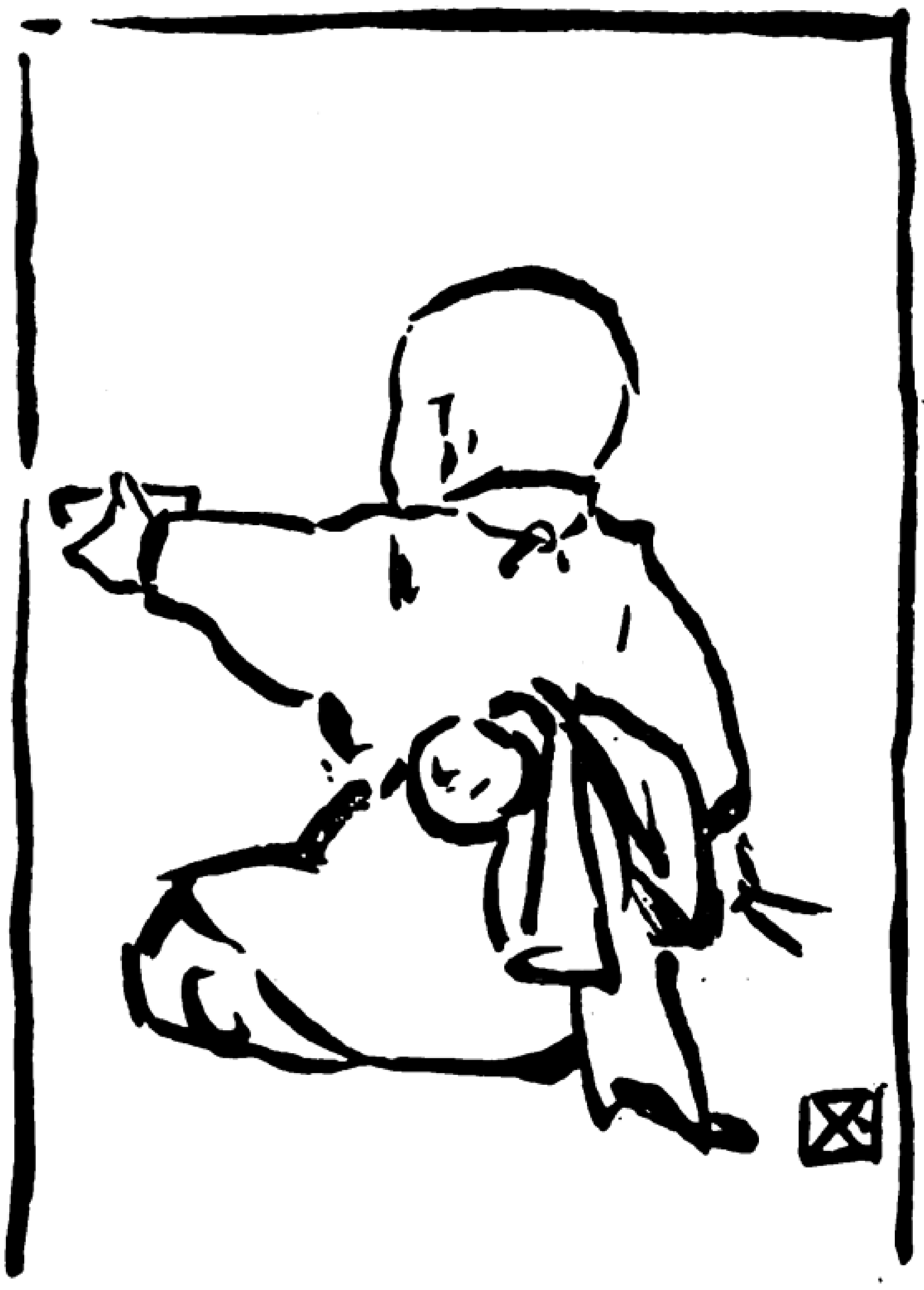
▲病氣――病氣は如何なる病氣も不妊の源となるは言ふまでも無い、即ち病氣に罹れば生殖慾も生殖力も共に減ずるもので、病重ければ重い程減ずる度が強い、世間には往々夫婦何れかゞ病氣中に妊娠する者も無いでは無いけれど、それは極めて異例であるのみならず、左程に重い病氣で無いからである斯う申すと病氣中に生殖慾生殖力の減ずるは言ふまでも無いことなれば、書かずもがなと批難せらるゝ人もあらう、所が脂肪過多症、條蟲病などは素人の方から見ると、病氣で無いやうである、殊に脂肪過多に至つては、肥え太つてるから、普通人よりも健康であるかの如く見ゆ、抑々この病は急に來るものでは無くて次第〳〵に身體の容積、體重を増し、何時の間にか所謂デブ太りになつて、梅ケ谷宜敷といふ格好になる、梅ケ谷は筋肉肥え太つてゐて大力無雙なれど、本病者は脂肪が沈着して太るのであるから、腕力却つて減り進退擧動一々困難を感じ、手を動かせば重苦しく、歩行すれば股摺をなし、動悸は高ぶり易く、腦充血には罹り易く、甚しきは心臟破裂を來し、或は卒中を起すことがある、斯る極端まで進まぬにしても、屢々月經の不調を伴ひ、往々色慾減退し、遂に不妊の源をなすのである。日本西洋の婦人科産科醫の統計表に依ても脂肪過多の女は生殖器に異常無くも百人中約五十人の不妊者あることが了る、余の經驗に依ても某婦人は十七八歳にして或る金滿家に嫁し、數多の下男下女を使ひ、睡い時に寢ね、起き度い時に起き、口は何時も和洋の美酒に醉ひ、山海の美味に飽き、少し出るにも車で無くては動かぬといふ風であつたが、其の夫と十年程も伴れ添うてる中に身體次第〳〵に肥え太り、それ

と同時に月經不調を來し、何うも子が無い、底で姑や夫は殘酷にも、支那流の所謂「子無ければ去る」を實行した、婦人は故家に歸つたれど、當時故家は零落してゐたれば、涙ながら他へ奉公に出た、所がこの家の主人は極めて吝嗇で、朝から晩まで馬車馬の如く使ふにも拘らず、三度の副食物は香の物勝、それも飯だけ十分に食べさせて來れゝば可いけれど、三杯目には睨まるゝ始末なれど、婦人は我身の運命と諦らめ、忠實々々敷働くこと二年、身體の肉は段々締つて固くなり、月經も規則正しくあるやうにたつた、然るに又良緣あつて、某家へ嫁しづいたれば間も無く姙娠し、遂に三人の子持となつて生涯樂しい月日を送つたのがある、これは脂肪の多い物を取つて、運動せぬから、肥胖病になり、爲に不姙娠となつたので有るが、吝嗇な家に雇はれてからは、運動をしながら脂肪食を減ずるものゆゑ、それが不幸中の幸、即ち恰かも脂肪過多症の療治をするやうな工合になつたのである。然れば子無き男女の方で、若し脂肪過多で有つたら、直ちに脂肪食を去つて運動するやうに計られたいものである。但し「脂肪過多症は不姙の源となる、肉類には脂肪を含む故に子の欲しい者は肉食す可からず」と云ふ如き間違つた三段論法を組み立てられてはなりませぬ、肉類を食べて運動すれば決して本病に罹らぬのみならず、却つて姙娠の源となるけれど、一旦本病に侵さるれば、飽食勞働以て之を取返さねばならぬといふ事を御注意申しておくのであります。

次に條蟲其他色々樣々の病氣に就いて述べたいが、これは際限有りませぬから、子の無い方は夫婦共に病氣の有無を醫者に診て貰ふこと肝要である。

▲血族結婚――これ亦不姙の原因をなすことの多いものである、前號相性の章にも述べた通り、心身共に異性の者程和合し、和合は即て姙娠の源をなすものだと、然るに血族は同性なれば却つて不和合の種となるばかりで無く、夫婦體質の短を補ふことは出來ぬ、換言すれば同性には其の共通なる體質の弱點を有つてることの多いものである、故に縱

ひ子を設けても虚弱不具痴愚などになり易く、此上無き不幸を招くこと有れば、如何なる事情あつても叔姪孫とか從兄妹同志などは斷じて爲らぬことである、昔の貴族は其結婚する範圍が極めて少なかつた爲に、勢ひ血族結婚をせねばならぬ其故本妻に子の無きもの多くて妾腹が嗣子となる例澤山有たである、又若し本妻に有つても擧兒の數甚だ少く、而も其子は時に依ると白痴同樣、爲に一家は姦臣に專擅せられ、お家騷動を惹起したるは、啻に昔ばかりでも無いことを、既に讀者の知らるゝことでせう。



▲過房――彼の褻らはしき賣春婦が大抵子を生まぬ譯を能々探究して見ると十二三の原因あるけれど、過房も亦其一つである、之に反して人目を忍び、姙娠をヒヤ〳〵恐れてゐる野合に姙娠の多きは過房になり難いからである、然れど箇樣の輩が、一旦天下晴れての夫婦となれば却て擧兒の數少くなるは是れ亦過房が一因をなすと斷言しても可い。又、子不有の夫婦の一人が長き疾病に罹り、身體快復したる後に子を設けたる例も有れば、旅行等にて夫婦別居したる揚句に相逢ひ、始めて姙娠したる話も有る、然れば子無き方は夫婦有別の興味を悟つて頂きたいものである

▲生殖機の異常――

男女生殖器の異常は共に不姙娠の大原因をなすもので有るが、男子の方は女子に比して甚だ少いのみならず……爰には之を拔にし、女子に就いてのみ言はう、併し異常といふ中には、病氣もあるけれど、病氣は前章

に述べたる通り、誰も醫療を受けらるゝから、是亦愛に之を略し、唯先天的の異常と、及び本人の知らざる異常とに就いて稍詳しく說きませう。

其又異常といふ中にも色々の異常が有る、今其の重なるものを列記すれば、(1)處女膜の異常、一體處女膜は年頃になれば、大抵自然と破るゝが常なれども、時には結婚して間も無く、然うなるのもある、然るに其膜肥厚してゐて、唯僅かに微までの小孔を有し、或は更に有せざるもあつて、縱ひ結婚した所が、人世の義務を盡すことが出來ぬから、到底姙娠の目的を達せられぬは言ふまでも無い、昔は斯の如き人だと、唯鬱々く世を味氣無く暮したさうだが、今は外科手術を施せば普通の人となることは朝飯前の仕事である。(2)膣異常これに(甲)全部(乙)外口(丙)深部の三種有つて(甲)は全部閉鎖し(乙)は外口のみ閉鎖し(丙)は外口に異常無けれども深部に膜狀の閉鎖あるもの、さうして其の丙に至つては結婚後餘程の時日間之を知らずにゐることがある、併し是等は何れも適當の手術に依て姙娠を完うすることの出來るものなること前者に同じ。傳へ聞く小野小町は(1)(2)何れかで有つたと、果して然らば實に惜いことであつた。(3)子宮口の狹小、これは先天的が多い、けれど、又潰瘍の瘢痕が縮んでなるのもある何れにしても不姙の原因を爲すことの最高位を占むるもので、子不有の多くはこれである、然れど專門醫に就いて子宮口の擴張法を行つて貰へば必ず全治し、從つて爾來の淋しき家庭を賑はすやうになるのであらう。(4)子宮の矮小、これは子宮全體が小さいのであるから年齡の若い時に治療すれば大いに見込もあるけれど、時遲れてから悔いても仕方が無い、殊に小さい中にも極度に小さいのは現今の醫術では如何なる先生も匙を投げるであらう、其の比較的小さき者は、溫暖なる地方に移り、運動を適宜にし全身の榮養を計り、從つて子宮の肥大するやう導けば大いに望みのあるものである。(5)子宮の位置變狀、これには前屈、後屈、左右屈等色々の種類があるけれど、多くは苦痛を感ぜぬもので、それが爲め醫療も加へず、徒らに子の無きを

喞つてゐる無理な人もある。須らく適當なる正復術を施して貰うが國家に對する義務である。これに就いて或人は位置異常を治さず、其儘にして於て、姙娠せしむる方法有りと説いた、成程道理有りと思はれぬでも無いが、斯樣な事を書くと、「○生○報」然たる事になるから之を略す。右の外卵巣、喇叭管等の異常も有る何れも醫師と相談す可し。

▲男的婦――如何に女は怜悧だと言つても女は女らしい所のあるものだ、例へば最愛の夫や子に別れたやうな折には潸々と泣いて「ア、可憐やア、可愛やコリヤマア何としたら宜からう斯うと知れたら彼もするのであつた」と生前愛してゐた玩弄物などを棺の中に入れる如き愚痴をなすものだ、けれど余は斯の如き愚痴は女の長所として寧ろこれを愛するのである、然るに「泣いたとて蘇生するものでも無いのみならず、泣けば身體の不衛生又棺の中に入れるよりも之を他の小兒に與ふれば國家の經濟だ」と云ふに至つては理窟は理窟だけれど余は何と無く之を惡む、斯樣な女は縱し不品行なる點は無くとも凡ての擧動から身體の骨骼筋肉までが、男子的で、姙娠し難いものであるこれは餘り他醫の言はぬことなれど、余が多數の經驗上この一節を加へたのである。一つこれに適切な例を擧れば、余の知れる女醫某は二十五歳にして或官吏に嫁し、夫婦共稼で、互の間柄も親密で有つたけれど、兎に角其の妻君は身も心も男子的で、其の大道濶歩する樣は何うしても女性とは思はれぬ、それで生殖器はすべて異常無く、體質も强



壯で今は六十七歲、夫は五六年以前に亡くなり、子は一人も無い、されど之を憂ふるでも無く、洒々として頤に七八本生えてる長い髯を大切に捻つてゐる。

▲丈高女――某醫曰く『我國婦人の身長は、大抵四尺九寸位なもので、是より高くても五尺を超えぬ、若し夫れ五尺一寸以上に至つては甚だ稀で、而も斯る稀有の女は大抵子を設けぬと、或はさうかも知れぬけれど余の見たる丈高女は唯一人を除く外皆相當に子を有つてゐて、某婦人の如きは計つても見ぬけれど五尺二三寸も有らう、それで十四人の子福者、其一人の子不有も脂肪過多症の男的婦、而して夫は體質薄弱なれば、不姙の原因は丈高に無いやうだ、然れば某醫の說は何うも信ぜられぬ、併し余の見たのは偶然にも例外のみとした所で、天性丈の高い者を豈夫に短縮せしむる譯にも行かぬから、寧ろ之を信せぬ方が可からう。

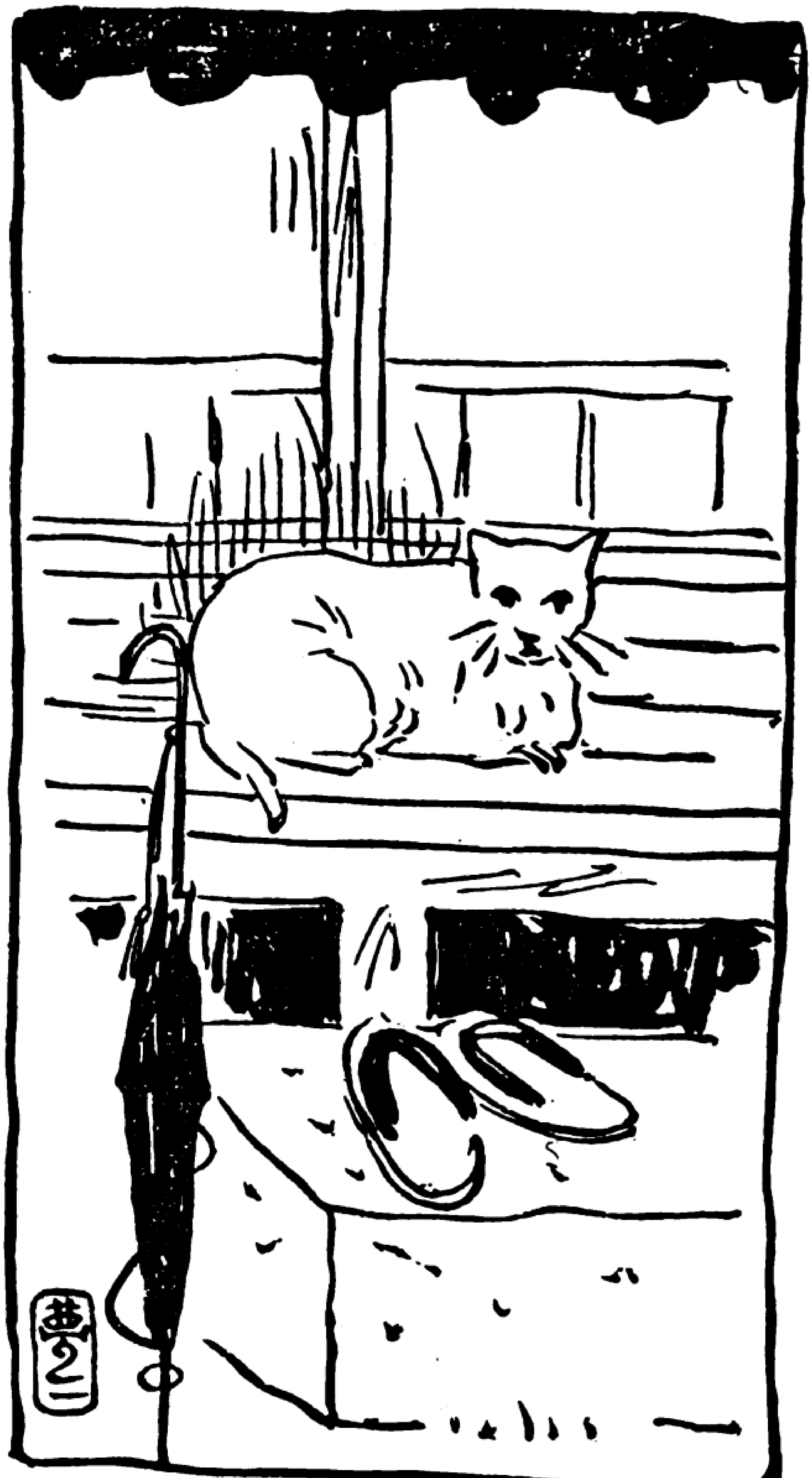
▲冴えぬ女――世には歇私的里病又は精神病とまで行かざるも、何と無く心の冴えぬ人がある、例へば普通の婦人なら悲しむ可き時は悲しんでも、さうで無い時は心の合うた友垣と盡きぬ話をしたり、或は遊山見物などを喜ぶものなるに、己れは一間に寢てゐた方が結句氣樂だといふやうな風である、即ち餘り語らず餘り笑はぬ的である、(但しムッツリとして居てそれで仲々心の愉快な人も有るから、これを間違ふてはならぬ)、斯る女の中には更に生殖慾無くして一生涯を過し、爲に子を設けぬ人があるとキッシュ氏及び其他の先輩が說いてゐらる、他病の爲に斯うなるのは其他病さへ治せば宜いが、然うで無いのは適當の方法を案出して精神を樂しましめねばらぬ。

右の外不姙の原因は數多有るけれど、女の雜誌に憚る點多ければこれ丈に畧して一般の救正法に移りませう。

▲不姙一般の療法――前號よりかけて說き來つた箇條書を一々讀まれたら、其の中に自ら療法も籠つてゐるけれど、今改めて一般に通有なる救正法を述べて此の章を結びませう。

先づ皮膚を淸潔にし、隨つて衣服も屢々洗濯し、家

の内外も能く掃除し、光線の射入、空氣の流通を宜しからしめ、晨起就寢及び食事の時間を違はせず、能く働いて能く遊び、能く動いて能く休み、肉類も食ふ可し、野菜類も味ふ可し、時には山にも登る可し、時には川にも棹さす可し、心配は身の毒、悲哀は筋骨を削るの刃、夫婦は互に禮讓有つて情濃かに、一方は豪邁にして優しく、一方は婉曲にして他に犯されず、松に蔦の纏ふが如く、千歲の友となつて、一合の米も共に食ふ可し、一尺の布も共に着る可し、仮ひ貧苦でも樂其の中に有るものである。某華族の夫人が大鼓敲きながら賣て歩く飴屋夫婦を眺めて、「嗚呼妾も飴屋になりたいなア」と言はれたさうだが、さも有りなん／＼、



若し夫れ病氣が有つたら、何を捨てゝも之を治すことを先にし、決して無理してはならぬ、箇樣にしてゐても子無き時は夫婦共に醫士の診察を受けて其の異常なる點を敎へて貰ひ、否之れが救正法を實行せねばならぬ。生殖器を診らるゝことを避けて、子を生む方法を聽くは恰かも醫者を賣卜者と見做すやうなものであ

る、又世には「子を產む保證藥」など〻廣告し、其文を讀んで見ると「如何なる人も之を服めば直ちに妊娠すること疑ひ無し」など麗々しく書いてある、されど斯る道理の有る可き筈は必ず無いから必ず信じてはなりませぬ。又子無き夫婦が温泉場に行き、始めて目的を遂したとの話も、往々耳にするが、これは下部を温むるよりして幾分の充血を導く等の爲に、多少の効力有るけれども、之を以て萬全の策なりと考へてはなりませぬ。この外申し上たき事山々有れど、そは御目もじの節に讓り、まづは筆止めり〳〵、あら〳〵かしこ。

來月は男女兒誕生に設けらる〻といふ說等に就て有益なる話を致す積りです。

季節衞生

イヨ〳〵天氣濛々たる梅雨も既に去り「今日の暑さを忘る〻はこれ」と團扇を手にするやうになりました、斯うなると、汗は出る着物は汚れる食物は腐り易く、病魔は喜んで來るといふ調子、されば大いに衞生を講じて無病息災家內安全

まんまるとうちはの力あふぐかな

何卒目出度御暮し下さい。それには、皮膚毛髮は屢々洗ひ清め、汗垢の溜らぬやうにするは言ふまでも無く、衣服の洗濯も怠つてはなりませぬ。衣服の色は可成淡きが善い、殊に白は太陽の熱を撥ね反して、甚た涼しい、絽の羽織も神官然たることを關はぬとすれば、染めずに、唯紋だけを黑にしておけば可いけれど、己れ一人さうする譯にも行かぬ。衣服を洗濯するには、單に水で洗つても容易に垢を除けるものでは無い、洗はぬよりは況しである位なものだ、通常木灰汁で洗ふけれど、亞爾加里性であるから、毛織類の地質を變じて宜しく無い、今イエーゲル氏の洗濯法を紹介せんに、これは硇砂或は硼砂を以て、地質の脆く變るを防ぎ、然る後石鹼で汚垢を洗ひ淨むるのである。糊は通常洗ひ上げたる後附けるが、これは何の爲かと言ふに柔かな質の物だと、肌に接いて汗ビッシ

ヨリ、甚だ氣持が惡いから、糊をつけて着物と肌との間隙を生ずる目的で有る、されど其の短所を言へば氣孔を塞いで、衣服の通氣性を失ひ頗る衞生上の害あるものなれば、若し附けるなら甚だ僅かに附けるが可い、況んや飯が腐つた勿體ないとて之を糊にして附けるに至つては、其の害や言はずとも推し測らるゝでせう。

▲蚊帳――の中へ這入つても宵の中は暑いから、小供などは裸體になつてるけれど、何時の間にか、其儘眠るのみならず、縱ひ夜具を着てゐても、眠れば無意の運動で跳ね飛ばして了ふ、然ればフランネル又は紀州ネルのシヤツ及び腹巻をして寢るが上分別である、胸腹は睡眠中でも空氣を呼吸し食物を消化せんために血液を茲に集むる必要あれば能々此部を冷してはならぬ、夏の感冐は寢冷より起ることは誰でも知つて居らるゝでせう。



▲生水――を飲んではなりませぬ、さりとて冷水又は氷を决して飲む勿れとは六かしい注文である、故に朝に熱湯を沸し、之を大きな貧乏徳利に詰め、護謨のキロクを以て口を塞ぎ、急に井の底に漬けておけば午後になつて、之を飲むと仲々冷たいもので、而も何等の害は無い、若し夫れ稀鹽酸を二三滴落し白砂糖を混ぜて服むに至つては

美味清涼且つ止渇の効を奏し、甘露々々。

飯は飯櫃に布を敷ける物に盛り、飯蓋をなし、北窓の風の當る處に吊しておくが宜い、これは冷却と乾燥とを兼ねたる法で、大學病院は之を實行してゐる、これに少しの酢を打つておけば尚長い時間腐くならぬ。

▲午睡――は午飯を終るや否や、一時間の範圍内に於て、例のシャツ腹卷をして行るは、勞働者及び小兒には必要だが普通の大人には餘り行らずもがな。

脂肪を多く含める食物は此月から澤山用ゐぬが宜、左程食いたく無いやうになるのが天の命令と心得可し。

▲海水浴――は此月より始めるが宜からう、但し此月は一日一回、一回の時間は三十分間の範圍に於てし、來月より次第に回數を御增しなさい。

日が暮れて冷しいからとて椽側に夜深は眞平だ、八時頃には蚊帳生活と打變り、四時になるかならぬ中に起きて出ると既に新聞配達はチリン／＼直ちに取つて讀むも亦樂しみではありませぬか。

▲蚊――は近邊に水溜と樹木とさへ無ければ居る可き筈で無いから、可成不潔な水の無いやうにし、又樹木とても餘りいぶせく植ゑるは宜しくない、けれど田舍では田圃が有るから言ふ可くして行はれぬ次第、されば尚更早く蚊帳の中に入つて血を吸はれぬやう肝要々々。

食あたり、腹くだし、脚氣、虎列剌などの夏に多く有る病も、夜深、惡食、生水、蚊や蠅が原因となること多ければ、注意々々。

▲蠅――は色々の毒を附け來つて之を我等が食物の上に持ち運ぶ、恐い／＼。

四六二十四時間悉く華氏八十四度の空氣温なら、人間に着物は不必要かも知らぬけれど、其の樣な國は地球上にないから、如何に暑くても裸體美人は御免々々、天の罰は國の法律より重い／＼。

能く熟したる新鮮な果物ならば之を食ふ方が寧ろ夏

の衛生なれども、熟せぬ物や或は摘み來つてから、日を經たのを食ふと、即て胃加答兒の種になつてガーゴー。

寢際に冷飮は何う有つても下可ませぬ、汗になつて流れぬから、それで腸加答兒の誘因になり、明日になると、腹はゴロ〱鳴つて、ザーと夕立ならぬ下痢、イアハヤ。

夏になつたら、他所殊に料理屋の物は飮食せぬが安心である、能く煮沸せぬ黴菌の有るやうな物を與れぬとも限られず、疑へは何處の馬骨の喰ひ殘しかも知れぬ穢なし〱。



▲衛生顧問▼

（問）佐藤醫學士の著にかゝる生殖器篇といふ本を見ましから、西瓜を食つて子宮病が治つた老妓の實驗談を掲げてありましたが、果して本當でせうか、御教示を乞ふ。（神田の至急女）

（答）私も讀んで見ましたが、其說の眞僞に就ては判斷出來ませぬ、又子宮病と言つても其の範圍が廣いから、果して効驗あるとしても如何なる子宮病に宜しきか、これも疑はし、併し其の老妓は職業しつゝ有つたのであ

るから、慢性の子宮内膜炎でも有つたらう、兎に角西瓜は新鮮なのを用ゐれば毒な物で無いから食つて試るも可いでせう。

(問)廿歳の女便秘性ですが、健康は普通、ブタ〳〵と肥えてる所を見れば病的の肥満でせう、如何なる運動及び薬を用ゐて宜きしか伺ひ度候。(京都の一擬生)

(答)醫師に就いて便通を整うて貰ひ、餘り液體の物を取らぬやうにし、運動として騎馬、登山、競争徒手體操、啞鈴、棍棒、ブランコ等が宜いです、それから當分肉類鷄卵の如き動物性の食物を止め蔬食して御覧なさい。薬品は用ゐるに及びますまい。

(問)妾の良人昨秋従軍中満洲にて慢性膓加答兒を患へ完全に治せずして歸り、其後も治りませぬ、其治療法を伺ひ度候。(大阪尾田靜女)

(答)毎日二回宛半身浴を行ひ、固形の食物、酒、麥酒胡椒、唐辛の類、又び脂脂類を禁じ、新鮮の空氣を呼吸し、食事及び晨起就寢の時間を正しくし、薬品としては左の如き大黄のビスミットを用ゐて御覧なさい。

ビスミット　二、〇（これは一回の量なり）
右一日四回用ふ可し。

(問)慢性膀胱加答兒にて困つてゐます、醫師は温泉を勸めますが、何處へ行つたら宜いでせうか、其の治療法と共に御示教を乞ふ。(下野の川瀬夏子)

(答)相模の湯本、伊豫の道後、上野の伊香保などが適當でせう、治療法としては其性質に依ても違ひますが、刺戟性の食物は大毒です、薬としては

律弗林　〇、三　　硼酸　〇、九　　白糖適宜
右分三包一日三回一回一包

等を用ゐますが診察の上ならでは確答し難し。

(問)鮫肌の療法を伺ひ上げ升。(愛知ＴＨ女)

(答)鮫肌と言つても其の原因に依て種々あるが、概して榮養の惡い皮肪の少い人に有るものであるから、動物性の食物を取り、能く運動して皮膚を清潔にし、不良の石鹸を用ふ可からず。

(問)(ふすま)は(ぬか)の替りに使用して皮膚を害するものに候や。(日本橋の横山女)

(答)麩も糠も其効能は同じことで、何れも垢を落すには甚だ宜しいもので、殊に麩糠等分に混せて用ふれば鮫膚などにも幾分の効あります。

(問)品行方正にて必ず男を知らざる女、月經不順の後腹部は妊娠四ヶ月位に膨れました、如何なる道理でありますか、何卒七月の誌上に御答を乞ふ。（十七才女）

(答)鼓腸、腸加答兒、腹膜炎腹水等皆腹部を大きくし、且つ月經不順になるを免れず、されば貴女のは何であるか診察の上ならでは答へ難し。



(問)明治二十二年生の従兄妹同志が結婚するも有害ならざるか御尋答を乞ふ。（山北のSM女）

(答)先月今月の「女代診」を熟讀せられたし。

(問)五月の「女代診」に月經帯を使用せよとの事で早速求めましたが使用後は洗つて仕舞おけば宜しいでせうか御答を乞ふ。（悦女）

(答)百倍の石炭酸水に半日許りつけおき然る後又能洗ひ乾かして再度の用を待つ可し。

(問)月經帯は當地に有りませぬが何れにて買求め然る可くや、是非御答を乞ふ。（日向のKS女）

(答)東京或は大阪等の藥店へ注文せらるべし、本郷森川町の順天堂藥舗でも賣て

ゐます、往復端書にて御問合の上送金御求めあるべし。

(問)足及び顔に汗の澤山出るのを止める法御教授下されれ度願上候。(仙南困難女 阿波玉汗女)

(答)鞣酸二瓦をアルコール一合に溶し、之を一日二三回筆にて塗る可し、其他良き石鹸で洗ふことも必要なり

(問)腋臭に鞣酸を塗けよと聴きまして試みましたが其の粉末が直に落ちて了ひます、何うしたら宜いでせうか。(周防の人に憚る女)

(答)前答の如くし玉へ。

(問)乳汁不足故牛乳を用ゐてゐますが、其の水を割る分量及び夏向腐敗を防ぐ方法御教示を乞ふ。(近江の辻[illegible]子)

(答)

分娩後嬰兒の日數	稀釋の水量	牛乳の量	分娩後嬰兒の日數	一日の回數	一回の量
一乃至二週	三分の二	三分の一	一月	十回	三勺半強
一乃至二月	二分の一	二分の一	二月	七回	五勺
二乃至四月	三分の一	三分の二	三月	七回	六勺半強
五乃至六月以上	稀釋せず	純牛乳	四月	七回	八勺余

右の表に依つて御用ひあれ牛乳を陶器の深い鍋に入れて沸騰せしめてから尚十分間以上煮て、其の間かき混せてをり、之を冷水に漬しおく可し、其冷水も度々取換ること肝要なり、牛乳を入るゝ器械及び其の附屬品は屢々重曹水にて洗ひ、然る後再び熱湯にて清むべし、されど可成は健康なる牛の新しい乳を其儘飲むには如かず。

(問)當年十六歳の妹、四五年前より秋になれば「雁がさ」と申す「でき物」の爲に悩まされ困難罷在候何卒これを防ぐ法を七月の誌上にて御慈愛の露に濕ひ度候。(香川姉女)

(答)常に皮膚を清潔にし、一日二回冷水にて夏冬ともに摩擦し、秋にならぬ少し前から毎日一回サリシルサン五瓦をアルコール一合に溶かし、股腹等其の多く出る場所に塗けらるべし但し多少しみると心得られたい

(問)妾事十七歳にて身體健全なるにも拘はらず、遠視眼にて困入候、これが治療法の御教示を乞ふ。(新潟市の遠視女)

(答)診察せざれば答難し、新潟病院にて診療を受けられよ。

(問)井又は川に落ちて失神したる節醫師の來るまで如何なる手當をして居ましたら宜しいでせうか。(鎌倉の伺度女)

(答)先づ溺者を赤裸にし、伏向に臥さしめ、衣服を卷いて、胃部と地上との間に入れて、口を低くし助手をして溺者の額を少し持ち上げて、地上に接かぬやうに防がしめおき、術者は兩手を以て溺者の胸部を壓すること、四五回七繰り返すと、飮んでゐた水が、口や鼻から流れて出る、出て了つたら、却つて仰向にし、枕を背の下に入れ、兩手は頭上に交叉せしめ、術者は溺者



に跨がり、其の腰部を己れの股間に夾み、膝立して、兩手を溺者の肋骨に當つ、即ち拇指を劍尖の部に、其の他の四指を肋間に當て壓したり緩めたりすると、遂に呼吸をするやうになる。

(問)妾事身體には別に異狀なきも毎年初夏の頃より眼球凹み視力も多少衰ふる如き心地す、其原因を伺ひ上候。

(二十二歳の心配女)

(答)夏は四季の中で身體最も弱る時です、故に平生に抵抗力を作つて無い人は所謂「夏痩寒太」になり、隨つて眼球も凹み視力も衰ふるのである、然れば秋冬春に於てドン

ドン強壯法を計るに如かず「盜人見て繩を綯ふ」では其の時の用を爲さず候。

(問)私は二三年前より睡眠中「齒嚙」をしてなりませぬ何卒確實なる療法を問ふ。(山里の草刈女)

(答)親達等に頼んで若し齒嚙をしたら、直ちに左の藥を顳顬及び兩の頰に塗つて貰ふこと毎夜〳〵續けるのです遂に治ります。

　コロヽホルム

(問)先生兩手を合せて御願申します、今年廿歲の女、幼い時から鼻の尖が赤くて困ります、之を白くする法を是非〳〵敎へ下され度幾重にも〳〵御願ひ申候。

(越中富山のすみれ女)

(答)鼻尖の赤くなるは酒や酢を用ゐる人腸の病い人、生殖器に障りある人、常に寒風に吹かるゝ人、又遺傳も有りますから、其原因を調べて療治せぬと効がありませぬ、貴女のは何れに思ひ當りますか、若し何の原因も身に覺えなくば、左の藥を半年續けて塗け、それで治らずば鼻の尖より外科醫に就きて血を出して貰ふのです、是非〳〵さうして下さい。

イヒチオール	二、〇
依的兒	一〇、〇
アルコール	三〇、〇

右一日五六回塗布すべし、而して其藥は暗い凉し椽の下のやうな處におかないと精が拔けて了ひます。

(問)私事十七歲にして身體何れにも故障無く極めて壯健でありますが、唯月經てふものを知りませぬが、之は打捨おきて差支有りませぬか、御敎を乞ふ。(常陸の心配女)

(答)果して何れにも故障なくば差支無きこと、先々月からの「女代診」にも說いておきました。

(問)小生の父母共に肺病にて此の世を去り、小生も結核質の體質にて徵兵檢査にも落第しました、働かずとも一家を支へるだけの財產は辛うじて有ります、然れば如何なる職業が小生に適し申すか、先生の御高敎を乞ふ。(北海道なる男の女學世界愛讀生)

(答)これは衞生顧問欄よりも寧ろ人事判斷欄に御問に

なつた方が宜いでせう、併し折角の御尋ゆゑ、一寸答へて見ますれば、航海業、植木屋、庭作、漁者などが善いでせう、さうして傍ら、音樂或は詩でも嗜んで風流の思想があつたら、嘸や愉快でせう、但し音樂或は詩を職業にせんと思へば仲々の苦心である。

(問)御情深き先生よ、薄給者の妻何卒避妊法を御敎へ下され度偏に懇願し奉り候。(これにて五度何女)

(答)何たる不良見ぞや余は斯の如き人に一片の情なきなり。

(問)俗に云ふ「たこ」即ち堅い瘤の樣なものが、出來て邪魔になりますが、これを除く方法を問ふ。(越前のたこ女)

(答)ザリチルサン二瓦、コロヂユーム十五瓦の二品をよく混せて塗るべし、さすれば日々軟かになつて終には除れます。

(問)蚤の驅除法を衞生顧問外かも知らぬけれど、時節柄御敎示下さらば、老父母も嘸々喜ぶならんと存候。(麴町の親思娘)

(答)虱と同じく不潔な處にわくものなれば、床下床上には石灰を堆かく播き、疊は日光に乾かし、よく敲いて塵を取り、夜具衣服を淸潔にし、樟腦を少しづゝ香はせておき、外より家に入らんとする時、着物を能々拂へば蚤先生近づかんと欲するも豈得べけんやの道理である。

(問)痲疹を種痘の樣に前以て種る法無きものに候や。(飛驒の痘痕)

(答)有りませぬ、但し輕症の本病者あらばこれを傳染せしむるが得策です。

(問)私の男八十四歲は非常なる煙草嗜で何時も煙管を離しませぬが、定めし有害ならんと存じ、良人にさう申すと、餘年も無き人なれば、好まるゝが儘にせよと叱りますこれは、孝行に似たる不孝かと存じ候へば何卒七月の誌上に其害を詳しく御答を乞ふ、先生此位不衞生な物は有りますまいからね。(京都の二十三間女)

(答)予も亦御良人の說に贊成です、理外の理が有りますからね。

八十年來何ゾ鑁鑠。　玉顏如レ童ノ骨欲レ仙ナラント。

向テ君ニ試ニ問フ不老ノ術ヲ。笑ツテ而不レ答ヘ只吹ク煙ヲ。

では有りませぬか。

(問)老人(七十)の近小便は治りませぬか。(若狭の其の媼)

(答)然り。(近い程度にも依るけれど)

(問)ヂスペプシーとは、如何なる病に候や伺度候。

(答)Dyspepsia と綴りまして、日本では消化不良病と譯してゐます。即ち食欲欠乏して時には悪心或は嘔吐もあり、胃部は重苦しく、鈍い頭痛はする神精は鬱々として力脫け、時には腹痛もあつて何となく身體一般に倦み疲れます。(在北米KTの女)

(問)「ヤプニラミ」は到底治らぬものでありますが、有らば其の療法を問ふ。(熊本縣の嫁入前女)

(答)矯正療法あれども確實ならず、手術を施せば治ること疑なし。

(問)兎唇は遺傳するものに候や。(四國のAS女)

(答)必ずとは申されねど、往々遺傳することの有るものである。

(問)娘十五歳は舞踏病との事で、殆んど氣狂の如き狀態になつてをりますこと爰に十日間で御醫者は珍らしき病なりと、熱心に治療して居られますが、全治するものに候や何卒〱其の療法と共に御教示を受度候。(甲州の其母)

(答)果して舞蹈病ならば其の原因にも依るけれど大抵全治致します、療法としては其の原因を去るが肝要です、身體を安靜にし精神を樂しましめ、衣服を溫暖にし、電氣療法コ、ロホルムの吸入其他内服藥としては臭剝抱水コロラル或は砒石等あれども兎に角診察の上ならでは何とも答へ難し、御地の醫師と能々御相談あるべし。併しこの雜誌を見らるゝ時分は旣に治つてゐませう。

(問)美貌術或は美顏法等の事に就き詳しく述べたる確實の本有らば御教示を乞ふ。(京橋のGH女)

(答)來る七月十五日の定期增刊に滔々と述べますから今は略す、それを御覽じませ。

（七月料理）

△霜降鰹　鰹を三枚におろし、よきほどに木取りて熱湯に入れ上面の白みたる時あげて水に冷し厚目に小口切にして、時の青物に、卸し山葵を添へ生醤油にて出す、身は赤く縁は白くして美しき者なり、紅き魚は何にても奇麗に出來るものなり。

△あいなめ薄葛煮　三枚におろし中骨を去り薄醤油に葛を解きませ煮あげて卸しわさび添て出す。

△鯵のぬた膾　水洗ひして三枚におろし程よく作り鹽を少しふりかけ、木くらげ、刻みうど又は大根など取合せ酢味噌にてあへるなり。

△鮎の味噌酢づけ　三四寸位の鮎を筒切にし鹽をふりて暫らく置き洗ひて水氣を能く取り扱て白味噌を能くすりて上酢の中に入れとろりとする程にして右の鮎をつけ三四日置きて味噌の付きしまゝ生姜などつけて出すべし。

△茄子の龜甲燒　皮のまゝ二つ切にし皮目に斜に十文字の庖丁目を細かく入れ鍋に胡麻の油を引きて煎り燒にし生姜醤油かけて出すべし。

△茄子浸し　ゆでゝ水に浸け、あくを抜き板の上に並らべ水氣を押し出して取り胡麻醤油をかけるか、又は丸ながらあつ灰に入れ燒きて皮を去り引き割きて生醤油、胡麻ふりかけて用ふ。

△萵苣の芥子あへ　葉をよくゆで、よく水を切り味噌を漉して酢と味淋とを加へ芥子をませてあへるなり。

△田舍なます　まづ大根を短冊に切り鹽もみにしてよく洗ひ揚豆腐を炙り二枚に剝ぎ小口より細く刻み又煎餅麩を細かに刻み又椎茸を薄く刻み芹の莖を一寸ほどづゝに切り味噌を黒くなるまで燒き燒豆腐一つと一しよに擂盆にてよく摺り酢、醤油を少し入れて延べ前の品々をあへて出すなり。
但し輪切唐がらしを上に置く。

△洋食當座漬

△胡瓜の漬物

なる丈小さな胡瓜を撰びて十二時間乃至十五時間鷄卵を浮す事の出來る位の鹽水に浸け置き、後取り出して清潔なる布切にてふき、甕に入れ、深鍋に甕の中の胡瓜を掩ふ位の酢を入れ、酢三合毎に大匙一杯の砂糖と大匙一杯の丁子と、大匙一杯の肉桂の細かく裂きたる皮とを加へ入れ、其の煮立たる時、甕の胡瓜にかけ、丁子を上にのせ木綿を以て蓋となし冷たきところに置く可し、一週間後に食す可し又冬中保存するとも得可し。

△赤蕪菁の漬物

丸ごとの丁子少數と、砂糖を入れたる酢の中に煮たる赤蕪菁を幾許にても漬く可し、二十四時間後には用ゆる事を得可し又固ゆでの鷄卵の殼をはぎて、蕪菁と一緒に漬け置き、輪切にして用ゆる時は、サラダの飾として大によし。

△玉菜の漬物

玉菜を頭を下向にして一時間冷水の中に浸け置き、小さく裂きて瓶に入れ、深鍋の中に右玉菜を充分蓋ふ程の酢と砂糖を大匙に一杯と、全體の丁子少數を之に加へ入れて、沸騰ち居るうち玉菜にかけ丁子を上せ冷たき所に置き一週間後に食すべし。

△無花果の甘漬

五十個の無花果の皮をむきて、一個々々に丁子を挿し、深鍋に五合の酢と三斤の砂糖とを入れて、十分間沸騰たせて、上に浮く泡をすくひとり、其中に無花果を入れて軟らかになるまで煮、後甕に無花果を徐かに取り入れ、鍋に殘りたる汁を半分になるまで煮つめて、熱き内無花果にかけ淸潔なる木綿を以て蓋となし乾きたる冷たき場所に置く可し。

△食後の果物

辛いものを食べた後は甘いものが欲しくなり、濃厚いものゝ後には、あつさりしたものがよい、食後の果物は即ちこの爲である。しつこいビステキなどを食つた後には、おのづからこの果物が欲しくなる。果物は實際營養分から云ふと、とても肉類などゝ比較すべきものでない、大分は水で僅かの營養分があるに過ぎない、しかし欲しいものを適度に食べると、その物がよく、消化るばかりでなく、初め食べたものも、よく消食る、それで肉類の後で果物を食うことは大いにいゝことである。但し右は洋食の事で、和食の後に、果物を食べればならぬといふ理由はない、お汁にせよ、煮肴にせよ、多少砂糖を使ふものが多い。そして澤山に御飯を食べるから、實際果物といふものゝ必要はない。却て香物の方が増である。

▲アイスクリームの製法

氷菓子をつくるにはまづこれを凍ほらすまでは三分の氷に一分の鹽を用ひ、凍ほりて後は桶に氷を充たし、食べる時まで其まゝに置く可し。

氷菓子を凍ほらす器具のなき時は蓋のできるフリーザー即ちブリキの罐の中にアイスクリームの原料を入れて桶に入れ、氷を砕きて鹽とまぜ合せて罐を充分よく圍みて絶えず罐をまはし、又三分間乃至五分間毎に罐の上部と蓋の上とにある氷をとりのけては罐の中の氷菓子を下から上へかきまわし或は罐のまはりをよくかきまはし、全體よく凍ほりて固まるまで同じ樣になしつゞく可し、これ製法の概略なり。

△フロズン、カスタード

五合のクリーム(牛乳にてもよし)を深鍋に入れ鷄卵の黄身を五個と一合半の砂糖とをゆるくなるまで掻立て同じ鍋に入れ、此鍋を湯のにえたち居る他の鍋に入れて中の物が濃くどろ〳〵になるまでかきまはし、小匙に二杯のワニラかレモンかを入れて其鍋を外の鍋より出して冷まし、フリーザー(凍ほらす器具)に注ぎ入れて凍ほらす可し。

△凍ほらした果物

六合の苺と三合の砂糖とを鉢に入れてよくつぶし合はせ、五合の冷水を注ぎ入れ(レモンの汁を少し入れてもよし)フリーザーに入れて固くなるまで凍ほらすべし、若し苺のなき時は熟したる桃又は杏のつぶしたるを六合苺の代はりに用ゐてもよし。

△レモンとオレンヂアイス

六合の水の中に六個のレモンの汁と、同數の密柑の汁と三合の砂糖とを入れ又鷄卵の白身をよくかきたてゝ其中に入れフリーザーに移し入れて硬くなるまで凍ほらすべし。

△桃のアイスクリーム

深鍋に五合のクリームと一合半の砂糖と掻立てたる鷄卵を二個入れて火にかけ、沸騰ちさうになりたる時(沸騰す可からず)火よりおろしてフリーザーに入れて固まるまで凍ほらし、次に十二個のよく熟したる桃の軟肉をよく潰して、一合半の砂糖をまぜてアイスクリームの中に入れ全體固くなるまで凍らすべし。

△ワニラアイスクリーム

五合のクリームに一合の白砂糖と小匙に一杯半のワニラとを混ぜ合せてフリーザーに入れ固くなるまで凍ほらすべし。

△苺のアイスクリーム

此アイスクリームは桃のアイスクリームと同じ仕法にて、唯桃の代はりに熟したる苺一斤を用ゆ、苺は蔕をとり砂糖と一緒につぶす。

動物と睡眠

魚や獸はどんな風に眠るであらうかとは一寸人々の知りたい所であらうが、近刊の外國雜誌に面白くこれが説明してある、即ち。

人によると魚類は眠るものでないと思ふものもあるやうだが、矢張り夕方から眠るのである、然し目は閉ぢないのである、例へば白楊魚等は砂地の石の間を擇んで其所に入り流れの方を向いて眠るそして大抵いつでも冬には同じ場所に入つて來て春まで冬籠するのである、眞鯛、鱈などは反對に泥深い水底に眠る、又或河魚は日光の達する極く淺い所に眠るのである、鯉は底に近く鰻は岸の穴の中等に眠る河魚に比べると海の魚は餘程觀察がむづかしいが青魚、鯡のやうな移住して廻る魚は冬の間底の方について眠るさうである。

陸上の動物に就ては或る兩性類、蟾蜍は頭を立て眞直になりて眠る、ひきがへるは穴の中や岩の下に日中眠り冬になると地下に這入つて仕舞ふ、其時彼れは後足で穴を掘り前足で推して穴にもぐるのである、袋鼠は體の都合で横になつて寢る事は出來ぬ、一種の狐はうづくまつて前足の間に頭を入れて寢込む、又チンパーザー其他の猿類になると森や林に眠る時其前肢を折り、重ねて體の上に押つけ、それから生えてる毛によつて雨を防ぐのである。

オランゲーメンは脊を曲げ頸を前にさげて晝寢をし、或時は腕を伸して木の枝にかけて眠る、クロコダイルは腹を地面につけて眠り、蜥蜴は目を閉ぢ口を開いて眠る、又或獵師の言によれば鯨は夜中でも晝と同じく水を噴出するから眠るなどの事はなからうと言ふけれども鯨類は實は海面で眠り、其噴水の動作は丁度人間の呼吸と同じく自動的になるゝのである。又海豹水獺などは暴風の時にのみ遊び廻り、穩やかな日には常時眠つてゐるのである。

汽車中の觀察

藤葉女史

人世悲劇が演じられた後さて汽笛一聲徐に進行を初めた時に人々は皆ホッと溜息をついて向ひ合せ、さては横隣りの人々の顔を見くらべた。

何れも赤切符の面々、車中の定員は何人であるか詰めたわ／＼腰掛は申すも更らなり荷も足の立つ處には恰もすしを詰めた樣、而も猶足らずして殘りは車外に溢れてヒユー／＼と風に吹かれ、煙と砂にむせんで居る。實に旅は何處迄も憂いものである。

京都の見物を終へて夜の十二時自分も此群集の中の一人となつて居るのである、名に負ふ琵琶の勝景も、關ケ原の古戰場も夜の暗に包まれて惜いかな見る事が出來ない。否たとへ晝間で有つても駄目だ、何故なれば幸か不幸か自分は丁度立つて居る側の腰掛が荷物を以て充されて居るのを見て持主に頼んで漸く腰を掛けさしてもらつた、併し夫れが最後で右にも左にも身を向ける事が出來ない、まして後などを向ふとして尻を上げたならば我席は忽ち兩側の人に依つて埋められてしまふのである。

▲工夫の親切、京都のステーションの混雜に自分は幸ひにしていち早く乘る事が出來たけれ共同伴の者は人に押され大きな手荷物が邪魔をして中々這入る事が出來ない、自分は氣が氣でないので持つて居た大きな手提かばん、風呂敷包、信玄袋など丁度出口の席に居た鐵道工夫らしい人に預けてトツカは又車外に出て同伴の荷物を受け取り辛ふじて這入り得た、併し工夫から荷物を受け取る事も出來ずして、押され／＼て次第に離れて行くばかり、見れば工夫の膝の上は自分の荷物で埋められ僅に首だけが見へるのみ、さぞ重かろう、窮屈で有う見ず知らずの他人のものを、而も其人は少しも迷惑そうな氣色もなく却つて氣の毒そうに自分の席を立つて荷物を叮嚀に腰掛けの下に入れ（上はもう一杯だ）席をあけて頻に腰を掛けよと進めてくれる、

けれ共到底行く事が出來ないと見たから側に居た老人に讓つて自分は戸の外に出て行つた。

▲公德に乏しい、立ちん坊の連中は長い道中を斯くて何時迄も立ち盡さねばならないのか、自分は流石に氣の毒にも思はれたましして其當の人は定めし腹も立つだろう、中には情けなくなる人も有るだらう、窮屈ながらも腰をかけてひじを枕に今や安らかに眠つて居る人もあるに、併し立つて居る位はまだ我慢をしなければならない、戸の外に終夜風に吹かれて併も車內の者は寒いとか何とか小言を云つてあはれ〆め出されて居る者さへある、トンネルが來た時に朦々たる煙に包まれて呼吸をする事さへ出來ぬ、而して居る間に無情な雨がボツ〳〵降つて來た、あはれ今は此雨にぬれ鼠、同じ汽車賃を拂ひながら彼は夢暖かに、是は此處に、而も誰一人として自ら席を讓つてやるものは無い、電車の中で席を起つてやる人は有るけれ共、此處には更らに無い、人世は矢張り利己主義なものである。

▲寢行儀　夜は深々と更け渡つて所謂草木も眠る頃となれば流石に喧々たりし車內も靜まつて、レールをきしる車輛の音のみ、着物のよごれるのを氣にして居た人も何時の間にか板の土間にうづくまつてコクリ〳〵の居眠りは終にグッスリと寢込んでしまつた、十七八の女學生らしきが初めの內こそ殊勝氣に氣取つて居たれ終にたまりかねて隣りのきたない田舍爺の肩に依りかゝつて他愛もなく寢てしまつた、向ふの方では八字髯いかめしく生やした官吏風の人が人前も有らふにガックリ〳〵うなづく度に口から涎を垂らして居る、仰向いて口をあんぐり咽喉佛迄をがまして居る人、伏してごう〳〵たるいびきをかく人、意識の無い間の人の樣は實に見られたものではない、此有樣にはあいそが盡きて自分は一層寢られなくなつた。

▲辨當の不足、關ヶ原を過ぎて夜はしら〳〵と明けて來た、人世の希望を旭に例へたのは實に道理な事で、彼方の山の間から一條の光線がキラ〳〵と差入つた時に人々は初めて蘇つた樣。

辨當〳〵と云ふ聲が夫れから幾驛か通り越して聞え

たさてこそと顔も洗はぬ連中が窓から首を突き出して方々から聲をかける、瞬く間に辨當屋の箱は空になつて、而も悉くの人に滿足を與へる事は出來なかつた、生存競爭は玆にも行はれてグツ〳〵して居るもの、又は弱い女連中は終に朝飯はぬきにするの止を得ない有樣、之れでは支那内地の旅行もまんざらけなされない。

知つたふり、何時通つても、何處を通つても眺めて見れば畢竟眼に入るものは山か、河か、野か、海か、まづ夫れより外に見るものは無いが夫れを又物珍らしげに大抵の人よ



眺めたり賞めたり、何時乘つても必ず講釋師が居る、彼方のは何と云ふ山、此處は昔何をした處、彼の山の後に何が有るの、此處の海では黒鯛が澤山捕れるのとさも知つたかぶりに述べ立てる、正しく其土地に明るい人か、さてもよく何でも知つて居る人併し餘り悉しく説明されると終には此奴宜い加減な事を云つて居ると馬鹿にしたくなる。

▲出をくれ、汽笛の鳴る頃悠々と玆は何と云ふ處かしらと誰に云ふとも無く尋ねて吃驚わしは玆で下りるだつたと俄に騒ぎ出し、一寸待つてくんさいと棚から荷物ごとくさと

肩に引かついで、人の足につまづき、膝に依つかゝつて二足三足出かける時にあはれや汽車は動き出した、其時の其人の顔笑止と云はうか、氣の毒と云はうか、田舎人にはよくある滑稽の一ッ。

▲罪人、何時乘つたのか巡査が二人這入口に立つて居る自分は何心なく其方に眼を注ぐと、丁度其足下に跪まつて居る人がある、年の頃は二十四五か、眉は太く濃くして眼凹み何處となく人相の惡そうなと見れば其左の手はかたく腰縄にしばり付けられてある、云はずとも之れが二人の巡査に護衞されて居るのだ、如何なる罪を犯して、何處につれて行かれるのか、見れば其衣服の襟のあたりには血痕らしいものがついて居る、罪を犯す程のものは實に横着だ、傍に有つた新聞を取り上げて悠々と讀んで居る、胸中何の恐れる處も無い様である。

▲藝妓、蒲郡で藝者らしい者が五六人どや／＼と這入つて來た、其土地では之でも、もて囃されるのか白壁の様に白粉をつけて流石に派手な縞の着物を着て居たが衿は白粉と油で怪しく光つて居る、其内の二人はまだ十二三の蕾の花とでも云ふべきか、元祿摸様の派手な唐縮緬の着物と帶から頭の飾りまで同じにしてある大方雛妓であろう、巡査と罪人と藝妓、偶然とは云へ何となく趣味のある様感じられた。

▲山中の勝景、人知れず咲いて又人知れず散る深山の奥の山櫻、谷間の水にやさしき影うつす岩つゝじ、我庭に植ゑても見たき姿いみじき枝振りの松の岩影にさし出でたる、やれ三景の、八景のと人に持てはやされる處は却つて俗に近くして、斯る深山に人に知られぬ景色がいくらもある。

▲萬歳の聲、不意に起る愛らしい萬歳の聲、車外を見れば斯る深山にも住む人のあるか五ッ六ッの男の子二三人紙片の日の丸の旗高くさし上げて聲張り上げて頻に萬歳／＼と叫んで居る、山中の勝景と、此罪なき幼子とは實によき配合である、畫にしても、詩にしても、あゝかけるならば、歌はれるならば、とは自分一人の恨みでは無かつたで有う。

▲車內の猥雜、辨當の喰ひがら、蜜柑の皮、煙草の吹いがら、茶碗や、土瓶、紙屑藁屑、追々東京間近かになつて、次第に人が減つて空地の出來るに從つて、さて目立つて來た、車內は一見芥溜の樣、三百哩以上をも僅か二十時間足らずに乘せて來てもらつた此車室の恩も忘れて後は野となれ山となれ、驛夫の手數ももののかは我物で無いからと例の無責任の公德心に乏しい人の心があり／＼と發表されて居る。

▲新橋の別れ、一日を車內に過して午後の六時過ぎに汽車は無事に新橋に着いた、時間の貴重な事を餘り氣にかけぬ日本人が斯る時ばかり、さも大切そうに一分間も惜しいと云ふ顏付きで荷物引かゝへて我先きにと改札口に潮の如くに押し寄せ細い處を辛ふじて通りぬける、荷物を受け取るもの、人力車を雇ふもの、電車に乘るもの、歩くもの、さして行く手は何處か皆それ／＼に蜘蛛の子を散らすが如くに都の十五區に廣がつて行く。

汽車旅行にて心得べき件々

拜啓過日は汽車中にて始めて拜顏仕り掏摸に就ての御高說なか／＼面白く拜聽仕り候　御高說中掏摸に物を盜取るゝものは間拔けとか馬鹿とか申され候得共　私共仲間が一度心掛けたる以上如何なる人にても必ず目的を達せずには置かず候金は欲くは無之候へ共、あまり御氣焔御盛んなりしにより、一寸戯れたる次第に御座候、御品物は御返却申上候間御改の上御受取り被下度候匆々。

東海の掏摸より

松宮辯護士殿

さて松宮辯護士とは東京の辯護士松宮倘二氏のことにて先頃氏がその業務にて靜岡へ出張の汽車中四五の少壯辯護士を相手に雜談の序で偶々掏摸の噂に移りたるを松宮氏は哄然一笑そも／＼懷中物や携帯品を掏取さるると云ふことは間拔も亦甚し、普通能力の完備し居ら

ざる徒に限りて、斯る馬鹿に遭ふなり云々とて頗る雄辯を振ひ居たる折柄汽車は早や靜岡驛に着したれば、氏は下車せんとして不圖視れば我が手元に置きたりし重要書類と現金二千五百圓入りの手鞄が何時の間にやら消え失せ居たるに、我もその掏摸に襲はれしかと今までの氣焰何處へやら、いま更ら掏摸論の因果覿面なるに驚き悄然として其旨同地の警察署へ屆出で、その儘歸京したりしが、その後程なく右の書面に添へて、書類並に現金をそのまゝ小包郵便にて送り越したるなりき、これは近頃珍らしき愛嬌ある談なり、以て如何に掏兒がその技の巧妙なるかを知るべく、されば汽車の旅行には、今日周到なる警察の保護も何等頼むに足らざれば、唯各自めい／＼衛を嚴にするより外はなかるべし、今や夏季に入つて恰も旅行の好時節なれば茲に注意の二三を述べて旅中の心得に供するも強ち徒事にはあらじ。

さて汽車働きの掏兒は他の祭禮、緣日又は平場を働くものと異なり殆んど專門に汽車のみを働くにありてその掏兒の種類に二つあり、一は三等室のみにて働き他は一、二等室を働く、三等室にて働く掏兒は木綿づくめの衣服を着して旅商人、若くは田舍者らしく打扮ち、又時として道者風、落語家風に裝ふもありて何人と雖もその掏兒たるを氣付くものなし、又一、二等室にて働く掏兒は一、二等室には貴顯紳士富豪等總て中等以上の乘客を容るゝを以て其身も亦身裝を飾り、先づ此節ならば代價二三十圓もすべき塵除インバチスなどを纏ひ、誰が眼にも相應の紳士と見受けらるゝやうに打扮てり、されば人相の怪しきものは油斷すべからざるは勿論なりと雖も、頓間らしきもの正直らしきもの身分ある人らしきものも亦決して油斷すべきにあらず。

▲注意の第一　は乘客の睡眠すべき時刻なり、晝眠れる人は夜眠らず、拂曉眠らざる人は黄昏眠るべく、汽車の睡眠時間は乘客各自思ひ／＼なれど、概して睡氣の催し來るは夜十時後にして最も眠きは午後一二時より三四時の間なるべく、此間は如何に寢飽きたる人と

雖も眞に眼冴へ心澄めるはなく、何時しか昏々として睡境に入るが常にして、普通の竊盜さへ一時より三時までを屈竟の働ぎ時間となし三時を過ぐれば斷念するものなりといへば掏兒の乘ずべき塲合も亦此時刻なりと用心すべし、次は午睡を催すべき時刻なり、冬季は兎も角これより夏季に向つては午後一時より三時頃までは、暑氣は烈しく身體は搖られて神倦み氣憊れ我れ知らず夢鄕に入るものなれば、此際も亦一段の留意を要すと知るべし。



▲**注意の第二** は汽車の坂路又は山路に登り行く時なり、汽車の坂路或は山路を上り行く際は其速力遲緩となるが故に掏兒は乘客の財囊、時計、又は鞄の類を引浚へ汽車より飛び降りて容易に逃げ去ることあり。

▲**注意の第三** は線路に名所古跡のある塲所なり、掏兒は乘客が佳景を眺望せる隙をねらひてその所持の金品を掏取るものなり。

▲**注意の第四** は隧道に差掛りたる時なり、汽車が長き隧道に入る際には豫め燈火を點ずれども、光輝幽暗くして車室の四隅まで照すの力なく卷莨の火の隱見明滅してさながら叢間の螢火に異らず

室內朦朧として咫尺を辨じ能はざれば掏兒の鞄を覘ふには最も屈竟の機會なりとす。

▲注意の第五　は見ず知らずの乘客と飮食物の贈答をなすことなり、掏兒の中には魔醉劑を服ませ其前後不覺に睡倒せるすきを見すましその所持せる金品を掠めて跡を晦らますことあり、相手が下戶ならば菓子菓物、上戶ならば葡萄酒の類、喫烟家ならば烟草など供して、自分にも或は喰ひ或は飮みつゝ相手に侑むるものなるが、其自分の用ゐる品は無論普通の品なれど相手に侑むるものゝみは魔睡劑の入り居るなり、西洋などにては小刀の片側に魔醉劑を塗付け置き相手の目の前でカステーラなどを切り自分は魔醉劑の着かざる方の片を食し、相手の人に薬の付きたる方の片を食せることありと、或人は先年汽車中の他の客よりカルヽス煎餅を貰ひたれど迂濶に之を口にせず先方の樣子を見てありしに、自分は焦げざる煎餅のみを擇りて食せしより益々怪しと思ひ、如何に侑めらるゝも體よく辭して食せず携へ歸りて後畜猫に與へたるに猫は白き泡を吹きて悶へ苦みしにぞ、さては魔睡劑を使用する掏兒なりしなれとて早速其筋へ訴へ出でたりと云ふ。

▲注意の第六　は見ず知らずの相客より馴々しく話掛けらるゝことなりとす、縱令先方に婦人子供の連れありとて決して心を許すべからず、掏兒は單獨にて乘り込み居るものにあらず必ず二人三人の同類を同行せることゆゑ、妻や子を連れて乘車せるもあり、此等は皆相手を晦らます手段にして、掏兒が手足まとゐの妻子を連れ居るなどは、誰も思ひ到らざる所なると、且つ他の妻子を携へ居る乘客に談話を交ゆる便宜あるに由ればなり、馴々しく談掛け相手を油斷させて他の同類に働かせる機會を造るにあるなり。

▲注意の第七　は「切符」なり、汽車の掏兒は金品の外に乘客の切符を掏取ることあり、もと掏兒は遠距離の切符を求め居るものにあらず、されば或る一定の時間内に乘すべき機會なく一働ぎせんとの目論見が外れて、更にその先きまで跟け行かざるを得ざる場合に、切符を買ひ換える餘裕もなく、又斯る面倒な費用の掛ること

は勿論その柄としてなすべき筈なければ、相客の切符で間に合すとなり、されば切符は大切に仕舞おくは勿論、切符の番號をも忘れざるやう記憶し措くべし。

▲以上の件々　乘客が注意して乘ずべき機會なき時は掏兒はぺん／＼機會の到るを待つものにあらず、自ら進で機會を作るとあり例へば先づ二三の同類と謀し合せてその內落語家のやうな口輕き奴が、東海道線路ならばその近江路に掛りたる頃、「ソレ向ふに見える山が金龜山と云ふので、アノ天主臺が彥根の城です、彥根は櫻田御門で殺された伊井掃部さんの舊領地なんで、アノ下にあるのが伊井家の別邸で樂々園と云ふ景色の好い所です、ソラ此邊は一面に松原でせう、是れは朝鮮人街道と云つて朝鮮の使節が來たときには此松原の中をグルリ／＼と廻り廻つて通らしたものです、何故かと、ソレは日本は大層廣い琵琶湖の周圍ばかりでも幾日掛つたと思はせる計略なんださうです、一寸面白い考へですな、コッチの窓から御覽なさい、ソラ富士山のやうな山があ


花の兒

るでせう、アレが近江富士と云ふので田原藤太秀郷が大百足を退治した三上山と云ふのは此上です、オヤ早や草津に來た、オ、姥が餅を賣りに來た、ドウです一つお買なすつては、姥が餅と云ふは草津の名物なんで能く名物には甘い物なしと云ひますが此姥が餅は一寸喰へるです、モウ瀬田に來ましたよ、ソラ彼の橋が瀬田の唐橋でアノ先が石山です、マア此方を御覽なさい琵琶湖はドウも廣いもんですな、ドウしたつて海としか思はれんぢやありませんか、ナニ竹生島ですか、竹生島は此處からは見えません、などゝ途すがら喋々と湖上の景色を面白可笑く說き立て、他の乘客が覺えず知らず談に釣込れて、アレが彦根か、アレが三上山かと、我を忘れて眺め入る隙を窃ひ他の仲間が財布と云はず時計と云はず手當り次第掏取て逃げ去るとあり、松宮辯護士のやられたるは談に身が入りて手元は空蟬のもぬけの殼となり居たれば、掏兒より見れば兒戲に等しき働ぎにて、その戯れにと云ひしは理なり、又汽車が隧道に差掛らんとするとき他の乘客に向ひ「皆さん是れから隧道に這入るのですが、此隧道は長いから懷中物の御用心をなさいよ、現に私は此間此處で時計を掏られたことがあります、迂濶して居ると劍呑ですぞ」などゝ注意せるにぞ乘客はその厚意を謝して深く用心せしより幸ひ掏摸の難に掛りたるものなく孰れもその無事なりしを喜び合へりて、ホッと安心して警戒を釋く頃を見計ひマンマと金品を掏取るなり、又彼の

▲妻子を携へたる掏兒に至つては、先づその妻をして相手の子が女兒ならば、「マアお可愛らしいお孃さんだこと、貴孃おいくつで入らしやります、オヤ左樣で大層お怜悧で御座いますことネー」と、子供から褒て掛り、「貴孃詰らないものですが一つお上がんなさいまし」などゝ菓子などを與へて先づ娘の兩親を喜ばせ、先方が厚く禮を述ぶる機會に、「貴婦方は何方へお出になりますか、オヤ左樣で入らしやりますか、妾共もドコソコまで參りますので」などゝ旨く調子を合せて何臭れとなく話しかけ、暫時の間に早や十年も馴染んだかの如くに親しくし、其間に男は亦相客の亭主を捕へ

こ言葉を交はし、双方餘念なく話しつゝある間に、相手の所持品を成る丈け浚ひ易きやうに仕向け、前刻より機會來よかしと待ち居る掏兒の一人は得たりかしこしとソッとそれを浚ひて逃去るなり、されば油斷もすきもあつたものに非ず、如何に情けあり氣に見ゆればとて決して『旅は路連れ』などゝ油斷すべからず、『人を見れば盗兒と思へ』とは、汽車旅行四六時中忘れてはならぬ誡と知るべし。

吾脊子とかさね重ぬる旅衣
すゑはいづこの里にぬぐらむ

西崎くみ子



盆栽の聞書（遣水の心得）

夏季は物事總べて涼しげなるを尚び朝夕の眼に快く清かれとの心構へより盆栽を弄ぶと益々流行し、今や盆栽は家庭娯樂の一として必要品に加へらるゝ盛況となれり

さて、水を遣るには樹木の枝葉の上より灑ぎかくるは斯道にて絶對的に忌むものとなり、石菖等の葉尖の黒く傷くは全く葉頭から水をそゝぎ掛けたるに依るものなれば、遣水の際は如露器にて盆の裏面へ徐々と灑ぎかくるをよしとす、或は靜に盆栽を水に浸すもよし、水

は雨水に限るものなれば豫め雨降の時器に溜め置くべし、即ち雨水は空中の安謨尼亞を十分吸收せるを以て肥料を含み居りて盆栽に採つては天與の好下物なりと知るべし、



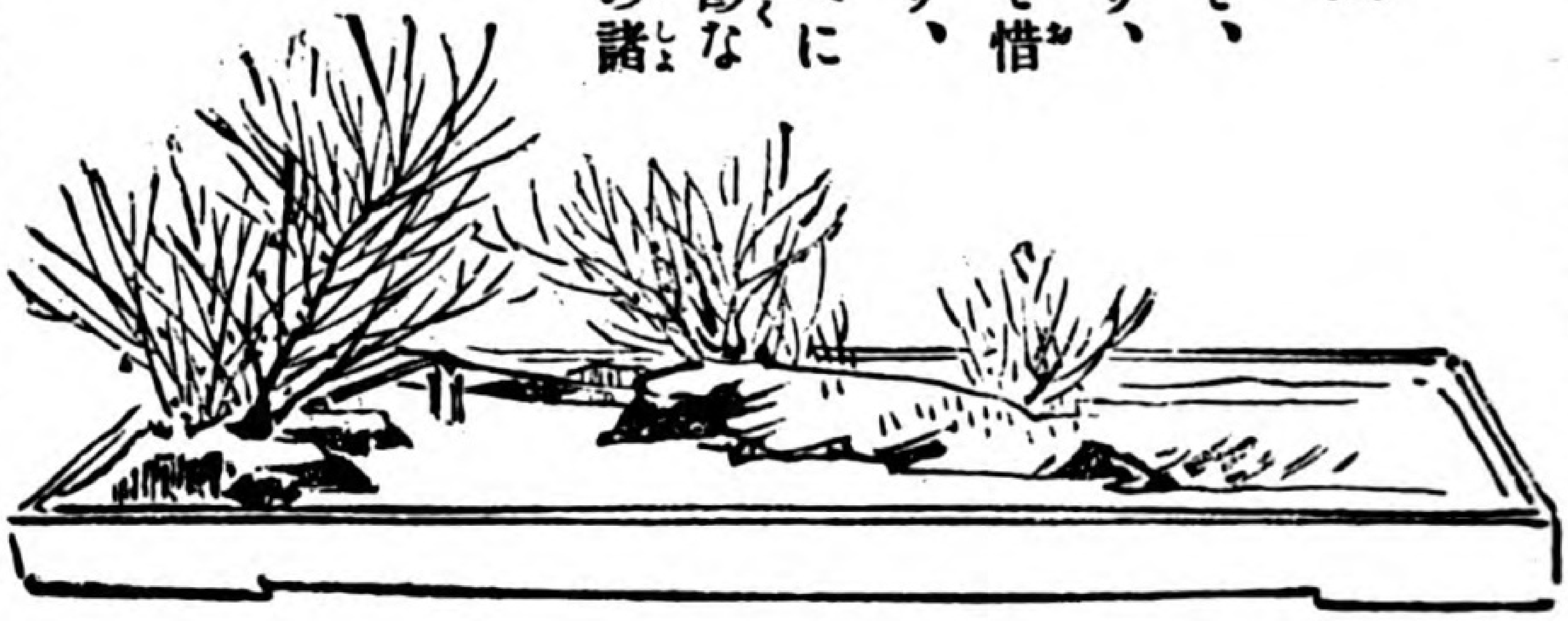
外國に在ても我國の盆栽を賞するもの年々多きを加へドクトルエー、ブリック氏は、近頃漢堡に於て日本の盆栽は世界無比の美術品なれば歐洲にも是非此種の美術を奬勵する方針を取りたきものなりと演說したるが、又佛國里昂の庭園家中には盆栽研究の爲め日本へ人を派遣すべき場合には、一切の費用を引受けんと申込みたるものもありと、さて目下橫濱盆栽株式會社の手にて外國へ輸出せらるゝもの計りにても一ケ年四百萬圓に上る由なるが外人の盆栽嗜好は未だ多く草花の範圍を出でず、その重なるものは百合にして、就中鐵砲百合は第一に賞翫され、產地は上州本莊、上總木更津、銚子、橫濱近在等にて、之に次ぎて評判よきは牡丹、藤、菖蒲等にて大森近在の菖蒲園などは一ケ年の菖蒲の輸出高七八萬乃至十萬株に上り、其他牡丹二萬乃至三萬藤一萬乃至一萬五六千株に達する有樣にて過日我國へ來遊せし米國富豪シツフ氏の如きも貳千圓餘の各種の盆栽を買入れて歸國したりと云ふ、而してその種類より云へば外人は總じて色の淡白なるものよりも極彩色の濃く派出なるを好む風あり、さて又同じ花の中にても



八重咲の如き、至つてあくどきものを賞翫する傾ありとのことなり。

盆石の聞書

斯く盆栽の盛なるに連れて、更に進みて盆石の慰みとなり、一拳の石に數十百金を投じて惜しまざる者さへ出で來たれり、ものその好む處に集るの譬へに漏れず都下に集まれる名石尠なからず、就中西京鴨川上流の諸谷より出づるものを本場とし、豊後臼杵の産、西京鞍馬の産等これに次で珍藏せらるゝよし、されど碌々たる石は素より數ふるに勝へずその奇石の名を得たるは甚多からず、曾て賴山陽の愛翫したる柴舟となん稱



ふるもの、今は傳へて大阪市の某家に秘せるよしなるが、今日東京に集まれる珍石の二三は左の如し。

▲荒磯　高二寸五分、横八寸、巾五寸
質は鴨川産にして眞黒、形は正面に磯邊の山を見せ前に數個の岩石の散在せるなど、如何にも荒磯を望むが如し、盆中の水、風に觸れて動搖するとき小池ながらも、猶ほ大濤の澎湃として去來するの感ありと。

▲深山の瀑布　高一尺五寸、横一尺二寸、巾七寸
質は唐石、形は自ら深山の狀をなし頂に日虧あり以て水を湛へ　又數條の溪谷あり其大なる溪間より大瀑布を掛く、山上の蓄水は是れ湖水、山麓の深淵は是れ溪谷、湖水と溜との間に飛瀑あり、銀河倒に懸りて一潭為に白を沸す、漸く淺碧の色となつて旋瀨を造り急湍を作せるもの〻如し。

▲湖水富士と伊豆七島　高一寸二分、横六寸、巾二寸三分



質は鴨川產にしてその色漆黑、形は上下兩面に二樣の風景を備ふ一面は湖水中に小島浮ぶ其狀恰も富士の如く、又他面は水面に大小七個の島嶼を現す、恰も洋中群島を望むの感ありと是れその名の生ずる所。

◎◎◎

▲淡路島　高二寸五分、横六寸、巾三寸五分

質は鴨川の變りもの形は淡路島の如し殊に水面を界として上下其色を異にし上部は碧に下部は黄褐色なるが面白として愛石家の垂涎する所なりと。

◎◎◎

▲霞間の遠山　高五寸、横七寸五分、巾三分五分

質は豐後臼杵の產にして赤色を帶ぶ、形は宛然霞める遠山を望むの趣あり風景の妙云ふ可からずと。

◎◎◎

▲鰕の巢　高二寸五分、長一尺八寸、横一尺二寸

質は鴨川產にして龍眼也、形薄くして全面無數の小孔あり、初め京都府華族富小路家の愛藏せし頃此石の盆中に鰕數尾を放ちたるに未だ幾何ならずして無數の兒鰕の游泳するを認めたり、之れ親鰕の窟孔中に入りて產卵せしが軈て孵化せしにて、人々之を奇き石に命名せしなりとぞ

曩きに右荒磯は下谷の本莊氏、深山の瀑布は宍戸氏、湖水の富士及び淡路島は芝の苔香園主、霞間の遠山は岩崎男、鰕の巢は市川團十郎の有に歸したりと聞きつるが今は如何にや。

●フランネルの洗方

先づ誰でも沸騰した湯の中へ入れて振つたらば垢の落ちがよかるべく思ふであらうが、それはいけない。丁度手の入れられる位の加減になして手で、そろ〳〵と揉むべし。洗濯板で、ゴシ〳〵やることや、強く揉むなどは品が縮まるから注意すべし。それから乾かすには強い日光にあてること熱火に近づけるなども、また縮まるから成るべくは朝早く日光の強くならない中か木陰の風通りのよい場所で乾かすやうにすべし。また洗濯湯の中にはマルセーユ石鹼液を入れ泡立つまでよく攪拌し、更に水五升毎にアンモニア水一匙の割で加へるのである。で、これで洗つた後は水洗ひをしてよく石鹼分を取去るがよろしい水洗ひが不十分であると乾いてから硬ばる。それから水洗ひの後、手で絞るのもよろしくない。唯、手で壓し付けて水を切るをよしとする。また濕つて居るものを長く其儘にしておくのも縮まることになる。尤も洗濯する前には何れもブラッシュを以てよく塵埃を掃はねばならぬ。

活断

人事活断 運命占ひ所

天啓堂

▲不孝女に――この心掛よき良妻をなぜ粗末にされるのでせう、成程此頃の別居が貴女の進退を決せられる好き機會のやうに見えますが未だ時節が來て居りません、今暫く御辛抱ありて今一層誠意を込めて良人に仕へて御覧なさい、故意とでもなく殊るでもなく眞の心の底からです、そして來る十二月になつて貴女の願望を何なりとも良人に訴へて御覧なさいそこで良人に實意の験が見えなかつたら此處に始て貴女が進退を意に任せて決せられてよろしい、十二月迄は如何なることがあつても神の御試なさるゝのだと思ふて夢にもいやな心持を起してはなりません。

▲嵯峨十八歳女に――貴女は恐しい不貞節極る方ではありませんか、是れも京都近くで自然と祇園流の實女氣質が感染したものと見える、甲の人に心殘りがある爲め乙の親切を暫く顧みないと云はれるからは、若し甲以上の氣に入つた男に出會つたら又乙の如く甲をあやつッて捨かるは間違ない處でせう、眞面目に勉強して將來多望の男ならば女學生の本分を忘れて男に憧がれ戀の煩悶のと見下げ果てた劣等な女子を厭みるものでありません、眞に男らしい男子を得たいと思ひなさるなら女子らしく處女らしく其本分を御示しなされ、桃李言はずとも自ら蹊をなすで天下の男子は競ふて貴女の愛に浴せんと蝟集して參ります、貴女の方から水を向ける間は此戀永劫成功せず。

▲櫻子に――貴女の親思ひは近頃珍らしいお心掛ですが、老母の申さるも當節母としてはそうなからねばならぬ處です、貴女の戀は喜すべきであるが、實践するには甚危險の分子が含まれて居る、今年は運性良好でありません諸事故障が出來て心中變化の生ずる年であるから、今日のやうな煩悶も出て來たのです、諸事控目にして開運を待たるゝがよし來る八月及び十一月は見込のある月ですから緣談あらば取結ばれて吉。

▲大阪の女に――一樹の陰一河の流つまづく石も緣とやらですから、獄間袋が緣の緒となるも穴勝ち不思議でもないです、併し此に一つの氣掛りは先方の脅迫箇間敷い振舞です、敢て良緣と云ふ程でもありませんが、去りとて又惡緣とも限らないやうですから思召があるなら先方の身分を確めて御覧なさい、先方の町村役場へ直接頼みて戸籍の謄本を送て貰ふのです、手數料は十錢位でそれに返信用の郵税添へて手紙で賴めば宜しい、それで身分が確で見込が付いたらその次は寫眞の交換と心掛ければ間違ありません。

▲一女子に――如何にも従兄とは合性が惡い、これは爭はれぬ事で現在は幸福のやうに見えても永の年月の間に必ず風波が起るものですから、苟且にするとは出來ないのです、その上血緣の結婚はなるたけ避けるが兩方の得策ですから、合性の良い他家の男子と結婚さるゝがよし、多少の不足は云はぬを吉とす。

▲不運女に——如何に優しく頼母しく云つたとて、まていよく〳〵と云ふ場合に曖昧ではその情實でないとが明瞭するじやありませんか、貴女と從兄の合性は金と木で互に剋する間柄ゆゑ縦令一旦夫婦となつても衝突たへまなく幸福な生活を送るとは出來ません、斷然思ひ切つて他へ嫁入られるが吉。

▲おそ嫁女に——親御の犧牲となつて小學教師で居らるゝとは優しいお心である、併し何時までも獨身との考へは宜しくありません、姉上達の如く嫁入仕度が出來ないからとてアツタラ結婚時期を空過されるとは更に不量見と云はねばならない、貴女は獨立して行かれると云ふ身に確な手藝があるとですからそれを婚資として嫁入なされたら宜いではありませんか。

▲北國住人に——他に仇し男を慕ふでもなく慾得にかへられず離婚したいとのと、世の淫づらな女子と違ひ斯く汚いやな男との結婚も親御の勸めで、一旦親御の顔も立てた今日、貴女の考へ通り決行せられてよし、當分は多少の小言もありませうが終に吉となる卦象を得たから一層勇氣を出してなさるがよろしい、中途で如何に困しくとも決して死ぬ氣など出してはイケマセン。

▲一老婆に——小僧から實體に勤め上げて、獨立の商人となつたとは珍らしい男であるから婿に取て惡しくはありません、併し一方にはそれ丈け當世男としての教育の不足が缺點です、これに反して親御に教育のあるとなれば滿足して行末永く亭主大事と立てゝ往かれるかどうであるか其處は母たる貴女のお考へにある事です。

▲筑後梅子孃に——軍人に嫁したいとの希望至極貴女の氣性に叶つて居ますから宜しい、御選擇なさい、廿一歳ではまだ婚期に後れたと云ふではなし徐に親御の思案を待つて居らるゝが將來の幸福と判じます、來る八月及び十一月に調ふべき緣ならば大吉運で取極めらるべし。

▲野菊に——小學校を失職の某所とは今始て承りましたそれでは天職の教育者も臺なしとなるわけです、併し貴女の可憐な心情には同情します、先方も不健康の身に貴女の如き優しい内助者を得たら嘸幸福なとでせう、そこでこれに就て一占した處が水火既濟の二爻を得ました此卦は水火相交て各其用を成し百事濟るの象でありますから此縁談は有望の方です七ケ月の後即ち來る十一月になると大學生との間に嬉しい話があるでせう。

▲日向米子に——貴女の發問は少し不得要領ですが、父母は健在、兄弟はみな同胞、末子に生れて何不足なく學問技藝を授けられたは幸福を知らない處が世に又此上の幸福やある、前途は明々白々です、廿三歳と云へば今が結婚の眞時期理想の眞人を持つて家庭を作られたら將來は多幸多福です、唯一つ氣掛なは貴女の所謂理想です時によるとそれが貴女を煩悶させてるのでありませんか、現社會に容れられるか否歟をよく再考なさるが肝要です。

▲信濃松町孃に——心細さに頼母しい男に依頼されやうとは女性として御尤な事ですが、未だ世間の事情にうとき少女が一存にて選定は甚だ危險です、如何に心安き中でも先方から正式の結婚を申込めば格別、此方から進んで行くなどはちと早計です、それより社會の經驗に富んで居る親御の意に從ふて居らるゝが將來萬全であります。

▲心配婦に‖結婚の縁談の中絶は事が新になつたのであるから前の話を當てにして居ると森騒するやうなことがないとも限りません、唯今は卦象が水雷屯で混沌たる有様であるゆゑ未だ何の方面にも確定した處がないのです七八月頃になつて話が掛つたら良縁と思つて進で取結ばれてよし將來幸福と判じます。

▲心配の一少女に‖合性も悪くない方なり、今時の若いものに似合はず實笃な處もあり頼母しき男であるから兩親の進めて下さるのを幸ひ快く結婚なさるべし、貴女が満腔の愛情を捧げて内助されたら男もこれからですから末は吉。

▲困果女に‖貴孃の事情は迫つて居るやうですが、どうも生年月日が判らぬので、判然と答へにくひ判者は秘密を守りますから、事情の一部をお洩しなつては如何、二三月中に或物を習ふ爲にぜひ家出したいといふお言葉の裏には言ふべからざる悲慘が含まれて居るやうです、何なら御住所を知らせて下さひ、篤と判斷を與へて上げます。

▲娘の母に‖二十八歳の娘御を持たるゝ女親の情としては御最千萬、判者は養ふなれば三十六の男子を推薦します、餘り慾を仰せなくは縁は遠くなし。

▲野田絹千代孃に‖お急ぎの方、吉。

▲大阪の芳子孃に‖最うお年頃であるから、身を定められた方、吉。但し來年まで俟たるれば一層の良縁あり。

▲加賀の七五三に‖再縁を御勧め致す。

▲岩代の君子孃に‖あなたは不幸な方です、御地には何か特別の慮物でもなければ適當の職は有りますまひ。

▲福岡縣の苦勞生に‖あなたの心配は取越苦勞です、良人の生年月日は何月ですか。

▲かつら孃に‖貴孃は身分が身分ですから、一層奮發して學問に身を入れて見ては如何です、御事情にては家に入らつしやつても面白くありますまいから、兄上と御相談の上、決心あるべし。

▲高橋よしえ孃に‖同じ結婚でも、養子を迎へては我が先祖以來の血統を子孫に存續する爲であるから、一身の幸不幸のみでなく一家の大事である、隨てその撰擇も一倍愼重を加へればならぬ、然るに此の大事の婿定めをみだりにして情人を引入れやうとは、トンデもない不量見と云はればなりません、それでは父御のお心に違ふ計りでない先祖代々に對して大不幸です、敎育ある方の考へとも覺えず御再考ありたし。

▲心配女に‖御心情は兎もあれ再縁は吉。

▲石狩無知女に‖專門の學業を修めて、獨立の生活を思ひ立たれたのは尤もですが判者は今身を定めらるゝのを可しとする、服役を終へて歸店せられた青年よりも他の縁談が貴孃の爲に幸福。

▲大阪〇〇女學生に‖スウイトホームは芝居で見たやうに、樂しきも

のではありません、學校卒業の後身を定めらるゝ方が貴孃の幸福であります。

▲熊本商校生に――少年の身を以て私情にくよ〳〵爲るゝのは判者は取らぬ、自然に任せなさい。

▲牛込花子孃に――御手蹟は見事です、今年中に良緣あり唯餘り空望を持たれぬ方が吉。

▲姫路の旅夫人に――お名前が見えませんでしたから、假に旅夫人として返答致します、良人の操業繁きを苦にせらるゝのは、失禮ながら感服致す、夫婦の間に談話の材料尠なく、興味索然たるが如きは、一つは旅行の身でもあり、また貴婦の心柄でもあり、良人の嗜味や、性情に應じて、氣を暢然と、專ら其の方に心思を遣らるゝのが上策。そこで夏は夕涼、手を携へて家外の運動なども一策です。

▲浪花の星華の朝女に――音樂美術の如きは貴孃性情に適してゐるが、養子を取るよりも御嫁に行かるゝのが幸福、嫁入先は商人よりも官吏、教師、然らざれば會社員などが向ひて居る。……今貴孃が杖とも柱とも賴んで居らるゝ人は賴母しい人には相違ありませんが、しかし貴孃の思つてゐるほど貴孃に對して、深い意味を持つて居らぬやうです。好緣なければ踈留科に入らるゝのもわるくなし。

▲迷女に――希望の通り着手なさい、餘りくよ〳〵せぬが吉。

▲高等女學校卒業の方に――貴孃のお手紙に名前が無いので困つた。東京大學の方よりも、顏の醜美は兎も角も係累なき中學卒業の方が貴孃に幸福です。

▲本鄕の心配女に――新婚後半年にして、良人の御病氣、御心中は深く察し申す。ですが緣あつて今の家に嫁がれたのに他の友人の身の上などを羨まるゝのは、判者は甚だ賛成致し兼ぬる、何も運性と諦めて良人の看病に誠心を籠めらるゝのが人間の踏み行く道。正當に行けば末に運が開きます。

▲丹後峯山の困女に――遠方に居らるゝ從兄もさる事ですが、其の性質に飽き足らぬ節あるも、一時の情を制して、戰役より歸られた隣家の方が、貴孃には良緣と斷ずる。

▲京都の小菊子に――希望をあまり高く持たれず、好嫌さへされずば緣は年內に在り。將來の運性は吉。「こゝろこそ心迷はす心なれ心にこゝろゆるすな」、心の持ち樣が肝要です。

▲芝葉女に――今まで苦勞なさつた甲斐に、今が運性の向いて居る時である。好緣あれば多少の思惑を捨てゝ身を定めらるゝのを吉と判ずる。

▲軒に落ちる春雨女に――十三歲位の相違は何んでもなし、餘り考へずにそれとお定めなさい。

▲心配女に――成程御心配でしたらう、叔父樣も三十二といふ分別時に爲つたのですから、最うそろ〳〵本性に歸らるゝものと判じます。

▲清國大連市の好み女に——末は親讓せず、よし運氣が變つて親讓するとしても心配は絶へず。

▲心配女に——手の筋などで人間の運が極まるものでありません、あなたの心の持ち樣一ツにて夫婦間は末長く續きます。

▲市内とし子に——御勉强大第で一二年の後には學問も上達致します、辛抱が第一です。

▲名古屋の女に——あなたから變はツた方が吉。

▲東京波子に——養子を取るよりは嫁入した方が貴孃は愉快です、随分苦勞してゐらツしやるだらうと判者は满幅の同情を捧げます。

▲大阪の富士銑女に——貴女の性質には造花、刺繡などは綺麗で眞いが御地では如何のものでせうか、心の胸を鎭めて今一度婚姻爲さつては如何です。

▲何女に——今一年ばかり待つて見ては如何です、が貴孃ばかりやきもきしてゐるのも何ですから先方の樣子を探つて御覧なさい。

▲伊豫の愛讀女に——別に身體に異狀はありませんか、それを聞いた上で、判じて見ましやう。

▲田舍心配女に——東京其の他遠方へ出るのは不吉、氣を變へて農家へ嫁いだら如何です。

▲牧方の氣掛女に——其人の不心得も長いとはありません、その中に止みます。

▲草深き田舍の紫蓋女に——貴孃の希望は高尙でもなければ不適當でもなし、杢にすなほな希望と判じます。併し不適當でないからといつてその通り行くものでもなし、如何かすると、運が外れて妙な破目に出會するのが世間の習慣、自然の成行にお任せ爲さい、貴孃の樣な心掛なれば悪い運には落ちません。

▲須崎商家の一女に——お迷なさるは御尤です、判者は御兩親よりも貴孃の胸の中に贊成致します。先方の國元身元よりもその人物を調べて確實な人とあれば然るべき媒妁を賴み此の緣を結んでは如何です。

▲煩悶女に——夫婦間には有る習ですが、母子間にそれとは不思議に堪へません、年長に折れるのが世間の常ですから、貴孃の理屈は暫らく傍に置いて、母親の言葉に從つて一二ケ月じつと蟲を殺して辛抱して御覧なさい、案ずるより産むが易く、母子の間が圓滿に爲るに相違ありません。

▲愛知の女に——一身に故障さい無ければつゞきます。

▲まよひ子に——一二年の中に眞緣あり。

▲秋田のゆかり女に——手に相當の藝があつて獨立してゆけるのは結構ですが、眞緣さえあれば身を定めらるゝのが吉、御兩親と和熟の上に緣を取り外さぬやうに爲さるのが貴孃の幸福です。

▲兵庫のあき子に━━看護婦を親父様が反對とあれば 產婆もお嫌いでしやう。工場勤は猶更でせう電話交換手などは如何です。

▲無實罪女に━━[illegible]の家に袖を絞らるゝは御尤ですが心配さるゝな、日の經つに隨つて次第に無實の罪が晴れます、無實の境遇に陥られた[illegible]れに身を捨鉢に持つては宜くありません、以前に倍して氣を柔しく持つて居らるれば自然に無實の罪が晴れて末は運が向いて參ります。

▲本郷のみさ子に━━母親を思はるゝ優しきお心根は、深く同情致します。矢張當分遠方へ行かず、母上の傍に時節を待たるゝのが末には吉となる。

▲すみれ女に━━二十七歳の今日迄未だ一度も縁談を受けられぬとは、成程御不仕合な身の上、但し最う運が向いて居ります、今ま暫らく御辛抱なさい、その中に屹度縁談が現はれます。

▲心配女に━━今度の縁は見込の氣が進まなかつた精もあらうが 兎に角縁が無かつたのです、最う先方は身を堅めたれば今は詮方なし、あなたが見てお貰い爲さつた占者は間違つてゐたのです。

▲露子女に━━再度の御質問でしたが、判斷は皆様何れもお急きのことですから[illegible]を極めて居ますから惡からず思召下さい、そこで貴女の開運は中年以後のことです、即ち結婚も濟み世帶も持ち子供の一人二人も出來るやうになると段々幸運が向ひて來るから御樂みです、まて當分は養母と氣が合はないから多少心に面白ろくなからふが、實は財產を握て居る養祖母の相談者として貰はれたのだから眞に祖母の意に從がつて居らるれば宜しい、處が祖母の婿見立ての方針が、商家で永く勤め上げた男などとの望みであるから、貴女の理想に合はない、でヒドク悶いで居なさる様子ですが、元と祖母の思召は成丈け堅氣ものなどとので矢張奉公人に限つたと云ふ譯ではないのです、よし商家に奉公したものでも今時の男ですから多少の勉強はして居ませう、そこが世に平凡な夫を社會より人物のやうに思はせるは 賢婦人の手腕にあるですから茲一番内助に全力をそゝいで貴女が日頃の修養を見せらるゝも 快心のことではありますまいか、 奮發して御覧なさい。

▲長崎の產婆生徒に━━將來の職業としては 看護婦より矢張り產婆の方が有望です、最初の目的を貫徹さるべし。

▲埼玉女に━━許嫁の夏人が一年志願兵に合格されたとのこと 結婚式は入營前に限る、來る九月中の黄道吉日を選ばれたし。

▲一老母に━━娘子に三方から求婚されて御迷ひとのこと、娘御の眞性から云ふと僧侶より軍人の方が適して行末仕合せです、幸ひ二口は軍人のことであるから娘御のスイタ方へお片付なさい。

▲大坂の女に━━貴女は一家の主婦として 亡夫と二人前の役目大事な場合であるからシッカリおやりなさい、萬々止むを得ないとすればお壻へ通り九月は丁度時が宜ろしいから決行なさるもよし、併し支配人の處[illegible]は今一應委しく聞いた上で明答することに致しませう。

▲破鏡の歎きに沈める女教師に━━亡夫の復籍は貴女の爲めであり、一家の爲でもあるから御希望は無理ならぬことであるが、最早今日では運が

鮮いのです實は斷然あきらめなされた方がよろしい、妾と貴女が最初から良人の非行を餘り寛大になされたが今日の結果を招いたのですから、並に最後の手段は先夫より地位の高き人、即ち郡視學とか或は郡長ならば頗る妙です此等の方より勸告して貰いなされたら有効でせう。

▲心配母親に‖‖期望して居らるゝ先方は今の處ドゥも有望の縁ではないのです、實は曖昧で本人はまだ何の考を持たずに居る歸朝後の意見に依て極ると云ふ傾きがあるから、その心得で早く云はゞ當にせずとお待ちなさるが上策です、娘御も二十三と云へば早い方でないから相當の處ならお片付なさるが吉、後の妹娘を縁付けるに影響するからとて成る丈け姉娘を良い處へと希望なさるが世間普通のやうですが、世の中には姉を餘り良い先へ遣つたが爲めに 妹娘が釣合はないとて困つてる方も往々ありますが、此處は思ひ様とり様です、 大抵の處なら後の差支ない内にお片付なされたら氣樂です。

▲若松のおかめ女に‖‖姑御の邪見の爲め 產後の見界もなく働かせられて遂に重患に陥り一人の愛兒を置いて離婚された趣き お氣の毒に存じます、所で其後先方の親類なり義姉妹や義兄弟から切に元の古巣に歸つてくれとの希望を申して來たが、何分姑御のことを思ひ出すとゾッとして進まないとの事ですが、「士は己を知るものゝ爲に死す」と云ふ譬合があります、尤もこれは男子の意氣でありますが女性でも同じこと、さきに一旦偕老同穴の契を結ばれた中でもあり、それに今時の男子に珍らしい離縁後六ケ年に及んでなほ男子の手に孩を育きての鰥棲し、再び仇し婦人を娶らないと聞て居らるゝ良人に對しては、此處は貴女も一番奮發して夫なり孩なりの犠牲とならるゝが婦人の道じやありませんか、殊に孩

姉妹などの同情もあるですから、枉て再縁なさるとを吉と判じます、夫に貴女は不治の病と落膽して居なさるけれど、もと肺病でも全然不治の病氣ではありません、統計上全治した割合も尠くないのです、肺病に限らず何病でも煩悶を起り病勢を募らせば皆致命症となるのです、幸ひ貴女は早くその手當をなされたから 今は既に殆んど全快の域に近づいて居るのですから此上の御心配は御無用です。

▲人面獸心女に‖‖元を云はゞ罪は養父にあるとゆゑ 事情を實母に打明けて其方より嚴しく養家へ掛け合ひ キッパリと結末を付けてお貰いなさるより外に好い道はありません、 家出してはイケぬ、又婿を取つても結末のつかぬ内は駄目です、一日遲くなればそれ丈け煩悶も増すとですから早い方がよろしい、 思ひ切つてその運びをおつけなさい。

▲無名子に‖‖「此方へ縁付ましてからは意外な事やら驚く事などが度々あります社會と云ふものは六ケ敷ものといふとが始めて分りました」云々、それで將來を御案じなさると云ふ譯けですが、夫を持つて妻の道を知り子を持つて親の務めを覺え、世帶を持つて家政の事を習ふとは其處のとです、その初心な心掛けで萬事誠實であつたら行末は必ず安樂でありますからその心掛けを忘れないやうになさい。

▲岩代の醜女に‖‖それは所謂る初戀と云ふものです、併し御承知の通り双方共結婚の出來ない身分ですから 若し深みに行かば世に云ふ惡縁ですから、 此上接近しては双方の不爲ですお愼みなさい。

▲一人の遺兒ある未亡人に‖‖年下の男子より 再嫁を所望せられて居る云々とのと、合性はよろしいから正式の結婚ならば應ぜられて吉、 唯

だ空閨の寂しさにと云ふやうで道ならぬ接近ならば絶對的に不可。

▲心配女に――某學生と二世の契をした處か、近頃學生が變心してその約束を反古にせられたとするので憂慮して居るとのと、結婚は何處まで神聖で、內所事とする男女の野交とは違ふのですから、煩悶を無くするには思切るより外なし。

▲幼女の母に――有望な少年であるから養子にして世話をしたいとのお尋れ、媛御は七赤金性で男子は二黑土性が天爽でありますから土生金と云ふやうな譯で上々吉てす、お貰ひなされたら末は樂みです。

▲名古屋市の困女に――親子再緣せよ、婿取れよと進められても氣が進まないで煩悶して居るとは、今更ら先夫に未練が出來たのでありませう、併し覆水盆に反らざる譬へもあり前回は無かりし緣とあきらめて、來る良緣を取逃がさないやうにするが大切。

▲京都の靜江女に――御兩親が賞金主義であつて理想の結婚には同意を得難いとは御尤もです、近頃は段々この風潮が甚しくなつて來て貴女と同じ境遇に泣いて居る女性も珍くないのです、併し境遇は幾分か自己の意思の立て易い場合もありますから、相當の媒介者が見付かつたら交渉なされてよし。

▲洲本の泣嫁に――貴女の如き境遇にあるものは得てヒステリーなどになりたがるのです、併し十九歲と云へば女はこれからです、三年五年立つた處で晩婚と云ふ程でもないから徐に醫師の指圖に從ひ心靜に療養なさるがよし、それに「戀しや青春の花咲かさず空閨に泣き寐す」など、閉ぎ込み自ら門戸を閉鎖して訪ひ來る幸福に門前拂ひを喰はせられるとは、わるい思案です。

▲結婚を急げる不幸女に――貴女の境遇には心あるものは同情を惜みません、ツーく何時迄も迫害計り續くものでありません今に幸運が向きます、一體あなたの緣の違いのも成たけ良緣を得て幸運を迎へよとの天の思惠かも知れませんから、お急ぎになるは却てよくなし徐に時節の來るまでお待ちなさるがよろし。

▲尾張の某女に――同年の求婚者は身元血統に於て差支なければ緣組まれて吉。

▲松山の困娘に――腦病ですから早くお手當をなさらないといけません、未だ醫師に掛らなくとも宜しいから衞生顧問の訓ゆる所に從て攝養なさい。

▲筑前煩悶女に――貴女が先夫との不結果なるに反して一方の求婚者は貴女の爲には實に良緣でした、併し先方は貴女の結婚と同時にこれまで談しのあつた方面の談を進め今日では已に婚約が成立したやうにも見えますが、未だ多少望みの掛つてる點も余には存じて居る、故に善は急げで前へ談のあつた手順で直ぐ交渉して御覽なさい、尤に世間には親が遠方へ手放すを嫌つて近處へ緣付けても、先方の都合では滿洲朝鮮は愚か亞米利加までも出掛けるものもありますから、田舍が嫌ひで都會へ緣付かれる位は何んでもないとです。

▲大阪匿名女へ――老人は悪いとを勸めるものでないから再緣すると

と決心なさい、三十二歳と云へば最早や晩婚、一刻千金を爭ふ時でもないから二年や三年後れたとて心配する程でもない、只性質の固執を去る樣に工風なさるがよい。

▲田舍の妻に――四月十日などいふは心の迷、其人はがらつとした快活な人物、時には横路に踏み迷ふこともあるも、何時迄も彷徨してゐる人でないから、御心配の根はその中に自然と絶へます。從前の通り柔しく使へらるれば末は上々吉。

▲無學女に――子供の出來ぬは其人の病氣も關係あり、貴婦は子が出來る體質ですから、其人の衛生に注意ある樣勸めらるべし。

▲浪花のより子姫に――四十七歳といへば、分別盛を過ぎた年輩、然かも茶屋酒を浴びて居らるゝといふのは叔父上も隨分無茶ですが、併しながら盗賊にも三分の理、叔父上の身になつて見ると多少の理窟も有りましやう。で、如何いふ風に仕たら宜いかといふ質問ですが、例令家を外に狂つてゐるからとて、其の當座は惡い顏せず、機嫌よく待遇さるゝのが第一。其の年に爲つて、なほ茶屋遊爲るゝといふのも、一つは習慣の故もあらうが、また家に居ても面白くないからでもあるにも相違ない。ですから例令如何なる眞似を爲さるとも、其の當時はむしろ平日に倍して機嫌よく待遇へば自然と歸ります。

▲三十女と年頼女史と無他友生とに――御三人一同に同等の質問、混雜して居りますが、先づ老頼生より判ぜば、教育の有無を氣に掛けず、身を片附けられた方吉。○三十女に、あなたも年頼女史と同じく縁附かれた方が吉。唯貴孃は身に職あるを力として居らるゝやうであるが、そこが强性に障つて居ります。無他友生に、女子大學の入學試驗、今一度試して見らるべし。

▲南地なる柳月に――あなたは自身で苦痛を作へてござる、「人生は苦痛なり無意義なり人生の目的不可解なればなり」など新聞雜誌に出てゐる辭句をその儘用ゐて嘆息せらるゝやうでは、未だ苦勞は足りませぬ、奮發して自活の道を立てらるべし。

▲堺のすみれ子に――女々しき情を棄てゝ、此頃申込ある縁談に應ぜらるべし。

▲西海の困女に――穴にでも入りたい心地、とは能くあなたの今日の心情が見えて居ります。病氣は別に障つて居らず、縁談は近い中に來る。

▲尾張一女に――お考通り爲されて吉。あなたは確然した御方と見上げて居ります。

▲心配女に――海外に出るなどは、あなたには適當しません、先から先まで考へる性質で入らつしやるから、氣を靜かにする繪などが適當でしやう。

▲山形縣のやす子に――御目的は至極殊勝ですが 渡歐行は今一回熟考あるべし。相應の學科を修めて徐ろに實行するも遲くありますまい。

▲宇和島町の某孃に――御事情は、よく御手紙で拜見しました。先づ一つ御答へして置きます。今十ヶ的に考へて入らつ しやる事の至極暴ろ

し、貴孃の御尋は隨分長く爲りますから大體に悉しく判斷を揭げます。

▲病弱女に‖理想は外れ勝のものです、友人は貴孃が思つて入らつしやるほど思つて居らぬと判じます。

▲備中の青下綠孃に‖女子の天職を守るのが至當です、貴孃の性質なれば心の持ち様にて愉快に世の中が渡れるのですもの。

▲心配女に‖貴孃の生年月は判りませんから困りました。なんとか詳しく知る方法が有りませんか。

▲岡山の煩悶女に‖ 今は高等學校にあるも後日進んで醫科大學に入る筈の或學生が家政の都合で學資に事を缺き向後仕送りして吳れる方へ養子になるとのとであるから、貴女は右學生へ學資を支給なされたいとの御希望でせう然も差當り親御の同意がないので金を得る方法を御尋ねなされたが兎角金で買取した婿は後日苦情が起り易い その例は世間に少くないのです、併し商人のお上さんも實業家の夫人として醫者の細君や華族の奥方などと決して隔ては御座いません、御互に公共の慈善事業に斡旋せられるやうな今日ですから、無理算段して大學醫者の奥さんに成るに限らんではありませんか、而も貴女は商家の生れで剩へ生家を相續して先祖の祀をなさればならぬ身分ですから、年來の家業を勉强なさるが當り前で、商家相當の婿を迎へなさる方が却て將來の幸福です

▲愛知縣の栢子女に‖ 八年以來の同棲愛兒の二人まである中を何等の理由なく、離緣の申込みとは全く良人の無法なのです、貴女は絕體的に、斷るのが至當であります、世間には斯る不德漢の爲に同じ境遇に泣て居る姉妹も少くありませんから餘程心をしつかり持たなければなりません、併し相互の合性は先方は九紫火性で貴女が六白金性ですから火剋金となつて、現在も將來も貴女が迫害の地位に立たればなりません茲に一つ遺憾なとには法律の不備です、重婚の制裁はありますが男子には和姦の制裁がないのです、故に離婚の手續きを濟せなくとも先方には不自由を感ぜないのには困ります、次に女子に職業として、裁縫の御研究は最も宜し、傍らミシンの使用法等も練習なされたら至極妙です、其他家庭職業としては土地と場合とで、一概に云ふ譯には參りません。

▲輪島豐子に‖貴孃の判斷は二ツに爲りますが家を繼ぎ若くは叔父上の養女と爲らるゝものとせば後の判斷は無用になる譯です御兩親が贊成なれば判者は後の判斷をモノに爲たいと思ふのです、然し冷靜に考へて、今の知人にして貴孃の將來が幸福なるものとせば其の人に心を打ち明けて見ては如何です、但し吳れ〴〵も十二分の思慮を要するとを注意して置きます。

▲栃木縣の富惑女に‖地方で高等女學校を卒業したとすれば先づ教育は十分です、此上强て苦學までされるには及びません、家庭にあつて日頃修得した學問を實地に應用する稽古なさるが肝要です、貴女は養子を貰ふべき孃でありますから、あまり學問をして空想に耽ると却て良緣が違ふ御座います。

▲備中の美さ子女に‖貴女の性質は多く移り氣で、深き思慮を持たす、物事にあき易い癖があるから獨立して一生續く氣遣はありません、貴女は家人より愛せられ殊に貴女が居なくなれば良人が非觀に陷りはしまいかとの御懸念であるが、夫れはむしろ貴女に天國を去つて地獄へ行くやうな危險あるを警告します。

人世觀

△無意識の犧牲▽

妻は夫に使役さるゝ如く感じ居れど、其實却て夫を使役なし居るなり。夫の拮々として今日の事に務むるはこれ妻に衣食の小言を云はれざらんが爲なり。されば男子は或部分まで婦人の犧牲となり居る也。

△女子の生命▽

女子にあつて唯一の財産は「我は美人なり」との自覺なり。若しこれを失へば婦人の生命は無きに等し、かるが故に醜婦は毎に鏡を怨む。

△一種の寄附▽

男子は女子を保護するの任あり、されど女子が男子に保護せらるゝ權利あるが如く思惟するは非なり。寄附は强ふ可きにあらず、受く可きもの也。

△未婚者と既婚者▽

未婚の女子は空想を糧とし、既婚の女子は實利を糧とす。空想は花なり、實利は團子のごとし。

△既婚者の淋しみ▽

既に人の妻となつて尚ほ胸中何となく孤獨の念ある婦人あり。これ其夫の愛の足らざるにあらず、自ら處女時代に描ける空想の滿足せられざるが故なり。

△追想の哀感▽

如何なる婦人も其結婚によつて葬られたる戀愛を懷古せざるはなし、されど這の哀感は子を設くるに至つて漸次稀薄となり行くもの也。

△美人を欲する理由▽

男子が妻として美人を欲するは自己に對する滿足よりも更に世間に對する誇負心より出づるものなり。之を味ふにあらず、見世物として誇らんとするなり。

△肉體の節操と心靈の節操▽

肉體上の不節操（穢れたる婦人）を忌むは男子一般の通性なり、されど心靈上の節操を穢したる婦人を妻として知らざるこそ憐むべし。

△天成の美術品▽

美人は天が此世に與へたる一大美術品なり、これを

專有する男子は社會的共有品を私する罪人と見て可なり。

△愛する人、愛せらるゝ人▽

婦人を愛する男子は幸福なり、されど婦人に愛せらるゝに至れば男子の價値は「無」となる。

△壞れたる陶器▽

失戀の苦痛とは壞れたる陶器を接合して見て嘆くが如きもの也。

△化學上の男女▽

男子は酸性に屬し、女子は亞爾加里性に屬す。酸と亞爾加里と化合すれば即ち元素の分解作用を起して忽ち沸騰するに至る、若し酸の量亞爾加里に勝てば其凡てを酸化し、アルカリー、酸に克てば酸、化してアルカリーとなる、ヲムネの如きは即ち酸と亞爾加里と最も適度に化合したるものにて、男女相合の理も亦道の原則に背かざる也。

△淚の元素▽

淚を顯微鏡下に照せば美しき無數の結晶體を發見すれど之を化學的に分析すれば僅に食鹽を含む燐酸曹達に外ならず。詩人はこれを以て人生の花なりと稱し、化學者はこれを糞尿の元素と同一物なるを語る。

△自然の暗示▽

強て世間に悖るの要なし、強て奇言奇語を弄するの要なし、水は高きより低きに流る、これ自然の大則なり、低き人の高きに服從し大なる人の小なる人を壓迫するは最も平凡なる物理上の原則なり。

△常住の矛盾▽

世の中は矛盾の結晶なり、この矛盾を消化し能はざる人は苦痛の擒となり。軈て自殺となるのみ。

△理性乎感情乎▽

伯夷叔齊は理性の人か感情の人かとの質問あり。以爲く、彼等は大なる感情によつて大なる理性を修養し得たる人なりと。

△凡て感情なり▽

世事意志の力よりも感情の聲大なり。若し比斯馬公が解職せられたる原因が、獨帝と激論の末、卓上の墨汁壺を投じたる偶然の動機に基因すとの說を眞なりとせば、一國政治的行動の如きも、畢竟するに瞬間の感情によつて起り來る大波小波なり。



現代婦人の鑑

（成功せし婦人の實例）

白鷺生

抑も婦人の勝れたる中には己が才を隱して身を終るまで凡物を粧へるもの多し、その世にあるや衣服も人目にたゝざるを用ゐ、髪飾も人並にして多辯多言ならず、而も是非利害の考へ深くして思ふことを色にも出さず自然と其望を達するやう仕向くる手腕敏く、平凡の夫を如何にも勝れたる人物の如くに世間へ思はせて一家の好運を迎へて謀に拔目なきは、實に敬すべく尊むべきこゝろならずや、されば世の中に賢婦よ女傑よと持囃さるゝ婦人は猿智惠なるが多く却て名なき婦人に眞の賢婦はあるものぞかし、試に才乏しくして、運のみ好きやうなる男子の妻女に着眼すべし思ひ半に過ぐるものあるべし、斯る無名の賢婦人が夫を失ひ遺兒を懷きて世に立つに至つて此に始めてその本來の特性（人後に落ちざる所）を現して人々をして畏敬せしむるものなり、世に名ある人々の多くは斯る婦人（終身名を顯はさずして卒りたるものゝ）の子なる事を知らざるべからず。

或は不幸にして褊狹なる沒曉漢に嫁して影にも日向にも己が才を用ゐるに由なく、一生貧苦に身を終る婦

人も莫きにはあらず、その一旦夫となしたる因緣よりして己が心に己が才を封込みて卒はるが如きは、傷むべく悲しむべきの極みなれど、元來好運なると不運なるとに關せず、又事なくして名を顯はさゝると機に觸れて譽を揚ぐるとに係らず斯る女性を女流の偉人とも英雄とも又豪傑とも云ふべきなれ、而も露のカザリン女皇の如き埃及のクレオパトラの如き將た唐朝の則天武後、我が朝の淀君の如きは與からず、彼等は國色無双、幾多の鬚髯男子を操擒駕馭せし樣は凡眼を驚かしむべきものありと雖も、もと是れ一種の變性男子の行爲たるに過ぎざれば賞するに足らざると同時に他に何等婦德の崇高なるものゝ强て見るべきあらざればなり、此に至て獨りその倫を絶てるは我が神功皇后の坤德なりとす、大纛邊境に臨んで皇上暴に崩御あらせ給ひ臣僚膽落ち氣失ひ策の出づるところを知らざるに際し、神斷一決茲に未曾有の外征軍を興し振旅凱旋し給へる如き、又遺れがたみたる皇子を鞠育擁立し給ひ天壤無窮の皇統を繼紹し給ひたる應神天皇の聖德彌高き、世に八幡太神の靈威の永久に我民族武運の護身符たらせ給ふ如き、是れ一に神功皇后が坤德におはしまさずや。

さて婦人の地位、境遇に隨てその成功の大小廣狹の別はあれど、いづれ其婦德の發輝に在て素より輕重のあるべき筈なし、坤德の目出度は高貴の御事蹟とし て取のくるも、世に又鑑となるべきものなからめや、其事蹟の如きも亦これを遠く古に求むるまでもなく、近く現當に乏しからざるを見る、されば茲に二、三の事例を揭げて女性が修養の鑑ともせんかな、

一　山本のぶ子の精勤

本年四月の蠶絲會總會に於て全國各蠶絲工場に就て二十年以上勤續したりし模範の婦人職工に彰狀を授けたりしが、その撰に當りたる一人に山本のぶ子と云へる婦人あり、安政五年生れにて當年四十九歲、實に前海軍大臣、大將男爵山本權兵衛氏の實妹なり、のぶ子は明治初年同姓山本氏に嫁したりしが良人は西南の役

に戰死して一人の遺兒を懷きて寡婦となりき、未亡人のぶ子は其後孤獨の操を守りて專心蠶絲業に貢献せんと志し鹿兒島授產會社蠶絲講習所に入りて明治十七年六月より今日まで二十一年餘の久しき一日の如く勵精し、現に同所の教婦を勤め居りぬ、近世帝國海軍計畫者にしてその大勢力家たる阿兄權兵衛男が權勢の下に高く安穩に過ごさば過ごさるべき身なるにも係らず、世に顧みられざる卑き工女風情の群れに在りて甘んじて其職に務め、二十餘年一日の如く世の模範を體したる如きは眞に敬すべき女性ならずや、彼の權勢に地位に將た財產に憧れ煩悶せる今時の女性達は省みて愧死せずや、



二　片桐けい子の林業

片桐けい子（五十一歲）と云へるは、素と美濃國惠那郡上村の醫家に生れ十八歲の頃今の居住地なる信州下伊那根羽村の醫師片桐春齋氏の許に嫁したる婦人なるが、男が造林の事に熱心し居たりしよりけい子も自然その

感化を受けて女性ながらも林業に關する趣味の深きを感じ、或時は名古屋地方より苗木抔を取寄せて栽培を試むることもありき、されど充分の生育を見る能はざりしより遂に自ら種子を拾ひ集めて播種し幾回かの失敗を繰り返しあらゆる辛酸を嘗めたりしが、その功果空しからずして年を追ふて成績好く、先年良人春齋氏病死の後は家政の事など總て一身に引き受けて處理せる傍ら、益々斯道に盡力し、或時は米と鍋とを携へて十數里に亘れる山中を巡廻するなど調査に怠りなかりしが、同村には雜木多くして比較的利益少き山林多きを見て椎茸栽培の有利なるを思ひ自らその栽培法を研究して地方人を導き、なほ新聞或は講話等にて各大家の意見、說話等を聞く時は直に一鄉の靑年子弟を集めて更に簡易なる通俗的談話を以て懇に說き諭し、旁々公私共にその功勞少からざるより同地方にては一人として尊敬の意を表せざるはなしと云ふ、斯くてけい子刀自が數十年來苦心の結果は自家に十五町歩餘の杉林を始めとしてその他の山林を作り時價凡そ十三萬餘圓に達せりとぞ、纎弱き婦人の身を以て殖產興業に熱心し十餘萬圓の富を一家に造り、兼ねて地方一般を利せること斯く莫大なりと云ふに至つては、實に感ずべく敬すべき婦人の成功にあらずや。

三　宮野さね子の篤行

富山縣西礪波郡松津村なる宮野さね子と云へるは、二十餘年來寡婦として淸き操行を堅守し、長男長成氏を敎育して一意勤儉節約に力め、その餘財を擧げて鰥寡孤獨を始めその他不幸に沈めるものを救恤するを自己の天職と信じ、之を以て老後唯一の快樂とするものから其救を受けたるもの其數を知らず、嚮に日露開戰に當てや軍隊の送迎に、傷病兵の慰問に、遺族の扶助慰安に、軍人の葬儀に殆んど寢食を忘れて東奔西馳し、鄉黨擧げてその至誠に感激せざるはなく、當路も亦その閭門に旌表せらるゝ所ありと云ふ、今その事蹟の主なるものを聞くに、

一、寶丹一萬二千五百餘袋を一包毎に齋戒沐浴一室に入り讀經

の上、南無阿彌陀佛の六字を自書したるものを第九師團に贈りたること、

一、義勇艦隊建設費に金千二百六十餘圓を寄贈せる事

一、金澤豫備病院收容の傷病兵を慰問し、物品の寄贈をなせしを前後數十回、

一、國民後援會へ毛布二十餘枚を寄贈せし事、

一、出征軍人に繪葉書二萬枚を寄贈せる事、

一、海軍々人に繪葉書一萬六千組を寄贈せる事、

一、國債に應募せし金額每回金一萬圓なる事、

一、其他赤十字社へ金貳百圓、石川縣出征軍人家族扶助に金百圓、富山縣同上三百圓、



西礪波郡軍人奬勵會へ金百圓、石川縣愛國婦會へ金十圓等枚擧に遑あらず、

一、應召兵の出發及傷病兵の歸還の都度は、金澤又は石動停車場へ每回必らず出張して煙草、寶丹、繪葉書及端書を寄贈すると終始怠らず、

等にて、此等の事も自身は嘗て口にしたることなく、何れも其筋の調査に係るものにして、爲に刀自が許に謝狀、禮狀の來ること日に幾回なるを知らずと云ふ、刀自が如く品性の崇くその貯財

を善用し陰德の厚き近頃珍らしき女鑑ならずや、彼の慈善の名の下に芝居を見、音樂を聞くの徒と同日の談にあらざりし。

四　小川直子の貞操

十餘年の間高輪御殿に於て常宮、周宮兩内親王殿下の御敎授職を勤めたる小川直子女史と云へるは、若くして良人を失ひ又貞操の目出度未亡人の一人なりとす、女史亡き夫の友人なる勸めに從ひ一先づ生國加州金澤の女學校に敎鞭を取り、其後青森縣師範學校へ招かれしが、幾程もなく上京して本居、島地、三島、根本、重野諸氏に就きて和漢の學を講究し、それより再び出でゝ京都高等女學校の敎諭に聘せられしが、當時京都にては禪門の師家として名高き荻野獨園禪師あり、女史が修道心は忽ち動きて爾來數年師の提唱を聞き座禪を凝らし工夫辨道怠りなかりしとぞ、當時女史の口吟あり。

目のまへにある極樂を餘所にして
けふまで何にまよひきつらん

おそろしと思ふもおのがこゝろにて
足ること知ればたのしかりけり

と、女史が貞節固く、學に篤く、又斯る修養あり、實に女流敎育家として成功せる以あるなり。

五　黑川まさ子の美德

去卅七年十一月十六日を以て栃木縣廳より木盃を下賜して其美德を旌表したりしは黑川まさ子とて當年六十七歲の老婦人なりき、まさ子は同縣宇都宮大町油蠟燭業黑川淸藏氏の實母にして家附きの娘なりしが、その幼少の頃より柔順にして孝行の譽れ高かりしため近所の娘達の手本とも立てられ居たりしと云ふ、さて妙齡に及びて養子定平氏を迎へて當主長男淸藏氏を產みしが、その鞠育宜しきを得て淸藏氏は成人して德望高く公共事業に心を盡くせしことも少なからず、遂に推されて市會議員となり地方の信用尤も厚しとぞ、然るにまさ子の夫定平氏は去二十一年中より神經病に罹り

爾來身體不自由となりて、飲食起臥一切他人の手を借らざるべからざる仕末となりしかば、まさ子は一身を之に委ね晝夜の看護大方ならず、されど嫁や息子の如何に乞ふも肯て人手を煩はすとなく、七十近き老體の今日もなほ一意良人の看病に餘念なく病夫をして痒き所へ手の屆きたる滿足を得せしめつゝありと云ふ、地方廳の旌表以ありと謂ふべし。



六　山崎いち子の孝貞

埼玉縣入間郡川越町大字寺井なる山崎いち子は資性溫厚篤實にして老母に仕へ三十年一日の如く奉養怠りなく其操行實に世の龜鑑ぞかし、いち子は父新太郎と母たいとの間に生れたる四人姉妹中の長女にして文久二年の出生なり、去廿四年一月同郡南古谷村の岩田某を養子に

迎へたりしが夫は卅九年病を得、爾來病床に呻吟すること四年にして卅三年遂に不歸の客となりいち子が溫き看護もその甲斐なかりしかば、爾來寡婦の操を守り以て今日に至れり、父新太郎は先きに明を失ひしが三十五歲の壯齡を以て逝き、而かも母たいは去明治六年末女ちかの生れし當時より少しく精神に異狀を來せしことゝて、その性益々褊狹となり、產後乳の出でざるより隣家に乞ふて乳を貰はんとせば、病母は怒りて之を叱し他人の乳には毒ありとて聞かず、時にいち子は僅か十二歲許りの少女なりしが常に母の意にさからはず、盲目となれる父、產後病褥に臥する母に仕ふる傍ら、乳兒をはごくむ爲めに米汁を製して殆んど手一つに幼妹の補育を司りて育て上げたり、斯くてちか女は十二歲の時暑氣に犯されて敢へなく死去したりしかば、病母は最愛の兒女を失ひたることゝて慟哭悲痛の極、殆んど狂して又治せざるに至りき、そのちか子を葬りし後は墓前に至りて終日念佛を稱へて去らざる事七年に及び半身不隨に至りてやむ、その間雨雪を厭はずいち子が看護に勤めたるさまは筆舌のよく盡くす處にあらず、その後母は全く褥中の身となり我意暴慢その極に達す、例へば母が平生嗜みし酒料は日に增進して一日一升を傾くるに至り、又煙草を喫するや一回十服二十服に至る、父在世の時は田畝家屋の不動產もあり且つ酒舖を營みて生計を立て居たりしも、その失目の後は家產蕩盡して更に負債を生じ、一にいち子が纖手もて田を耕し內職を營み他家に雇はれなどして辛ふじて一家を支へつゝ來れり、而も狂熱を極むる狂母の命ずる處に違はざらんことを勤めつゝ一日一升の酒料を辨ずるその苦心や思ふべし、いち子生來煙草を好まざれど半身不隨の母は吸付け與へざれば喫する能はず、さればいち子は咳嗽を忍びて唯々として母の命を聽くその孝養尋常人の企て及ぶ處にあらず、或人見兼ねていち子に云へるやう、狂者に對しては狂女に對する態度をとる可し一々命を聞くが如きは不利甚し、人亦以てその不孝を言はざるべしと、いち子答へて曰く母の喜ぶ所は妾の喜ぶ處何を以て其意に背かんやとて

断じて肯かず奉養益怠りなかりしと云ふ、いち子未だ曾て學校の敎育を受けたることあらず昔時僅に寺子屋に入りて多少の文字を書き習へるのみ、而も志操堅固に、孝貞に厚きは蓋しその天禀の資性なるか、誠に尊むべき世の鑑にこそ。

七　志賀淑子の忍耐

學界の名士

農學士志賀重昂氏の母堂を淑子と云ふ元參州岡崎藩の弓術師範役松下源之進の次女なり、十六歳にして同藩の儒者志賀熊太氏に嫁し二十二歳にして三人の幼兒を抱きて寡婦となれり、時に重昂氏僅に五歳、淑子は若くして良人を先立てゝ身の困難大方ならざるに加へて同藩の内規として戸主十五歳未滿なる時は容赦なく家祿を沒收するの制あり、志賀家も又その創規に準じて家祿を召上憂目を見る、ひそかに淑子刀自は幼兒を携へてその實家の扶助を受くることゝなりぬ、然るに頼む木陰に雨漏れて不幸は此處に止まらず、世は明治の維新となり、



廢藩となり、果ては實家に身を寄せて在ることもなり難く、各々離散の悲境に陷るの止むなきに至れり、刀自は此に志を勵して自活の道を講せんと決心し、即ち僅に習得たりし裁縫を以て一家四口を糊せんとし先づ附近の子女を集めて教授を開き、傍ら人の依賴に應じて仕立物をなしたりき、以前は一藩の儒者として人の尊敬を博せし家、家族も移り變る世の悲しさ、やうやく其日暮しの墓なき境遇とはなりぬ、搗てゝ加へて長女千代子は病に臥し乏しき中より何呉と、看病に手を盡す甲斐もなく、遂に空しくなりたりける、淑子刀自の悲愁例へんにものなかりしとぞ、實に不幸の極とは斯る人の身上なるべし、かくて明治六年小學校の設立あり、一子重昂氏は大切なる家の繼嗣にもあれば是非入學せしめばやと心計りは逸やれども、女の纎手もて母子三人の活計に追はれつゝある身のそれすら容易の業にあらざりけるとなん、されば僅か許りの學校用具を調へんとするに就てすら刀自の千苦萬慮は他人の知らぬところなるべし、其後重昂氏が十一歳の時父君の門弟たりし土屋光春（現十一師團長陸軍中將）緒方中信等の主唱にて先師の恩に報ゆる爲め學資を送り東京に遊學せしめんと相談一決し、重昂氏はそれより東京芝新錢座の近藤眞琴翁の攻玉社に入ることを得、次で札幌農學校に轉じたり、その業成り明治廿年の頃東京本郷眞砂町に假寓を卜し刀自を郷里より迎へたる時は、實に母子十三年目の對面なりしと云ふ、遺兒しかも一人息子の重昂氏を手放して十數年の久しき心細くもその寂寞に堪へて只管愛兒の成業を待ちたりし、淑子刀自が雄々しき心情は、又實に重昂氏が成功の礎なりしならん、是れ亦得安からざる女流の偉人といふべし。

八　岩波老母の健氣

新潜水器の發明に成功して一大名譽を博したるは在米の岩波貴夫氏とす、而して氏が成功はその母堂に負ふ所尠なからず、氏が生家は信州諏訪の機屋にて土地の舊家と稱へられたりしが、不幸にして氏が幼少の頃

破産し間もなく又頼むべき父を亡ひて實に一家離散の悲境に陷りしかば岩波氏は出でゝ小僧奉公をなしたり、母堂は此時の事情を語りて『サア此からが大變です浮〳〵して居る時代ではありませんと、思ひ切つて貴夫を同じ信州上田の菓子屋へ奉公に遣りました此れが貴夫を世の中へ手放した始りです人は何でも貧乏するが薬ですよ』と、云へりとぞ、それより母堂は姉妹の少女を携へて出京し、今の麹町永田町なる衆議院書記



官長 林田龜太郎氏の隣家に居を搆へ兎も角も今日を送り居たるが、その後貴夫氏も出京し有らゆる業務に從事しつゝ傍ら苦學を續け、二十六年中鐵道局經理課に奉職するに至れり、然るに熱心にして勤勉なる氏は課内の評判男となり上官にも望を屬されたりしが、廿七年中斷然意を決して職を辭し此に米國行を企てたり、時に母堂は苦心慘憺以て僅かの渡航費を調達しかけがへのなき一人息子を海外へ送り遣りたり、これ中々の氣丈なる女性にあらざれば

能はざる決心なりとす、さる程に氏の決心に聊かゆるみのあらばこそ、母堂の一念を忘れず彼地にて有ゆる勞働に服しつゝ苦學を積み一昨年中首尾よく大學を卒業して終に今日の大成功を見るに至りし次第なりと云ふ、貧乏の樂みを知れる母堂の如きにあらざれば如何ぞ斯る寧馨兒を育て得べき。

九　天野初子の獨立

本鄕弓町なる天野初子と云へるは早く父母に伴はれて鄕國愛知縣三河國豐橋より上京し、東京音樂學校に學びて去卅四年卒業しヴアイオリンの名手として稱へられたる一人なりしが、其後養子某を迎へその間に一男博方を設けたりしが、好事魔多く鴛鴦の契り尙ほ濃かならざるに早く旣に破鏡の歎きに沈み、覆水遂に盆に反らず、加之ならず日露の國際爲に破れんとせり卅六年の末つ方父は商業に全く失敗を取り、初子姉妹は今までの榮華一場の夢に歸して重ね〲の不幸を見るに至りき、さる程に尋常の婦人ならんには日夜泣き崩れてあるべきに、初子は女ながらも屹度心を取り直し自らは音樂學校の卒業證書に對しても將來は音樂家を以て身を立てんと決心し、妹愛子を勵して同じく音樂學校に入らしめ、自らも又母校の研究生となりて丹精を凝らしたる甲斐ありて、其後は女子美術學校及び埼玉なる女學校より講師を囑托せられ、又酒井伯、桂伯よりその家庭音樂教師に聘せられたる程に、兩親は更らなり初子の悅び一方ならず、やがて音樂の私塾を開きて教授を始めたるに幸ひ妹愛子も昨年首尾よく音樂學校を卒業したれば姉妹打揃ふて勉强せしかば、今は毎月百五十圓計りの收入ありて、老ひゆく兩親を奉養し父なき愛兒博方の成育を樂みつゝありと云ふ、不幸に遭遇して徒に落膽せず奮發せしは、今日薄志弱行者の多き世にありて萬綠叢中の一點紅ならん。

▲口繪正誤

本誌第六卷第七號口繪寫眞版中春かすみ、おぼろ夜、二幅上村松園筆とありしは榊原蕉園女史との誤に付正誤す、尙同號寫眞版日本女子大學文科卒業生とありしは、同校家政科卒業生の一部に付併せて訂正す。

人情哲學

▲飛だ疎忽

▲甲「おい〳〵、何で人のポケットへ手を突込むだ、乙「いや、如何も失心しまして、何時も貴君のと同じ樣なズボンを穿いてるンですから、遂自分のと間違つて。

▲名醫

▲診察に來し醫者患者の細君に向ひ「何で此樣に人事不省になる迄放つて置きました、早く呼びにお寄越しなされば好いに、細君「でも、夢中になりますまでは、貴君を呼びますのに不承知なンで御座いますもの。

▲良人の資格

▲夫人「おや新聞で「良人の理想的資格」つて云ふのを懸賞募集してますよ、主人「お前夫を應募て見るつもりか、夫人「えゝ、やつて見ましよう、主人「よし、夫ぢや丁度紙もある、筆も墨もあるから、其處で云ひなさい、筆記して上げるから。

▲乘合馬車

乘合馬車へ乘つた人、大きい荷物を重そうに膝の上へ乘せて居る、卸したら如何です、此樣に大勢人が乘てるンですから馬が重いでしよう。

▲ビーフステーク

料理屋の主人「如何です手前どものビーフステークは、客「左樣さ……割合に小さい樣だね。

▲嬉しさ

唖の人と聾の人が思ひ合つてやつと夫婦になつた、是がほんとに云ふ可からざる嬉しさであらう。

▲大洪水

大洪水で田も畑も流れて仕舞ひ二階迄水に浸されて仕舞つた、呑氣な老爺が其屋根に上つて四方を眺めて居る處へ村役場の人が船で見舞に來た、「鳥や何ぞは流れて仕舞ひましたか、「なあに、家鴨は泳いで居ますもの、「樹が皆倒れましたね、「なあに、後で植え替へますよ、「二階の窓迄水が來てますね、「あゝ左樣ですか、丁度窓の硝子を洗はふと思つてた處で好都合です。

▲勇氣

女「貴君、妾を愛して下さるつたつて、妾の愛の爲めに如何位の事が出

來るか見せて下さらないンですもの、男「困りましたな、お分りになりませんか、何時か貴女に頂いた、此手編の襟飾、是を私が平常して居る、其勇氣が御分りになりませんか。

▲家庭敎育

母「又喧嘩して來たのかい、往つて詫て御出なさい、泣したお友達の處へ往つて、 子「往つて來るさ、けど、お母さん僕の事を町内で一番しつけの惡い子だつて云ふンだもの。
母「おや酷い事を、もう往かなくつても好いよ、是から其樣子達と遊ばない樣におし。

▲三人の女三人男

「若世界中に女三人しか居なかつたと想像したら如何うだ、
「二人が集つて、頻りにあとの一人を惡口云ふね、
「ちやあ、若男三人だつたらば、
「前の女三人を捜しに出掛けるだらう。

▲餅菓子

先生「若貴君が餅菓子を四つ持つてゝ、又お父樣が四つ下さつたら如何なります。 生徒「分つてます、私は胃病になります。

▲難船

船が暴風雨に遭つて頻りに搖れる、吐いたりなぞして非常に苦む女客があつたが、やがて暗礁に觸れて船は怖ろしい響と共に沈みかゝつた、苦しがつて居た女客は「やれ〳〵やつと地面へ引掛かつたか。

▲演奏會

甲「岡目屋が演奏會で獨吟をやつたそうだね、 乙「ウム、甲「上手だつたかね、 乙「上手だとも、多勢の聽者のうちで五人殘つたきり跡は頭痛で退場して仕舞つた位だ。

▲酸素

「酸素は動物の生活に無くてならぬ物であつたが久しく發見されなかつた……、「先生、見付からなたつた間は、如何して生きて居たンです。

▲害意

裁判官「お前は此方の承諾も得ずに接吻して、夫れで惡意がないと云ふのか、
犯人「勿論です、惡意があつて何で接吻しませう、其上財產としては何の損害も與へなかつたのです。



家庭に用ふる石鹸の吟味

ＫＡ生

△石鹸は何より製へらるゝか

日用品の中で一番多く御馴染になつて、毎朝洗面の時や入浴の際に御用ひになる石鹸、即ち化粧石鹸又洗濯の時に使用さるゝ洗濯石鹸、此等の石鹸は、如何な物から何様した方法で作らるゝものかを一寸御話申上ませう。

尤も大仕掛に造る方法は專門家の事としてこゝには唯皆様が御臺所の端で娯みに出來る位の處を申上ませう。

石鹸の原料は御承知の通り苛性曹達と云ふ藥品を水に溶解して置き別に牛や豚の脂肪へ大豆とか、椰子の實に油等を適當に混合したものを鐵製の深い釜に入れて熱し置き、之れに前の苛性曹達の溶液を徐々に加へ攪拌しつゝ煮沸すると石鹸が出來るのであるが、初めの內は丁度乳汁の樣であつて、尙は煮て居ると遂に濃厚な透き通つたドロ／＼した飴の樣な液體になります、之が即ち石鹸で、温き內はドロ／＼して居ますけれど之れを木製の丈夫な型に入れて冷すと固くなります、此固まつたものを小さく切つて日に乾かして硬くして置きます、これが普通の洗濯石鹸で、別に細工も入りませんから夫れに勝手な形でも付けて直に賣り出しますが、一歩進んだ石鹸、即ち手洗石鹸又は化粧石鹸となりますと右の品に色を附けたり、香料を加へて好き香を含ませ、又種々の模樣をつけて裝飾しなければなりません。

石鹸製造業の最も盛なのは佛國と英國です、特に佛蘭西の「マルセーユ」は地勢が此業に適してゐるので規模の廣大な製造所が澤山あります我日本では外國と交

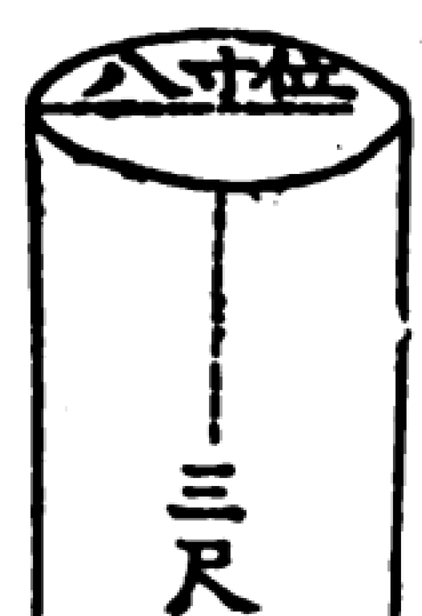
通が開けて色々の物を輸入する樣になつてからこの石鹸は最も早く起された仕事の一つですが最初の頃は上等品は出來ませんでした然し現今では中々進歩したものを作り出す樣になりました。

△手輕石鹸製法

さてその製造法を申しますと原料の苛性曹達、椰子實の油又は大豆の油等は市中で賣つて居り又牛や豚の脂肪も奇麗に精製したのを買つて來てもよい或は牛豚肉を料理した時鍋に殘つた脂肪を集めてもよいこの脂肪を精製するには脂肪を多量の水と共に釜に入れて煮ると脂肪は皆溶けて上に浮ぶ此時能く攪拌して後木綿の布片で濾過し、其儘放置すると上に浮んで居る脂肪は冷ゑるに從つて固まる、全く固まつた時脂肪だけを取り殘水を捨て又水を入れて煮沸し、濾過し、冷却して固まらすこの如く同じ事を二三回行へば非常に奇麗な純白な脂肪が得られます「ヘット」といつて「フライ」や其他の揚物に用ふる脂肪はこの方法から作つたものですが、石鹸の原料としては三回以上の精製を行ふ必要はありません。

△洗濯石鹸

扨て是から皆樣が臺所の隅で容易く出來る仕方を申上ますが、それには先づ鐵葉屋へ行つて一つ道具を注文しなければなりません、道具と言つて別にお金の澤山かゝるものではなく、唯

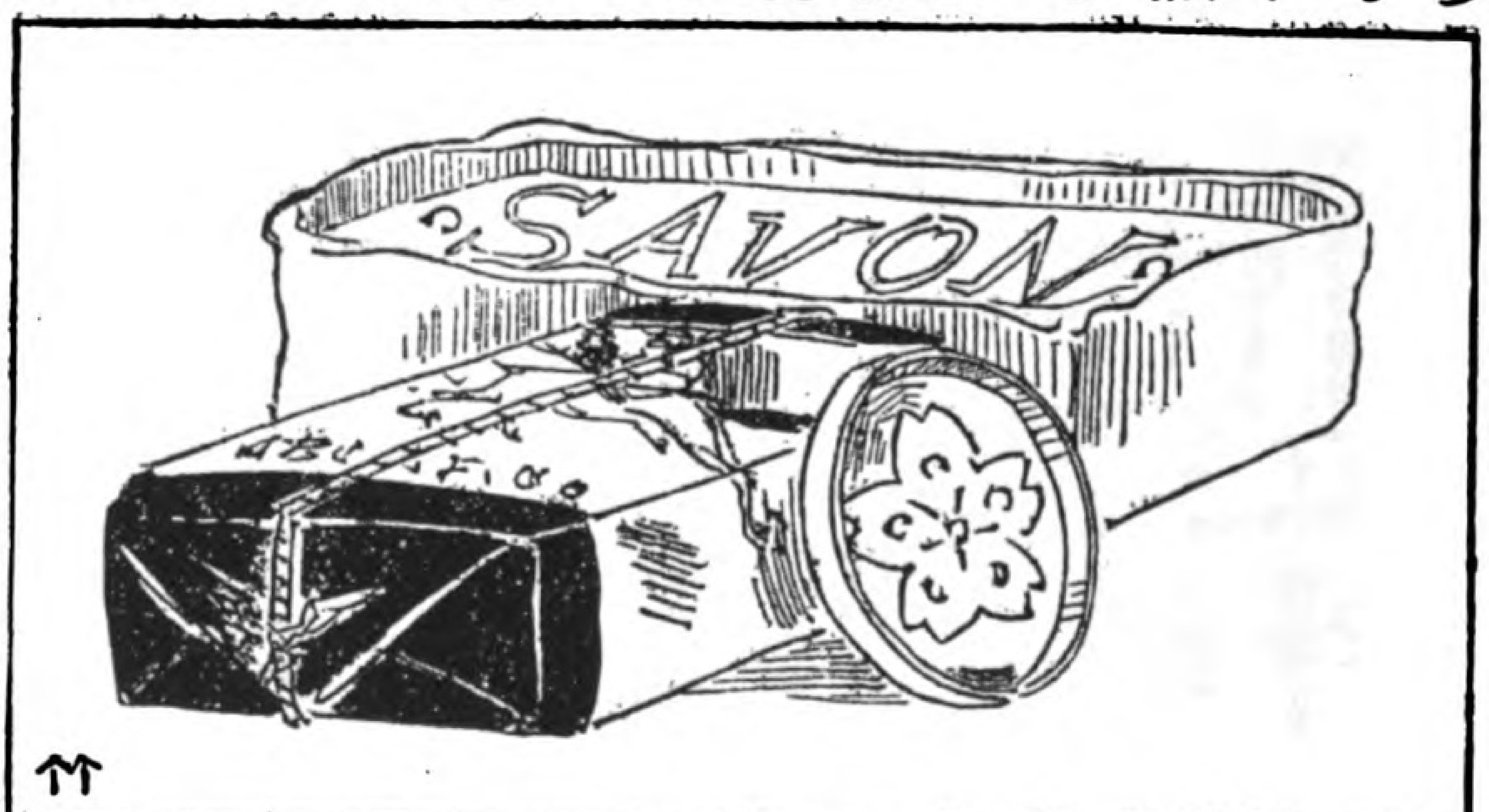


だ亞鉛で高さ三尺位、直徑八寸位の底のある圓筒形の者を作るのです此代價凡そ三四十錢位で、此外に攪拌棒が一本扨道具の準備が出來たら先七輪に火を煽し其上に右の亞鉛製の器を置き、牛の脂肪百目に椰子實の油三十匁、乃至五十匁を混じたものを容れて溶かし、少し熱くなつた時、苛性曹達三十匁位を一升乃至一升二三合の水に溶かした溶液を一度に一合位宛攪拌し乍ら加へて行くのです、此



攪拌棒

時苛性曹達の溶液を加へると非常に泡が立つて溢れる樣になりますがこれは團扇で煽ぐと少しは泡が沈みます、然し團扇の力でも及ばぬ場合には少しの水を注ぎ、斯くして泡が可なり沈んだ時に苛性曹達溶液を一合位入れて充分攪拌するのである右の樣にして苛性曹達の溶液を全く入れ切つたならば、尙ほ引き續いて熱して置くのです、此間に水が減つて變な臭がする樣になつたらば少し宛水を加へても構ひません、暫らくして後、攪拌棒で中のものを少し取り出して見ると飴の樣になつて板の上へ落すと直に白く固つて圍りに油が出る樣な事がなく、舌の先きで味つて見て僅かに刺擊性がある位ならば結構です、油が圍りに現はれる樣ではまだ熱し樣が不足なのか又は苛性曹達が不足かであります、何れにしても出來上つた時にはドロ／＼して透き通つた飴樣の液



體になりますから、そこで火を去り、暫らく置き猶未だ固まらざる溫き內に木製の丈夫な箱に流し込み、蓋をして急に冷えぬ樣に出來るならば毛布等で包むで置くのがよいのです、而して此まゝ一日位放置すると全く固りますから、そこで之れを出して適宜の大さに切り、天日に晒して乾かし、硬くしたものを紙に包んで貯へて置き、洗濯の時出して御使ひになればよいのです、今申上げた丈けの原料の代價は凡そ五三十錢であります（薪炭及勞力を別にして）而して出來た洗濯石鹼は眞白な奇麗なもので市中で四五錢に賣つて居る大さのものが拾個以上十五六位出來ます又製造の初めから木の箱に流し込む迄に四五時間かゝります。

右は洗濯石鹼ですが之れを化粧石鹼にするには濃厚な食鹽水を加へ、温度を與へて石鹼分を沈澱させ、此沈澱を布にて漉し、取り、少しく水を振りかけ、壓搾して水を去り、再び之れに少しの水を加へて溶かす樣にし、而して最後に種々皆樣が好む處ろの香料を加へて型へ入るればよいのであります、次に特種の漂白石鹼の事を御話して製造の事を終りませう。

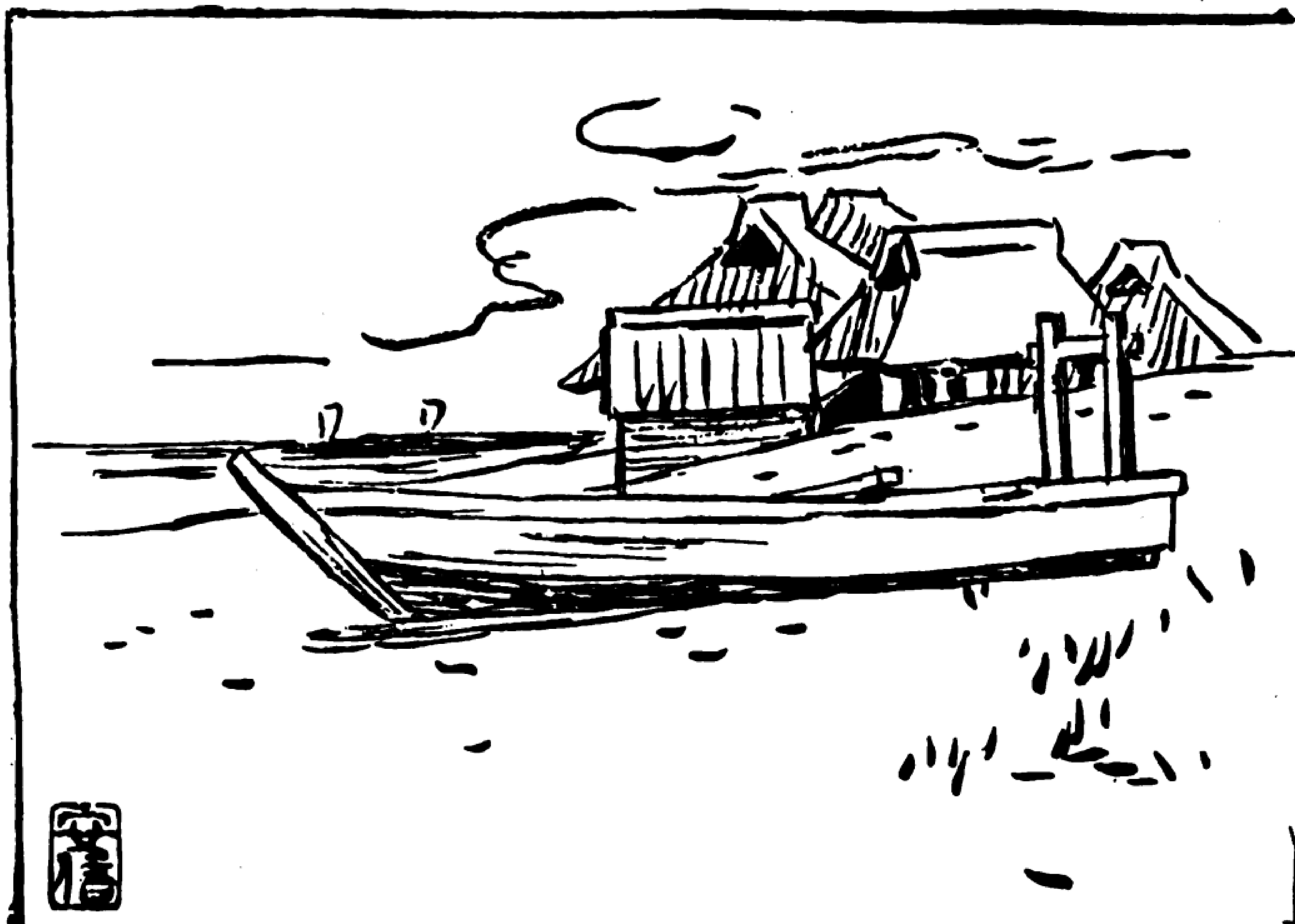
漂白石鹼は麥藁帽子や毛布等の汚れを清潔にする目的を以て製造したもので其製造方法は少し面倒ですが御自分で出來ない事もありません、其方法は前に述べた方法で作つた上等の石鹼を（上等の石鹼を購求してもよろし）稀薄な苛性曹達の溶液に溶かし置き、之れに濃厚で且つ清澄なる食鹽水を加へると石鹼が沈澱して來ますから此沈澱物を取り、布の上に置き、少量の水を撒布し壓搾して水分を去り而して此軟かな石鹼の塊に其重量の五分の一に相當する亞硫酸曹達の粉末を加へてよく練り合せて置くと、石鹼は段々に硬くなります是を適宜の大さに切つて貯へて置きます、さて此石鹼を使用するには先づ清淨にせんとする、麥藁帽子等を安母尼亞水を少し加へた水の内に浸して柔かになつた時取り出し、次に十分乃至十二分の水に前の漂白石鹼一分を溶かした液でよく洗ひ次に之れを二十倍位にした鹽酸液へ浸して置く事一時間にして取り出し、最後に之れを水で充分に洗滌して乾燥すれば奇麗になります。

△石鹼が皮膚に及ぼす影響

製造の事は先づ之れ位にして置きます、さて石鹼を用ゐると如何なる譯で身體が玉の樣になり衣服又は器物等が奇麗になるかと言ふ疑問が皆樣の頭腦に浮むで來るでせう、で其理由を少々申上ます元來石鹼は前述の通り、脂肪と苛性アルカリとの化合物ですから之れを水に溶解しますと脂肪酸の酸性鹽と遊離のアルカリ即ち苛性曹達が出來ます此二つのものが共に効用をなすものですが此時石鹼の分解する度が弱ければ石鹼の効力は少なく強ければ大いのであります、さりとて餘り強きに過ぎると苛性曹達の分量が多くなつて却つて布や肌を害する樣な事もあります、而して其遊離アルカリは肌や布に着いて居る汚穢物や脂肪分を溶かします、溶かすと同時に一度分解して出來た苛性曹達と脂肪と化合して石鹼を生じ、此石鹼が又水の爲めに分解されて苛性曹達と酸性鹽とになり、此苛性曹達が尙は殘つて居る脂肪と化合して石鹼を生ずる如く作用が循

覆して遂に肌や衣の脂肪分を取り去るのであります而して酸性鹽は汚穢物特に膏膩を乳汁樣の柔かなものに變化して水をして容易く之れを播攘せしむる樣に致します又石鹸をつけて摩るか揉むかしますと大變泡が出ます、此小さな泡が揉まれる毎に機械的に働いて汚穢物を擦り落します此外に石鹸は粘力を持つて居るから此爲めにも汚穢物が引き着けられるのであります。

斯樣の譯ですから皆樣が石鹸を御用ゐになる時唯徒らに澤山用ゐたからとて決して夫れ丈げ効力のあるものではなく、直に洗ひ落すのでは何んにもなりません着けてから永く揉むで居る程物が奇麗になるのであります。



皆樣は夏海水浴をなさる時分に御試めしになつた事がありましやう、海水の中で普通の石鹸をお使ひになると泡が充分出ないのみならず石鹸の効力がないのであります、之れ何故かと申すに海水中には常に多くの石灰分や苦土分を含んで居ります、此等のものが普通の石鹸を分解して自分が一種特別の石鹸を作つて、石鹸を不溶解性にいたしますから從つて効力がない譯であります。

△石鹸鑑定法

扨て之れから最も通俗的に石鹸の鑑定法二三を述べて、皆様が雲の様な奇麗な肌を御磨きになるに適當な石鹸の性質を御話致しませう。

尤も化學的に石鹸を分析して其成分なり、又有害無益の附加物等を定めるのは専門家の事でこゝに必要はありませんから皆様が御自分で出來る樣なものゝみ申上ます。

(一)石鹸は全く中性で酸性でもなくアルカリー性でもないものでなくてはなりません、苛性曹達等のアルカリ質のものが多く含まれて居る石鹸は使用に不適當です、かゝる石鹸は其端を少し切つて切口を一寸嘗めて見ると非常に舌を刺撃しますから、かく刺撃する度の強いものは可成注意して用ゐない樣にするが宜しい尚ほ詳しく見るには「フエノールフタリーン」と云ふ藥品がありますこの藥をアルコールに溶かしたものを石鹸の切口へつけて見て赤い色にならなければ至極好い品ですが其色の付方の多いものは餘り好ましくありません、之れ「フエノールフタリーン」と云ふ藥品は遊離のアルカリーに會ふと赤くなる性質を持つて居るからであります。



(二)石鹸には水が澤山含まれて居ます此水分は有害なものではないが水が多いと用をなす可き石鹸分が少なくなりますから、購入の時成る可く水の少ないものを擇ばないと御損です普通石鹸中には百分中二十より多きは七八十分の水を含むで居るものがあります、試みに市中で賣つて居る洗濯石鹸を買ふて來て日に當てゝ置いて御覽なさい、水分が段々蒸發して、石鹸は小さくなり、初めの大さの三分の一位に縮小するものがあります、水が多いと從つて石鹸は柔かい、故に成る可く硬い石鹸を御求めになるのが必要ですが、然し硬く見えても中々油斷の出來ぬものがあります即ち石鹸の内へ食鹽や硫酸曹達や、又時としては、洗濯曹達等を混じ石鹸を硬くすると同時に重量を多くして賣るものがあります、此等のものは何れも石鹸の質を惡しくする故注意しなければなりません。

(三)石鹸を水に溶かして見て溶けないものが多くある程粗品とは申されません、何故なれば時々石鹸の重量を多からしむると同時に廉價にする為めに粘土や細かき砂炭酸カルシユーム、硫酸バリウム或は澱粉等を澤山混入してあるものがあります、此等のものは白くなつて水に溶けずに居るからである。

以上述べた事柄を對照して石鹸の善悪を鑑定する事は大體御判りでしようが苛性曹達及び炭酸曹達は植物性の木綿の布を洗濯する時には多少餘分に含んでも構ひませんが、動物性の絹物や皮膚を洗ふには最も不適當であつて此樣な石鹸で絹布を洗ふと絹布は黄色を帶び皮膚は為めに粗強になります絹布を洗ふに適當な石鹸は大抵皮膚を洗ふにも適當して居ります。

現今市中に販賣して居る大抵の石鹸はアルカリーが殘つて居るか、又は種々不純物を混ぜてあるものが多い、曾て醫科大學皮膚科專門の某氏の言に、現今石鹸として適當のものがないのには困る、患者から尋ねられても之れと紹介す可きものがない、現に角人間の皮膚に最も適當と言ふものは全く中性で少しも刺戟性があつてはならない、皮膚病を患つて居る人は尚ほ更です、湯屋へ行くとよくアルボース石鹸を用ゐて居るものを見受けるが此石鹸は非常に刺戟性を持つて居る、成る程素人は皮膚を刺戟すると效目がある樣に思ふかも知れんが皮膚の為めには好ましくないと言はれました。

故に石鹸を御使になる方はよく注意して刺戟性のない(嘗めて見てもヒリヒリしない樣な)石鹸を御選びなさい。

▲汗の多い人の注意

おひおひ盛夏に向ひつゝある今日此頃、別けて勞働に從事するものは汗を流し脂肪を注ぐ次第であるが、それを洗ひ去ることを怠り、若くは洗ひ方を麁末にしおくの結果自然不潔に陥るより皮膚病を惹き起すこと往々あり、從て悪臭を放ち、また他の病菌に侵され易きことゝもなる、よつては成るべく汗は直に洗ひ去ること最も肝要なるは言ふまでもなけれど、しかし何人も心得居りながら、手の廻らぬより打棄て置くもの少からず、かゝる人にはくすり石鹸など適當なるべし、これは消毒用にも化粧用にも適し且つ臭氣をも防ぎ、多少殺菌にも功あり、おのづから病毒の侵害を避くる傾きもありとのことなれば身體の清潔法には目下の處比較的効能あるものと思ふ、それから外國では、足の汗止めとしてフオルムアルデヒード及びクローム酸などを用ゐるよしなれど、これが為めに汗腺を障害するもののゆゑ、ザリチール酸を用ゐた方よろし、また足の臭氣は靴を用ゐるものには格別多いのであるが、靴の臭氣止めには、フオルマリーンを塗りつけるとよろしい。

肺結核の豫防

肺結核を豫防法するに就て第一に勧めたきは水浴である、日本人は毎朝面を洗ふ習慣があるから、序に其冷水を以て、全身を拭ふ事にして貰ひたい、是は少し許り手數はかゝるが、その手數に代へられない偉大の効力があるのだ、殊に今頃から始めて行くと寒中までおッ通すのは、譯もない事である、又一つは口嗽である、これも毎朝行る習慣だから、序に其度數を殖やして貰ひ、朝一度の口嗽を増して、食後は必ず行ふ事と極めたら、頗る結構である、この二つは誰にも出來る方法で、而も大効力を顯はす事だから、必ず之を實行して貰ひたい、次には肺を丈夫にする爲めの肺臟運動法だそれには種々あるが、何の方法を執つても宜しい實行が第一である、兎に角、朝早く起きるのが肝要で、肺の運動をさせるには大きい呼吸を反覆すると非常に肺臟を丈夫にするものである、肺病患者の惡臭その物が直接害をする事は少いが、それを嫌に思ふ感じが害するのである、隨つて淺薄の呼吸は肺の筋肉を惡くする譯になるから、室内に於ける臭氣は、速かに驅除すべきでる、夫れから夜の空氣は毒であるかの如く思へますが中中さうでなく、夜の空氣ほど淸淨なものはない、病人などのある時は、時々窓の障子を明けて、淸淨なる夜氣を室内に入れる事に勉めるが宜い、殊に夏などは尙更必要である、終日閉居して、日光も浴びず、風にも吹かれぬのは、大に有害であるから、自ら奮つて外に出て運動を試むるのは肺病患者に取つて尤も必要の事である、宜しく之を勵行するがよろしい、其次ぎには不規律の弊を止めて酒を飲まずに古本や封筒や夜具にも黴菌が付いて居るのを、忘れてはならぬ。



美貌を得んと欲する淑女の心得

ドクトル　松本闇薫

▲美貌は婦人唯一の生命

古今東西に論なく、美貌は婦人の唯一の生命で、或意味にては一大資本の如く思はれる場合もあるので、時代に依り、國柄に依りて、美貌とする好尚にいろいろ相違はあるが、美貌と認めらるゝ標準に對しては、婦人といふ婦人は、老弱賢愚の別なく、孰れも全心を捧げて焦心苦慮するので有る。

爾して其の結果は、粧飾の上に現はれて來る、微に入り、巧を極め、文明と共に進歩をして居る。併しながら、粧飾は美貌の一部分であッて、決してその全部分では無いのである――粧飾は美貌の第一義では無いのである。

▲日本の婦人と西洋婦人

假に粧飾を以て美貌を得べしとせば、日本の婦人よりも、西洋の婦人が優つて居る、特に顔面の粧飾――化粧に於ては、余は最も日本婦人の粧飾の拙なるを思ふのである。

最も日本の婦人といへども、頭髮に就て注意する處

などは、遙に西洋婦人の上に出て居る。注意を置くと大なるが故に、髷には、西洋婦人に見られざる幾多の美點を發見するのである。といふのも、西洋の婦人は、帽子を用ゐるが故に、日本婦人の如く髪に粧飾を凝らす必要が無い故でもあらう。余は英國から歸つて、日本婦人が髪の粧飾に全力を注ぐのを見て幾多の趣味を感じたが、それと同時に顔面の粧飾が極めて幼稚であるのに聊か失望したのである。

▲自然美と人巧美

日本婦人の粧飾を見るのに、白粉をべた〳〵塗つてゐるのが、著しく眼に附く、濃艶と言へば濃艶であるが、斯くては婦人の氣品といふものが無く爲つて仕舞ふではないか、殊に口紅の如きは、最も拙劣で、紅を附けて居りますと言はぬ斗りに顯然たるは、決して粧飾に注意した者とは言へぬ。

西洋の婦人は一寸見た丈けでは粧飾を加へてゐるのである乎、如何歟、分らぬ位である、その眼や、その頬は自然の血色と些も異らぬので有る。焉んぞ知らん、西洋の婦人は顔面の粧飾に最も力を籠居らんとは、彼等の顔に何等の異彩を見ざるが如きは、却て其の間に幾多の苦心をなしてゐるのである、日本の婦人は粧飾を粧飾としてゐるが、西洋の婦人は粧飾を以て自然に同化することを力めて居るのである。

故に一言にして言へば、日本婦人の粧飾は人巧美で、西洋婦人の粧飾は自然美である。然かも余の眼を以てすれば、日本婦人の粧飾は、美を加へずして却て美を傷くるものであるやうに思はれる。口紅の如きは、その最も著しい例ではあるまいか。

▲婦人の一大謬見

以上は、西洋婦人と日本婦人との粧飾の巧拙を擧げたのであるが、粧飾は美貌の最上的であると思ふのは大なる謬見である。粧飾が如何に巧妙であるといつても、粧飾は矢張粧飾で、美貌の神髓を得る譯にはゆかぬのである。

思ふに眞の美貌は粧飾より來らずして、健康な身體から來るのである、虛弱な身體の婦人に美貌なるもの丶ある譯は無い。假令輪廓は十分であるとも、身體が虛弱であれば表情を缺き、憂鬱に流る丶は勢の免れざる所。よし青春の時には或は美貌であるとも、年の老ゆると共に、其の容色は索然として衰へる。所謂美人の運命の長からずして、悲慘に終る者多きは論より證據。

然るに、日本の婦人と言はず西洋の婦人と言はず、美貌を望むのは嘉すべきであるが、美貌の第一義たる健康に注意せずして、只管粧飾の末に走つてゐるのは甚だ不了簡の事で、余輩はこれを以て婦人の一大謬見であると信ずる。蓋し健康



を其方退にして粧飾の末に走るは、恰も土地の肥瘠に顧みずして美禾を得んとするに似て、愚の骨頂である。故に美貌を得んとする者は、先第一衛生に注意せねばならぬ。

▲美貌の第一義

美貌の第一義は、健康で有る。然るに今日婦人の美術とする粧飾を見るに、衛生と兩立しない粧飾が多いのである。

特に粧飾の第一位を占むる白粉の如き、ちよと見た所では、美は美であるが、皮膚を粗糙にして、年を經るに從ふて醜態が露はれる。美人薄命てふ事も、今日の粧飾法にては必然の結果で、或意味より言へば、此の白粉の如きも、薄命ならしむる一部分であらうかとも思

はれるのである。這は極論なりとするも、今日用ゐらるゝ粧飾法が衞生と兩立せざる一事は、何人も異義なき所であらう。——然かも東京の婦人は、美貌の第一義を忘れて粧飾の末に走つてゐるのは、慨嘆すべきではあるまい乎。

▲第一の注意

余は爰に東西婦人の陋見を破し、衞生と兩立する新美貌法を說ひて、教育ある婦人の參省を得やうと思ふ。美貌を得んとする淑女よ、卿等は美貌ならんと欲せば、先づ、

男子と同樣の食物を食せざるべからず

余の美貌法の第一條は之である。西洋の婦人に其の弊は尠いが、日本の婦人と來ては男子は男子、婦人は婦人、個々別々で、婦人は常に粗食に安んじてゐる。斯くては如何に衣服の美に全力を費やすも、食物にして粗惡であれば、到底美貌の人と爲ることはできない。加之、婦人の性格は、小供の體格に影響すること大なるが故に、今日の如き狀態にては、健全なる兒女を得る譯にはゆかぬのである。

男子と對等の食物とは、滋養分を含める食物を言ふので、身體に害ある酒、煙草、消化の容易ならざる牛肉、豚肉の如きを言ふのでは無い。余が美貌を欲する淑女に推薦せんとするのは、何れの家にても購ひ得べき米の飯、雞卵、雞肉、魚類、野菜、果實を適當に食せよといふのである。次には、

滋養を含める食物を適當に食すべし

と注意するのである。特に雞卵は筋肉の發達に裨益多きを以て、余は切に我婦人に之を薦む。魚肉も燐分を含めるを以て頭腦を明快ならしむる効あり、精神を勞する婦人には、極めて有効であらうと思ふ。野菜は、胡蘿蔔、胡瓜の如きは、不可なれども、その他の野菜は、大抵良し、特に大豆、小豆、鵜豆、紅豆などの如きは最も妙である、大根は大した効能は無いが、葱は黃金を含めるを以て、身體に利あり。

果實も大抵健康に益あり、特に西洋茄子は鐵を含め

るを以て血の不足を補ひ、林檎は燐分を含み、苺は鐵を含み、蜜柑は皮膚を滑らかにし、葡萄は便通に効あり。然り、葡萄は下劑の功があるから、多量に食して居れば、恐くは醫者の藥代は半ばに減ずるであらう。但し爰に一ッの注意あり

●●●●●●●果物の核は食すべからざる事である。葡萄及味柑の核の如き、過つて食せば、アッペンデ、サイチイスに罹りて生命を失ふの恐あり、現英國皇帝エドワード七世が、千九百二年の戴冠式に臨んで、此のアッペンデ、サイチイスに罹られ各國の使臣來集して、時日が確定してゐたるにも拘らず、一刻も猶豫すべからざるを以て延期せられたるなどは著しき實例で、必竟果實の核を食せられたる過失より來たのである。我國にては、地方の兒童など平氣で果物と共に食つて居るのを見受くる。知らぬこととは言ひながら、石を抱いて淵に臨んでゐると同樣、危險千萬の事共である、續ひて、



●●●●●●●食物の分量は八分目に止める事である、即ち十二分に食せず、七八分目に止めて置くことである。酒、麥酒、葡萄酒等健康に害あり、珈琲、茶の如きも神經を刺戟して不眠症に陥るとあり

食後は一旦沸騰せる白湯又は麥湯を一杯位飲むのは、消化に益が有る。

▲第二の注意

以上、余輩は美貌を得んとする淑女に對して、食物の注意を述べたり。次いで美貌を欲する淑女は、

氣を靜かにして熟睡すべし

といふ事である。夜は早く床に入り、朝早く眼を覺ますべしといふ事、少くも八時間は熟睡せねばならぬ。寐るにも寐樣あり、仰向に寐ては健康にわろし、右を横に向ひて寐るやうに爲ねば不良ぬ、夫婦同衾したり或は子供と伴ふて睡るが如きは、弱者の勢力を奪ふの弊あるを以て、最も惡い。寢室は出來べき丈け空氣の流通に注意し交換を能くするやうに力めねばならぬ。斯くて氣を靜かにして熟眠せば、心氣爽然として、おのづから美貌者と爲ることが出來るのである。

▲第三の注意

美貌者たるべき第二注意は、熟睡であることは前述の如し、第三の注意は

身體を清潔にすべし

といふことである。毎週少くも二回は湯に入るべし、熱き湯は皮膚を害するの恐あるを以て、餘り熱からざる程度の湯に入るのが良い。冷水浴も皮膚を硬くするから考物である。食後二時間内は、入湯は愼むべし。なほ一ツの注意は髮など洗ふ時は、手拭を以て水氣を去るべし、油斷して居れば、之よりして風邪と爲るなとは珍らしく無い。

▲第四の注意

美貌を得んと欲する淑女は、第四の注意として、

新鮮なる空氣を呼吸すべし

といふことで有る。新鮮なる空氣を呼吸することは、滋養物を食すると同一の必要條件で、余が新美貌法に於ては、最も重要視して居る、西洋の婦人は、常に空氣に就ては注意を拂つて居るが、我婦人と來ては、美貌を欲せらるゝに拘らず此の空氣の上には大なる價値が拂はれぬのは殘念千萬。而して空氣を呼吸する時は、口よりせずして鼻より呼吸するやうに爲ねばならぬ。斯くの如く常に注意を怠らざれば、例令は電車内にて

も、隣席に肺結核の人あるも、感染仕ない。

なほ讀書等の場合には、光線に注意するのが肝要である。

▲第五の注意

以上、第一より第四迄の注意は、専ら身體上の注意であるが、第五の注意は、聊か性質を異にして、

精神を平和に持つべし

といふ精神上の注意である。心配、嫉妬、憤激、過度の喜び、凡て健康に害あるのみならず、美貌を欲する者には、大禁物である。余は常に名工の畫ける美人の肖像に接して、その容色の美に打たるゝよりもむしろ其の顔面に現はれつゝある平和の姿、嫉妬なく、心配なき平和の相に憧れるのは、おのづから美貌の眞諦を得て居るのである。



▲第六の注意

美貌を得んと欲する淑女は、第六の注意として、

適度の運動を試むべし

運動！ 運動は我婦人の最も輕視する所ではあるまいか。室内運動としては、余は亜鈴などは婦人に適して居ると思ふ。次は散歩である。然かも規則正しく試るやうに爲ねばいかない。

要するに美貌は健康に基くものであるから、出來べき丈け衛生上の注意が肝要であると同時に、精神を快

活にして物に滿足するやうに有つて欲しひのである。

左に以上の所說を概括して美貌を得るの根原たる健康上の心得を擧げて、美貌を欲する淑女の參考に供す。

1 良心に恥づべき行爲を爲さゝる事
2 激怒せざる事
3 憂欝の思念を去る事
4 心配せざる事
5 不平の念を去る事
6 猜疑嫉妬を排斥する事
7 過度に喜ばざる事
8 人を恨まざる事
9 懶惰ならざる事
10 貞節を守り情慾を制する事
11 健康に害ある飲食を爲さゝる事
12 過食暴飲せざる事
13 食物は急いで食せず咀嚼して食する事
14 新鮮なる空氣の充滿せる室内に眠食し又は起臥する事
15 一日八時間乃至九時間熟眠する事
16 身體を淸潔に保つ事
17 不健康なる家屋に住せざる事
18 不健康なる職業に就かざる事

美貌を得んと欲する淑女は、此の十八ヶ條に違背せざるや否やを顧みて能く之を行ふを得ば、眼は淸しく頬豐かに、自然の美貌を保つと受合。醜惡なる粉飾を事とする必要は無いのである。……健康と美貌とを併せ得ば、此世は天國である。

▲人生の幸福は美貌に在り

曾て或學者は人生の幸福を數へて、第一の要素は健康、第二の要素は美貌、第三の要素は正當の手段にて得たる富、第四の要素は名譽なり、といつたのを記臆して居る。第一第二の要素を實行し得ば、第三第四の要素はおのづから到來する。——余は女學世界の讀者に告ぐ、人生の幸福は美貌に在りと、然かも余輩の所謂美貌は、健康と併せ立つ美貌を謂ふので、今日の婦人社會に行はるゝが如き粧飾より來る美貌では無いのである。

斯くて美貌を得たる婦人は、富を得べく、親友も得べく、人生の幸福は之を一身に集むることが出來るのである。

夏期休業と歸省

暑中休暇これ實に學生の耳には愉快なる響を與ふる文字で、寄宿舍に一ヶ年を送りし女學生には、殊に然りであります。かゝる女學生中の多數は、得意滿々として父母の膝下に省します。さて此歸省女學生に對して家庭殊に父母は如何なる態度に出でんとするか。思ふに此二ヶ月有餘の時日は彼等女生の將來に關係する所極めて多く、實に未來の賢母良妻たらしむると否と、將たまた休暇後の講學上に重大の影響を及ぼすものであれば、爰に私見の一二を陳じ、以て父母たり兄姉たる人々の參考に供します。

家政實習

をなさしむること。暫く見ざりし愛女の歸鄕せることなれば、殊に窮屈不便なる寄宿舍生活をしたこと故「せめても歸省中は」とは、多くの親々の慈愛心で、出來る丈愉快に、又自由に送らしめんことを欲しまする。これ親心として無理ならぬことですけれども、これ所謂盲愛であつて、眞に父たり母たる者の態度ではありませぬ。最も初めの一週間は、靜養せしむること必要あるかも知れませんが、先づ學校で習ふたことを出來る丈實際に練習せしめ、炊事の如きも手傳はしめ、或は洗濯のとも或程度まで理科學的應用をなさしめなければなりません。或家庭では炊事洗濯の如きは下婢等の勤めであるし、又それ〴〵人もあり、又令孃としてかゝる下賤なることをなさしめずと云はるゝもありませう、されどこれ大なる間違です。すべて人を使ふものは己れも亦た其心得なかるべからず、「芋の煮へたも御存じなき」奧樣では家政の整理は到底完全になし得るものにあらず、故に父母は出來る丈是等のことに關係せしめるとが大切です。さて爰に注意すべきは、學校で習ひし料理法は理屈上のことで、實際に應用の出來難きとまたは不經濟なる、こともありませう、是等は親たるものゝ深く注意し實際的に又經濟的に教へもし、正しもしなくてはなりません。かくてこそ學校と家庭との聯絡もつき、學問と實際との調和も出來得るのです。此夏の始頃某銀行重役の妻女に會ひましたが、其人は「今年も子供等の爲め海濱に行ふと思ふて居ますが、下婢は十二になる小間使一名丈しか連れて行きません、家の大抵のことは娘(高等女學校の生徒なり)にさせる積で御座ひます、それから丁度私の知つて居る看護婦も近處に居りますから、この二た月許は娘に看護法を此人から習はせる樣にしてあります」と告げました。斯る思慮深き母をもてる女子こそ幸でありまする。親たるものゝ注意せざるべからざるは女子の

入學せる學校

に依て夏期中の注意も多少異ならなければなりませんと云ふことです。之を一般よりする時は官公立の學校に入れるものは、日常規則正しく且器械的に養成せられて居るが故に、歸鄕するや其日常と正反對の動作に出ることが多い、これ親たるもの實に注意せざるべからざる所です。

日課及讀み物

に就ては一日朝の中一時間或は二時間ば

必ず嚴格に規則正しく復習なり新知識なり得せしむる樣殊につとめざるべからず、「暫くでの歸宅ではあるし、娘もさぞ疲勞して居るだらうから、まあ〳〵ゆつくり休まし又た遊ばしめよ」と、これは親心として無理ならざることですけれども、時に或は此のまゝお流れになるも少からず、されば娘には誠に氣の毒のことあるかも知れませんも旅の疲まだ全く脱し去らぬ折より實行せしめるよろしい。次に休暇中は學科の書物を好まず、雜誌、小說などを讀まんと欲するが如きです。是等は知見を廣むるに於て又人情を知るに於て必要かも知れませんかも其書籍の選擇に充分の注意を拂はなければなりませぬ。世事に疎き彼等は思はぬ危險に陷ることあるべければ、兎に角親々は「彼等は未だ理想（寧ろ空想か）の人なり、世態人情の眞想を知らざるものなり」てふことを是等は深く留意せざるべからずと思ひます。

歸校期

を誤らしめざることです。某女學校の教頭曰く「例年此歸校期を誤る者が多ひのに困ります、學校に於ては夫々授業の準備を整へ、生徒の揃ふを待て居りますが、いざ始業となりますと、一日二日は無論のこと、中には一週間、十日も後るゝ者もある、是等は誠に不都合であります。成る程始業早々ですから、課業に於ても左程の差もありませんが、學校の方では統一或は多くの報告の爲め、少からぬ不便なるのみならず、生徒の精神上にも多少の影響を及ぼすのです、一日も早く膝下に置きたいのは父母の情でせう、少しにても涼氣がたつてからと思ふのも親の慈心ですけれども、今は勉學の時です又良習慣を養はるべき所ですから、父兄たるものは時が來たならば即ち始業日には屹度學校に通はせ、又は寄宿舍に歸してほしいものです」と此の如きことは僅かの事の如くなれども其實少からぬ關係あるものですから、病氣或は家庭に或事情ありて止むを得ざる場合の外必ず其時を誤らせてはならぬ次に長き休暇の間彼等に一種の惰力が附き、不規律となり易きものですから、父兄に於ても大に注意せればならぬ事ですが、實際に於て斯くなせるものは實に少く、多くは遊び癖又は朝寢の癖、其他樣々あるものなれば、休業當初より注意せざるべからざるとなるも、開校期近かば十日或は十五日後の勉學又は規律の習慣を呼び還さしめなければなりません、子女の可愛いさに「もう十日しかないから思ひきり遊べ、あれを飲めの、これを食へ」と云ふが如きは實に不慈悲なる親と云はればなりません、吾人の觀察した處を以てすれば、歸校後生徒中に胃病を起すもの、又一ケ月間許り課業に不忠實なるものが多い樣です、敢へて皆然りと云ふべからざるも多數は盲愛の結果の然らしむる所なるを斷言します。其春期、冬期等の休業も是を參照なさいませ。

●女子音樂講習會　神田神保町東京女子音樂傳習所にては、教職に從事せるもの其他一般女子音樂志望者の便をはかり、八月一日より廿日間神田和强樂堂內に講習會を開き、主任講師は鈴木毅一氏にして、樂器使用と理論を教授し、會費は壹圓五拾錢にして、科外講義もある由、志望者は會費を添へて七月廿八日迄に事務所に申込むべし。

女子と繪畫

（黑田清輝氏談話）

（問）近頃大に女子の美術教育が盛になつた樣ですが、これは有望の傾向でせうか。

（答）無論有望の傾向ですが、見樣に依つて有望といふ意味が異つて來ます。

（問）私の問うたのは、箇樣の意味です。女子は美術教育、例へば繪畫を習うて、十分に發達しませうか、成功の見込がありませうか。

（答）其の點から言ふと、將來有望であるか、什麼か實は疑問であります。古來女性で美術界の大家となつた人は、實に稀であります。他の美術では如何であるか知りませぬが、兎に角繪畫界では、殆ど無いと言つても宜しい位です。

（問）古來女性の大家が無かつたから、是れから先にも大美術家は出まいと推理するとは出來ませぬか、將來は如何になるものでせうか。

（答）勿論、將來女流大家が出來ぬと斷言するとは出來ませぬ。併し私の考では今日の女子一般に、結婚と言ふ考が無くなつた曉ならでは、男子と相列んで、遜色の無い程の女流大家は出ないだらうと思ひます。既に結婚すれば、一家の整理を司らねばならぬ。其の中には子供も產れる、之れを養育せねばならぬ。斯樣に忙しい身となつては、美術の硏究など、決して出來るものでない。如何に時間上、財政上に余裕ある身でも、一家の女主人たる以上は、相當の家事的責任あるもので、其の爲に、腦力の大部分を使はねばならぬ、既に腦力に充分の餘裕がないとすれば、美術の硏究などは到底出來るものでないと思ふ。若し結婚せずして一生獨身で送る氣ならば、或は美術の蘊奧を究めるとも出來ませうが、其の結婚と言ふ目的を、女性の胸裏から、根本的に芟除するとか、果して出來ませうか。

（問）これは到底出來ないと斷言する方が、實際に近いと考へますか、然らば如何なる點で、美術教育は有

望でありませうか。

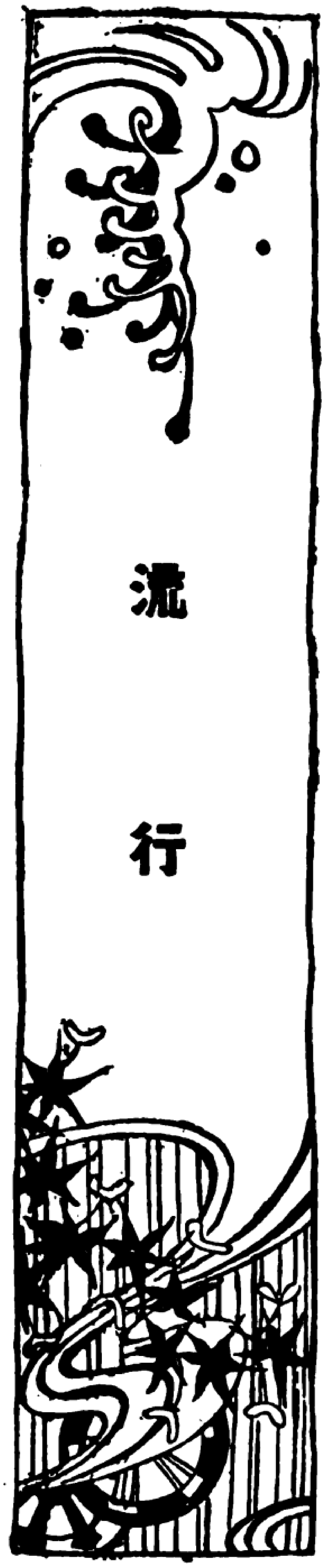
（答）社會一般の實術的嗜好を開拓すると言ふ方面から見て、此の盛況は大に怡ぶべきことであると思ひます。無論一家庭の女主人公となるのであるから、其の家庭の美術的嗜好を高進するに、與つて力あるは、言ふ迄も無いことです。夫が如何に美術賞鑑の眼なくとも、妻の力で、夫の力を備へしめることも出來る。復た子供が出來ても、之れに美術を樂むといふ性向を養成するとも出來る、また衣裳の模樣とか、室內裝飾とかを、美術的ならしむることも出來る、箇樣の方面には、却つて女性の方が、男子よりも成功するものである。將來は社會に、斯樣の家庭が、ます／＼增加したならば、社會一般の美術的嗜好は、一段と進步する。其の進步が、軈て大美術家を出す一因となるものであります。女子の爲めの女子美術敎育は、夫程有望でないにしても、將來の美術界を發達せしむる方面から見て、大に有望であると思ふのです。

（問）佛蘭西などは美術の盛な國ですが、女子で繪畫を學ぶ人は定めし多い事でせう。

（答）澤山あります。併し何れも繪畫研究が目的でなく、丁度我が國の上流の婦人が、遊藝の一として繪を習ふ樣に、只たしなみの一つとして勉强して居る樣に見受ます。亞米利加の婦人は少し異つて居る、巴里にも、隨分多く彼の國の留學生が居ります。恐らく數から言へば、他國の及ぶ所でないでせう。それで孰れも繪畫を以て身を立てむといふ目的を有つて居る樣です。これは米國の國柄が、荐りに女子の獨立を奬勵して居る故であらうと思はれます。全體亞米利加の婦人よりも巴里の婦人の方が、繪を畫いて巧みの樣に思ひます、夫れには種々の原因も御座いませうが、私は第一土地と風土の關係だかとも思ひます、巴里の公園に行つて見ますと、實に立派なもので、とても日本の日比谷公園などの考へも及ばぬ所で其他郊外の風景でも、人の風俗でも餘程優美の所が御座まして、歐羅巴中佛國が一番奇麗の人が多い樣に見えます、それ等の關係から、自然美術の發達を促したかとも思ます。

蚤の一代記

蚤も他の昆蟲類と等しく單に成蟲即ち蚤の形體のみにて一生を送るに非ず、卵、蛆、蛹及成蟲の四大變化をなすもので、小蟲ながら案外に智識を有し、其體を安全の場處に置くから、人が容易に之を見ることは出來ぬが卵は楕圓形白色で粘着力を有し、一產期に大抵十二個を生み、其卵は虱などゝは大に趣を異にし、獸物、疊又は塵芥の中に生みます、斯くて六日を經過すれば孵化して蛆に變ずるもので、幼蟲は頭及十二個の關節より成れる、白色無足の體軀で、全身に疎毛を生じ、頭には短小なる觸角と、咀嚼に適する齒を有し、最後の一節には、二個の鉤が備へて居ります、斯る形なるが故に、運動するには全身の毛と、後端の鉤を用ひ、食物は主として動物質を取り、時に植物質に依賴することもあり、蛆は夏なれば大抵十二日間にて、充分の成育を遂げ、塵埃の裡に在りて絹絲の如きものを吐き出し、小なる繭を作りて、其中に蟄居し、間もなく皮を脫して蛹となります蛹の形は頗る異樣で、背部著しく隆起するに止まらず、何の用をもなさゞる六本の脚が出て繭の中に在ること八日乃至十四日で成蟲となります、普通の蚤は、初め灰白色を帶ぶれど、須臾にして其本色たる黄赤色に變じ、血を吸ふ機關も玆に初めて生じ、蚤の發生して人を苦しむるは大抵四月頃で、其後漸次減少するも六月に至り再び增加し尖で又減少し七八月の交第三回目の蕃殖をします、併し氣候や風土の關係に由りて多少の遲速もあります、大都會を形造りて、蚤の棲息する箇處は、決して屋内でありません、蚤の都は意外にも、海邊の砂の中などに在り、若し風光の明媚と新鮮の空氣を慕ひて、海濱を逍遙するものありて、蚤の居る所に到ると、其人の體軀は忽ち此小動物の新殖民地となります、蓋し海濱には、魚類其他動物體の碎片多々散在して幼蟲を養ふに屈强の地であるからであります。



婦人の旅行用具

觀風子

青葉凉しき今日此頃は夏衣の袖輕く、旅行鞄の提帶衣類も嵩ばらず、旅行家には適切の好季節となりましたから、今年最近の婦人用旅行携帶品の流行を申上げやう。

△旅行用化粧鞄

暑中休暇を利用して歸省される女學生、都の紅塵を避て海邊に遊ばれる婦人を問ず、お化粧は嗜みの一ツだから化粧品の收容器が必要です、之には嵩張らない化粧鞄に限る、外裝が洋式で内容が日本風であるから鬢櫛、毛筋棒を始め白粉、石鹸、齒磨、楊子、耳掻、丁子棒、懷中鏡、香水まで、此鞄の中に收容さる事となつて居ますが、其の價格は三圓五十錢以上で、孰れの西洋小間物屋にもあります、其の鞄の中へ收容する所の化粧品は、前號の流行案内に見えたから省きましてこゝには二三の遺漏を補ふ事にしましやう。

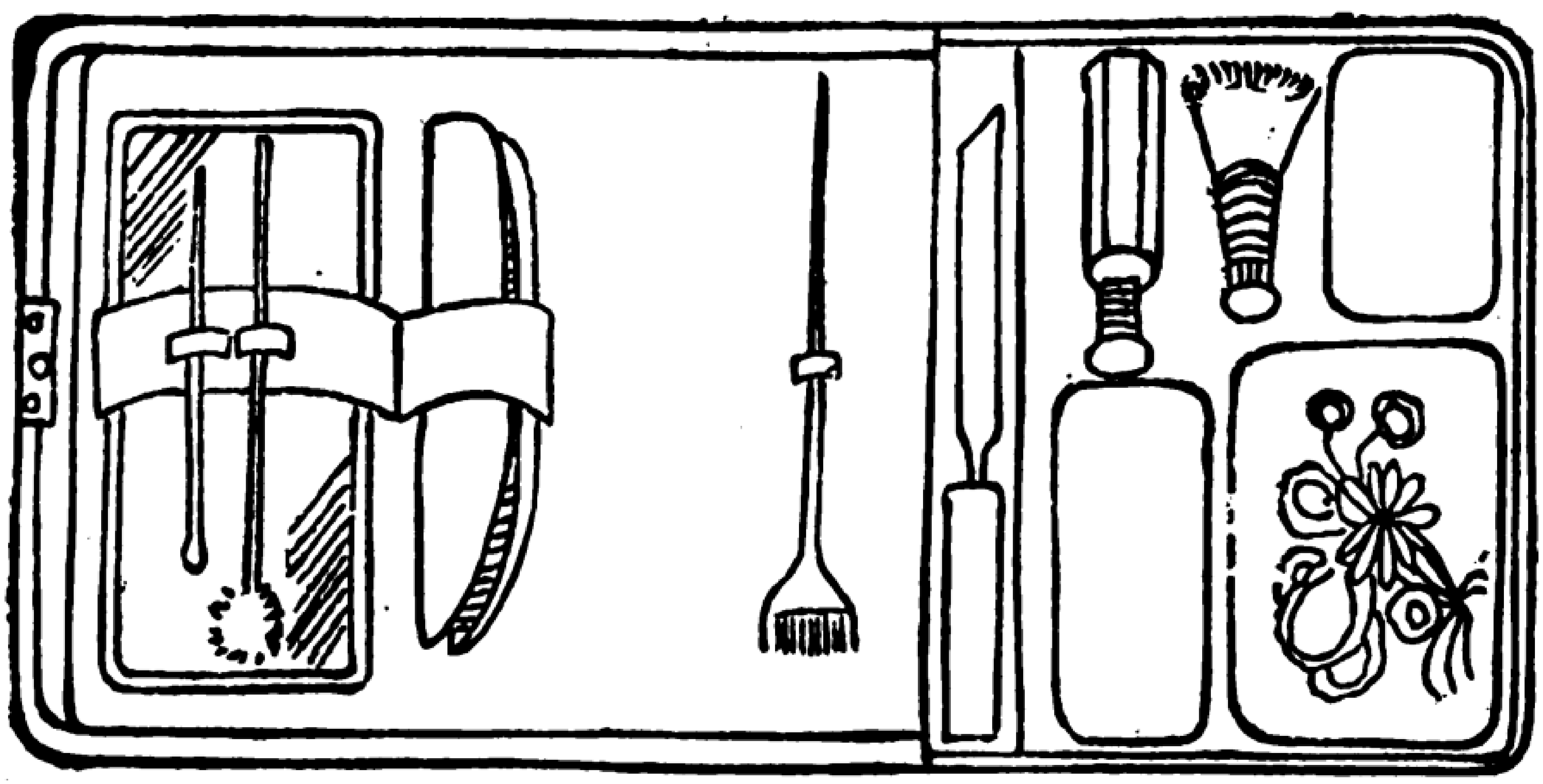
△新輸入品の化粧品

香水や香油は殊更に申し上ないが、梳油代用にはホメイードと云ふ煉油が良い、コスメチックを愛附とするハイカラ嬢も、此ホメイードには氣がつかれぬ尤も新着の舶來輸入品で代價は纔に二十錢、旅行用には當式伽羅油より高尚で良い、それにツースペンシルーと云ふ齒掃除の棒ですが、頗る衛生的なものです、クラ

プ洗ひ粉や西洋髮洗ひ粉は、旅行用として缺べからざるものですが、價格はいづれも十錢です。恁う云ふ化粧品は三越呉服店に陳列してあるから、實物を御覽の上に御購求なされるがよい、それから相變らずの流行は紙白粧雹の羽根であります。

△浴室要具の流行品

平面圖



婦人用皮製、旅行用化粧道具
香水、石鹸、白粉、齒磨、扇子、白粉ハケスウ豆、櫛、鋏、耳カキ、

入浴用に必要なのはタオルである、此タオルに入浴用と湯上りの二種あつて、入浴タオルは一葉十六錢より五十錢、別に之には新流行はないが湯上りタオルには流行があります、其の新形とするのは縞物又は摸様の織出したのを、一般に嗜好すると云ふ傾向ですが、舶來品で一枚七十錢位より一圓五十錢までである、それから垢擦には護謨海綿が最近の流行ですが、一個一圓以上で不經濟極る所から、海綿入タオル垢擦と云ふのが出來ました、價格は二十五錢、廉價の上に、皮膚の滑かな婦人用には尤も適して居ます以上は湯治場へ行れる方の携帶品で海水浴用には嶄新の流行品があります。



中麻製ハンカチーフ

△海水帽子と海水着

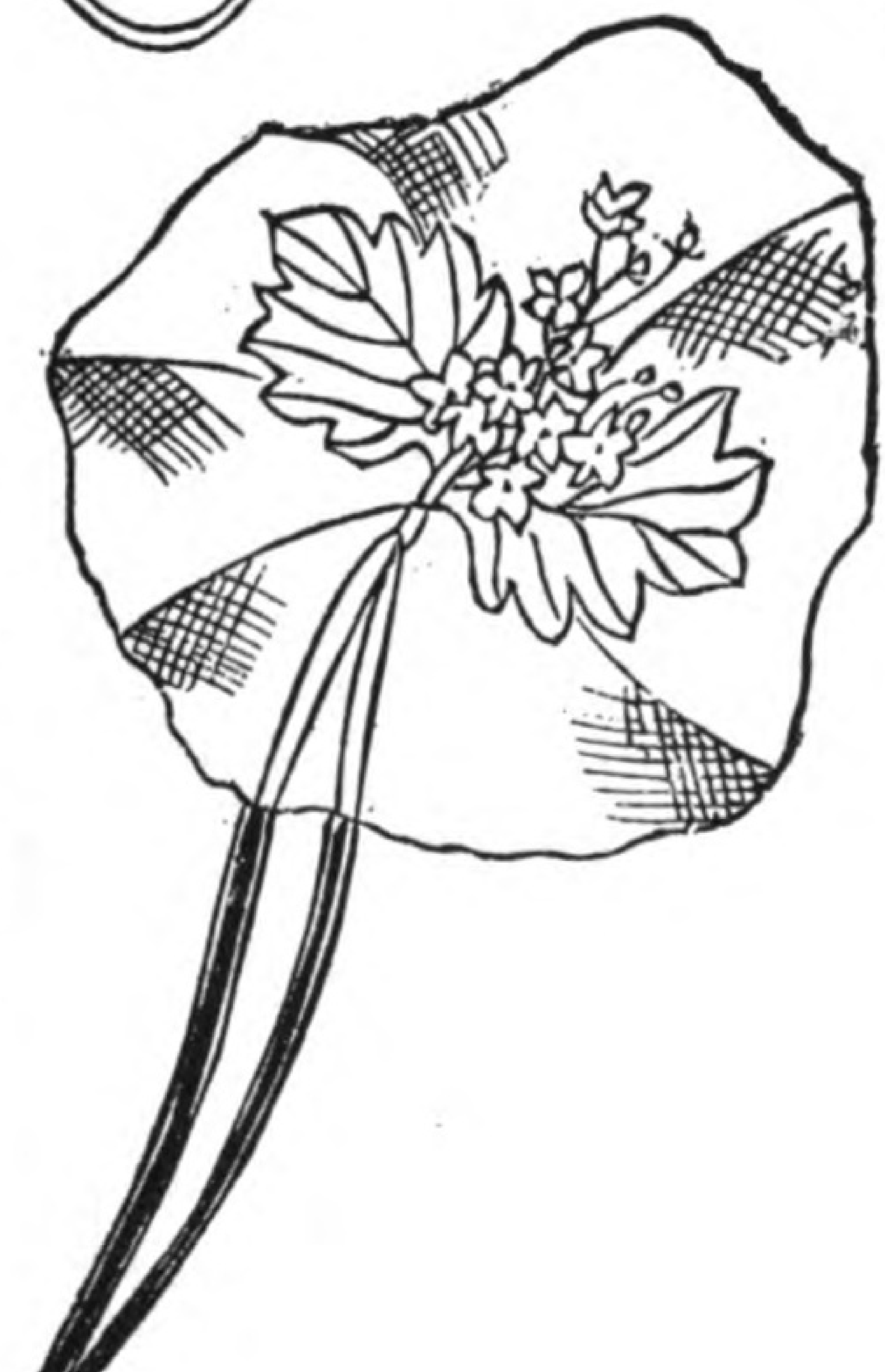
海水帽子は本年始めての新輸入ですが、歐米の婦人社會には既に行はれて居る相です、其の體裁は護謨製の大黒頭巾で、之を頭からスッポリと被れば、海水で頭髪の濡る事はない、之も大した高價でもなく一個一圓廿五錢、海水着は莫大小で猿又と襯衣と連綴したもの、價格は一着一圓八十錢内外で、黒地か∖つた物が流行の傾向です。



新製品、束髪用簪　金三十錢前後

△汽車用の携帶品

汽車へお乘遊ばすのには、膝掛と空氣枕でありますが、膝掛は薄羅紗とセル地、無地物よりは格子縞と云ふ嗜好、價格は五圓以上十五圓までだが、膝掛のみでは長距離の乘車には耐られないから、空氣枕の必要を感じます、此枕は夢を貪るよりは座蒲團代用とするのです、併し空氣枕は綆紗地が尤も流行です、其の價格は二圓内外。

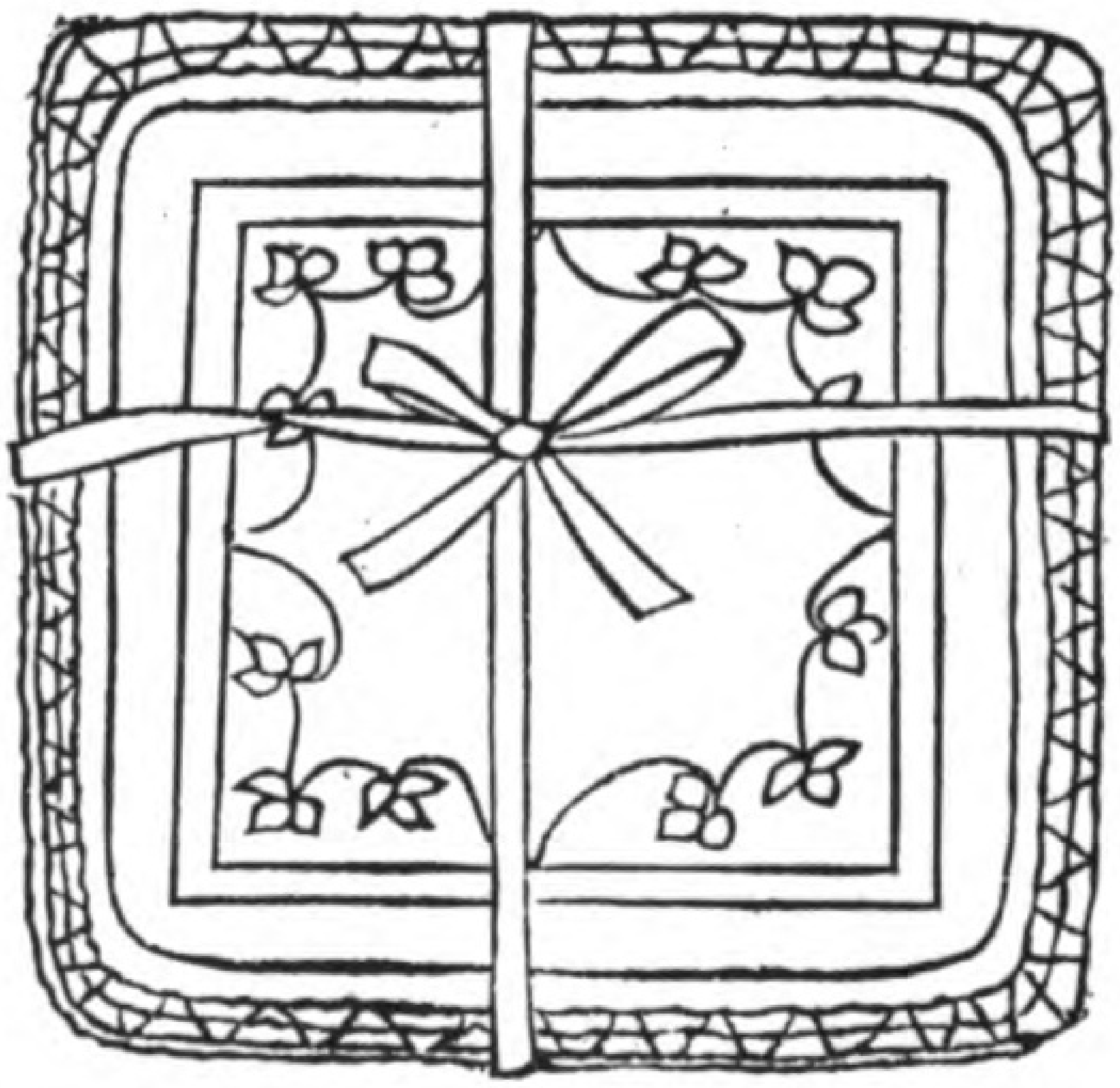


同　上

△肌着と肩掛……手套

夏の旅行には肌着襯衣を携帶遊ばさねばならぬが、其の肌着はクレーフが尤も流行で、一枚一圓五十錢以上三圓五十錢、それから夏肩掛佛蘭西縮緬レース附、

又はシホンやチユール製のボアーなどが、本年の新流行品で價格は先づ四五圓、色合は鴇色、クリーム、鳩羽鼠、其他は白黒と云ふ嗜好で、ハイカラには多く縞物を需用する相な、夏手套はレース製の半手套で、一雙廿五錢より一圓位まで、種類は麻製…絹製…綿製の三種に限られて居る。



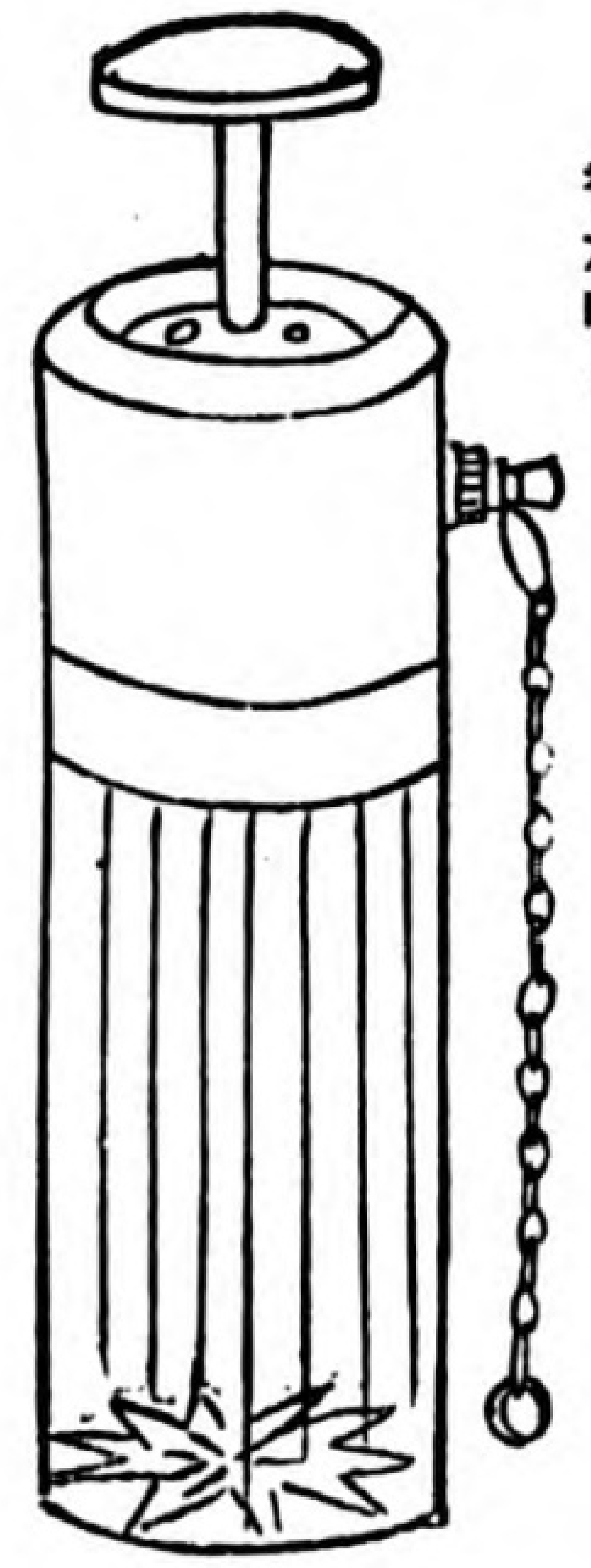
麻製ハンカチーフ

△暑中の携帶品

暑中に缺べからざるは手巾ですが、之は相變らず本麻と半麻で、本麻は一打三圓…半麻は二圓内外です、それから濡た手巾や濡た手拭を收容する、スポンジパツク則ち護謨製の袋が必要でせう、其他は裁縫用の鋏、糸卷、米利堅針筒、又は手廻りの洋刀…毛拔等は缺べからざる品です、尙旅行の徒然に寫眞器械や水彩畫具、之等はお慰みに御携帶あるがよし。

△流行の婦人用鞄

旅行には衣類及び携帶品を收容する鞄が必要ですが此鞄の流行形は婦人用としては、弓形合切鞄と平屋根形と云ふ鞄に限る、其の寸法も一尺三寸より八寸まである、合切鞄は五圓五十錢以上三十圓、平屋根形は十五圓以上三十五圓までであります、經濟的なら柳行李、竹行李でも鞄の代用をするのだ、多額の金錢を鞄に費消するのが潜上の沙汰だと思召たら、柳行李や竹行李が平民的で宜しからうが、それも之も風采と相應しないと滑稽に失するの嫌ひがあらう。



香水噴き

△旅行鞄の説明

化粧品の一切を間に合ふようにしてありますのは先づ旅行用化

粧道具です是は至極便利に出來て居ります五寸と四寸位ゐな皮製の箱で開閉も自在で携帶も手輕です、香水、石鹸、白粉、齒磨、刷子、白粉ハケ、スツ立、櫛、鋏、耳搔き、等で、三圓から五圓位であります、空氣枕は裏はゴム引きで表が品の好い更紗形で出來て居ります是は一圓九十錢位です、其から、今迄は信玄袋、敷島袋が流行でしたが新製品としてはオペラパツクと申す新形で是は口に金具が附けてある爲面白い趣向で開閉も自在です其に友仙縮緬、緞子編物の類で種々あります。

ハンカチーフは麻製のレース付きが二圓七十錢、半麻製ヘム付、エンブロイド、で二圓四十錢(一ダース)シルケツト製プリントヘム付きで一圓七十錢、皆更紗形の小模樣付きで恰も絹かと思はれる位ひで美しいものです是はリボンで結び體裁宜き箱に入れてありますから御進物用にも誠に適當と思はれます、スポンジ入りのメタル製垢スリ、は入浴などには便利です代價は二十五錢、白粉は水白粉でペンセと申のが餘程宜ろしい香りも淡白で夏期用には非常に適當です紅白二種あります、代は二十五錢位、其れから齒を磨くには、ツースペンシルとて固形體石筆の如き形をしたるものですが齒の衞生上又美觀上必要の品です一本四十錢、髮を洗はれるのは夏期は殊に多いのですが粗暴なるものを用ひられますと髮の艶を失ふとが往々ありますで是は注意すべきことと思ひます洗ひ粉にも種々ありますが、クラブ洗粉と申のが非常に宜ろしいので是は日本製としての優品でしよう、日常、顏などを洗ふに使用しても適當して居りますから便利です十二錢と二十錢とあります。

夏期に限らず衣服を簞笥などに仕舞つて置かれる時は、ゼルメンシーダを二三個紙に包みて入れて置きますと香りの高尚なのと虫杯を除ける爲め是非必要です又平常、懷中しても宜いように出來て居ります圓い固形體で瓶に入つて居るのです代價は和製で、六十五錢、舶來品で八十五錢位。(以上三越調べ)



オペラパツク

新流行の納涼具

團扇や扇子偖は在來の岐阜提燈を殊更に納涼具と云ふのも可笑やうですが、實際暑中に涼を納るゝ器具ですから露骨に標くは名命したのだ、先づ

▲團扇――は相變らずの流行が玉子形で、意氣向き則ち花柳界の進物用は、小玉子と云ふ形が流行の趨勢です、今年より新意匠で製造したのが大内形と稱する團扇です、此團扇は玉子形より稍巾廣で、同業者間では單に九寸と稱して居ます、天保以降に流行した昔形の團扇の再製で、之へ改良を加えたのだから、團扇の窓が櫛形の切り透しになつて居るのだ、之が團扇界の新形として歡迎されて居る。

それに團扇の畫圖であるが誂ひ物は別として、堀江町や四日市の仕入問屋で製造したのは、一時流行した今様美人は衰頽氣味となり、新版は孰れも元祿模樣や元祿美人と云ふ趨勢で、一般の流行とは一年遲れと云ふ有樣です、之は地方向きを適込むから何時も然う云ふ傾向となるのです、それに團扇の緣紙も色變りと云ふ好みであつたが、昨年は友色の紙を用ゆる事となつて居ます。

其の他に挿描、蘆描、絹張團扇等もありますが、外國土産に過ぎないから殊更に流行もないのです、さて團扇問屋が、自家製造の團扇の柄に烙印を捺す事が流行ですが、此烙印の始りと云つたら舊時の團扇張は孰れも幕府の御家人が内職として居たのですから、誂ひ團扇を他店の仕入團扇と間違はないやうに、殊更に烙印を捺たのが習慣となり、それが一變して今日では團扇屋一般の記標となつた相です。

▲扇子＝扇子の本場は京都に限られて居たのも、今日では上等扇子は東京製となつて居て、關西地方の製作品は下り扇子と稱し卑しめられて來た、それから婦人持の扇子は一般に平骨と定り、上等が象牙骨で次品がポンと稱す馬骨製、塗骨では若狹塗が最上品、其他は煤竹骨…胡麻竹骨…晒竹骨となつて居る、所で地紙だか絹張、雁皮紙、地漉雁皮の三種に分れて其の價格は、象牙骨絹張で地紙模樣は金無地、モミ金、雲形、天地金、泥引などで、一本三圓内外と云ふ所だが模造品のポンとなつたら、同じ體裁で一圓二三十錢、塗骨の雁皮張を塗潰して、肉筆で草花を描いたのが地張製で一圓内外、之が下り扇子であつたら纔に三十五錢で買得られる、然んな按排だから何所の扇子屋でも、下り扇子を鬻ぐやうな傾向です此雁皮張は地漉本漉に拘はらず、地紙の無地は艶地、布目、香ひ入が相變らず流行して居ます。

▲涼提燈＝涼み提燈は岐阜産を本場としてありますが、昨年は名古屋製の方が多いやうです、孰れも之を岐阜提燈と瞞着して鬻いて居る、併し品質は比べ物にはならず名古屋製は粗惡だと云ふ話してある、一時の二重張などが流行しましたが、點火が暗いので普通の張方の方が賣行きが宜い、それに寸法も尺と八寸があれど、都下で流行するのは八寸に限られて居ます、それに涼み提燈の本年の新形は、元祿模樣と云ふ事ですが之も團扇と同じく、流行は一年遲れとなるのですから、本年の新形は桃山模樣だと、或る提燈屋は呟やいて居たのだが、實際流行遲れの新形よりは秋草の方が、高尚で涼み提燈に適して居るから、新形と云ふ元祿模樣よりは秋草物が、一般に賣行きがよいとの事。

▲樂石社の吃音矯正傳習　兼て吃音傳習に熱心なる伊澤修二氏は、是迄小石川金富町の本社及相州酒匂の別邸にて傳習をなしつゝありしが、本年は暑中休業を利用して專ら學生の爲めに、熱心懇篤に傳習すると云ふ、入會希望のものは同社に照會せば直ちに詳細なる規則書を送るべし。



美文

（天）建禮門院

岡山縣御津郡宇甘西村大字紙工　鎌田君代

「一」

平家榮華の春は去りぬ、秋の梢の落葉哀しく、味方の軍散りて〳〵彼方此方と木枯しの末もあはれに二年ばかり憂事のみを見聞して果ては長門の壇の浦身を潮泡の果敢なくも消ゆるに任すことゝはなりぬ、文治元年の三月二十四日、源家の大將九郎判官義經に攻めつめられ、今日を限りの船軍、一族所從が手痛き最期の戰ひも、定まる運のとても叶はず、やがて新中納言知盛の手傷幾箇所か負ひたると覺ぼしく朱に染みて御船へ參られければ、主上に仕ふる女房の、斯はいかに、何んとなり侍る、と驚き問ふに、今は兎角申すに言葉もなし豫て思ひ設けし事にぞある、珍らしき東男をこそ御覽すらめと打笑ひつゝ、手づから船を掃除して、見苦しき物共を海に投げ入れ、此處拭へ彼所拂へなど指揮せさせ給ふ偖は最期となりにけり、さほどの事に成り侍るに閑かなる戯れかなと、女房達は泣きかこちぬ、今更に門院も覺悟の胸亂れて、何事も知ろし召さゞる主上の、只惘れ顔にて在しますを抱き上げ奉り、暫時は夢の御心地にぞありける、母二位殿はさすがに雄き御心なりき、今を限りとこそ、各々覺悟候へと仰する聲もさはやかに、練色の二衣引纏ひ白き袴のそば高く挾み、我より主上を抱き取り給ひ、帶もて其身を結び合せ參らせ、寶劔を腰に、神璽を腋に、徐かに立ちて舷に

臨み給ふ、今年八歳にぞならせ給ふ主上の、御年の程よりは大人び給ひ、御顔あてに美はしく、御髪黒くさやかにして、御背中へ流しかけ給へる御容、神か佛か世に類ひなくぞ見えさせ給ふ、平家の赤旗今は見えず、源氏の白旗のみ吹靡く海原の、斜陽も雲に包まれて、朧々と暮れ行く樣を見そなはし、御心迷ひたる御色にて、斯は何處へ行くべきぞと仰するに、我はあなやと泣沈む、二位殿も熱き涙に咽び給ひ、兵共が御船へ矢を參らせ候へば、別の御船へ行幸なし參らせ候ふとて、「今ぞしろ御裳濯河の流れには涙の下にも都ありとは」と宣ひも果てず海に入り給ふ、後れ奉らじと我は燒石と硯の箱とを左右の袂に宿し入れ、女房達の船の艫舳に伏し轉び聲を限りに叫き泣ぶを後に見て、續いて海に入らせけるが、怨めしや現世の罪業尙盡きず、渡邊源五馬允眤と云へる者に舁ぎ上げられ、そが郎等の熊手に髮をからまれて、藤重ねの十二單衣も潮垂れ衣の淺ましく捨てし此身を又船に拾ひ上げられしぞ口惜しき、眤はおのが船の鎧唐櫃の底より唐綾の白小袖一重ねを取出し、もしやの時にと用意仕りて候、これを召させ給へと門院に捧げつ近くは參り寄らず程を隔てゝ畏りて、君は女院にて渡らせ在すかと度々尋ぬるに、夷ながらも情けあるものとは思ひたまへど、身の現在の哀しくいぶせく怨めしきまゝ、答辭はえせず只點頭たまふのみ、やがて義經の船に伴ひ行かれて、いと嚴かに守られつ、逝くに逝かれぬ身となりしかば、見まじとすれど眼に映る一門最期の狀哀しく聞くまじとすれど耳に響く女房の泣叫ぶ聲物凄く、此世からなる地獄の苛責と、只一向に御佛を賴み奉るのみ。

『二』

斯くて都へつれ上られしが、素より女の身の殊に一たびは后妃の位に備はり玉ひしお身のことゝて、荒くれし源氏の武士も、さすがそれと放ちけるにぞ、寄邊渚の捨小舟、今は何處へ身を寄すらむ、雲の臺花の高殿昔しを夢と悟らぬ心の、兎角は泣き沈みたまふを、情ある人に伴はれ、東山の麓吉田の邊中納言法橋慶惠と申しける奈良の坊へ入りたまひぬ、住荒して年久しくなりし朽坊なれば、軒に苔銹び庭に草亂れ、椽も蔀も敗れ頽れて雨風凌がるべくもあらじ、道の程伴ひ參らせし女房達も、共に住むべきやうなければお暇申して散り〳〵になりける只一人朽坊に取殘されて誰を賴みに何となるらむ浮草の、實に定めなき夢の世や、空は五月雨袖は露、雲井遙かに鳴く杜鵑の一聲我れを弔ふも哀しく思へば思へば迚も斯くては在られぬ身なり、兄にて在す內大臣宗盛の壇の浦曲の泡沫とは消え給はず淺猿や我と同じやうに熊手もて搔上げられ丈夫甲斐もなう都へ生耻さらして聞けば此頃九郞判官に伴はれ鎌倉へ下向爲給ふとぞ、掌反す榮枯盛衰昨日迄流人なりし賴朝の前へ跪き、宗盛何と爲給ふらん、あはれ人々の失せし所にて兎も角もなりたらば斯かる憂き事は聞くまじものをと、又繰返す緒環の、歎きに果てしなき我を、情ある判官の、樣々の衣調へ

我に贈りつ、壇の浦にて夷共の取りたりし物の中にも、我が具足と覺しきなば尋ね出して還し與へけるがその中に、先帝の御手馴れさせ給ひける御具足共あり、御手習の反古の御手箱の底より出でしを見ては、あなやと計り我はさながら夢の如く、末は藻屑となり給ふ御運とも思はれねば、折には遊びに耽り給ふを止め參らせ、浪のうれ〳〵定まらぬ御船の中にも、いざ御手習をと勧め申してやがては、御代知ろしめす君にてましますを、など怠らせ給ふと諫め奉れば、幾度か點頭せ給ひ、急に御筆取上げ給ふていそしみ給みし御容の、只今の事のやう眼に見たまふも哀しけれ、死ぬるに死れぬ罪業の、自害なさんも後世の怖しく、五月八日、長樂寺の阿證坊印西上人を戒師と頼み、髮をおろし身を墨染の衣にかえさせける、兼ては命の限りまでも離たじと締めし先帝の御直衣を布施とせしが、斯は一つは御菩提の爲一つは執着の覊絆を斷んが爲めにてありけり、世を黒髮と共に思ひ切り、心を墨染の色なき境に寄するとはいへ、しかすがに空定めなき五月雨の、又一しきり、屋根をたゝきて、軒近き盧橘の昔し懐かしき香を送り、折節杜鵑の鳴渡るにぞ、「ほとゝぎす花たちばなの香をとめて啼けば昔の人や戀しき」と、またなかなかに、凡念の消えやらず、爪繰る珠數に宿す涙もわりなしや。

（地）夏の夕

美濃國武儀郡東武藝村　山田愛子

心爽なるは夏の夕なるべし、遠寺の暮鐘、淡霞に消えて、月未だ昇らざる時、數點の螢火、或は高く、或は低く、夜の美觀は涼しき風にたゝよひぬ。母に伴れて妹と共にゆく、長良河畔の夕納涼。金華山は闇の空に聳えて、颯々たる松風、三百年の昔を語るが如く、伊吹山巓に殘る夕日の雲、紅より紫に消えて、はては夜の色にかはりぬ。千丈の黄塵より出でゝ人界のあつさを此夕風にすつるもたのしく、河瀬の音にも亂れぬかじかの聲には、世外の響もきかれ得べし。不圖見れば、上流船伏山のあたり、月の出ともおぼしき光のほの見ゆるはいかに、待つ間ほどなく七艘の鵜船闇を破りて、上つ瀬遠く現はれぬ。やがて亂れては、急湍を走るもの山蔭をはなれぬもの、おのがじゝあさりて下りくる舞火の水の上に、もえても涼しき影の漸く近づきて、わが欄の下に到れば、鵜匠の綱をあやつり、烏鬼の鮎をあさるさま歷々見るを得べく、眞に天下の奇觀なり。鵜飼は此處に來りてやすみぬ。漁りたる魚の數やいかに多からむ。畫船妓を載せて、河畔の清涼をけがすあまたの俗客は、やがてかなしき鵜舟かなの詩情を解せざるべく、三百年の昔を想ひて、織田氏の末路に灑ぐ一滴の涙は、倚夏になかるべし。感深く、情切にして、母と共にこの思を語る時、一圓の月は金華山を離れて、明皎々たり。銀波の上をなでゝ、涼しき浴衣の肌に吹く萬斛の清風は、自然を出でゝ自然に遊び、人の世の罪とけがれとを忘れて、恰も天外の人たるかの思あり。惜しき月と風とに別を告げて、妹の歸るを急ぐにいさなはれつゝ、家に歸りぬ。

（評）情景兼備

（人）夏の一日

越前敦賀町　島　萬壽子

朝

今朝は大層早く目が覺めたので暫く散歩して來やうと思つて顏を洗

ふや否や裏の田甫道へ出た。見ると彼方の山も里もまだ朝霧の中に眠つて居て、折々遠くではれ鈎瓶の音が聞える垣根添ふて行くと小さな川の邊りに出た。その傍に一軒の藁屋があつて低い竹垣の内には撫子や、けし朝顔などの花が露を含むで咲いて居る。一しきり遠くで鷄が啼き出したが、それがのむでしまうと唯足許を行く小川のせゝらぎがちよろ〳〵と靜な音をたてゝ居る。餘りに清らかな流だから下駄をぬいでそつと足をひたして見るとまあその冷たい事！夜は全く明けはなれた。

涼しい風がそよ〳〵とおくれ毛をなぶる心地よさ！　暫くは歸るのも忘れてさまよふて居た。

晝

口ぐせのやうに暑い〳〵と云ひながら早く夕立がすればよいのにと思つても相憎かん〳〵と照りつけて、塵動かす風もなく拭いてもふいても汗が流れるその苦しさ！「その筈さ九十三度だもの」と兄様は仰しやる、弟等は海へ行つてしまうし團扇ばかりもてあそんで居ると丁度鄙の隅田さんから御手紙がついた。「東京も大層暑くて草木も萎れる位、用事がすんだら早く歸つていろ〳〵御話したい」と。御返事上げやうと思つたが餘り暑いから夕方の事にして庭の樹蔭へハンモツクをつつて横になつた。本を讀みかけたが蟬の聲が喧しいから閉ぢて今度は低く唱歌をうたひ出した。「暴より獨くか靈の雲、青葉茂りて蔭深く、そよ吹く風も音絶えて、燃えんばかりの響さかな。」

夕

樹蔭の蟬の聲も聞えなくなつて晝の暑さは噓かと思はれる夕方になつた打水の露の玉が草葉に光つて夕月の淡い影が宿つて居る。妾は樂しい夕餉を終へて後、浴衣の袖を凉風にまかせて庭のあちこちを逍遥して居た。隣家の軒では早や岐阜提灯に灯がともされて、折々蚊やりの烟がなびくのが見える庭の面は漸く暮れそめて垣根の白薔薇がほのかな香を吐いて居る折から池邊の柳の蔭から飛び出た螢一つ、思はず繪團扇で打落さうとしたが上に下にふわり〳〵と飛びまわつて遂に闇に消え失せた。それに誘はれて知らずしらず裏口から川の堤へ出たが此處は又一層涼しい風が吹いて彼方此方に螢が飛んで居る。里の子等が笹の葉を振りまわして「ほーたる來い螢來いあつちの水は苦いし」と呼びながら遠くへ行つてしまつた。川向ひからハーモニカの音が聞える。川風のまに〳〵高く低く。

（評）實景見るがごとし

（秀）

ある朝

八王子八日三丁目六十四番地　中村粂子

起き出でゝ雨戸あけぬふと妾は庭の水の散らされあるを見て先づ不思議てふ觀念を胸にうかべぬさて庭下駄はく間もあらせず池の中見れば我が最愛なる金魚は影見えざりけり何者の仕業ならん猫なるか猫の他には妾が心に一つも浮ばざりし猫よげに憎き猫よなどてわが最愛なる金魚を捕へしぞ猫を憎み金魚を憐みしばし恍惚として池のかたへに佇みしが朝風の吹き來るよと見る間に池の水動きて岩かげよりあらはれしは金魚の死體よう見ればあゝかの金魚なりしよ長き尾を水に垂れ眞白き身の傷あるを波にたゞよはせたりこの憐れなる姿に妾は身もあらぬ思ひおゝ汝は憎き猫の力に及ばで死せしかされど汝はよう彼の餌とはならざりし妾が汝を救はざりし罪はゆるしてよとかくて益々猫を憎しと思ひぬやゝありて妾はそが死體をそとすくひあげ牡丹の根もとに埋め葬りぬあゝさても憎きは猫よ。

（秀）　草　木　謙

名古屋市長島町二十番戸　杉谷稜子

○かきつばた

昔男旅のうた詠みしよりその名高く、毫毛の筆に紫の繪の具溶みたらむ如き蕾の青みたる葉がくれほの見ゆるは春の畫工が遺物なるべし、みづ〳〵しき苗代田の隅に一群咲きたるやごとなき姫君の絹衣の袖短う築山の池の汀に花の一本切り給へば朝の露こぼるゝ樣古るけれど捨てがたし。

○たちばな

なにがしが宿は何處ぞと螢追ふ兒に問ひ給ふは、妹許り尋れ詫びつる皇子の命の御微行とや、我家へまゐらせむ此方へ來ませやとやがて指せる柴門ほと〳〵と叩き玉へば橘いたう薫じて夏の月さやかなり。こは寧樂朝めける想像よ。

○かきのはな

鄙びたるが嬉し、さる片山里の住居、德川樣の代より親子繼いで九代目の古屋、厠のみ新しき麥藁にて圍へるが殊に目立てり、十六七と見ゆる娘の繭乾すと敷き並べたる蓆に柿の花ころ〳〵と落ちて打交れるも面白し、折しも杉垣の上に淺黑き顔現れて「姉いさん繭賣らんかナ。」

○あふひ

葵の御紋の御威風など老祖父の昔語りに忍ばるゝもなつかし、此市に東照宮の祭禮今は大方寂れたり。

○なでしこ、なつぎく

乙女子に譬へられて優美しく咲きみだれたる撫子も好ましけれど、雄々しき若武者のごとく崇高き夏菊にわが心よせられて。

○あをつた

やゝ幅廣き川の上流あるは山上の小さき湖、水は紺碧の色を湛へて深く鴨五六羽岸近う浮游び、背には雲間きまで枝茂りたる林を負ひ、霽れたる夏の日の光り樹陰を漏れて漣漪彩織る岸の邊り、壁崩れたる古き家屋の半ば青蔦に埋もれて見ゆる、こは往古泰西に名を得たる詩人の住居なりしが今は廢屋となれるなどゆかしき心地ぞせらる。

（秀）　夏のはじめ

四日市々濱田小澤内　幸枝

今日や明日やと待ちわびにし櫻花咲くとせしまにかつちりて、消えやらぬ雪のふると眺めつゝ日數つもりてわくらはに遊び見て、互に積る思ひをもまだ語りあへぬに、曉告ぐる雞の八聲に驚かされて、此頃の夜の明け易きをかこつ好き人もあるべし、田舍わたりの、はや蚊帳釣りて軒端に蚊遣り火こちたく燻ぶるもいぶせし、されどしるし計りの垣根に卯の花の咲きかゝりて、さながら、雪の積りたらんやう見ゆるは道行く人の心を引きとゞめてをかし、郭公の初音を聞かむとて、山里深く分け入るに、行く〳〵の籔の若竹の陰に、鶯の老いを悲しむも、いとあはれなりや、日暮れ果てゝあやめも別かぬ空に、ゆくりなう尋ぬる鳥の二聲三聲、啼き出でたる、いつも初音の心地こそすれといへる古歌をも思ひあはされてめづらし、都の内に三葉四葉の家居を構へて、此世を樂しく送れる人の前栽に、黄金白金をまき散らしたらん樣に、牡丹芍藥の今を盛りと咲き匂へる、いと麗はし、花の王、花の宰相なんど名づけたるふさはしき心地ぞせらるゝ、鏡の如き池の面に杜若のゆかりの色に咲き出でたる、顔よ草の名にそむかでいと美し、旅衣はる〳〵きぬるといへる古事も忍ばれぬべし、あふひ草祭りに遊びて、やむことなきあたりより立たせらるゝ使の挿頭にめさる、めでたき草の契りなり、六條御息所のものゝけに

なりて、葵の上などとり殺し給ひけむはこの折りの事ぞかしと、そのありし昔の事どもを思ひいでられて疎ましとも疎ましきわざなりや、近江の筑摩祭りこそいとをかしきものなれ、女どもはその夫の数とりに、鍋を頭にかつぎて神前にまうづめり、一重なるはよし、あまた重れつるは、なにゝかくはと、爪弾きせらる、人の妻たるものゝ守るべきはそのみさをにこそ、かゝる例はとつ国々にありやなしや聞かまほし、陰暦八日の日には、佛生會とて、寺々に小さき花の御堂をしつらへ、今日あれいで給ひし佛の産湯とて甘茶を灌ぎかけなんとするもをかし、又里の童の甘茶を貰はむとにや、手に／＼小瓶を持ちて寺の門も揺く計りひしめき合ふもをかし、山寺の僧たちの安居と稱へて、眞如の月の影きよきまる窓の内に籠り初めたるいと尊し、こは漫りに野山を逍行して、虫けらなどを傷けむことを恐れてなり、されど、本堂のしりへに女の小袖だつ物を打掛けたるは見ぐるし、園城寺の千團子、延暦寺の花摘みいづれもをかしからぬかは、九重の内は申すもかしこし、あやしき賤が伏家に至るまでその軒端毎に、青簾を涼しげにかけ渡したる、いみじうすが／＼し、今は麥に藍、茶、菜種なんどの取り入れに農家は、よる晝のわかちなくいそがはしげなり、そが内にいかばかりか樂しからずやは、小きわらは女の青紗ざしなどを配るとて、重箱をもてしる人の家に出入るいとやさしく見ゆめり、小笠に腰蓑をつけたる人の早瀬の淀に舟を浮べて、鵜をいく羽となく水の面に入れ、鮎をとるさまの篝火の影に、ほの見わたさるゝをかしうも、又あはれなり、月のいでたる後、こゝらありし鵜飼舟のいづちともなく歸り去りたる、今更もの凄き心地のせらる、卯の花くだし降りつゞきて、つれ／＼なる夕ぐれ、はしなく友に訪はれて、新茶を煮てもてなすに、此人いみじう世のすきものにて、去年の宇治の縣祭りに、ふと見そめにし人の俤、今に目の先に立ちて、露忘るゝ隙なきぞ鳥のなけきなるなど、さるがう言はるゝさる方にをかし、さるはおのがいだしぬる茶の味に醉ひて、かゝる言をいひいだし給ひしなるらんとおもへば一入にをかしくなむ、話もさま／＼なるよしなし言を、互に語りて夜をふかしたるもはかなしや、今こむといひし人を待つとて、はしゐする程にいつしか、片割月も西の山の端に傾きたるに何の便りもあらざりければ、ふとまどろみたるに、扉をほと／＼と叩く音のす、驚き出でゝ見れば、そが人にはあらで、門田の面の水鷄にはかられたるにてありきにくしと思へど又をかし、むかし、ある人の夜啼く鳥は、すべてをかしといひけんも、げにことわりぞかし、春は花、秋は月、冬は雪、とり／＼にをかしきものなれど、卯月の折柄、またなどかをかしきことのあらざらむ、皐月、水無月の頃、なほあまたありぬべし、されば夏も又亦捨つべきものかは。

橋上の影法師

和泉　津田浪子

お琴のしらべもすみまして窓よりさし入る月あまりさえきつて居りますから思はずさし見橋の上にと足を運びまして大空には月まんまると澄み渡つて廣い／＼野原には鈴虫くつわ虫などの音は細う哀れに身にしむ様におぼえます姿より前に二つの大なる影法師と小なる影法師とは立つて居ります聞くともなしに聞いて居りましたら母さん昨年の今晩だれお父様まん／＼さんに成つたのわ美津坊はお父様のお顔知らないしまたお父様も美ちやんしらないのれあたし能く覺えてよ美異なおひげ澤山あるおせいの高い方だつたわ而していつも赤いお馬に乘つて隊から御歸りなすつてよつ／＼靜よ／＼と可愛がつて下さつたわいつか博物館におとー様とゆつて赤いリボンを買つて貰つたわれー母さんと袖の下より首つき出し片言交りのお話し母なる君は御返事も成さらないで顔をうなだれた儘お乳を含まして入つしやるふところみどり

鬼の顏をしみ〲眺めて居りましたがいつかの玉の樣な涙は頰をつたつて居りますし美ちやんは何に驚きましたかわつと泣き出しました靜さんそんな悲しいお話しはもーおやめにしまして歸つて桃太郞の鬼が島征伐のお話し致しましよーと御手を引いてしほ〲と靜さんは只々無邪氣に大きな淸い聲はり上げてこゝは御國の何百里離れて遠き滿洲のと歌つて行きますうつとりとしばらく後姿をながめて居りましたが嗚呼あれなるは村内にて噂の高い〇〇少佐の未亡人であるかとさとられました花なれば今や眞盛りといふ御年配なるに早やお二人の御子樣を抱いて此の茫い浮世を離れを侘りにおそばしてと我身に引きくらべまして思はずむせび入りました月はいつしか黑い雲の中に姿をかくしまして虫の音は細う高く低く世間はしんと水をうつた如く何處よりか細う哀れに辻占賣の聲が聞えます。

若葉日記

武藏　靑柳彌生子

暫時の海棠徒らに雨に惱み裏庭の梨花空しく靑風に飛んで春帝やゝに輿を枉げ給へつ桃櫻盛りも一時の夢田畷の靑蛙は今頻りに夏を叫ぶ小鳥既に歌はず蝶既に舞はず世界は默然として綠獨り漲らんとする也花の樣は靑き實となりつ美しき櫻は若葉となりぬ蝶は殘れる可憐の菫に泣き鶯は若葉の露に世の冷酷をかこつ野に出づれば土筆、芹、薺、綠栞、菫なんど族々として足を容るべき所なく茂りに茂りたれど流石に哀れ多く淋しく春に別れる田舍の景色なりけり五月一日今日は日曜なり雨ふる淋しさいやまさり雨にけぶる若葉をもれて美江ちやんが琴の音僅にきこゆ曲は「五月雨」とぞ知らる身のしめやかなる音にも優し顏ばせ眼前に描かれてこよなうゆかしく覺ゆ美江ちやんは今年十七にて花ならばまた蕾まれなる佳人なり東京某女學校の三年生「才媛」の名高しとか聞く美しき袖のはぶり手の運び香高き匂ひは琴ひく一間にみちて小指に輝くルビーの指輪小闇き窓に光るらん思ひやりて暫乎たり琴の音絶えつ給目傘に顏かくして柄櫛新芽をはきし姿が靑齋の窓下を今し過ぐるは誰が家の孃さんで美江ちやんなり〲呼すらりとしたる玫瑰姿そは突然女神なり。

夕の小川

岩代　近藤やい子

笹舟ながす少女のむれも早やかへりて山寺のかれの音と共に日は西山におちぬ細上と姿はすゞみがてら小川のほとりにたゝずみぬあゝ此淸き小川のながれひろのにぎはひも笹舟と共にこゝの小川にながれしか此しづかさを今はやぶるものもなし見あぐればみそらはすみて平和の海の如しかゞみの如き淸き月かげは小さきうれりに音たてゝながれゆく水のまに〲千々にくだけて銀の砂を投ぐるやう折りからさつとふきくる凉風と共にやさしき笛の音きこゆるは釣にとゆかれし兄上早やおかへりなされしなるか。

消息文

（天）親しき友の許に

無名女

まあ何といふ御無沙汰の仕方でしようれ、何日ぞや可愛いゝ赤ちやんの畫いてある繪端書を頂戴してから御返事を出したやら出さ無いやら自分ながら判斷がつかないのですもの其後皆樣お變りもなくつて。私方にもおかげ樣で、皆達者で花子も此節では餘程面白くなりましたよ、一寸丈けでもお目にかけたいわ、今雜誌といふ聲がしたので出て見たら今月分の女學世界なの、すぐに讀んで行くと女代詠之部に赤先生の不粧の

原因についてのお話しが書いてありました私はそれを讀むと直ぐに貴女の事が心に浮びまして、もはや御覽になつた事とは存じましたけどもだどちと筆を執りました若しまだお讀みにならなければ是非とも早く御覽なさいましそしてお子樣でも御出來なすつたら、どんなにうれしいでしようそれとも最早本なんか、讀む必要は無いとお笑ひの樣なのなればこんなお目出たい事ありませんわ、貴女どちらなの。ほんとうに子供は可愛いゝもの又世話なものよ私こんなにして育てゝ貰つたのかしらと申しては笑われてよ、今まで門で遊んで居た花子が何日の間にか歸つて來た又お乳をせがみますから今日はこれで御免を蒙ります、此の後はつとめて御無沙汰はせぬ覺悟ですから……さようなら

（評）　文に眞情こもりて而かも言ひまわし巧みなり

（地）　傘を返すとて

名古屋市長島町二十番戸横井方　杉谷稜子

いろ〱の清興にみじか夜の更けゆくも知らず心なく長居いたし御無禮の段お許し玉ひてよ、お宅の御邪魔も顧みずなほうら若き女の身の小夜ふけて歸宅するはよからずと伯母にもいたく叱られ候ひき。いつのまに降り出し雨ともしらで、庭の若竹のさや〱にさやぐ葉ずれの風の音かもり、面白き夜よと、よしなし言云ひ笑ひつゝ拜見いたせし數々の御畫帖短册輪端書など、とり〲の趣き飽かず見られ候、春の花秋の紅葉いづれ〱と手折り迷ふが中にも、殊に御許樣の御賞贊遊ばされ候、西の國に名あるまたはこの國の人々の洋畫帖げに如仰新しき趣味とやらん見えて嬉しく存じ候ひしが、私は光琳百草畫譜の美しき色優しくて莊重なる運筆今も目の前にちらつきて忘れがたく候ものから、若し御借用願ひ得べく候へば四五日間御貸し渡し下されたく願ひまゐらせ候。拜借いたし候傘昨日の天氣によく乾し置候に付使者を以て御返し仕候ありがたく存じ候。花菖蒲やうやく咲き初め候間さしあげ申候。

なつかしき君が見ませる花なれば
　あしたの露にぬるゝともよし

（評）　巧緻

（人）　新茶を贈られしに答ふる手紙

東京　靜枝

五月雨の晴れぬ思ひにくろゝ我身はせまき袂の干る間なく一人うき日を破窓のもとにくらしゝが今日は近頃になき空のけはひの長閑さに野邊にと思ひ居候ひしをふと障子にうつりし鳥影の若や音づる人もやなどあまりの迷心と我ながら可笑しくもとゞまり居候處君よりの御使御心づくしの新茶の高き香りにそへ給ひし御文にも通ひていといと嬉しう存じ候御父母君の御慰につくり給ひし由今年は不順の氣候の爲出來あしとの事なるにこは全くつもる御たんせいと厚く御禮申上げ候早速父の許へもて參り候ひしに讀書につかれし身すぐにもその事故崩してすゝめ侍りしにいとど喜ばしき笑顏を見候時は何より嬉しく覺え候御心づくしをいたづらにくむは本意なき業なれば御手製の新茶を料に一日の興をとらばやと存じ候就ては他の客人などあらば反つて心はらし難く候まゝ只内々のみ故御父母樣始め皆々樣御揃ひ明後日の午後を私宅に御こし下されまじく候や御兩親の御相手も御妹の君達の御つれも候へば決して御退屈は御感じ申させまつらぬ考へに候小さき住居は良つて高き香のこもりて又一しほなど父はうぬぼれ居候何卒よろづ御くり合せ御こしのほど願ひ上げ候先は御禮かたがた……かしこ。

（評）　筆は未熟なれど心づくしは見えたり

（秀）旅の妹へ

茨城　吉村八重子

花子さん先日は御手紙有がたう、こまく〳〵の仰ごと委細承知致しました、決して御心配なさいますな、母様の御持病は餘程快よく相成ましてれ、近頃は朝夕末の松子さんに御手を引かれ、御庭へ散歩に出かけますよ。そら、あなた御待兼の小女界れ、此の一日につきましたのですからすぐ送る心得で居つたのよ、すると、生憎用事が出來まして、私一週間程不在で、一昨日歸宅しましたから、昨日早く送りました、嘸ぞ御待ちなすたでせう。

次に、私の愛讀して居る女學世界も昨日きたのよ、開いて見たられそりや、面白の、繪葉書の美しいつたら、私あんなの見たことなくてよ。此の面白い御本や、美しい繪葉書を、私ばかり見るのも本意でないから、一寸讀むと、此も送りますからられ、其時こそ、あなたすつかり御讀みなすつて、澤山賞めて頂戴な、さよなら御免下さい。

京なる妹へ

八王子　中村粂子

御身がわが家を立ち出でゝ都に上り給ひしは忘れもせぬ四月の八日お釋迦樣の御誕生日にて候ひしよ一度は悲しと思ひしが御身の修行などて悲しきことやあると思ひかへしては心を慰め申候ふかくて朝九時といふに汽車は御身と父上とをのせて走り出でしを妾はプラットホームに立ちしまゝ御身の姿の見えずなる迄眺入りしにやがて汽車もあなたの山の端に消え入りしかば母上は「もう歸らう妹や」と仰せられしを一二町汽車の走りつゝけしとや思はれん山の木の間より黒烟さつと立ち昇りしかばあつと思ひてまた眺入り候ひしに烟はやがて散り失せたれどまたもや出づる烟あらんと瞶つめ居り候ひしがあゝまこと第二の黒烟は妾が眼には見えず候ひき家に歸りて仕事をなせど手につかずたゞ淋しさ悲しさの念に打ち沈みて日々暮し居り候ふ此文したゝむるにも胸せまりきて思ふやうに筆はこばれずなほ筆の毛絶ゆるまで書きたきこと御座候へども悲しき想ないや増すのみと思ひて先は筆止め申候ふたゞ御勉學專一にこそ

五月雨の日友の許に

東京　なでし子

五月雨しめやかに降りて罪なき花はむなしく地に委しあはれ昨日までの美しの姿はそも何こに行きしか影だにとめ申さずあはれ椅は若葉のみ雨にはたまれてにくうまでのび申候この五月雨に君は如何にすぐさせ給にか例のこと丸までのもとの机にもたれて筆や操り給ふか書や見給ふか妾は友なき宿にてまたもや空想にふけり申候あまりのつれ〴〵なるまゝにまど押明けて見渡せば庭の秋海棠は雨になやみてうなだれるさまさながら初戀に泣ける乙女の姿のごとくいともあはれに覺え申候あはれこの乙女の胸のなやみはそもなにゝて候かあて給ひてよあまりの淋しさに純かれて例の琵琶とりいでゝ小督の曲を彈すれば歌も進みて「あらなつかしの雲井やと御文顔にあて給ひ」の一段にいたれば折しも雨はまた一しきり降り出して庭の木の葉の音高うなりまさりていとゞ小督の身のあはれに感じ申候君よいとまあらば合唱に來り給はずや君と妾と雨との合奏は如何に興あることにや今より樂しくほゝゑまれ申候慰るゝないとはで來り給へかし君をまつ妾あれば……あなかしこ。

妹の死を友に告ぐる文

下谷　太田あきつ子

光子様、妹は昨夜遂に十一時過ぎ永久の眠りに就きて候。今はの様など申すも中々涙細き手に、妾の手を緊と取つて、姉様妾もう駄目れ……お父様や姉様はどうぞ御丈夫でれえと、是ぞ妹が最後の言葉、あゝ妹は母なき身の妾のみ頼りに致し、妾とても天地の間に血を分けし者とては只妹一人に候ひしを、老ひたる父と一人の姉を残し、十六の蕾の花、はかなや無情の風に散り失せ候ひぬ。あゝ委しくは問はせ給ふな、繰返す悲しみに腸斎へんばかりに候ふを。

（評）悲しみの極み、同情申上候。

別れし友に

涙花　きやう子

本当に此方に参つてやつと二ヶ月ですけれど、私一年も居るやうな氣がしますの、折角都の便りで慰めて下さるのに愚痴ばつかり云ふて堪忍して頂戴よ、餘り淋しいのでついなのよ、妹はちつとも淋れないの、何か考へ込んで居ると、こちらの言葉で姉さん錦子さんがおいんなはりやよいの子つて云ふの、妹も心の中じやどんなにお待ちして居るか知れません、そして お約束の須磨行も氣が拔けますわ、私どこも見ずに待つて居りますから、ほんとにアノ今にくでなく、一日も早く居らしつて頂戴、今から私梅田での嬉しさを想像して居ますのよ、ではさようなら。

（評）可憐なる少女の友情を描ける、詳婉にして情切なり。

弟の許に

本郷　山崎菊子

御別れ申してより僅三日を千秋の思して明暮御身のことのみいといとう心許なう存じ侍りしに、昨日恙なく御着との御文給はり、誠に嬉しく存じ候、父なく母なく兄なき御身と妾その二人其れも今は遠く離れて朝夕喜憂を共にすることさへ叶はぬ境遇、誠に悲しき極みと存じ候、まして年若き御身のこと故倫更不憫の外無之候、さはいへ、かくなるからは家の爲身の爲一向に身を立て名をあぐるがなき両親様はじめ兄上様への此上なき孝行と存じ侍れば、朝も心にゆるみなく勉め励み給はらん事を切に祈り上候、殊更か弱き御身くれ〴〵も御氣をつけ被下度、此の御守、或は迷信などゝ御斥けもやと存じ候へども御心づけまで、かしこ。

（評）さすがに婦人の眞情見えて、めでたし。

なつかしき友に

三重　帆山静子

庭のしのぶに村雨の名殘の露きらめき青簾もれ來る風につれて得ならぬ薔薇の香室の中へ、あゝ此心ゆく夕君はいかにそゞろ御わたりのなつかしうてなん

今しも龍ぬけし螢のあとおひ行きて野道にあひし紫りボンのやさしき少女愛らしき頬の邊より月を仰ぐ其姿君にまがふ許りなるを思はずよびとむれば名さへも同じ秋さんとかさながら君にあふ心地して!!!

なつかしさにたへぬ折節相語りて心やるべき優しき友秋さんを得し今宵の此奇しきめぐりあひのいとゞうれしうてさつそく筆とり君が御もとへ。

友の許に

小山松枝

ふりつゞく梅雨なかく物靜にて、文の林の奥深くわけ入らせ給ふらんとうらやましく、なつかしくて、つれぐ〵なぐさむすべもやと寫眞どもながめ申候、さて御許樣よ驚きたまふな、この少し首かたげ給ひしそれなかれて亡き人とのみおもひし富子の君、わらは、先日御目にかゝり一時は夢かとばかり疑ひしかど母君御同道なるに、ゆる〵伺ひ候處、わらはとものきゝしに反對に、嬰兒を失はれしとか、恰度かの時、さい子君世をさられ、くま子君を病床にとひし歸るさ、御許樣とともに耳にせしは富子の君産辱熱にてはかなくなられ、夫の君は御出征中姑君一人嬰兒を抱きて途方にくれ居給ひし由、まことしやかに語りしは、かの老婆の耳のくるひか、とにかく人の口は信ぜられぬものに候。たまに無意中に二三事あると、かしこにもこゝにもと、「だらう」的の風説傳はり、遂には事實のごとくなりて人を動すに至るものに候。こたび夫の君凱旋のめでたさに、過去の淋しさも忘れ給はんこの君のため、腰折にても祝意を表さんはいかに……かしこ。

離れる友に

姫路　船戸ゆき子

嘘か誠か、おんみいたくもおごりに長け給へり、てふ噂聞き候ひしは二ヶ月餘り前にて、さる事の知れかし、人の噂の誤りなれかし、と祈りしも仇や、昨日卿を訪づれ給ひし登規子の君の今日妾を訪ひ給ひての御物語り、聞くも語るも涙にて候ひき。

おごる者久しからず、とは古き教にて候ものを、知り給はぬ事はあるまじきに、牡丹を見よ、華を誇りの色深く、ほか〳〵の花にも增して艶やかに咲き匂へど、それとて廿日限りの命と歎しまるゝにあらずや、君は基督に從ひ給ふ神の子にてありながら、聖書を如何に讀み給ふや、何ぞ財は之を天に蓄へ給はざる、嘗くひ錆くさり盜人うがちてぬすむ所に地に蓄へ給ふことのおぞましさよ、如何悟れ君。

君短かきふみには候へども、眞情の涙に墨磨り流してのお諫めも、にがしとな捨て給ひそ、さあれ身の程も顧りみぬ暴言、友よ、ゆるし給ひてよ。

玉の初産を都の姉に知らす

稲井　黒川好久

かれて〳〵、お姉さまの御めでさせられし玉、さる六日、やす〳〵も子二つ生みおとし申候、親なる玉によくも似て白色なれど、頭にいさゝかまろらかなる黒き毛あり、そこに白き毛が出入りしたるきわの、富士額といふになり居り、はやちよこ〳〵走りに歩みまわる樣に相成申候、初子もいたくよろこび、學校よりかへるや否や、部屋へとはしりゆき、頸に紅藩のきれをまとい、小鈴つけやりなどして、毎日〳〵もてはやし居申候、その内ひとつは雅子さまより切にのぞまれ候故、まいらすべくかたく約束致し候、雅子さまもいたく喜ばせられ、いづれ姉さんにも、御禮の手紙いだるん、などと言い居られ申候、まずは玉の初産の通知のみに御座候匆々

馳走に與りたる禮言

すみれ

昨日は久々にて御伺ひ申せし處種る御物語りに春の日の長き日足のた

くるも知らで圖らずも時を移し御妨に相成りし末、誠に心なき業なりきと後に氣付、失禮の段は御許し參らせられる樣、兎角へだてぬ御中とて御心をこめられたる海山の御物語難有存候、終日うちとけつゝ御語らひ申せし事此上なき樂しさに候へば昨日程心ゆきたる折も候はず、たゞ御睦じきにまかせ、はしたなき御物語りあるは取り亂しての居ずまいさぞ片腹いたく思召されんと、御恥しく存候、此後御いとまも候はゞ我ら方へも御遊來の程願上候先は御禮申上たく、可祝。

病床より友へ

尾張　穗積榮子

暑さ殊の外嚴しく候。

終日、病床にのみ臥せり居り候身の苦しさ、なか〳〵に得耐え難くて、日中は罪もなき看護婦にまで、無理計り云ひては、苦しめ居り候事の心なさ。

看護婦は富貴子と申し廿歲、至つて氣立てよき者にて妾が、每日のわが儘をも、少しも氣に掛け申さず、心より親切にいたはり吳るゝ甲斐ありてか、昨今些しは熱も靜り候、何れは土用越す間敷きと決せしいたつきの、この樣子にては少し永びく事かと、淋しく微笑まれ候。

いま鉤の如き新月は、青葉若葉茂り合ふ窓を洩れきて、妾が白き褥に淡き光りを投げかけ居り候よし。

舊友を慕ふて

磐田郡掛塚町　大石よね

あゝ寢食をともにして三とせの間睦び合ひたる我友人三十有餘、今は何處に如何なるホームをぞ結ばれ給ひしならむ、と五つとせ昔の其樣を忍び出してはわきくる涙、あゝ舊友程おなつかしきものはありません、出來得べくば今一と度辞の學びやに集ひ合ひて移り變りの身の上話をともにいたすの暇をばあたへたまへかし女守の神よと祈るも甲斐なし浮き世の哀れさ。

あゝ一の思ひは成功せじ必死となりて願ふとも、されば第二の手段をと申した所で文運、かなしい儘是とても、いふは易くて行はれがたし、何となれば其大多數は嫁がれて住所の御變りなされしこと必定なれば、何地に向けて書狀を差し出してよいやら、或は戰後の進步に伴ふて女ながらも夫にしたがひ千里の波をけやぶりて遠き〳〵外國（とつくに）に御渡りなされし方もあるならむ、また小さく申せば養父母を上にいたゞき日々の職務に鬱々として世のつれなきをなげきつゝ朝夕を御暮しなさる方もおはすならむあゝ何につけても女の身自由ならぬが浮き世の常如何にあはけどせんなし、すべなし。

最早一もくだけ二もくだけ今はいよ〳〵第三のよき法をはめぐらしてと、不肖ながらも夜もすがらいれもせずして書へだしたは妾の愛讀書たる此女學世界、もしや僥倖にも此拙文を其かたはしへなりとも載せて貰らふておなつかしき舊友の御一人になりとも御目にふれそれを御縁に此草深き片田舍にあはれなる朝夕を送り居る妾を御なぐさめ下さる御方のあらむにはと頼みがたきを頼みにし拙なき文をもかへり見ず美文あつまる其中に、あゝ大膽〳〵投書するとは、殆ど狂者の仕業されど是も其元たゞせば舊友を慕ふのあまりいたすところ、何卒眞意のある所御くみあられて一滴の涙を御そゝぎあられん事をこそ願ふにてなむ。

友への返し

鳥取　すゝき生

そよ〳〵と吹き來る風に衣袂はせてふくろ川の清き流にそひ螢とみだれ玉と飛びこふ螢をとらへし事まだ昨日今日の如くに記へられ候さてもなつかしき君と別てよりは心打明て睦じく語りあふ友もなく唯一人清き月をながめ虫のあはれになく聲を聞き居り候へば文林の如くにたどるを何よりの樂となし居り候折柄昨日は誠にうるはしき御文たまはりたが上にやさしき寫眞をたまはりし事さよ御姿拜みまいらせば誠にあひたるが如き心地せられていとなつかしく唯君が月の桂を手折歸られん日を待ち居り候のべたき事は濱の眞砂の如くに御座候へども惜しき筆は之れにとて先は御禮迄、さようなら。

郷里にある姉の許へ

京都　安積島子

嵐山の盛時は夢の間、新綠の時、菖蒲ふく頃と、月日は何時しか、すぎ去りまして、今ははや凉風ほしき時となりましたが、姉上樣には、如何におすごし遊ばされるか、定めし父上母君のお側にあつて、厚きお情のお恩に浴せられるかと、羨しいことに存じます。

されど、姉上と京に居た頃は、學の餘暇に、或は御室、或は高雄と、手を引きつれて、散歩しました時の愉快さを思へば、その時折につけて、姉上の事のみ思ひ續けられて、終日茫とすることさへあります殊に此頃は螢の時節とて、昨年の今日姉上と共に石山に螢狩しました時の事を思ひ出しまして今年も姉上あらばと、なつかしきまゝ……

友に花を送る

福井　野坂まさを

母君の御いたつき聊かは靠らせ給ふにや先づ承らまほしうてなむ今日は殊の外閑けく家の内にも居たまらずと思へるなり同窓の友垣みたり訪づれ給ひけふのひと日を浮かれ暮らさんとこゝまで歩み來れりいざ野遊びをと勸めらるゝも嬉しければ直に八つの袖打ち連れて野わたりに至り菫を摘ひつゝ摘草をなしゝは興多かりしも此の野に親しき君の居まさゞりしはいと物足らぬ心地して憾み深かりき、歸るさには某の別莊に立寄りしが今や全盛の藤、紫のとばり垂りたらむが如くいみじく可笑しかりければ主に乞ひて一枝を得てなむ御許に參らするよあはれ病みませる母君と共にあけくれ眺め給はらば嬉しき事になむ今日は殊の外疲れぬれば筆の運びも心に任せずゆるさせ給ひてよあなかしこ。

都の友の許へ

出雲　勝部とし子

お別れ申したのは、未だ昨日の樣なるに、數かさなりしお音づれに、日頃の無沙汰の夢さめて……あゝ、許してよ、許し給ひてよ！此頃は御散歩のよし、さぞ、妙見の桃花は、當今眞盛りでしようねおゝそう〳〵今度の文理で御當撰になりし美文は、かれてより御達者なることは、耳にもし目にもしてゐたが、如何なる言葉もておほめ申さん、書籍へありし野のよう、たゞ輕妙〳〵。餘りの面白さ、幾度となく讀みかへした程に、そゞろ去年がしのばれて……あの杉村さん、妙見の桃園で、若林さんに初めておあい申したは丁度此頃、其後しば〳〵、あなたに御相談しましたが……あゝ、もはや駄目です一家の妻となつては……何事となう、うれいがちで……しんにあなたが羨しいな……。

蝶よりたんぽゝに

千住　宮崎雪子

春風にたぐへての御玉章、嬉しと拜し參らせぬ、さるにても優しきは君がみ心かな、君戀うとの言の葉を、秘めし心の釣明けて、漏し給ひし情の文、手に取りしその折よ、思はずも双の翼の打ち震ひ候へし、思へばあはれの君が戀、汲んで共に語らまほしけれど、なし離き運命の糸、おゝそれよ、吾れ白桃の梢に生ひ出でし一夜、運命の神の囁きに、汝は此の下の小菫を愛で共に終りを同うせよと、汝がたらちれは契りきぞ、夢々遠へそとの……それよりは羽風も輕く春の野に舞ひ立ちて色々競ふ百花の美をあはれとは思ひつも一夜の宿は此處ぞと歸り來て、一本の小菫愛でぬ、されば此の頃のが君煩悶、深く悟りつれど運命の神の引くらん糸のまに〳〵……あゝさても、墓なの世にもまゝならぬ浮世の風の吹き荒むものよ

未來こそは、君が優しき情受けん君！あゝ君よ、哀れてふ事知るならば、吾小すみれ、一村雨に墓なき名殘を止めし後を、哀れ弔ひてよ、かしこ。

螢にそへて

越前　島　萬壽子

藤枝さん、大層暑くなりましたわれ、暫く伺ひませんが御變りもありませんか、私の方は皆大丈夫よ、昨夜れ弟と一處に螢狩に行きましたの、森の向ふの堤ですが隨分澤山居て闇の中を飛ぶさまが本統に奇麗でしたから、團扇で取らうと思つても高く上つたり草にかくれたりしてちつとも捕れませんのよ、けれど弟が笹の葉で打落して漸く二十匹程とりましたから、螢やに持たせて上げます。

お暇でしたら明日からでもいらつしやいな、お泊りがけでれ、そしたら又螢狩にでも海水浴にでも御供しますわ、きつとですよ、待つて居ますから……、さやうなら。

短　文

（天）女文字

浪花　京子

若葉に煙る櫻の宮のほとり小柴垣の破れしを其まゝに雪の卯の花に結ばせて廣くもあらぬ庭に藤もみぢなど思ふがまゝに茂り合へる草の屋あり。

わざとならぬあるじが住ひぶりも五月雨のつれ〴〵とや忍ぶ小琴の音にいとゞ床しうなにがしとや美いしき女もじの表札に足を止めて橫手の丸窓すかし行くもあれば蛇の目傘に葉末のつゆうけて青葉がくれの杜鵑待つとも見えぬ人のひとりふたり門にさまよふもげに浮世そかし。

（評）清女の筆の跡しのぶとはいはじ、わざとならぬ書きぶり、一葉女史の文を讀むこゝちす。

（地）

神奈川　廣守千能子

私の宅では毎夜葡萄棚の下へお風呂を立てゝ這入るのよ末弟の敏はいつも私と……葉のすき間から美しい星がお湯の中にキラ〳〵黄金の波をたゞよはして居るのを見てお湯の中に螢が居るといふてよろこぶのよ。……

（評）意匠巧妙、綺麗にして雅致。

（人）藥嫌らい

尾張　穗積榮子

此頃妹が風邪を引たので嫌がるのを無理に勵して藥を差付けたら途い

澁い顔をしてコツプの水を殘らず乾して終いました。「其れ御覽其んなに上手に飲れる癖に」と云へば妹は今にも泣きだしさうな曇ッた聲で「姉さんお薬は未だ這入ッて行きやしないわ」と緋牡丹の唇を開けば、まア可哀さうに綺に濡れた舌の上に小い丸藥が三粒！　私はもう其れで強て飲めとは云はれませんでした。

（評）何となくあはれに面白くかゝれけるかな、讀み了りてそゞろに涙さしぐむを覺ゆ。

妾の務

佐賀縣　千鶴子

天眞爛漫花の如く玲瓏清麗玉の如き學びの子等が紅葉のやうな手をのばして先生！　先生と前より後より紫袴に睦び纏る其無邪氣さ實に可愛くて〳〵終日塵にまみれ居る其身の苦勞も忘れてしまつて、ひたすらに行末遠き學びやの撫子に淸き美しき花咲きみのれよとかみかけて祈るのみ。

（評）何ぞ其思想の高尙なる、人の師たるに耻ぢず。

金側時計

河内　田中八須子

或は停車場で、年頃十七八の鐵道某式部が憎しげに、巡査に向ひ。私は只今金側時計を掏られました、何卒御調べを御願ひ申ますといふを聞きて、巡査は、其時計は龍形かと尋ねますと、式部は、ハイ慥か十四形位です、シテ刻印は、慥かに覺えません。巡査は冴りて、自分の所持品を覺えないとは、と問ひ詰めますと、件の式部は、顔を赤らめ、首を低れて、實は今日友達のを一寸と、後は小聲で聞き取れなかつた。

（評）滑稽々々、しかも自然を失はず。

スケッチ

福岡　英子

涼しい葉櫻の蔭に、ハンモックを釣つて、雜誌を讀んで居たら後にクスクス笑ひ聲がするから、フット振りむくと、アッ惜しい事した今少しだつたのにッて、兄さんと高原さんと私の顔見てお笑ひなすつた。

（評）「アッ惜しい事をした」の轉語、非常に面白く聞こえる。

一夜の宿

福岡　木下あさの

行きくれぬ、宿るべき家もあらぬに、夜風は身にしみたり、行きずりの若き僧、眉けぶり痩せ肩の君、さては緣深き人か、まだ新らしき法衣のその襤れやうや「新らしのみ袖とのみに振り返るわれもうらぶれ旅の旅」君一夜宿かし給へ、今こそ斯くは窶れたれ、われも一度は都に名を求めたる子ぞ。

（評）アマリに小說になり過ぎて居るやうに思ふ、小說的短文といふのもないではないが、今一ト息だ。

お嫁さん

美濃　山田愛子

紫に白に咲く杜若の花は久ちやんのリボンにも似たりや　紅にさく躑躅の花は久ちやんの愛らしき唇の色にもまがひたりや　逝く春をかざる造

のまわりに蝶を追ひ花を摘みて戯れたる久ちやんも今は遊びつかれてや我雛に餘念なきわが窓のもとに來りて「あれよ姉ちやんあの赤ひ鯉は黒ひ鯉のお嫁さんなの」

（評）奇想。

吾が家庭

羽前　谷山たに子

蟠まれる老松の下さゝやかなる一茅屋清き流れは前を走り青き田は後に廣く雞犬の聲遠く聞えて黄牛の影近く門に在り池の鯉は忽ち水雷を揚げ園の花は靜に蜂蝶を宿す機杼の聲止むとき啼兒の聲代り起る夜は弟妹と一燈を圍みて讀書の聲自ら閑なりこの情味この幽趣いかで市塵を趁ふの念や起るべきこれは是れ平和なる吾が家庭。

（評）漫りに奇を衒ふにも及ぶまじ、この文の如き眼前景、口頭語、いふ可からざる味あり、げにや此の如き文を讀めば、われも市塵を趁ふの念無し。

無心

岩代　岸野常子

今しがたスヤ〳〵と圓かな夢路を辿りかけた敏ちやん、オヽ其愛くるしい事つたら、あの小さい貝殼の閉ぢ目のやうな目、象牙細工のやうな優しい鼻、ツツと結んだ蕾のやうな唇を洩れてつく息もいと輕く、アレ薔薇色の頬は今何にか無心に動いて居る、と見るまにパツと開いた葡萄形其まゝのフツクリとした兩眼！オヽ敏ちやん、はや夢さめて……、と白羽の蝶が飄々と垣根の彼方へ。

（評）婉麗。

恐ろしき時

小倉　白石光枝

さした雨傘を、危いはづみに、吹き飛ばされんとして僅かに引き止め、はつと思つて見上ぐる山の頂は、全く雲を以て鎖されて、一端が顯はれるかと思へば、一角が隱れ、一山が出るかと見れば一峰が滅して、丁度鬼神が黒い衣の袖で隱てるやうであつた。

（評）天地の大景、之を七寸の不律に訴へ、僅々百數言の短文に收む。

露とほたる

名古屋　横井なみ子

アレあそこの芒にイルミチーションの松にキラ〳〵光つて居るのは露でしやう？螢でしやう？露は月夜によく光り螢は暗夜によく光る、今日も滿月ですから露でしやう、共に青白き光を放ち明滅してます、ですが露は眞珠の樣で螢はダイヤモンドの樣ですね……貴郎。

（評）「貴郎」の二字に妙もあるが、何となくイヤミでもある。

つるちやんの悲しみ

長崎　たか子

つるちやんと云つて今尋常科に通つておる私の親族があります、或日つるちやんに、あなたは何が一番悲しいですかと、たづねましたら學校で先生がお父樣のある人は手をあげてと、おつしやる時私はお父樣がありませんから手があがりません其れが一番悲しくあります、と申しました

から私は思はず涙が出ました。

（評）人生最も悲惨の事すら〳〵と書き流して更に一層の悲惨を覚ゆ。

初夏の庭

能登　栗倉すみれ子

青葉若葉が影を寫している泉水の岸に六ッ斗りの可愛らしい女の兒が楓の様な手で鋏を切つては投げている。其の眉目秀麗なる若い婦人が「花ちやん危いよ」と云ひながら出てきた併し女の兒は默つていた……がやがて鋏が無いのになると婦人の袂にすがッて甘えるかの様「おかあ様お菓子頂戴！」。婦人はにつこりと白い歯を見せた。

第二の妹

府下　中村かね子

妹も居らで春雨の淋しう降りてたゞ一人妾は西の窓近かく妹の單衣を縫ひ居たりしにいつの間にやら雨晴れて西の山邊に日の輪傾きぬ庭に咲き出でし緋牡丹の花夕日に榮えて際やかに美しき黄金の玉を身にちりばめいとゞ麗なるに風蝶の來りて戯るゝなどさても彼は淋しき妾を慰むるものかなあゝ妾は彼を第二の妹とせん。

交換手

芝區　新野春枝

御隣の姉さんは毎日電話局へ行く妾の家では此間から電話が出來て大變便利だと御父さんは賞めて居るけれども姉さんが還ると家の長吉や萬どんが何番へ〳〵と云つていじめるからほんとに可愛そうだわとしみ〳〵話すのはつい二三軒先の吳服屋の總領娘で今年八ッに成つた愛くるしい子である。

藤太郎

松山　德丸せん

今年漸く三つになつた藤太郎に御ばあさんが親切に持て來た御赤飯を可愛らしい小さな御皿の子へ入れてゴマ鹽をふり藤太郎をよろこばせようと思つて渡すと藤太郎はうれしそうに其れを取つてしばらく其中を見守つて居たがとう〳〵泣き出したのでおッかさんやおばアさんは驚いていたはると藤太郎は其御皿の中のゴマをふう〳〵吹いてかなしそうに此御飯にはモッ（虫の事）が澤山いるよと云ふた。

八重子の君

栃木　玉野とし子

八重子の君あゝ八重子の君、入學以來何時も變らぬクラッスの首席、されどあゝされど妾は親しき友に代りて天を恨みます地を恨みます、右足不具の爲めに樂しき遊戯や體操の出來ぬ可憐なる八重子の君……。

姉妹

長崎　三浦ふさ子

他家へ遣しける妹、亡き父の法事にとて參りけるに、いつしか日數もたちにければ、外へ出でなんとする前「今日は歸るの？」と問ひしに、「さ！、どうしませう？」との返事。あとにて、「姉様は、いつも歸れ〳〵つておつしやるの」とつぶやきけるとか。あはれ、我とて、鬼にしあらじな……まして、いとさちなく、生ひ立ちし二人。われを母ともたよるなるをいかで……と、思はず落す一滴。

田植

筑前　手島とみ子

昨日上谷の方から植え初めて曲の長い眠そーな歌が歯にきこえて居たが今我家の門田に人聲がするので障子ひらいて見ると丁度蓮田の處を植えて居る　アレ男が滑稽なことでも言つて居るのであろーか女の笑聲が頻りにきこえて居るあのかんばしつた聲は下女のお松であろー。

清ちやん

兵庫　大西秀子

「こゝは御國を何百里」「離れて遠く満洲の」今年九歳の清ちやん學校よりの歸りと覺しく「ザーダ」の鞄を肩に掛け無遠慮に大きな聲で軍歌を唱ひつゝ歸る路傍の花畑に蝶の舞ふを何と思ふてか　立止つて一心に見つめそして蝶花に宿るやちいさな手を蝶の後へもつと……　蝶驚いて何處へかとびさるや。

「赤夕陽に輝らされて」又歩む。

百合ちやん

越前　池上小芳

或る日妾一人お庭で洗濯しておりましたら、お隣の百合ちやんがいらして「姉さん何していらつしやる」のとおつしやるから、「洗濯よ」と答へたするとやがて百合ちやんは金だらひと石鹸とをもつていらして、この中へ水入れて頂戴とおつしやるから、汲んであげると、左の袂から昨日縫つて上げた人形のちりめんなどの美しい着物たくさん出して　すぐさま水の中へ入れなさつたから、妾驚いて何をなさると尋れた、すると百合ちやん平氣で洗濯よとおつしやつて、傍にあつた石鹸をつけてその着物を皆めちや〳〵にしてしまはした。

紙包

栃木　大野はな

小高き丘の青葉かくれに風琴の音、草刈る妾の耳にも何となく忍ばれて近よれば、主は花の盛の女學生の二人、賤しき妾を厭ふてか、いそぎ立ち上り丘の彼方に行き過ぎぬ。

あとに殘れる紙包あら忘れ物よ返さばやと、拾ひ見れば、こは如何に　おいもの皮。

たのしみ

栃木　中村きぬ子

世の人から餓鬼大將とか、見懸ばかりで金がないとかいはるゝ、小學校教員には、此のような作文を見る楽しみがあるのである。

題、いそがはしいありさま　　尋二　廣野みち

いまはいそがはしいときであります、わたくしはまいにちおともりをしますおとーさんもおかーさんもむぎかりにゆきます、となりのせんせいは、はなにはちまきをしてためひきをします。

合奏

大和　芳蘭女子

あなた笑つちやいやですよ、ヘチ一緒……　あら貴美子さん、私又違つてよ、勘忍して頂戴な。ほゝゝでは又初めからにしませう、今度は拍子とつて大きく大唄ひよ。

子さあイチニーサン（同じ道ふむ………）

歸省

佐賀　西かち子

先達來た、愛ちやんのお手紙に、桃割れに結つて姉様のお歸省を、待つて居ると、書いたつたが、眞く似合ツて美しい事だろう、今年もお歸の久子様とお辨當して森遊びに行こう、ほんに、去年は愛ちやんが足が痛いつて、お泣きなすつたがと、色々の事を想つて居る内に、戀しい故郷へ着いたので、飛ぶ様に我家へ着き、戸口から覗いて見ると、お母様は薄暗い燈火に皆つて、針の目を通して居らつしやる。

一枚の債券

大阪　奥以久枝

たつた一枚所持して居る、り號貯蓄債券が圖らず一等に當籤したので、喜び勇んで銀行に持參し、現金と引換をしました。先づ百圓は平素望んで居る時計、指環、衣服に、今百圓は慈善事業の會社へ寄附し、殘三百圓は取敢えず預入せんと、或銀行へ參り懷中より取り出ださんとせしに、途中にて掏られたのか、落したのか見當らないので餘りの情さに、不覺泣聲を上げた。傍に居た山田さんが、奥さん何を魘はれて居んですよと揺起されて夢が醒ると、宿舍の時計が二ツチン〱。

人の命

紀伊　林貞子

此頃の暑さに堪へかねて、或る夕、椽から庭の青葉若葉を眺めて居た、今しも一匹の蜘蛛が、半月の片隅に巣を營んで、いでや頁き獻御參なれと用意をさ〱怠りなき折柄、一匹の黄蜂如何に道を間違たか、あなやと見る間に蜘蛛の毒網に掛つた、驚ひて直に救け上げたが、すでに事きれた後の事、嗚呼黄蜂の命何故斯くも果かないであろーか、病める身には一しほの哀を催した。

○

神戸　富士野みゆき

まちにまつた御手紙がやつと今着てよ…とる手おそしとひらいて見たら…ほんとうに露子さん何といふお目出たい…おうれしい…まあ…定めしさうとは思つてゐたのでしたが又今更に…御良人の御心中わけて御許さまのおよろこびわたしは思はず小躍りしてよ…ことにお名まで勤まんとはあゝ去年の今頃…何たるお仕合を…われは思はず…

ばんざーい!!

落花

山城　藤田りう子

こぼれむばかりに、咲き匂ふ花櫻木に見れつゝ、春の歌唄ふあどけなき乙女の姿、いとしよと、見るうちに、撫づるやうなる和き風に、蝶の二つ三つ送られて、此櫻に來るよと見れば、花ははら〱と心なく散りぬ乙女は躍り出でぬ、ォゝ美しの眺めよ、花が蝶か、蝶が花か、乙女そよ佐保姫なるか。

無邪氣

兵庫　愁葉女史

「姉さんわたし今日いゝ事してよ、あのねポチが溝へ落ちて居たのをね上げてやつたのよ」と今年から學校へ上つたお轉婆の時ちやん、さも得意顔「オヽそうポチよろこんだでせう」といへば先生がね誰でも難儀して居るものは助けるものだと仰有つてよ「先生に話してあげるのよ」可愛い掌を出して時ちやんの手にのせると「姉さんこれお褒美」嬉しそうな顔。

短歌

（天）逸題　愛知縣　ますみ

藻の花を分けつゝのぼる舟白し
笠縫あたり月かたぶきて

評。何等の麗はしき歌ぞ。（停春）

（地）樗　尾尾　森　照野

かはほりのつばさやぶれし夕月に
樗花ちる川つらの里

評。詩味饒多。可誦可歌。

（人）折にふれて　女子大學　羽田豊子

五月雨をやみてわぶとも知らずして
古里人はたよりまつらむ

評。學窓に在るもの此の恨あるは、人の多く經驗する所也。情眞なるものよく人を動かす、必ずしも言詞をかざるを須ひず。

秀逸

○○○五月雨　兵庫　柳田白百合

琴やみし高殿に灯の影さして雨のおばしま人おぼろなり

其境其詩と共に清婉。

○○○折にふれて　岡山　田上濱子

卵としれど卵のほかなる心地してまたしのびけり其の春の夢

人情實に然るもの歟。

○○○逸題　德島　泣濱子

大潮といどみ合ふ如初夏の鳴門の空に龍の雲舞ふ

豪壯。

○○○胡蝶　姬路　井口その子

うなゐ兒の小さきいびき喚ぎよりて胡蝶舞へり夢胆ふごと

夢胆ふとは、何等の奇想ぞ。

○○避暑　河内　田中八須子

あつき日もいつしかよそにくれ竹のしげれる陰のふしよかりけり

用調巧妙を極む。

○○逸題　名古屋　杉谷稜子

柳かげ清水ながるゝ宿もがなしばしといひて君をとめまし

是亦用調の巧を以て勝る

○○夏月　埼玉　東角井高子

ふきよする夜風涼しき蚊帳の内にひとり寢待の月を見るかな

其涼しさ可想。

○○夏山家　名古屋　清水みさを

そのまゝに岩間の清水せき入れて夏をよそなる山かげのいほ

涼味可掬。

○○失題　麻布　原てる子

相逢ふて女夫の星が美しき戀をかたるかこの天の川

一機軸を出したる七夕の歌也。

○○夏夕暮　和歌山　森　紫尾

丸窓に女ふみかく眉若し卯の花白き夕暮の宿

如畫。

、○○蚊遣火　丸龜　吉田眞壽子

蚊の聲もすくなくなりて軒つたひ蚊遣のけぶりたなびけるかな

實景なるべし。

▷○○都の友に　越後　ことぢ子

花ならばまきそへましを君にやる文かくまどの鶯の聲

着想凡ならず。

▷○○五月雨頃大津に宿りて　伊賀　服部かつ子

今日も又降らんとすらん絶間なく逢坂山は霧立ちのぼる

五月雨の頃の實景見るが如し。句に力あり。

▷○○逸題　越後　坪井わか子

永久のむかし偲びて眞野の宮ぬかつき居れば啼く時鳥

感慨可掬。

▷○○折にふれて　埼玉　東　てい子

雨細き宵を若葉の院にして日記かき居れば時鳥なく

詩情を動かさゝらむと欲するも、むしろ得べけむや。

▷○○時鳥　美濃　山田愛子

きのふまで月に待ちたる時鳥この夕暮の雨に鳴くなり

月に待ちたる一聲を雨に聞く亦一興。

▷○○螢　石見　富田はる子

園のとみつくると思へば乙女子が飼螢の籠はちからなりけり

眞に然り。

、○○船中納涼　熊本　安田文子

夏の夜の月もすみだの川舟は秋を載せたる心地こそすれ

、○○河邊柳　奈良　奥西菊子

誰かもとにたよりせんとて青柳の下行く水に文や書くらん

佳調

○　名古屋　世貴子

破れかきま垣の菊にそとさして小雨の窓に歌思ふかな

白百合　兵庫　柳田白百合

手折んとさて佛の手のたゆたひぬあまりに清し谷の白百合

失題　京都　四辻清子

なり〳〵は水瀬に小鮎ひらめきて月影しろし清瀧の川

折にふれて　長門　杉山きくの子

さだてしはおなし教への園ながら鬼百合もあり姫百合もあり

○　福井　井田愛子

春なれど病む身にあれば歌もあらず桃咲く村は細き雨して

折にふれて　三重　佐々木らく子

やとりかれて胡蝶の一つまひいでぬゑみまたわかき撫子の花

折にふれて　諫早　紅涙女

さらぬだに涙ぐまるゝこの夕を山時鳥血にぞなくなる

夏草　和歌山　高内さくら

あさな〳〵露をしみれば夏草のかるべくもなき庭のおもかな

逸題　常陸　菊池峯子

うなひ子が歌のすさび止み果てゝ雨に暮れゆく濱の松原

失題　奈良　細田琴子

おしなべて高きを慕ふ世の中に低きをたどる水を見よ〳〵

山吹　備後　立神峰子

山吹やせめて一つは實ともなれ春になづるふ我が胸にさゝむ

○　美濃　青井志賀

汐あみてかつさすゝしき磯傳ひ波間はろかに月をしのぼる　大阪　森川春子

他家の稚兒を見て
富も名もありて我身に何かせん稚兒ぞ此世の寶なりけり　錦町　神谷よし子

五月閑晴
すがすがし木々のさみどりふか緑たらひにうつる梅雨晴れの朝

五月雨頃旅やかたにてよめる
大方は雨の文字のみがきにけりさみだれ頃のわがたび日記　三重　服部うた子

首夏
見渡せば早苗はみどり麥は黄にところどころにひな歌の聲　長野　松尾節子

社頭蟬
氏神の杉の林に雨過ぎて又一しきり蟬ぞ鳴くなる　廣島　親子

梅雨霽
五月雨の雲のとざせし我宿もさやかにはれて蟬ぞなくなる　熊本市　河村むら子

夏季雜題
眞帆片帆かなたこなたに行くみえて秋すゞしき濱の松かぜ　尾張　野咲すみれ

深夜子規
鈴鹿山青葉さゆらぐ青もたへて更けゆく月に子規なく　伊賀　ます子

○
野に摘みし花を手にして眠る子の夢や胡蝶のもとに遊ばん　神奈川　寺岡登卯子

卯の花
卯の花の垣根に添ひて一とめぐりめぐりて見たり野の孤つ家　姫路　なみ子

夏庭
松かげや庭のみどりのすゞしきにいもとれよげの常夏の花　武藏　青柳彌此子

才媛文壇懸賞募集

▲美文　廿四字詰廿行以內
▲實用文　半紙一枚十行限り
▲新體詩　半紙一枚十句まで
▲短文　一題五行端書に限る
▲和歌　一人一首端書に限る
▲小說　半紙十枚以內
以上題は隨意の事

賞金規定

和歌新體詩、短文、の優等者へは左の賞金(圖書切符)を呈す
▲天壹圓　▲地五拾錢　▲人參拾錢
又美文、消息文の優等者へは
▲天貳圓　▲地壹圓　▲人五拾錢
小說の當選者へは
▲甲拾圓
▲乙五圓　現金にて呈す
投稿はすべて女學世界才媛文壇係宛にて字體明瞭に記すべし
(〆切七月十七日限り)

人事詩（劍花坊撰）

題「太陽」「母」

天

十五億母に増したる人は無し　大阪 加藤あい

地

太陽はお伽噺で物を云ひ　大阪南區南桃谷十五番地 六車よしを

人

歸る帆を直紅に染めて日が沈み　尾張國小牧町中町 穗積榮子

懸吟

太陽は世界の人を寐せ起し　磐城 足立てい
あはれさは十六七で母に成り　名古屋 横井なみ子
まゝごとの母が毛虫で泣き出だし　大阪 れん子
朝寐坊あをむいて日を拜してる　神戸 岡名部胸子
赤丸がつくとお清書母に見せ　神田 末廣愛子
小包は母の手紙の絣がすり　藤浪やを子
日蝕に重の底をのぞくなり　本郷 佐藤はつ子
おツぱいを貰ふ御世辭の齒も濟み　芝 新野藤枝
滊車の消印印母は苦がい顔　横濱 加藤その
寐て居るに母の團扇の手は動き　牛込 小林鐵子
太陽の家庭星の子月の妻　神戸 筆屋みさ子
禿頭手拭載せて日を除ける　品川 智加女

佳吟

日を呑んで燼を吐き出す手品なり　羽前 谷山たに子
燈をも氣にする人の親ごゝろ　近江 貞子
赤星に光を惠ぐみ賞めさせる　八の戸 階上金子
運動が過ぎて局眠る母の膝　飛驒 さゝんか
母に爲り思ひ當るは母の慈悲　伯耆 入澤ぬい
圓窓に夕日がさして歌が出來　石川 栗倉菫子
及落は時の運ぢやと母の愚　大阪 翠柳女史
お試驗のその朝母は鯛を買ひ　奈良 中西まさ
獸物も夏は後から追手が來　美濃 田中久代
木戸口でこそ〳〵噺す下女の母　八王子 青木まさ
あやまりも意見もするが母の役　米澤 白藤女史
繪日傘にパラ〳〵と降る花の雨　神戸 青楓女史
七夜から泊り込んでる星の母　八王子 大野ふさ子
まぶしさを扉でよけてサプライム　讃岐 しづか
松の木にのぼつて朝日下界を見　岩代 阿部つぎ子
媒人を待たして母は云ひきかせ　旭川 磯部照子
須磨の夕病人までが顔色　紀伊 川俣多根
日の丸の旗が泣く子の守をする　大和 横出ひろ子
母の首伸び過ぎる頃歸省なし　相模 淵呂木たけ子

太陽は雜踏の中の見きなり　岐阜　櫻井華子
お針から歸れば膳が揃えてある　下野　永井きく
日の出も見日の入りも見て野良仕事　筑前　北村民子
三遷の揚句に機を斷つて見せ　奈良　中西まさ
母病事子は茶斷ち鹽斷ちし　姫路　船戸幽規子
太陽は我が國有の思ひあり　岐阜　櫻井育子
門先で母へ傘おしもどし　靜岡　手島とみ子
美しう鬼販り添ふ花拓榴　鶴見　岩村芳枝
泣き聲が母を跣足で外へ出し　小樽　若松とみ
額摺りて聞えて抱く母の愛　京橋　秀子
お日樣がわしと一所にあろいてよ　長門　中山秀子
思ひ入れ湯乳の額に接吻し　深川　山下みの
日の落ちる頃に敵艦全滅し　京都　藤田靜枝
さかしいが涙の種の未亡人　栃木　むらさき

撰句

蜜が塞蔵んだと人に挾まれ　新居濱　山崎玉子
右左りすかしてたどる雪の中　伊豫　くま子
日の丸が來て居る坊の蠅を追ひ　大和　中上芳蘭
風を引く早く休みやと病める母　德島　野澤さかゑ
母ちやんの兩手へ花がぶらさがり　岡　西野ひさし
夏の日やひれもすぐたり／＼かな　下野　深山百合子
來たあとへそつと布團をかけて置き　小樽　大杉ひさ
御日樣が五尺昇ると坊が起き　足尾　きん子

靜々し朝の二見で又も泣き　淺草　千代
東天紅無心の坊も合掌し　山城　吉川かつ
ひんがしの紅濱で手を合せ　横須賀　中里萬壽子
母親に泣いてだまして貰つて居　相州　小林英子
乳呑子をかゝえて母は針仕事　伯耆　船木松子
中見世で泣かれ母ちやん負けちまい　淺草　房所菜
女學生日やけをよける扇變　伊勢　三好ます子
母に具し今年も詣いる善光寺　越後　坪井わか子
日がさして子供喜ぶ運動會　姫路　のぶ子
御日の出を眺めて蜜四ツする　富山　網田くに子
懇想文母に見られて散る紅葉　岩代　稚子
奉公をして母樣の味が知れ　大阪　矢部てふ
夕日より人の見る方へさす日傘　相州　福田きぬ子
母さんのお歸りを待ち夜を更かし　信州　北澤かつ子
おさな子に海老茶をはかせとみかうみ　長崎　西村春子
太洋のお日は水から水に入り　備後　中村保子
夏休み早く歸れと國の母　相模　たんぽ
富士御朝日がさした厩かさ　大阪　山内米子
お日樣の年をきかれて姉困り　下谷　美登女
春の日を背中に受けて針仕事　栃木　松本紫子
愛らしい我子の爲に離縁せず　長野　西條うめ
來てる間とつい一針がとまりかれ　大阪　歌子
首途には健氣な母も陰で泣き　弘前　森下檜
病む母の枕のそばで針仕事　岩代　五十嵐みよし
戰で日出づる國の名が上がり　姫路　東村濱子

母さんとたけくらべして得意顔　滋賀　夏野梅子
愛らしさ歡迎の子の日章旗　日本橋　田中珠子
母さまの乳は日本一の味　近江　川原貞子
朝日子と山の端の距離を枠でるし　備後　立神峰子
眉毛染めて畫師のあきるゝ朝の不二　足利　それがし
弟は二見の話得意なり　愛知　小島品子
飾着た節會が母を喜ばせ　上野　佐藤露子
英雄を出すのも母の力なり　同　登仙女
太陽をにらめて露は失せにけり　小樽　野村仙子
病める子の額でそつとさわつて見　尾道　中尾せき
おひづるを撫でゝ眺めて母雨だえ　熊本　佐竹紫花
いじつては寐て居る坊を母起し　兵庫　春田愛子
添乳する子供に母は寐かされる　牛込　鈴木靜子
母の鏡叉も源氏の御代と爲り　門司　櫻井多計子
式部の母女大學讀めと云ふ　なでしこ
三遷の孟母が有つて孟子あり　大阪　福田きく
氷賣る兒の顔に日があたる　久留米　まさ子
母ちやんとうつゝにまでも呼んで居る　香川　川崎みつゑ
小包に中に溢るゝ母の情　岐阜　度會よし子
みやしろの幣にわなゝく筆の跡　同　安藤ゑい
田植時野田の細道親子づれ　貞子
寂しさは母の一夜に父十日　駿河　片山いさ子
日のもとの光を浴びる全世界　神戸　定村春枝
灸すえてあとでいたはる眞の母　千住　宮崎壽洲
三遷の慈愛英才世に出だし　伊豫　熊谷友枝

日は海に波をいろどる夕景色　大和　春日子
蚊の聲にうたゝねの子を母あんじ　岐阜　加藤芳子
太陽が父上なれば月は母　兵庫　大西秀子
末の子はいまだに母に抱かれて寐　福井　池上小芳
人形を抱いた人形に乳を呑ませ　奈良　中西まさ
日盛りに木綿をさらす青女房　岡山　青木米子
御端の日傘やら櫻やら　同　[illegible]部君野
可愛さが餘つた母は頰ずりし　赤阪　つれ子
雨の日に日傘と母をこまらせる　岡山　林琴子
海人の子が夕日を浴びる濱傳ひ　浅草　堤いく子
おばさんへお辭義をしなと顔を見る　岡山　春野靜子
花摘みを天道樣は笑つて見　大阪　八重子
赤ちやんの寐た間を母は針仕事　岡山　阪本高野
眠りつゝき水いさかひのかしましさ　越後　野ざく
其次は男の子でと母自慢　岡山　白神美代子
母となる身をはにかみて岩田帶　秋田　佐々木つれ子

加

繪にかけば花をあしらふ聯隊旗　劍花坊
太陽に目鼻隙腐なボンチ也　同
厄介な次男は母のふところ子　同
孝行にしてくれますと嫁自慢　同

次號課題

「夏季雜題」

夏の題にて人事に配合する事柄を捉ふれば可也、俳諧にならぬ十七字、人事に關する十七字、品よく面白く、やさしくおかしく詠まるべし。

謎々

「梅雨」「寫眞」「情死」とかけて

一等

▲情　死　奈良縣添上郡田原村字茗術　奥西菊子

「平假名」と解く、心はいろ(色)に初まる

二等

▲情　死　栃木縣喜連川町一四七　吉川千代子

「河原」と解く、心は小石々々(戀し〳〵)の集り

三等

▲梅　雨　米澤市東町下通り七二六　藤倉白藤

「雙六の遊び」と解く、心は振たり(降ったり)あがったり

▲寫……織田信長の家來」と解く、心は「全身(善臣)も半身(反臣)もある　美濃　田中久代

▲梅……富士登山」と解く、心は「日の出を待ちる　長野　名取月波

▲情……論功行賞」と解く、心は「遠征(厭世)の結果　羽前　谷山たに子

▲寫……人の顔」と解く、心は「年がたつ程はげて來る　岐阜　安藤ゑい

▲梅……健康な人」と解く、心は「なか〳〵やまぬ(病まぬ)　千葉　米良もみぢ子

▲梅……商人の失敗時」と解く、心は「不利(降り)續く　奈良　中はる子

▲寫……寫眞」と解く、心は「勾践(光線)を主とする　越後　坪井わか子

▲梅……下手な書畫の展覧會」と解く、心は「眺め(長雨)に厭く　遠州　丸山茂登

▲寫……大神社と解く、心は「外見は美しくても内心(内神)が見えぬ　陸奥　山中まつ枝

▲梅……むづかしやの衣類」と解く、心は(洗濯)選擇にこまる　松山　せん子

▲情……桂太郎殿」と解く、心は「鯉(戀)で浮名を流す　越後　坪井わか子

▲梅……田舎より上京した女學生」と解く、心は「大抵の物が黴(華美)に成る　加賀　太田菊枝

▲情……常盤御前の變節」と解く、心は「聞ば哀な節もあり　岐阜　青木松尾

▲情……貧乏人の五月節句」と解く、心は「鯉(戀)が立たない　足尾　伊藤みつ子

次號の新題

▲海水浴
▲緣日
▲小村駐英大使

〆切七月十五日限
賞金一等一圓、二等五拾錢、三等三拾錢、
謎々の投書は端書に限る事

當世ものはづくし

▲いやなもの

◎小姑のひそ〳〵話　紀伊　黒柳三子
、○好まぬ人の長談議　鶴見　岩村芳枝
○○雨中の土左衛門　相模　木内とみ
、、入梅と大晦日　深川　加藤木はる枝
、○後をつけて來る男學生　大阪　翠柳女史
、食物にたかる蠅　大阪　みよ子
○○食事中人の來た時　横須賀　中里ます子
、、きざな男の訪問　徳島　郡澤粂子
、、金さいそくの手紙　横濱　相田照子
、○月經の時に汗をかく　紀伊　黒柳三子
、試驗の時の難題　栃木　岸けい子
借金取り　神奈川　秋田眞子
○わざと廂髪にして鼻眼鏡をかけた女學生　兵庫　愁童
電車で男ににらまるゝ事　中萬輝子

▲好きなもの

○ハンモックにのりて女學世界を見る時　近江　すみれ
、無邪氣の小供　滋賀　夏野梅子
○小波先生の作　山形　藤倉白藤
○○新婚旅行　深川　加藤木はる枝
、小説　東京　池田濱子
、、初夏の満月　徳島　郡澤粂子
、○心あひの友　長崎　西村春子
○○自分のよく出來る學科の試驗　金澤　藤田すみ子
、、歌加留多遊び　神戸　間名部駒子

▲辛いもの

、浮世の味　周防　梅子
○○嫁入つた先の姑の八ヶ敷い事　福岡　筑紫子
からしとなんばん　池上小芳
、ハイカラの内幕　四國　百合子
○親父の意見　函館　ちよ子
、、みなし子の世渡り　長崎　西村春子
當時の人情　三河　太田みれ
○盲人の杖うしない　福島　水谷せん子
○○打ち明けて云はんとして云はれぬ時　小石川　中島そめ子

來月の課題

（一切七月十七日限　ものはづくしの投書は端書に限る事）

▲意氣地のないもの▲有ても無てもよいもの▲耻かしいもの

投書せるお方の住所姓名番地は必ず正確に原稿に御認め願度候、諸姉の姓名を記載なきため懸賞品を送る事能はざるのみならず、まゝ間違を生じ候間、今後は必ず叮嚀に御記載下され度、他人の名前にて投書する事はかたく御斷り申し候

一口ばなし

▲授業料の安い女學校　堺　田中松代

下女「お孃樣の學校は大へん授業料の安い學校なのね」、孃「なぜ」下女「でもお孃樣の學校は拾錢(實踐)女學校とか云ちやあ御座いませんか」。

▲　岐阜　度會よし子

甲「あなた〳〵、わたいのお寺の坊さん頭の回りが十八里もあると云ふ評判さ、乙「冗談でしやうこれは趾の里數とでも云ふ洒落の積りかしら、甲「いや實際九里九里坊主だからさ。

▲懸賞寫眞　宇都宮　大谷こうた

太郎が太陽の懸賞寫眞を撮影さうと機械を持出して切りに氣をもんで居ると、次郎が飛んで來て、「兄イさんソレナラ譯はない、コウお寫しよと取り出すのを見れば太陽懸賞寫眞第一等當選!!

▲英語　谷山たに子

父「いゝかな摺附木のことを英語で何と云ふか」孃「マッチです」父「いやマッチは日本語だぞ」孃「そんなら何と云ひませう」父「スールトピーアル」。

▲燒字や　會井でん

甲の燒字や名を十里とつけて賣り出しましたが、一向賣れません、餘りの不思議さに、乙に向ひ「私共では何故賣れぬのだらふとくどきますと乙「ア、其れは(五里五里)だから賣れぬのだとさ。

▲お化粧　紀伊　黑澤三子

「坊」毎朝〳〵お化粧する母に向ひ、お母チャン「いつそお化粧を鏡にして置きなさい。

▲　山口しづ子

昔は胡蝶(月星)といひ、今は蝶々(町長)といふが、サア此次は何んといふ名をつけるだらふ「左樣もう名種(案種)はないだらう。

▲女教師　西尾敏子

女教師「ホールトに(白)と云ふ字を書き、「さあ皆さん讀める人?」生徒「………」女教師「此の樣ですと己が顔を指した」生徒「直ちに手をあげ「黑」。

▲　伊勢　熊谷友枝

一日阿彌陀如來釋迦佛と酒狂の上爭論す、釋迦は阿彌陀を捨ち上げ是が釋迦捨ちと云ふ如何、阿彌陀泣て訴へて曰く、恕し玉へ〳〵目から阿彌陀が出るアイ。

●記者より讀者へ　前號消息文作者平井千東子の「たんぽゝより胡蝶」への文に付少々御尋ね申度き事有之候間住所御存じの方は是非御知らせ下され度候○麻布新龍土の澄江子樣にも小説の事に付住所承はり度候○美文消息文の投書の中へ短歌人事詩謎々一口ばなし、ものはづくしなどを交ぜて投書すると無効となりますから、別々に願度候。



女學世界定期增刊

家庭百生活

夏は來れり本誌六萬の愛讀者如何にして驕陽三伏の暑を凌ぐべきか、海水浴よし、溫泉よし、旅行よし、登山も又悪からず、去れど懐を屛顔洗ふが如き靑山に馳せ、氣を渺々たる海濤に托するの快は、好書を得て好讀するの快に如かず、本誌の定期增刊家庭百生活は、銷夏に適する好資料を選び、趣味と實益を兼ね、健全なる家庭の好讀物たるを期す。

（七月十五日發行　定價貳拾錢　郵稅貳錢）

▲顯榮の御食卓
▲英國皇室の趣味
▲獨逸帝の家庭趣味
▲我家の廿四時
▲食卓の團欒
▲理想の生活
▲家庭の圖書館
▲我家の公園

▲一家の智惠袋
▲登山のたのしみ
▲令孃旅日記
▲化粧十二則
▲談話の趣味
▲晩餐後の遊戯
▲子供の成育日記
▲蓬萊不死の藥

▲御馳走文學
▲料理山海經
▲昔の食道樂
▲珍膳四十七種
▲下婢の禁條
▲夢うらない
▲海水浴の遊び
▲溫泉場の一日



父おもひ

小栗風葉

一

十月も末であつた。私は伯父の命を受けて牡鹿の半島に旅立つこととなつた。用向といふのは他ではない。伯父とは小さい時からの親友で、それに遠い親戚になつてる田村鐵衛と云ふ人が、ある事業の失敗から可也の財産を磨つて了つて、今は少しの所縁をたよりに石巻の町に逼塞して居る。然るに他の噂に聞けば、その妻君が肺病に罹つて目下危篤とのこと、仔細あつて伯父とは數年以前義絶同様の疎音にはなつて居るが、外の時と違つて病氣とあらば見ぬ振もなるまい、といふ處から、幸歸省中の私に言付けて病氣見舞旁々生活の様子も探つて來るやうにとの事であつた。私は又これを好い機に、多年憧れて居た半島の秋色を、存分に貪つて來やうと云ふ意りで。

仙臺から鹽釜迄は汽車、鹽釜から石巻迄は小蒸汽船で五時間に足らぬ旅程。蒸汽船と云ふものゝ、高が運河の回航船で、辛と四五十噸積の吃水の淺い外輪式、北上丸と名ばかり嚴めしい小蒸汽である。

潮時の都合で、平時より二時間餘りも後れて、鹽釜を出帆したのは午後三時頃であつた。

上等室として別に仕切つてはあるが、疊なら辛と三枚ばかりも敷かるゝか、草色の絨氈は無殘に擦り切れた、恐しく天井の低い船房。裝飾と云つても、黒塗の枠入になつた船籍證、顔を馬鹿に細長く見せる姿見位なもの。唯、三方が硝子窓である丈は嬉しかつた。

その狹苦しい室に、好く寄宿舍の扣所などに見かける嚴丈な鑄物の鐵火鉢を圍んで、ボーイの汲んでくれた番茶を啜りながら、埓もなく語り興じて居る乘客が、私と共に都合七人。

北海道邊の商人であらう、白毛布の上に足座を組んで、毛皮の襟の付いた角袖外套を着た赭顔のでつぷり肥つた四十男。次に、「これから久振で娘に遇ひに行きます、孫の顔を見ますのが、もう樂みで〳〵。」とでも云ひ相な、顔も手足も髷も薄く小さい媼さん。絹の褞袍を端折つた、遠濱の網主らしい二人連。些つと叄つた黒斜子の五ッ紋に節糸織の綿入、何れは中央名士のそれを眞似たのであらう、胸高に結んだ白の羽織紐は如何にも立派だが、胸が擴がつて、手足の節くれだつた處に、直ぐ素性を讀まれる所謂地方政治家。その他には書生が一人と、私。話はそれから其れへと花を咲かして、折々ドッと云ふ笑聲。

然し、書生のみは初めから一言も交へず、窓際に倚つて水彩畫のやうに前に展がつて居る鹽釜灣の布置を眺めて居た。その眼付の若々しさ、やゝ延び過ぎた髮毛が緩かに波を打つて居る所爲も有らうが、顔色の蒼白い、氣の軟かさうな青年である。

汽船は松崎灣を右に望みながら、繪にあつて好い程の眞帆白帆を絡んで、白鷗の飛び違つて居る、秋穩かな深碧の海の上を二海里餘り、東名の岬から運河に入るのである。

十月末といへば、北日本の秋は最う老いて居る。兩側の堤の雜草は代赭色に末枯れて、乾いた堤の地が淺しく見え透いて居る。弱々しい――然し夏よりも明かな――秋の日射は餘程傾いて、千斷れ〳〵の羽雲は、潮脚の鈍い、寛りした水の上に落付もなく漂うて居る。

船は是から五里の間――時間で云ふと四時間餘、此の

單調な平凡な堤の間を進むのである。

汽船は野蒜の村を過ぎた。

私は皆の話にも飽き、それに火鉢に焚いたコークスの臭氣、强い煙草に攻付けられて、一人新鮮な空氣を吸ふ覓りで甲板の上に遁れた。

それは、如何にも靜かな晩景であつた。底冷のする夕風を怖れてか、乘客の姿は一人も甲板には見えなかつた。未成品の塑像のやうな船長も船員等も居なかつた。大方、宿屋の番頭どもを對手に、胴の間の積荷の中で賭事にでも耽つて居るのであらう。

狹い甲板の上に私は唯一人。意味もなく突立つて居る。



▲新柄浴衣地

野蒜の町！　名を聞いた丈でも早や追懷の情が胸を突く。もう十五六年昔の夢となつた。海岸線の屈曲の緩かな太平洋沿岸には横濱と函館の間に、是ぞと云ふ良好の港が無いのを恨んで、某と云ふ時の縣令が或る外國技師の設計に基き、政府に說き、民間に勸めて、此の漁村を築港する事となつた。維新の敗北以來萎靡振はざる縣民に取つては、其の工費の半分幾十萬圓――その半分は國庫補助を仰ぐとして――は決して輕い負擔では無かつた。然し縣民等は築港後の殷盛と利益とを妄想して、高い利率の縣債迄起して築港を敢てする事になつた。

工事は設計通り着々其の步を進めた。利に敏き他縣人は一攫千金の投機を見越して皆この新開地に流れ込

んだ。近傍の雜木林や沼地は一朝にして十數倍の價格を呈した。沿岸の漁民農夫迄が、眞面目に櫓柄を掴むのを愚かしく思ひ、一廉の商人になりすました意で、父祖代々の不動産を賣り飛ばし、夫れ〳〵の智慧を搾つて新事業に着手した。其頃の野蒜は全で金鑛發見當時のカリホルニヤであつた。

あゝ、然しながら幻の夢は不幸にして醒める時が來た。最も其日は午後から西南風が吹荒れて、雨さへポツリ〳〵降つて居たが、是のみに三十萬圓を費したと云ふ第一突堤の竣工式を擧げた夜の、初夜過ぎからドツと云ふ大暴風に變つて、翌一朝技師も村民も夜前の醉心地で瞼を腫らして港口を眺めた頃には、さしも大資本を投じた大工事は痕方もなく破壞されて、蒼海は依然として寛りと和いで居つたので……。

日は遙かの森に沈んで、暴風の前兆のやうな餘光は穩かな空を彩り、夕闇は胸に泌み込むやうな軟らかな匂を乘せつゝ、ほの〳〵と薄れて來るのであつた。汽船は水の上に長い白波を殘して進んで行く。周圍が靜穩になるに就け、水を嚙む車輪の響が高まり、獵犬のやうに息を彈ます煙突からは連りに火花が散るのである。

眸を凝らすと、當時幾萬の人の頭を沸立たした市街地は、灰色の夕雲の下、淋しい枯野に其の面影を留めて居る。町割も溝渠も敷石も牓示杙も、恐らくは十幾年かの昔、第一突堤が流された朝、勞働者が仰天の餘り其手から投出した瞬間の儘て、春に一度秋に一度、村の若者が飼葉を刈取りに入るばかり、波の音松の風に明け暮れて、徒らに旅客の心に其盛時を描かせて居るのである。

今日私が訪ねに行く田村の落魄も、此時の失敗が源因であつた。凝としてさへ居れば、相應の財産家で通れるのを、生中の新智識を持つて居た丈に、早くも築港の利益に見込を付けて、數町歩の地面を買込んだのが、此不測の天災で五六千圓の損失を招く事になつた。それも其儘で斷念すれば何でも無かつた者を、そこが人間の弱點で、其の損失を塡めたいばかりに、馴れも

せぬ投機に手を出す、其れも外れると云ふ段取で、焦り悶えた揚句、遂に朝倉の鑛山に懸つて見事に磨つて了つたのである。

私は那樣事を考へながら、狹い甲板の上を靜かに歩いて居た、恁う云ふ時には別に取留めた感想の浮ぶものではないが、唯、周圍が餘り靜穩なので、胸の内に隱れて居る、何か深い悲哀が誘出されるやうな思がするのであつた。

私は先に甲板の上に唯一人と言つた。然し今氣が付いて見ると、船首に積んである菰荷の間に凭れて、彌張思に沈んで居るらしい一人の書生があつた。即ち私と乘合せた淋しい顏の青年其人である。

汽船は今丁度閘門に差懸つた。市街地の東外れに當つて居る處で、新溝渠の水量と海に通ふ運河の水量とを均一させる目的に設けた、石疊の宏壯な水門である。その前を通る時、運河に丁字形をして居る新溝渠は眞直に見え、第一から第五迄の五箇の鐵橋が書割のやうに折重なつて見えた。片側は市街地の茫々たる薄野、片側は稍寒げの雜木林、其の間に渡せる鐵橋は、朽ちたる桁、錆びたる欄干に十何年の風霜の痕を見せて居る。今は別に水を引く要も無い處から、眞黑な河床の間を蜿り傳つて、チヨロ／＼流れる秋の水の上には、美しい夕燒が燦然に映つて居る。私は何と無く名畫などにある、古城の廢園の下を通るやうな感想がするのであつた。

『惜いものだな。此儘立腐れに爲るとは、實に惜いものだ。』私は唯獨言ちた意りだつたが、顏は眞向きに其の書生の方を向いて居た。

『然し僕は又、此間に無限の敎訓があると思ふんですね。自然は形象を以て、人力の微なる事を誡めてるのでは有りますまいか。』

『然う思へば、然うも見られますな。』

『僕は此處を通る度に然う思ふんですね。人間のやる事は何時も這麽ものです。人間の力量で何が出來るものですか。自然には大なる理法と力があるんですから、人間は唯自然に服從して居れば可い。其れを人間は自

箇の力を揣らずに運命を咀つたり、天意を圖つたり、愚な者ですね。實に愚な者です、然し……。』と言半して口を閉ぢた。而して謙遜な眼付で、初對面の人に仍ないと思つたやうに私を見上げた。私も押して問ひも爲なかつた、唯然り氣なく、

『石卷へ御歸りですか。』

『は。』

『東京から？』

『は、美術學校の生徒です。』

『羨しいですな。私は君等のやうな若い學生の方の歸省を見ると毎も然う思ふ――尤も、私は早く兩親に別れて、家庭の情味と云ふ者に餓えてる所以もあるでせうが。』

『羨しい？ 僕をですか。』飛んだ事をと云ふ顏付。

『御兩親は御達者でせうな。』

『は、達者です。』と氣の無さゝうに言つて、遥か向の村の灯を見詰めて居る。

何時の間にか、周圍はトツプリ暮れて、船首には青い舷燈が揭げられた。

私どもの行く北上川の上あたりには、寒さうな星が點々と煌いて居る。

二

翌日、私は田村の家を訪れた。成程難澁も今が絶頂の樣子である。以前郡長が住んで居た後とかで、邸は相應に手廣く、玄關坪内など事々しく構へてあるの丈、零落の態も著しく目に立つのである。

私の尋ねて行つた時、主の鐵衛は玄關脇の薄闇い一間に、寒さうに足座を組み、手酌で罎詰の正宗を傾けて居た。一見して私は鐵衛の衰の甚しいのに驚いた、四五年前の其人とは全で別人のやう。一體が痩削の小柄な人であつたのに、長年の辛勞と貧苦とに不見目な程窶れて、薄い耳朶から掛けて肩の聳ちが痛々しく、背後姿など如何にも年寄染みて見える。

『何うだ、東京には面白い事があるか、大學は何科を遣つてるとか云つたな、何？ 理科？ 貧乏學者にで

もなる氣なのか、學者になつて何うする、一生フラソコの尻を弄つて朽果てる氣か。』

罎の底には酒が未だ殘つて居るのに、鐵衛は最う可成醉つて居るらしい。其以前仙臺に居た頃は有名な强酒家であつたのに、僅三四合の酒に言葉の調子まで狂つて居る今の有樣を見ては、實際同情の念に堪えなかつた。

『然し小父さんのやうに、然う金ばかり儲けたがる人も稀しい。』

『貴公は金儲が嫌ひか、羨しいな、はゝゝ、俺は又金が欲しくて〱な、五十年來それぱかりに苦しんでるんだ。』と小さく揃つた齒並を見せて、是丈は昔の儘な高い聲で笑つた。

『では、今でも彌張朝倉鑛山の方をお遣りですか。』



▲新柄浴衣地

『遣つてるとも！　盛に遣つてる、那の鑛山は田村鐵衛の生命だ、待て〱、今に呻と云程儲け出して、貴公等のやうな痩犬等に目を眩させて見せるぞ。』

『那樣に儲けた處で何になるでせう、人間の欲には限が無いから、足る事を知らなかつたら、幾ら儲けても結果は同じだらうと思はれますが。』

『馬鹿な事！　一萬と十萬は第一算盤の桁が違ふ、欲が無いと云ふ貴公でも、眞新しい金貨で、爰に十萬も積まれて見ろ、屹度顫付くに相違ないから、はゝはゝゝ。』

さては噂に聞いた通り、是程に零落しても眼が醒めず雪のやうな空想に欺れて、妻子には憂目を見せ、世間からは爪彈されながらも、未だ鑛山などに焦り狂つて居るらしい。

私は苦笑しながら、『ですが、私共の目から見ますと、貴方は金を儲ける事それ自身に趣味を持つて居られるやうに見えますが。』

『金を儲ける事それ自身？　儲ける事それ自身と云ふと、俺は空に奔走してると云ふ事でもあるのか。』

『そんな空といふ譯ではありませんが。』

『では何うか？』と眼に威を持たせて私を見る。誰にしても、眼付から先づ酔ふものであるが、鐵銜に限つて酔へば酔ふ程、霜を帯んだ鋼鐵のやうに眼の内が冴えて來る。」

『私には何うしても然うとしか思はれません、凝としてお居でなすつたら、相當な資産はあり、一家揃つて立派に行かれべき筈なのを……。』

『はゝゝ、馬鹿な。』と眼ばかりで笑つて居る。

『實際、小母さんや靜枝さんが氣毒でなりません。』

『處が、お朝や靜枝は那樣意氣地無しぢやないから安心してくれ、皆喜んで貧乏して居るて。』

處へ下男の重作爺が外から歸つて來た。

『おゝ百騎町の若樣でねえか。好く御座らつした。』

『何時も達者で結構だね。』

『年い老ると、氣ばかり達者で何にもなりましねえだ――時に水島へ廻つて來ましたゞが、旦那。』

『水島？　其話なら後にしてくれ、其れよりかな、重作、俺は今金儲を止せと云つて、眞造に叱られて居る處だ。はゝゝ。』

重作は存外眞面目で、『旦那はそれで何と言はつしやるだね？』

『何と言ふものか、金儲は鐵銜の病氣だと思つてくれ……。』

『然うだかな、私は又、今日のやうな事があるに付けてもな……。』

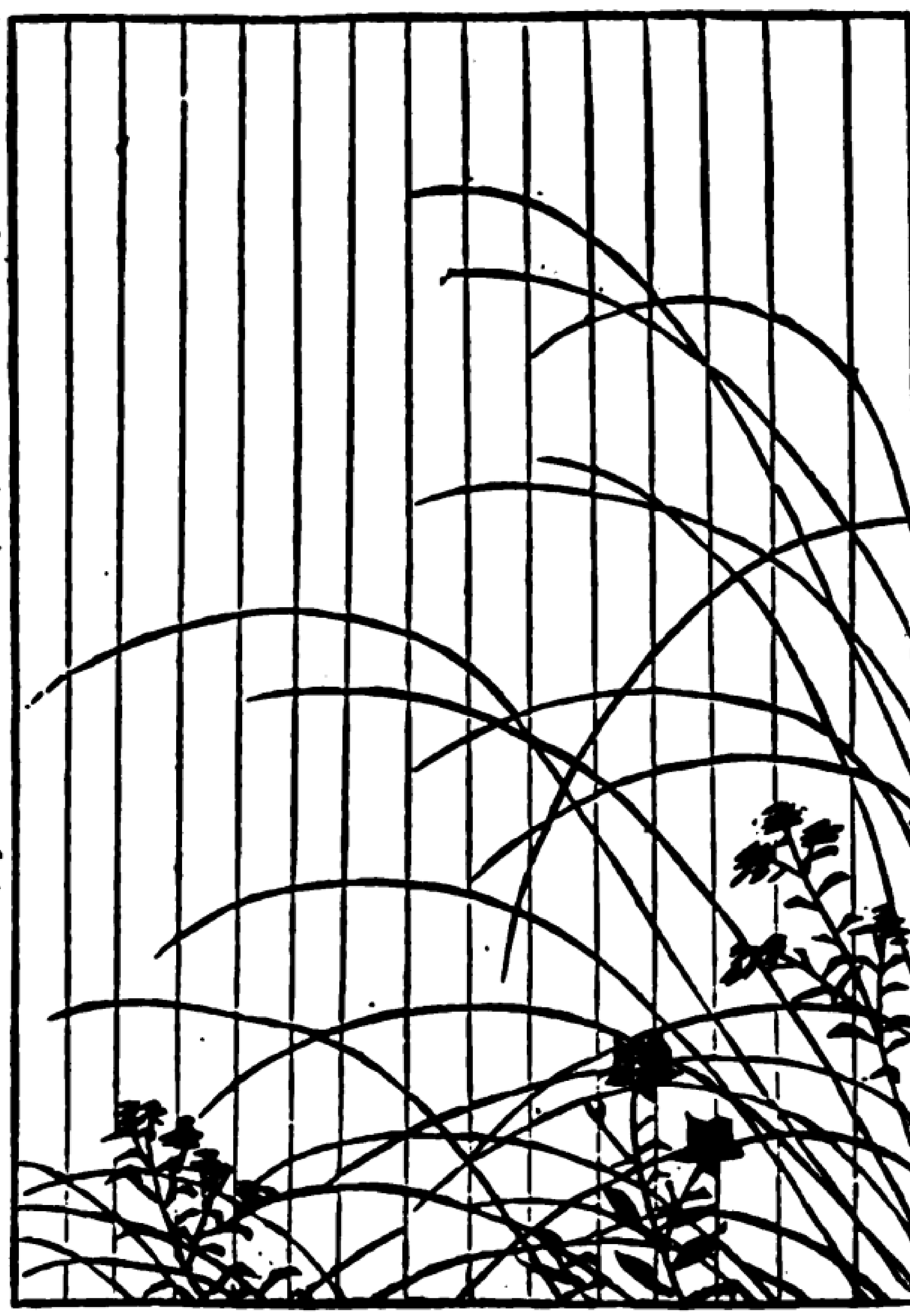
『最う合せ合せ！　貴樣の意見など聞いて耐る者か。』と、不厭な顔をして、靜枝は何處へ行つた、眞造が來た事を知つてるか。』

『奥で下の孃樣と何か話しながら、泣いて居なさるだ。』

「ちよ！　困つた奴等だ。」と舌打しながら、鐵衛は庭下駄を穿いて偶いと出て行つた。

で、私は案内知つたる病室へ行つて見ると、病人の裾に火鉢を圍んで、編物か何かして居た娘共は立場を失つたやうに其處に居竦んで了つた。姉妹二人、姉は靜枝と云つて今年十九、妹の辰子と云つて漸う十三。鐵衛は苦しい中から、姉妹を仙臺の女學校に出して居るやうに聞いたが、母の看病に此節歸つて居るものらしい。病人は白い布で面を掩つて、寢息も聞えぬ程靜かに沈着いて居るので、愁ひ目を覺ましてはと思つて、私は密と娘の方へ行つて、

「何時お歸りでした、彌張お母さんの御病氣で。」



▲水色縮緬に秋草を白上げ又はオリーブにて染上しもの意氣向

「はい、此のつい五六日前――十六日で御座いました。」と、靜枝は更紗の蒲團を出して薦める傍から、妹娘の辰子が窮屈さうにお辭儀をする。

「辰ちやんは暫く見ない内に大きくなつたね、私は誰だか忘れたらう？」

「知つてゝよ、仙臺の兄さんだもの。」と點しさうな薄笑をして居る。

「お母さんは病氣、姉さんは居ず、辰ちやん一人で大底ぢやないね、臺所のお手傳迄してるの？」

「あら、何故？」と不平らしい顏をする。

「でも、手が大變荒れてるぢやないかね。」

「まあ可厭！　誰が臺所なんか。」と脣を外らして、一旦引込ませた手を自分も眺めながら、

『これ、砂金洗つたからなのよ。』

『砂金と云ふと。』

『ほら、砂の中にある金よ、米粒のやうな。此間鑛山から傳馬十二杯、砂金の土を送つて來たから、それ洗つたのよ、面白かつたわ、ドッサリ拾つたら指環を打つて貰ふ筈だつたの。』

『那樣にドッサリ有つたかね。』

『有るもんですか、ドッサリ無いからこそ、金が高いんだわ。でも、本當に面白かつたわ。然したらね、お父樣が――。』と言はうとすると、『辰子さん！』と靜枝に窘められて、口を噤んで了つた。

『靜枝さん、小母さんの御病氣は、お宜しい方ですか。』

『はい。』と靜枝は外の方に眼を逸らした。

『今、お睡つてゞすか。』

『はい。』

　庭に冷たさを持つた透明な秋の日は、末枯の梢を透して、庭一面、座敷の中まで明るく流込んで居る。病人の好みで植ゑた秋草は大方枯れ伏して了つて、血で染めたやうな雞頭の毒々しい色のみが、霜にも撓げず目に立つ。

　四年振で見た靜枝の姿は全く女になり濟して居る。美人の名高い母の血を受け、黑い髮、乳色の頰、特に人を引付けるのは其眼で、軟い潤みを持つた底に物思はしげな色を含んで居る。華かな娘らしい所が無くて、何處と無く、若い尼僧などに見る淋しい俤があるやうに思はれた。

　と、何所から迷込んだか、羽の白い秋の蝶が一つ、靜枝の眉の邊を掠めて、小さな靈のやうに弱々しく飛んだ。靜枝は息を凝らして其れを眺めて居る。

　蝶は木葉のやうに舞下り、病人の夜着の袖を傳つて、羽搏しながら天鵞絨の肩當の邊まで行くと、何に驚いたか、白い粉を零して、ヒラ〳〵と高く上り、額緣を横に外れて、夢のやうに小春日の庭に出て了ふ。

　靜枝の靑醒めた頰を傳つて、涙がハラ〳〵と流れた。

　私は何がなし胸が痛んで來た。唆かされるやうな思で、病人の枕元に躙り寄り、顫へる手で、顏を掩うて

ある白布を取除けて見ると、病人はグッタリと仰向いて、下顎部には死色さへ見える。

『靜枝さん！　こりや小母さんが！』と言ふ聲は鋭かつた。

『は！………。』と靜枝は唇を嚙んで居る。手を觸れて見ると氷のやう、少くも今朝明方頃息を引取つたものらしい。

『全體、何うしたと云ふんです、靜枝さん。』

『は………。』

『小父さんも餘りだ！　今奥で靜かに眠つて居るなんて。』

『…………。』

辰子が、『お母樣は死んだのぢやありませんよ。』

『死んだのぢやないつて？』

『え。』と私の眼を見て、氣が射すやうに俛れて、『未だ死んだんぢやないつて、お父樣が然う言つてよ。』

『馬鹿な！』

『だつて、お母樣はね、死んでも這麼家から葬出すのは可厭だ、お嫁に來た時のやうに賑かに出して貰ふんだつて、然う言つてゝよ。』

『辰子さん！』と制した靜枝は何時か貴夫人のやうに落付拂つて居る。

其處へ鐵衞は懷手のまゝ、ノッソリ入つて來て、『眞造！　貴公の目にはお朝が死んだやうに見えるか。はゝゝ、馬鹿な！　お朝は死ぬものか、朝倉鑛山の煙筒から吐く煤煙を見ない内は、死なぬと口癖に言つて居たぞ。』

私は默つて居た、辰子は悲しさうな眼色で父を見上げて居る。

鐵衞は室内を歩き廻りながら、『死ないとも！　死ぬものか、二十年來這麼苦勞を嘗めて來て、今死ねるものか、死なん、お朝、死にはしないな、お朝。』と枕頭に立留つて、凝と死人の顏を見下しながら、『死ぬんぢやないぞ、お朝、死ぬんぢやないぞ！　乾度あの鑛山を活かして見せるから、必らず死んでくれるなよ。』と言つて、枕頭の藥罎を取つて、死人の口に流込んだ。

眞白な水薬は土色の頬を傳つて、白い布の上に冷々と流れた。

花うり

上

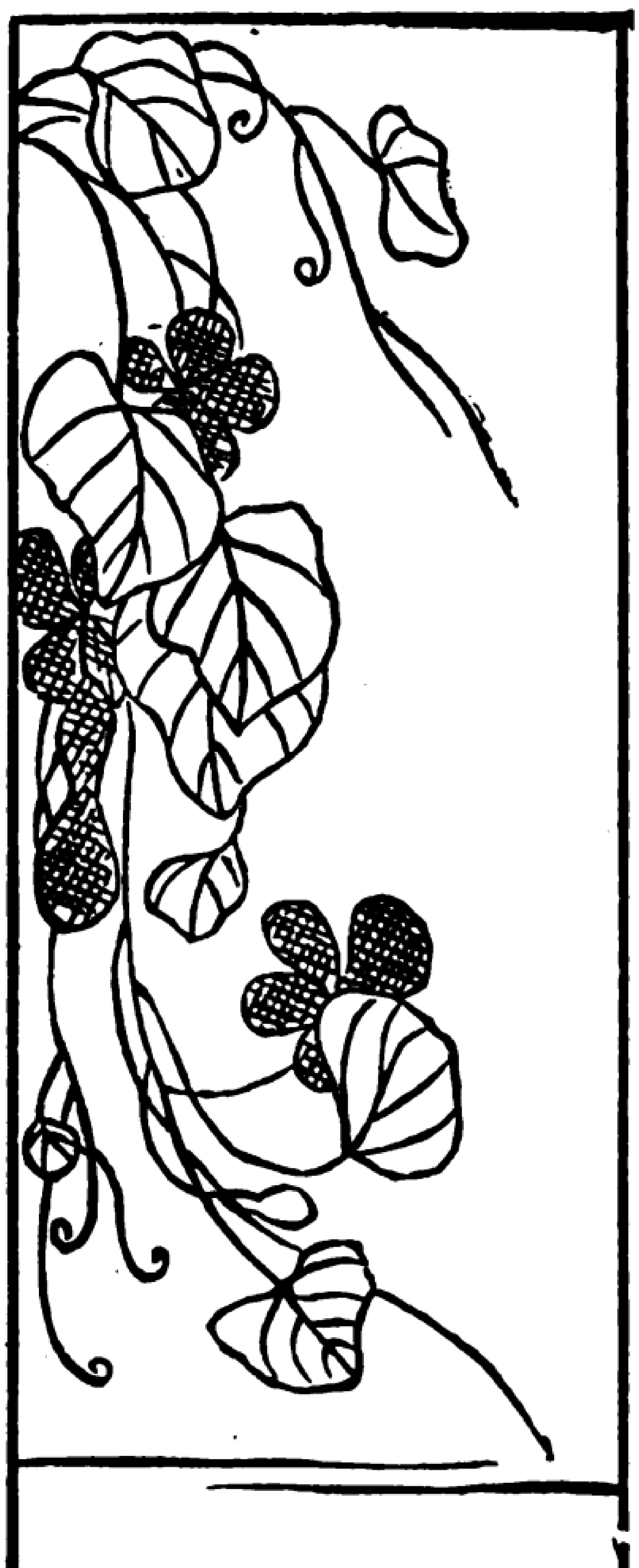
甲野翠子

店の者等の手前も思はで歳効もない姥やの、如何した事かとおとみは針の手留めて窺へば、其れとも知らぬ勝手の方に、疳高な老婢の聲『幸ちやん、いくら云つたつて徒面だよ、今時誰がそんな枯れかゝつた花なんか買うものかね。』『イ、エ枯れかゝつてるなんて、これは只一寸萎でゐるんです、水の中へ入れて御覧直に活て來ますから。』『オホヽヽヽ、旨い事許り云つて切出だよ、眞實にお前さんは何時見ても元氣だからお花までが活き〱して見えるけれども、其方の子のは……。』と云ひかけて心附きけん、『其方の子のは又此次に買つてあげるから今日は矢張幸ちやんのを置ておいで。』と云ひ直す。『姥やさんそんな事を云はないで後生だから御新造樣に願つて下さいよ、昇ちやんのが賣れないと又苛酷い目に逢はされて可哀想だから。』

昇の一語耳に入ると蟲が知らすと云ふものか、おとみはそつと裏口へ、爭ふ二人の側より優しい笑顔を現はして、『姥や如何したの？』と問ひかくる。『何、なんでも御座いませんけれど、いつもの花屋がお友達を連れて參りまして、可哀想な子ですから、此子のも取つてやつて與れと頼むのです、未だ歳もゆかないのに可愛らしい事を申ますけれど、賣りたければ賣れさうなお花を持つて來る樣にと、只今申て居りました處で。』と可笑くもない追從笑ひ。

姥が大の贔負ないつもの花賣の左側にシヨンボリと立ちし十一二の小供、蒼ざめて力なげなる身を背けながら、折々老婢を恨めしげに睨み上げ、又おとみを竊み見る眼の光り鋭く、小供らしき無邪氣さは影も留めで、世を拗者の風情しるし、同じ花賣る境遇でも變れば變る二人の擧動哀れの者よとジツト見て、『まあ姥や

そんな事云はないで可愛想に二人から買つてお遣よ、佛様のと生けるのと二種にすれば宜いぢやないか。』幸『エ、買つて下さるつて、御新様難有うございます、姥やさん難有う、これから精々勉強致しますから何卒御贔負に願ひます。』昇ちやんも御禮をお云ひよ斯う言ふ風にお花主様が出來て來るとあとはもふ占たものでよ嬉いだらふ、エ昇ちやん？』我先づ嬉しさに堪へぬさましてさし覗く罪のなさ。とみ『可哀想な子つて、お前あの父さんでも歿なつたの？』と問へど答へさうにもしない昇に代つて幸吉が『御新様此子は父さんも母さんもあるんですが、三ッの時に母さんが父さんとこの子を捨てたんですつて、其から父さんは口惜しがつて五ッの歳までは一所に居て大變可愛がつて呉れたさうですが母さんが憎いから、なんでも立派になつて見せやうつて、此子を今居る處の姨さんに預けてアメリカへ行き、十年立てば立派になつて歸つて來るつて行つたきりなので、姨さんも初めのうちは可愛がつて呉れたさうですが、伯父さんが出來てから如何したものか苛酷い目に計り逢のです。ねえ君、さうだつたねえ？』少年は無言に頷きぬ、、、おとみは聞く内に何時か眼を潤ませて『なんて可哀さうな子なんだらう、ねえ姥や。』姥『ほんとに可哀想でございますね、お前そんなに毎日虐められては父さんや母さんがさぞ戀しいだらうね？』昇は始めて口を開き『誰が母さんなんかに逢ひたいもんか、見たくもないや、母さんは……母さん計りぢやない母さんの姉だの妹だの立派な

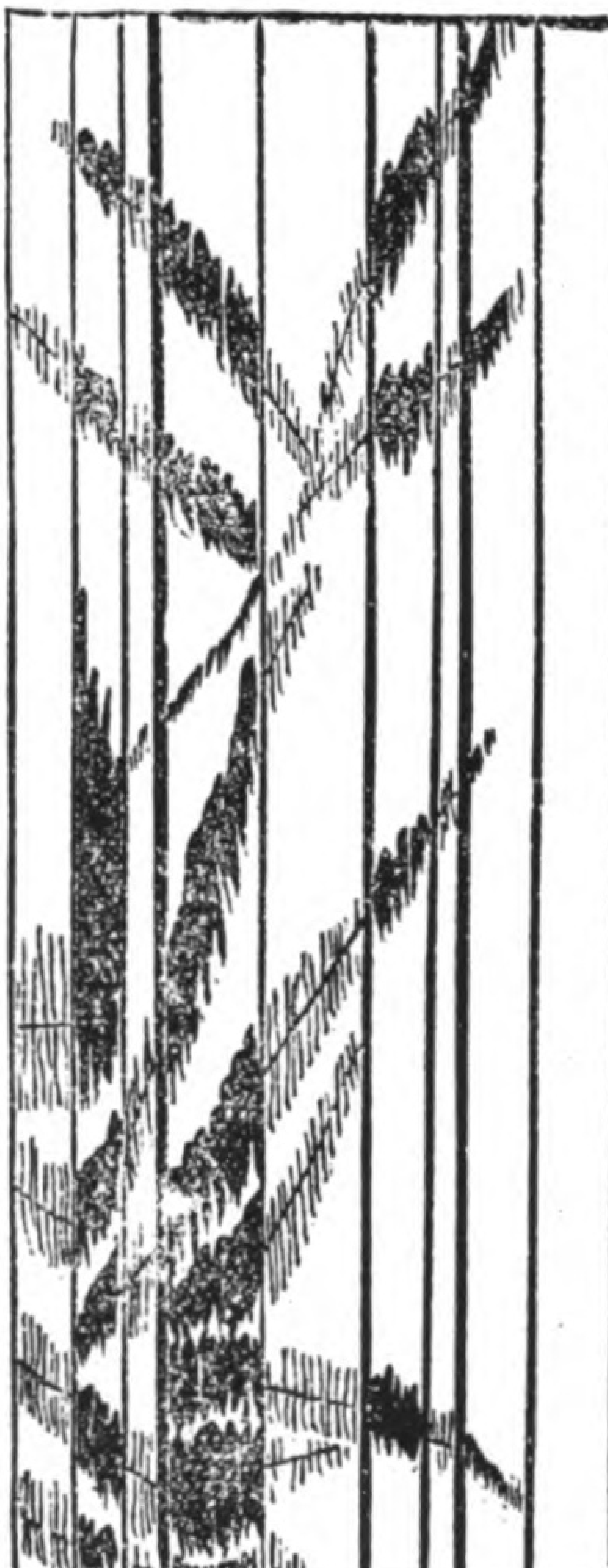


▲腰帶――白地絹ちりめんに、ひさごと花と葉の四田に、葉をオリーブに染め上げしもの。二圓三十錢

人がいくらも東京にゐるんだつて聞て知つてるけれど、あんな母さんの姉妹なら叔母だつて見たかない、父さんには逢ひたいけれど……。』と溜り兼てや筒袖に面を覆へば玉なす涙が頰を傳ふいぢらしさ、興さめ顏の姥はかさねて『お前そんなに逢ひたいて、父さんの名を知つてるのかい？。』と問へば側より幸吉が『高木太郎と云ふのです、母さんはお花。』

おとみは蹌踉と二足三足辛じて踏み止まつた。今の今までよもやと思つた此花賣が矢張り甥であつたのが、我儘一杯に育てられ、丸顏のクリ／＼と惡戲のはげしかつた代り、風一度引た事のない、鈴なりの目元のことに愛らしかつた昔の面影が今何所にあらう、かくまで憔悴るゝは小供心にも、どれ程辛い思をした事やら、恨に燃ゆる父親の寢物語が浸込んで母を恨む此子の不憫さ恨まるゝ妹の罪深さよ、とおとみはそゞろ今昔の感にうたれて、老婢の手前も打忘れ其と名乘つて抱締たく思ふ途端に周章しく、姥『あら御新樣　麹町の坊ちやまが驢馬に召して。』と云ひながらあたふたと出迎へる。折も折時も時ハツトして振向けば威しき海軍大將の制服つけたるが『叔母さん』と云ひつゝかけ來る。姥『まあおみ大きくおなり遊ばして、これがお六ツとは、ねえ御新樣、ちつとの間にお見違へ申程御立派におなり遊して、そして又此お美しい御洋服がよくお似合ひ遊ばして何てお可愛らしいのでございませう、さあ／＼お奥へお上り遊ばせ。馬丁さん毎度御苦勞樣ですね。』と一人で引き取る喋々しさ。小供心の幸吉は只羨ましげに見送りぬ、飽迄僻める昇も始の内こそわざと背けて見んともせざりしが、老婢の言葉に誘はれけむ、流石小供の恐る／＼見あぐれば、はしなく見下ろす正輝と見交はす眼元に浮ぶ色、其と見て取るおとみは悲しく『では花屋さん二人ともお花を置て行つて下さいな、これからは何時でも買つてあげるから明日にも亦來て下さいね、昇ちやん……、昇ちやんと云つたつけねお前明日は屹度來ておくれよ、宜かい屹度だよ。』と情をこめて見やりし眼よりは包みかねたる涙をば露と注ぎて、心殘しつ奥に入れば『叔母さんあ

の汚い方の花屋は何を泣いてるの？可笑いね馬鹿な奴……。』と云ひ掛られ、『正輝さん何です、つけ〴〵とそんなことを云ふものではありません。』と思はず強く戒めぬ。知らぬことゝは云ひながら父こそ異へ母そばの同じ木かげの兄弟が一人は憎み一人は譏る、さてもうたてき世の様や。



▲腰帯──白絹縮に藍と水色にて陰陽に竹を現したるもの　一圓五十錢

下

店に流行の粋を列らねて、友染の派手〴〵しき、綾織の質素なるも眼に馴れては、己が身の廻りは二の次に、先良人の物氣になりて口性なき同業の人中に出た時、敗取らせじとの心遣、おとみはあれられ取出でゝ、衣たつ音も一切り、帳合濟まして入り來る主人信三に茶菓を薦めなどして、いと濃やかに今日來し花賣の有りし様子を語り出で優しき良人の同情に新たなる涙を袖に拭ひぬ。信『では先づ第一着に先方へ掛け合つて、此方へ引取るんだな、さう云ふ風なら何少し握らせれば文句はなからうから餘り心配しないが宜よ。』『いろ〳〵御無理計り申て濟みませんけれどもさうして戴けば妹の罪滅しにもならうかと存じまして。』『罪滅しなんて、そんなに氣にすることもないさ昇坊には苛酷い母さんでも正輝さんには優しいお母様、それで世間は持つたものだ。』だが高木の方も何とかして一ッ探ぐつて見やう、男一疋なら憎い口惜の一念だけでも遣通して來さうなものだが。』『ほんとに高木さんさえ立派になつて呉れますと、昇坊もどんなに仕合ですが、又妹だつて寢覺がいゝ勘定でございます。』『さうさ、何しろ一時は神聖な戀だ

とか云つて騒いだ仲だものな。』『あゝ其だからと申のではございませんわ。』と我事ならねど顔赤らめぬ。『アハ丶丶丶まあ其は其として、引き取つてからだが、何所までも名乗らずに赤の他人にして仕込むのはいゝが、さういふ風に僻で居るものを、直に店に出して小僧達の仲に入れて、摺れさせるのも考へものだから、少しの間は勝手に置て、お前が面倒を見てやつては如何かね？』『其はもうどんなにも世話は致しますけれども、何しろあれでは私の下に合いますか如何か怪しいものでございます。』『何、たかゞ小供だもの此方の舵の取り様では直に懐くさ、其方は心配ないがお花さんには話す積かい？』『さあそのことでございます。』と計さし俯向。『己が思ふには今の所、お花さんも思ひ通りの何不足ない身分になつて昔のことなぞ忘れてしまつてゐるにしてもだ、さて生の子があんなに落魄て自分を恨で居ると知つたら、まあ人情としてどんなに悲しいか、といつて今の夫の身分に對して勝手なことは出來ないしとなると、其間に立つて何程悶躁いたつて何の効があるぢやなし……と思ふがね。』『被仰やる通り私も匿して置ます方が宜しからうと思つて居りました元々親の意見に背てまで連れ添つた人に働がないと申て愛想を盡し子まで振捨てゝ歸つた者が、一年立か立ぬうちに、又再婚と定りました時、思ひ知らずに一生を送れば仕合だがと申て姉と二人で泣たことがございました、今が其時ではなからうかと存じますとゾッと致します、けれどもあれが思ひ知りますのは自業自得で致方がないと諦めましても、心に何か悲みが出來ますれば自然と顔にも出て、夫に對しても又子に向ひましても、今迄のやうには出來ますまいと存じますから、匿して置て、妹に代つて盡せるだけのことを盡して遣りたいと存じます。』『いかにも其所だ、折角靜な家庭を破る樣な事があつてはならんから其がよからう、では姉さんにだけ打明けて御相談するとして明日にも行つて來たらどうだい？』『ではさうさせて戴きませう、所天の思召を伺ひましたら姉もどんなに嬉びませう。』『イヤ大した世話も出來んで恐縮さ、併し六七年の

間始終氣にして居た子が自然に來合すなんて、廣いやうでも狹いものだな。』『先程高木太郎と云はれました時には驚いたの何のと只もふ悲しくなりまして……。』『さうだつたらうともだがこれも全くお前の優しい眞情が通つたと言ふものだから、これから一層氣をつけて、立派に育てあげて遣るさ、旨くゆけば此上樂みなものはないよ。』

地位が何、名聲が何？その日に追はるゝ心配もなく同情深い夫と二人一致した家庭を作りて、心中一點の疚ましい影もなく、見渡す限り洋々たる春の海に棹して、世を渡る心安さ、富からえた幸など浮べる雲より未だ果敢ないものと、世間からは三人の姉妹のうち、一人懸離れて卑くしと氣の毒がらるゝ己が身の幸福を喜びし、これも亦おかしき世の樣や。

●櫻美婦人會の手藝教授　岩井かほる子の幹事たる同會は麹町永田町三丁目に置き婦女子の手藝を勵奬すると共に、和洋服裁縫、編物、造花、刺繍を尤も親切叮嚀に教授する由、授業料は各科共一ヶ月金壹圓で、外に實修生を置き無月謝にて教授し、技術の進歩によつては會より相當の報酬を與ふと云ふ。

餘興

喜劇 家政學校

巖谷小波

第八節

松子夫人（字佐子たる缺く）　お清　志保子

（お清　次の間から出）あの……志保子樣が入らつしやいまして御座います。

（松子）オヽ、世野江さんのお孃さんかヱ『……よく入らつしやれたねヱ。直ぐに此方へ！

（お清）畏まりました。（ト入る）

（花子　まだ進まぬ顔で）また何誰が入らしつたの？

（松子）世野江さんの、志保子さんと云ふ方だよ。

（花子）何樣な方？

（松子）あの方はお前……とてもお前なんぞとお話が合やしないよ、

（花子）學者なの？

（松　子）いゝえ？

（花　子）美術家なの？

（松　子）さうでも無い。

（花　子）ぢやアまたお轉婆なの？

（松　子）どうして大差異だよ。

（花　子）まア、そんなら何樣なんだらう。（ト好事に振り向いて待ち搆へる）

此所へ志保子は、質素な扮裝、白キャリャコの前垂掛、風呂敷包を持ち、徐に入つて來て、しとやかに辭儀をする。

（志保子）叔母さん、ほんとに遲くなりまして濟みません。今日は何うも難有う！……こんな平常の風俗のまゝで……（ト、氣にして前垂を外づす事あり）

（松　子）なアに貴女、却つてその儘の方が宜しいんです。ちつとも氣の詰まる方は入らつしやらないんですから……コレ花子や御挨拶をなさい！　志保子さん、これがアノ娘です。何卒御心安く！

（志保子）初めて御目に掛ります。お噂は御母樣から伺つて居りまして、是非お目に掛り度いと存じて居りました。（ト、愛想よく云ふ）

（花　子）何卒よろしく。（ト、初々しく挨拶しながら、頻りに樣子を見る體あり）

（志保子）貴女に御目に掛るのでしたら、もう少し用意を致して參り度かつたんですが、丁度あの、今日は私の當番で……あゝ、一寸買物に參つたものですから……

（松　子）それぢやア志保子さん！　今日は貴女が仕込に入らしつたのですか？

（志保子）はア、まだ馴れないもんですから、好い物が買へないんですけども、何だか面白半分にねエ、いろんな店へ行つてやりまして、思はず學問を致しましたの。

（松　子）それは宜しう御座いましたネ。でも、貴女の時分から、さうして修行して居らつしやると、今に屹度好いお嫁さんに成れますねエ。

（志保子）アラ、そんな事は存じませんけども、何だか面白いもんで御座いますから、自然と色々な事覺え

まして、私ァ嬉しくつてたまりませんワ。

（松　子）けども、そんなに滿足して居らつしやるのは、貴女ばかりでせう。

（志保子）いゝえ！　何誰もみんな喜んで居らしつて、不平云ふ方なんぞ一人もありや致しません。ほんとに好い學校で御座います。

ト、樂しさうに話す。花子聞き咎めて、此時膝を進ませ、

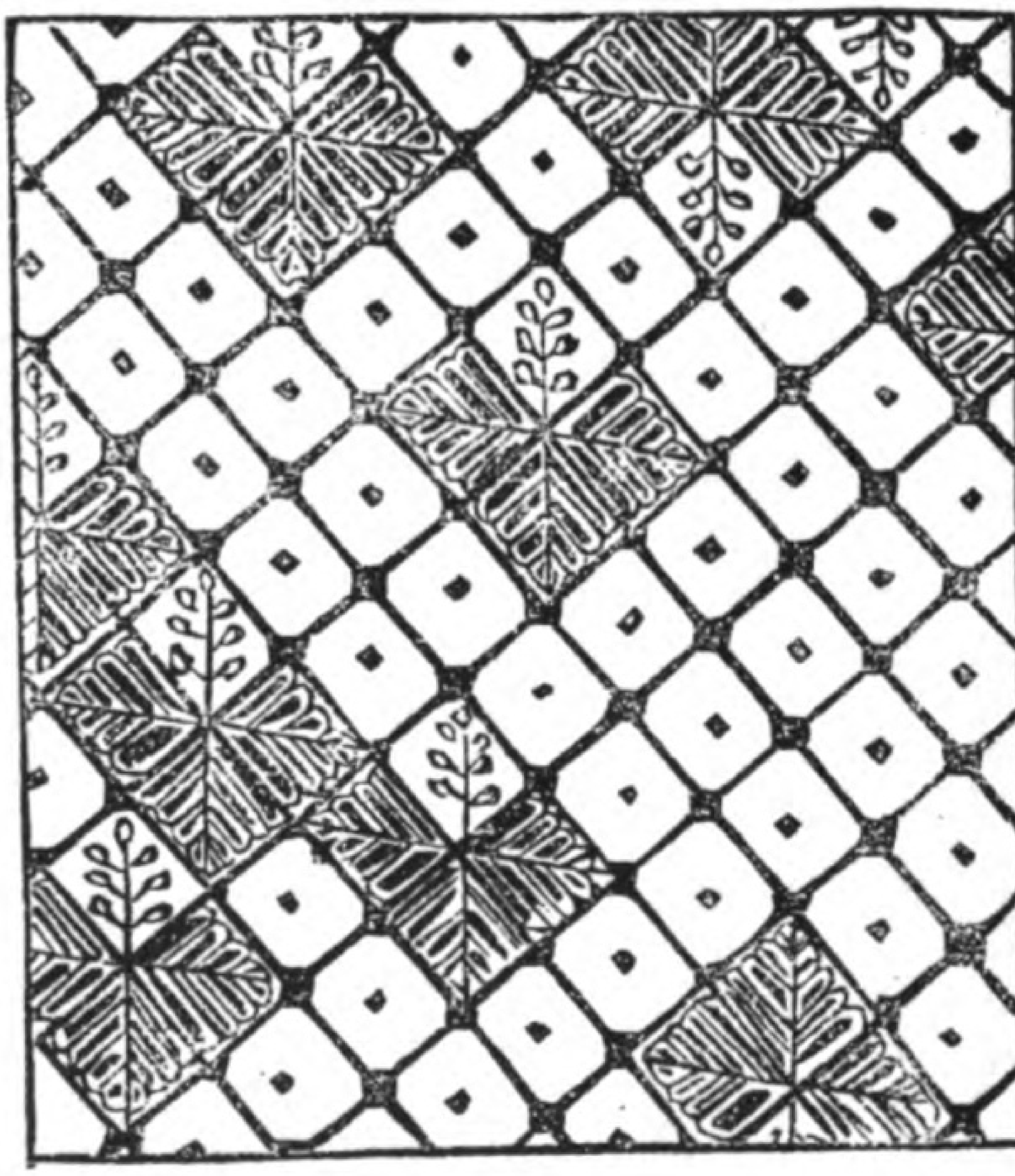
（花　子）阿母さん！　それ何所の學校の事なの？、

（松　子）此の方の居らつしやる……

（志保子）家政學校の事で御座いますよ。

（花　子）アラ、家政學校！（ト、少しく意外の體）

（志保子）貴女入らしつた事御座いまして？



▲新柄浴衣地

（花　子）いゝえ、そんな所……

（志保子）そんなら是非參觀に入らつしやいましよ。面白う御座いますから……

（花　子）だつて……御料理計りしてるんでせう。

（志保子）他に種々な事が御座いますワ。

（花　子）他につて、裁縫でせう。

（志保子）裁縫計りぢやありません。

（化　子）そんならあの家政學……私も敎はりましたワ。ほんとにあんな眠む度いもの……

（志保子）ホヽヽ、眠む度けりやァ、お寐みに成つても關ひませんが、私の學校のは、それは〳〵面白いんですよ。第一先生が、皆さん御熱心で居らつしやり

ますもの。
(花　子) だつて貴女！　他の學科は無いんでせう。まア文學だとか、圖畫だとか……音樂や舞踏なんぞも
(惠保子) アラ、無い事が御座いますもんか。家政の事は午前中に濟まして、午後は音樂もあり、舞踏もあり、圖畫もあり、文學諸禮もあり、講演會もありやア、理學の科外講義もあり……ほんとに面白いんですよ。紀念日だとか、大祭日などには、活人畫をやつたり對話をやつたり……みんなが交る〳〵藝盡しをするんですが、それが何樣に面白いでせう。ア、ほんとに貴女、一度見に入つしやいましよ！　御母樣も御一所にねヱ！　私御案内致しますから。
ト、松子を見て目配する。
(松　子) いゝえ貴女！　慈親どころぢやありません。此娘も何所へか入れなけりやなりませんから、貴女方と御一所に、家政學校へ上つたら何うだと申しますんですけども、何うしても厭だと申ますんで……
ト、云ひかけると、花子は母の袂を引く。松子はわざと心付かぬ體で、
(松　子) それやア貴女の樣な御氣分なら、乾度面白いに相違無いんですけども、花子は妙な性分で御座いますから、迚もさう云ふ御交際は出來ますまい。
ト、云ふ時、又花子は袂を引く。松子まだ見向きもせず、
(松　子) 何しろ宇佐子さんの樣な活潑な方や、羽根子さんの樣な學者の方や、貴美子さんの樣な美術家の方で無けりやア、とても御交際は出來ませんから
(花　子) アラ！
ト、遂に強く袂を引く。松子初めて氣付く體で振りむき。
(松　子) 何だねヱ！
(花　子) 御母さん、そんな事を云つちやア厭だワ。
(松　子) 何をさア？
(花　子) 私……行く事よ！　(松　子) 何所へ？
(花　子) 上る事よ！　(松　子) 松子へさア
(花　子) 私……家政學校へ上る事よ！

(松子) 家政學校へ? だつてお前厭だと云つたぢやないか。

(花子) いゝえ、もう好くなつたの。(松子) まア何うして……

(花子) 今志保子さんのお話で、何だか急に好きに成つたワ。それに志保子さんほんとに好い方だから、私その方と御交際したいワ。

(松子) ぢやア宇佐子さんとは?

(花子) あんなお轉婆、大嫌ひ!

(松子) ぢやア、羽根子さんとは?

(花子) あんな生意氣、大嫌ひ! (松子) そんなら貴美子さんとは?

(花子) 貴美子さんぢやない、キザ子さんだワ。私大嫌ひ、大嫌ひ!

(松子) さう。そんならその志保子さんの様に、これから家政學校へ入つて、女の道を勉强お爲だネ。

(花子) はア! (松子) 屹度だネ?

(花子) 屹度!



▲新柄腰帶――白地絹縮み藍、紺、青にて芭蕉を染め出す。一圓五十八錢

此以前より、お清はそつと椽側へ出て來て、障紙の蔭で立聞する事あり。此時我知らず躍り出て、

(お清) 奥様! おめで度う御座います。お孃様萬歳! ト、叫ぶ。花子は不意に驚く體。松子はそれを制して、

(松子) コレ、まだ早いぢやないか! それよりはやく皆さんを御呼び申して!

(お清) ハイ、畏りました。

ト、お清はまた急いで出て行く。

結婚道しるべ

▲申込者は博文館女學世界交信部宛の事▲申込者は住所姓名番地を詳記する事▲本人の寫眞を送らるれば保存して希望者に紹介す▲身元希望の點を詳記さるゝものは特に保存して希望者に紹介す▲照會者は雙方への通信料として三錢切手三枚を送るべし▲寫眞を望む方は切手貳拾錢を送るべし▲廣告〆切は毎月廿一日限り

行き度き方

▲年齡二十二歲初婚普通敎育を終り本鄕女子美術學校にて造花及び編物科を修了す、容貌普通、血統正、兩親健在、家計中等、軍人若くは會社員に嫁ぎたし。(寫眞あり)(小石川生)

▲年齡二十二歲、血統正、身體强健、精神確固、性質温順女學校卒業後生花琴三味の奥義を極む、容貌普通家計毎月六百圓以上の收入ある者の子女、兩親兄姉弟あり、前途有望の官吏軍人若くは着實なる人の妻となりたし但財產の有無を問はず(神戶Y)

▲年齡二十三歲、血統正、地方高等女學校卒業、容貌普通にして再婚、兩親健在にして醫師を業とす家計は中等なり、軍人若くは相當の所へ行きたし、(廣島の求婚女)

▲年齡廿歲の初婚者縣立女學校卒業、尙補習科習學中にて、傍ら家庭に在つて料理、點茶、活花、盆石、和歌、琴、月琴を稽古す、容貌普通血統正、兩親健在職業軍人にて家計中等なり、法、工學士又は相當の向へ嫁ぎたし、(金澤の女)

▲年齡廿三歲、縣立高等女學校卒業後、上京して高等專門の敎育を修め、餘科として生花、茶道其他書繪の稽古をなす、容貌普通、血統正、母親と兄のみ在りて、兄は陸軍步兵少佐なり、前途有望の官吏又は、軍人の妻となりたし、(在京の女)

求むる方

▲友人年廿六血統正、初婚者本店東京、海外に一支店を有する直輸出貿易商、月收七百圓、兩親の外別に係累なし、商業擴張の爲め金二萬圓を三箇年間に融通し得べき器量ある年齡廿歲前後高等女學校卒業の處女を求む。(四方田生)

▲年齡三十四歲の軍人にして初婚者月收五拾圓以上、外に財產なし係累なし、中等の敎育ある處女を求む、年齡二十歲より三十五歲まで、容貌普通身元の貴賤貧富を問はず、從順にして親切なるを望む。(上根岸の人)

▲年齡廿二歲血統正嫡男(初婚)早稻田大學出身目下實

業に從事す、財產は有價證券其他三萬圓不動產は計上せず、係累は兩親のみ婚後は隱居する筈中等教育ある健全の處女を求む。（京都の實業家）

▲年齡二十九歲血統正地方有力家、現今實業に從事す、母と妹とあり、普通以上の教育あつて體格健全志想溫良の處女を求む、但し年齡は十八歲以上廿三歲迄容貌普通。（讀者の一人）

▲年齡呼年三十三、血統正、再婚者にて子なし、四五年前商業に從事して經驗を有す、目下某會社員勤務中、普通教育ある身體健全の女子を求む、都合上養子に行くも差支なし、但し岡山市若くは其附近在住者を望む（ＭＩ生）

▲年齡二十五、血統正、初婚、數學英語の中等教員、月收五拾圓、父母を養ふ義務あり、十六歲より二十歲迄の中等教育ありて、特に國語漢文の素要ある處女を求む、但し當分別居するも差支なし。（山形縣の人）

▲廿五歲の男子血正、體健、官立專門學校出、前途有望の事業に從事す、年齡十五歲以上廿歲以下の教育普通品性高尚なる進取的の淑女を求む、但今後三年間尊長者監督の下に交際し、相互意志疏通せば結婚する事、尙ほ婚後海外へ行く覺悟を要す。（東京無名草）

▲年齡二十一、血正の一人娘、兩親ありて實業をなす、年齡二十七八歲にて商業學校出身者又は會社銀行に奉職中の前途有望なる男子を求む、但し京都在住者に限る。（京都一女子）

▲年齡二十二歲、血正、府立中學卒業後渡米文學專攻三年にして歸朝、文筆を以て立たんとす、身體一部の缺損（痣、跛）等に悲嘆せざる女子と約婚したし、但し財產の有無を問はず。（在阪Ｍ生）

▲年齡呼年二十六、血正、東京某法學校卒業某官職を奉じ月收四拾圓、不動產及株劵を有し時價八千圓以上、兩親の外別に係累なし、容貌美にして强健沈着なる十八歲以上二十歲迄の師範卒業者又は高等女學校卒業生にして相當財產家の處女を望む、但し富山石川兩縣生れのもの。（富山縣四北生）

▲滿廿六年累代京都の住、附近の田園に淸新なる事業を營める實業學校出身の一靑年、新時代の家庭を作るの修養ある淑女を求む、家には奢らざる生計を爲す丈けの資產あり、係累老母一人。（京の人）

▲年齡二十三歲の女血統正、性質活潑、容貌は普通以上、教育缺點なし、尙ほ諸藝の奧義を極む、資財家にして兩親健在也、前途有望の軍人（大尉）又は相當なる會社員を養子に貰ひたし。（白　妙）

北海道の某氏は在韓一紳士に向け交涉中○横濱の某氏も同氏に紹介中なり○紀伊の一紳士は伊勢の濱萩女子と相談中○浪花節子には門司の某氏より問合せたり○其他北海道の某、名古屋の某、新潟の某、京都某氏等紹介交涉中の者多し。

八月號記事豫告

（八月五日發行）

毎月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數……………十二冊
增刊四回…一、四、七、十月價格同一）

郵税　一冊　二錢

廣告料

	二十四字詰一行	半頁（即二十行）	一頁（六十四行）
特等	……	二十圓	割引　四十圓
一等	五十八錢	十七圓	割引　三十三圓
二等	五十錢	十四圓五十錢	割引　二十八圓
三等	四十二錢	十二圓	割引　二十三圓

▲等級の位置〃切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅九年七月五日發行　第六卷第八號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局
三百三番　二千六百二十番
千十八番　三千二百二十九番

三十九年上半季新刊書目

伊東祐穀君著
袖珍世界年鑑
明治卅九年 全一冊 洋裝 菊半截上製
正價七拾五錢 郵稅八錢

本書は其好評嘖々たる世界年鑑の著者伊東祐穀君の著さる所、日本、各國、世界、實用の四大部より成り、同年鑑中の萃を拔き、華を萃めたるものなり、剪裁宜しきに適ひ編製當を得て、一閱宇内の大勢に通するを得るは即ち世界年鑑に優る、而して形體は手頃にして携帶に便に、裝釘は牢且つ美にして實用裝飾井に宜し。

法學士 南弘君編述
政治學
上製 正價五拾五錢 郵稅拾錢
並製 正價四拾錢 郵稅八錢

本書は政府の基礎的原則と其政府が企圖し劃策すべき實際的行動の方針を明白ならしむべき特殊の觀察を以て編せり故に其論ずる所務めて偏執の空談を避け全然道理と經驗とによりて有用の構成的政略を提示せり

法學士 南弘君編述
國家學
上製 正價五拾五錢 郵稅拾錢
並製 正價四拾錢 郵稅八錢

本書は久しく內閣書記官に在職して實地國政に參與せらるゝ南法學士の編述なり故に國家學の源義を極め國家の意義及其組織を敍述するに穩健の筆、精到の論を以てす其讀者をして了解の便を與ふるや言を俟たざるなり

博文館編輯局編纂
新法令 附二十二帝國議會史
正價參拾錢 郵稅參錢

戰後經營に任ぜる第一次の議會は其重要の點に於て比儔を見ず法案に鐵道國有法、市制町村制改正案、輸出羽二重練糸法、韓國裁判事務に關する法律、韓國統監の職權に關する法律、廢兵院法、醫師法其他諸稅則の改正變更等あり尙「第二十二議會史」は春汀鳥谷部氏の筆になるもの敍事簡明、九十日間の經過は卷を開ひて即ち之を知るを得べし。

博文館編輯局編纂
戰後經營
正價參拾錢 郵稅參錢

孰れも當代一流の名家數十氏の卓見にして論旨は着實、理想的、活動的、指道的、警醒的なり。而して將來に關する山の如き諸問題に對する各專門大家の解釋を蒐集して國民の歸趨すべき標本を示せしは本誌なり。

法學士 松井茂君著
警察の本領
一名公衆と警察
正價貳拾五錢 郵稅四錢

本書記する所は警察教育の普及、公德と警察等よりして助長的警察と警察行路に及びて公衆と警察との關係を說くこと最も詳細悃切を極む其觀察の明にして其說く所の正しき絜說を須ゐざるなり。

博文館編輯局編纂
明治史第四編
產業史
正價參拾錢 郵稅參錢

日清戰爭に依て導かれたる戰後經營と共に各種の產業は頗る面目を改め今や日露戰爭の結果として更らに產業の一大變遷期に入らむとす。此時に當り明治の產業史を知らざれば決して未來の產業政策を談ずる能はず、又戰後經營の事業を語る能はず、茲に產業史を編纂せし所以なり。

（後付の一）

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

三十九年上半季新刊書目

文學士 杉谷泰山君譯
處世哲學
上製 正價五拾五錢 郵稅拾錢
並製 正價四拾錢 郵稅八錢

此書は大哲の眼識を以て活動の正邪を辯じ、幸福の眞僞を明にし、人格財產名譽を始めとして自己に對し、他人に對し、又境遇に對する用意覺悟を敎へ、日常處世の方針を示せり。

物集・長 兩文學士共編
散文韻文
美文辭彙
正價壹圓貳拾錢 郵稅拾錢

大槻文學博士序して曰く「此書百家の文より其華を拔き類を以て分ち收めて索引閲讀に便ならしむ 文を學ばむ者 一たび此書を繙かば左右其原に逢ばむ 之を求め得て 朗讀玩味せば 巧妙なるを得むこと 俯して地芥を拾ふが如くなるべし」と以て此書が如何に作文壇上の好書なるかを見るべし。（再版）

長谷川天溪君著
文學訓
正價參拾錢 郵稅六錢

文學の眞義を究め、清新の文章を作らんと欲する諸子試みに本書を繙け。似而非文學の雲霧を拂ひ、如何にせば眞正なる文學の光彩を發揮し得べきかを簡潔明瞭に說述す。これ純正文學の說明也。文學者の心理的解剖也。而して文學鑑評の標準也。

中川霞城君著
平言俗語
俳諧美學
正價參拾錢 郵稅六錢

本書は殊に高遠なる眞理を平易に通俗に說明したれば俳諧を學ぶ人は勿論美學を修めんと欲する人の爲にも無二の良書にして尙古今名家の俳句五百餘首を擧げて例とせり。

文學士 常盤大定君撰
南北對照 英漢和譯
法句經
正價四拾錢 郵稅八錢

法句經は諸經律の散在する佛陀の金言を集錄せるものにして現存するものに南北兩傳あり今此兩傳は對照比較して佛奥の講究に資せり。實に是れ佛敎研究の大要冊といふべきなり。

石橋思案君校 星野麥人君編
紅葉書翰抄
正價五拾錢 郵稅六錢

曉山人が、眞相の流露する筆の跡を偲ばんとするもの、此の書を熟讀すべきは素より、世の書翰文を學ばんとするものに絕好の指針を與ふる稀代の珍籍なり。山人が小說以外に、其の書翰文の如何に章句の妙を極め、又如何に情誼に厚かりしかを、庶幾くば此の書に依つて知れ。（**六版出來**）

東京府立職工學校長 今景彥君監修
五行讀本
水の卷
正價拾五錢 郵稅四錢

本書は木火土金水の五つの內まづ水の部に就て其の自然美から利用厚生の途に至るまで或は之を詩的に或は之を科學的に極めて廣義に極めて平易に極めて流暢に水の性狀、空中の逍遙、地下の潛行、地上の旅行、動植物體內の巡行、機關內の運行等を記述せり。

（後付の三）

發兌元 東京市日本橋區本町 **博文館**

三十九年上半季新刊書目

法學士 辻宏吉君著
新式 英語作文書取法
正價五拾錢　郵稅六錢

本書の特色は何人も知らず識らずの間に謬り居る英文の眞意を解釋せしむるに在り。又説明の方法は一般學生の誤謬を剔抉し一々引例に據りて最も平易に且つ懇切に講述せり。

醫學士 石原弘君著
醫學新書 人體解剖學（中卷）
正價參圓　小包料拾五錢

本書は（第四編）腸管系及呼吸器（第五編）泌尿生殖輸尿管（第六編）脈管系を學術語は必ず羅甸若くは獨語を併記し主として新名稱を以て説述せり而して精巧緻密なる要圖は每節に挿入し本文の副となす。

醫學博士 井上通泰君監修
家庭衛生叢書
正價一冊貳拾錢　郵稅一冊六錢宛

第八編｛婦人姙孕力の話（伊庭博士）肝臟の話（木村博士）分娩時の攝生（緒方博士）色盲の話（井上博士）等
第九編｛肺癆の話（井上博士）小兒の虫及疳の話（瀨川博士）產後の攝生（緒方博士）等外數項

糸左近君著
四季應用 通俗治療法
正價貳拾八錢　郵稅六錢

著者糸左近氏は仁術造詣深く、諸病の蘊奥を究めて洩らすなし、今其尤も普通なるもの七十餘種を網羅して備さに治療の方針を説く、其功德の大なる耆婆、扁鵲にも讓らずといふべし。

中島義弌君著
新撰日用女禮式
正價貳拾五錢　郵稅六錢

著者中島先生は三十有餘年の經驗學校の教授に採つたる方針に依り尚文部省訓令に適合せしむる程度に由つて極めて簡單に其記する處精しく古今の典儀に鑑み能く內外の善風良書を折衷補正し盡せり幸ひに購讀を乞ふ。

マズダー・オブ・ローズ　宮本桂仙君著
西洋男女交際法
正價貳拾五錢　郵稅二錢

著者久しく歐米の禮式を研究し其實驗に基き今後日本社會に必要なる日常作法を青年士女に懇示し併せて日本禮式と交際法の連絡を通融す實に新日本人士が必ず一本を机右に備ふるの要書といふべし。

博文館編輯局編纂
藝人出世譚
正價貳拾五錢　郵稅貳錢五厘

題して藝人世出譚と云ふ。藝界の名人が成功談、苦心談、逸話等を出來得る限り網羅し、藝術研鑽の人をして其名人の徑路を辿り、他日の成功を期せんとするの資に供せんとす。其如何に趣味深く、また如何に多方面なるかは一讀の上其の眞味を知り給へ。

發兌元　東京市日本橋區本町　**博文館**

（後付の四）

三十九年上半季新刊書目

明治畸人傳
博文館編輯局編纂
正價貳拾五錢　郵税貳錢五厘

本書は明治畸人にして最も著明なる者のみを集めて一巻となせる者にて讀者は開卷其奇に驚き案を拍つて快哉を絶叫せらるゝや必せり其記事の奇なるに加へて各名家が筆を阿せる文の妙あり蓋し出版界未曾有の一大奇書といふべし。

女重寶記
博文館編輯局編纂
正價貳拾錢　郵税貳錢

内容收むる所何れも家庭と婦人とに重寶ならざるなし日々家事の繁務を鞅掌しつゝある諸婦請ふ本編を坐右に備へ便利を享け玉はんことを。

女玉手箱
博文館編輯局編纂
正價貳拾錢　郵税貳錢

女玉手箱は女子の爲めに學問の道しるべをなし、又專門諸大家研究自修法より、女流學者の修學の工夫、經驗其他勉學上の便りとなるべき修業の栞あり、趣味ある文話ありて正に學海の好羅針盤たり。

現代學生社會
博文館編輯局編纂
正價貳拾錢　郵税貳錢

其記事は凡て學校と學生とに關する記事のみにして、中には、奇警ある觀察評あり。趣味ある觀察あり。或は有益なる資料もあれば、愉快なる慰籍もあり。擧げて數ふべからすと雖も。要するに其一面は斯界の一大パノラマたり又其一面に於ては學生座右の一大寶典たり。

應用家庭美術
森田洪鈴木古拙牧野等三君著
正價四拾錢　郵税八錢

本書は日本畫西洋畫の研究順序として沿革、種類、彩色、描法、寫生の法、用器、用紙等を說き尚彫刻、象牙彫刻、彫金、大理石彫刻、塑像、鑄金、蒔繪、陶磁器、造花等各製法より用具、應用、使用法、製法等を順序により詳述せり。

鐵道及其建設
工學士　岡崎平三郎君著
正價八拾錢　郵税八錢

本書は專門家以外の人士にも解し得る爲め其數理に關するものは勉めて初等代數學程度に據り測量に關する章にも三角の簡易なる項式を加へたり此書一たび出でゝ鐵道界に貢獻する所蓋し鮮少にあらざるべし。

實用製革法
東京製皮會社技師長佐藤秀光君著
正價八拾錢　郵税八錢

佐藤氏久しく獨逸に留學して斯業の研鑽深く歸朝後製皮會社の技師長に就任し今や本書を公にして斯業家の便覧に供す如何に本會が斯業の實質を世に紹介し有益なる資料に豐饒なるかは言を俟ざるべし。

（後付の五）

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

三十九年上半季新刊書目

接合劑製法

工學士 簑田猪太郎君著

正價五拾五錢　郵稅八錢

本書は諸種の物體を接合するに用ふべき接合劑及其用法を說述し卷末附錄として接合劑原料の性質幷に製法の梗概を說き製作工業中接合劑を使用するものゝ參考に資する所鮮少ならざるなり。

機械設計法

工學士 古閑正雄君著

正價壹圓、郵稅八錢

機械の種類は極めて多く一々其設計法を悉くさんとするは小冊子の及ぶ所にあらず、因りて一般の期待に應ぜんが爲め汎通の設計方法を主として機械各部の設計に關する原理法則を說き併せて各般の注意すべき事項一切を網羅せり。

農家節用 農業辭典

農學博士 稻垣乙丙君著

正價壹圓八拾錢　小包料拾五錢

本辭典は單に農業上の用語文字のみならずして普通に世間の使用する熟語をも網羅し且つ數多の圖書を挿入して解釋の便に資せり、故に農家の寶典にして須らく各戸に備ふべきものなり。

高等天文學

理學士 一戸直藏君著

上製 正價五拾五錢 郵稅拾錢　並製 正價四拾錢 郵稅八錢

第一是等天體の視運動及び實運動に關する法則を究め更に運動を起す原因を究め、第二是等天體の形狀大小質量等を測量し、第三是等の理學的性及び成分等を研究し、第四是等天體間の關係を講究する等は最も重要の事項にして本書は之を遺漏なく說明せり。

新撰物理學階梯

岐阜縣師範學校敎授 中等敎育 蒔田宗次君述

正價五拾錢　郵稅八錢

本書は自然界に於ける現象より說き起してX光線、光學的分析術、無線電信、電車等に及び尚ほエネルギーの變換及遷移等に至る宇宙間の萬象を最近の研究によりて說述し細大漏すことなし。

普通物理學

理學士 福井政一君著

上製 正價五拾五錢 郵稅拾錢　並製 正價四拾錢 郵稅八錢

本書は故鶴田理學士の遺稿によりて更らに福井理學士の訂正增訂を加へて之を統一し、博く普通物理學の新智識新材料を世の研究者に頒つ、說述懇到挿圖數百蓋し物理學書の精冊といふべし。

本邦地理詳說

中村士德 大久保千濤 兩君著

正價壹圓八拾錢　小包料拾五錢

本邦地理書の上梓せらるゝもの汗牛充棟も啻ならず偶々參考に供すべきの書あるも未だ全きものあらず、此の缺陷を補はんとして此の著あり故に本書は普通敎育の參考たるは勿論中等敎員の受驗適用斯學獨習の讀物として必讀の良師友たるなり請ふ其の眞價は一讀の上徵せられよ。

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

（後付の六）

三十九年上半季新刊書目

高頭式君編纂
日本山嶽志
正價貳圓　小包料拾五錢

本書は全部七篇より成る、曰く索引、登山術、山嶽諸說、日本地質構造概論、山嶽各記、山嶽噴火年表、山嶽表是れなり、眞に是れ新編登山の栞にして愛山家必備の要書といふべし。

香川悅次君編
支那旅行便覽
正價四拾錢　郵稅六錢

四億の人口と無限の富力を有する清國は、今や世界列國の最大華客として、歐米强國の注意國として萬目集中の焦點にあり、清國を硏究し清國に志あり清國に航せんとするものには實に缺く可らざる指鍼なり。

竹貫直人君著
少年算術遊戲
正價貳拾五錢　郵稅四錢

本書を繙く時は、趣味津々として恰も無盡藏の如き中よく高尙なる學理の一斑を知るべく、斯學を以て常に難解の科目と心得たる人は、正に一驚三嘆、初めて數理の了解し易きを知らん、

海軍主計中監　窪田重弌君著
少年必携　最近海軍
正價參拾錢　郵稅四錢

本書は筆を列强の海軍力に起して兵學校の入學軍艦の說明艦內の勤務服裝の區別等苟も將來國防の要職に當りて五大洋上に馳驅し以てネルソン提督たり東鄕大將たらしめんと欲する者のために無二の良師友なりとす。

內山昜君編
弓術新書
正價貳拾八錢　郵稅六錢

本書を內外の兩篇に分ち、內篇は專ら現今の步射を詳說し、外篇は其因て來る所の根元を知らしむ、行文精熟讀者をして得難きの資料を領せしめたり、請ふ體育を重ずるの士は必ず一本を購求あれ。

博文館編輯局編纂
學生座右錄
正價貳拾錢　郵稅貳錢

△「學生座右錄」は充分の新趣向を以て編輯したる者なり。
△「學生座右錄」には一も死たる材料なし。
△「學生座右錄」また巻中の幾分を割きて「夏と學生」の一欄を附せり。

博文館編輯局編纂
學校園
正價拾錢　郵稅壹錢五厘

動植物の愛護育成の方法を始めとして苟も小學兒童の心得べき事柄は一も泄らさず揭載し加ふるに多數の密書を挿入して本文の足らざるを補ふ故に本書は少年社會無二の寶典たり詳くは之を左記の目次に徵せよ。

(後付の七)

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

三十九年上半季新刊書目

博文館編輯局編纂 寫眞畫報 **清國寫眞帖** ▲正價貳拾錢 郵税貳錢

同 寫眞畫報 **捕虜露國土産** ▲正價貳拾錢 郵税貳錢

同 寫眞畫報 **凱旋觀兵式紀念帖** ▲正價貳拾錢 郵税貳錢

同 寫眞畫報 **世界周遊寫眞帖** ▲正價貳拾錢 郵税貳錢

巖谷小波君編 少年日露戰史 **樺太の巻** ▲正價拾貳錢 郵税四錢

同 少年日露戰史 **凱旋の巻** ▲正價拾貳錢 郵税四錢

博文館編輯局編纂 少年世界臨時 **不思議世界** ▲正價拾錢 郵税壹錢五厘

巖谷小波君編 世界お伽噺 **金髪王女** ▲正價八錢 郵税貳錢

同 世界お伽噺 **新塞翁** ▲正價八錢 郵税貳錢

同 世界お伽噺 **木馬物語** ▲正價八錢 郵税貳錢

同 世界お伽噺 **馬の首** ▲正價八錢 郵税貳錢

同 世界お伽噺 **三の王冠** ▲正價八錢 郵税貳錢

博文館編輯局編纂 幼年書報臨時 **森のおばさん** ▲正價拾錢 郵税五厘

同 幼年書報臨時 **木舟石舟** ▲正價拾錢 郵税五厘

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

(後付の八)

女學世界
第六巻第九號
(明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可)
(明治卅九年七月五日發行毎月一回五日發行)

(定價金貳拾錢)